

ら私たちの奉唱だと思つた時、身中がさつと清められたやうな感がした。歩一歩と玉座に向つて近づいて行く私たちの胸は、光榮と歡喜とに満ちてゐた。

「あゝこゝにすめらみことの 鳳輦を迎へまつれり……」

仰げば高き玉座の上、私たちの眼前に嚴然として神の如く微動だに遊ばされぬ 聖上陛下の尊嚴極まりなき御英姿、私は此の國に生れたることを限なく嬉しく思ふ。斯かる至尊を戴けばこそ日本は強いのだ。

「ああ今しすめらみことの 御姿を拜みまつる……」

感激に涙はとめどなく頬をつたふ。天も地も金色の陽光にも、あらゆるものが歡喜と光榮に輝いてゐる。待ちに待つて御親閱は今だ。こんな光榮は私たちの一生に又と有り得ないことだ。

「ああわれら生けるかひあり……」

私達は全生命を聲にして奉唱した。その聲は柔かく、なごやかだつた。然し何處が強い所があつた。この奉唱こそ第二の日本婦人として立つ若人のまごころからほとばしり出る叫びであつた。「君が代」の奏樂に御召自動車は、わだちも輕やかに滑り出した。七萬人に近い若人の眼は最後の感激に浴せんとして何處までも御英姿を追つた。

生れて初めてまみえ奉るみ親の君の遠ざかり行く鳳輦——お聲でも掛けて戴かれる様な、然しそんな事は想像だに出來ぬ様な敬虔の念。私は唯感涙にむせんだ。流れ落ちる感涙の中に私達の生くべき新女性の道を見出した。この感激で、この新しい道を、確かな足どりで力強く歩み続けよう。

光榮の一日

熊本縣立八代高等女學校第四學年 西山明子

昭和六年十一月十八日。珍らしい快晴の日であつた。 天皇日和とでも申したい。私はこんな快晴の日に御親閱を受け

られる事をどんなにかうれしく思つた。

御親閱場は、大御心のやうな陽の光が限りなく私等を照して居た。神々しいまでに美しく阿蘇の靈峯が大空にえがき出されて居た。そして私の心は全く敬虔で一ぱいであつた。純白な玉座に立たせ給うた時、そして心からなる最敬禮を捧げた時、私は體中の血が凍るやうにすつと身がしまつた。しばらくして分列式がはじまつた。とだえては聞え、聞えてはとだえる軍樂隊、人の姿は見えないが靜かに前進する澤山の旗、折々陽の光にきらめく銃劍……それ等が皆、感激におのゝく心をじつとおししすめて居るやうに見えた。やがて我等の番になつた。勇壯な軍樂隊に合はせて前進する。最敬禮、その時舉手を遊ばされた。有難さ、おそれ多さ、日の國の民のみが覺える感激に私は涙がにじむのを覺えた。

大空にはちぎれ雲一つ飛んで居なかつた。その眞青な空の下に、我等の歌は感激に充ちた空氣をゆるがせた。軍樂長の打振るタクトの先が私には次第に見えなくなつてしまつた。限りなき大御恵み、あゝ、何と云ふ若人の今日のほまれなのだらう。「かしこさに涙こぼるゝ……私は頬につたふ感涙を何ともする事が出來なかつた。感涙にみちた若人の萬歳の聲は、大きく山々にこだましては最後の餘韻を残して澄み切つた青空に吸ひ込まれた。身にあまる光榮、かうして聖壽の萬歳をとへる事の出來る我等は何と幸福な者であらう。

歸途、靜かに歩いて居た私の心の中には、不思議なまで有難い目にあつた異常な興奮と、今まで自分の一生の大事とも思つて居た事が事もなくすんだ一種の淡い淋しさがあつた。そして私はもうこんな目に會ふ事は二度とないだらうと思つた。御親閱式も終つたのだ。長い十ヶ年間の學生生活の唯一の尊い、敬虔な思ひ出、私は一生涯、今日の此の光榮を忘れないで居よう。今日味はつたこの尊い氣持を忘れまい。さうだ、私は今日の此の一事でも強く明るく、そしてやさしい人として立派な次代の中堅たるに恥ぢない女性にならなければならぬ。

私は身にしめてさう決心した。

「感激」唯この一語

熊本縣立八代高等女學校第四學年 米 典 子

紺碧に輝き渡る秋空に、阿蘇の靈峯は紫の煙をゆるやかに、たなびかせ／＼六萬に餘る若人の感激に溢れた顔は歡喜と希望に輝いてゐた。帶山の高原は軍旗、校旗が微風にハタ／＼となびき、軍馬はたてがみをふるはせながら、高らかにいなないて人の波を縫つて行く。

後二分、何と云ふ静けさ！皆の眼は輝いてゐる。「御臨場」緊張しきつた人々の全生命は一瞬の中に風聲を赤誠を以て迎へ奉つた。「君が代」の莊嚴な、四方をふるはす調に 陛下は雪白の御臺にお立ち遊ばされ、我等をはるかに見渡されたおゝ！何と云ふ神々しき！何と云ふ有難さであらう。感激に涙はあふれ、かしこさに胸はせまる。軍樂隊の勇壯なメロデー、若人の血を躍らせる劍影のひらめき。「あゝ我等生けるかひあり……」さうだ。今日こそ、我等の生ける甲斐ある日である。神とも尊む 聖上陛下の英姿をおろがみ、感激の潮にひたれる今日の佳き日！何と榮えある日だらう。一糸を亂さぬ分列隊の中を一步一步、玉座に向つて近づきつゝ、軍樂長の鮮かなタクトに全身の血を漲らして歌ひ始めた。

「あゝこゝにすめらみことの風聲を……」胸は一杯になり、聲はふるへ、涙が後から／＼と頬をつたふ。「感激」唯この一句につきる。大日本！洋々たる前途はこの第二の國民、感涙にむせぶ我等に希望の手を差延べやさしくほゝ笑みかけてゐる。天皇旗はへんぼんとして太陽に輝き、かしこくも我等の眼前に 陛下は立たせ給ふのである。「忠君愛國」猛然としてこの思想が身中にみなぎり溢れた。本山知事の萬歳に和して、出来るかぎりの聲で萬歳を唱へた。潮の様な萬歳の聲は山をもとゞろかし玉をころばす様な餘韻を長く引いて四方の山々に吸ひ込まれて行く。

嗚呼十一月十八日！我等はこの光榮あるかゞやきに溢れたる日を記念に我等の長き前途、希望の前途を、陛下の御爲に皇國の爲に全生命をさゞけてつくしたい。

御親閱拜受感想

熊本縣立人吉高等女學校第四學年 小山 千鶴子

あゝ昭和六年十一月十八日。此の日は私達少女が終生忘れる事の出来ない光榮の日であり、感激の日でありました。此の度我が熊本縣下に催されました、陸軍特別大演習御統裁のため、長くも風聲を熊本に駐めさせあそばされた

聖上陛下には、大演習終了後寸暇もあらせたまはざるに係らず、菊の香薫る十一月十八日忝くも駕を帶山練兵場に枉げ給ひ、縣下は申すまでもなく、鹿兒島縣を除く九州の全縣下、遠くは山口縣の男女中等學生、専門高等學校、青年訓練所、女子青年團、在郷軍人の御親閱の儀を催されました。

此の日は一片の雲だに浮動するなく、東の彼方に登ゆる阿蘇の連峯は今日の佳き日を壽ぐが如く、颯々たる金峯風は今日の榮ある日を祝福するが如くに思はれました。午前八時より各團隊は或は校旗を或は團旗を先頭に翻し、威風堂々と映ある式場へ乗り込みました。十一時頃になりましたと七萬に垂んとする人々が所定の位置につき、さしもの廣き練兵場も人を以て埋められてしまつたかの感がいたしました。練兵場の周囲には今日の榮ある御親閱を拜觀せんと、若きもの老いたるもの、遠くより近くより十重二十重に堵列し文字通り全く立錐の餘地なき程でありました。

午後の一時頃でありましたらう。大本營あたりの空と覺しき所に一發の煙花がうちあげられました。それは御發聲の合圖とうなづかれ、私共は思はず襟を正し、そして胸は高鳴るのでありました。あたりは寂として聲なく全く水を打つたやうな静けさであります。やがて雨簿が御到着になり、軍樂隊の國歌奉奏裡に 陛下には設けられた玉座にお立ちになりました。此の瞬間私共はまのあたり神を仰ぐかの如き一種の莊嚴なる感に打たれました。神々しいと申しませうか、恐れ多

いと申しませうか、はた勿體ないと申しませうか、あまりの忝なさに胸塞り涙がほとばしるのみでありました。斯くて勇壯なる軍樂隊の調べに歩を合せて男學生、青年訓練所生、在郷軍人の閱兵式が行はれました。その間畏くも

陛下には吹き募る烈風にいさゝかの御厭ひもあらせられず、始終直立不動の御姿勢を保たれ、校旗又は團旗に對しては一々擧手の御答禮をあそばされ、秋霜の如きその御謹嚴なる御態度には只管恐縮し奉るの外はありませんでした。最も嚴肅なる裡に分列式が済みますと、「奉唱隊前へ進め」の號令が下されました。感激に充ち／＼た胸をとゞろかせながら、私達幾千の奉唱隊はいやが上にも緊張を覺えつゝ、静々と玉座近く進みました。至誠をこめた奉唱歌が靜かにしかも嚴かに合唱されました。それは全く感激のひびきでありました。

かくて千載一遇の御親閲の儀も目出度終りを告げましたが、陛下には全員最敬禮裡に龍顏殊の外麗しく御車を還しあそばされました。數ならぬ私共少女子たちが未だ會てない盛儀であつた御親閲に參列する事の出來たのは何と幸福であり何と光榮ではありませぬか。私共はその光榮と感激とを深く胸に秘めて子々孫々に傳へねばなりません。

思ふに我が國は現今内外共に多端な折柄でありまして、彼の滿洲事件の如きは國力の消長に關する大問題であります。聖上陛下におかせられては、この國難の御解決に日夜いかばかり大御心をおなやましあそばされてゐられるかと拜察するだに恐れ多き極みであります。私共臣民たるものは年の如何を問はず、性の如何を顧みず、職業の何たるに係らず、凡て心を一にして、陛下の大御心を體し、小にしては自己の本分を守り、大にしては國の隆盛を計るの大きな覺悟をなし以て皇恩の萬分の一に報い奉らねばならないと思ひます。

御親閲式に參加して

熊本縣立人吉高等女學校第三學年 隈 部 仲 子

十一月十八日！その日こそ私共に取つて一生の光榮の日である。秋空は紺碧に晴れ渡り風麗らかに光る帶山練兵場につめかけた私共は鳳輦着御をどんなに待ちわびた事でせう。時刻迫つたと見え式場入口に立てられた竿頭にスル／＼と大國

旗が引揚げられた。祖國の聖き姿赤き心を青空高く描いた日の丸の旗風に私共七萬人の大衆の心も自ら引締まる様であつた。突然「氣を付け」合圖の喇叭一聲、廣漠たる帶山に響き渡ればさしもの帶山原頭も音を潜め、全衆姿勢を正した。戸山學校軍樂隊の「君が代」吹奏裡に鳳輦は着御遊ばされた。秋陽朗らかなる帶山原頭、大阿蘇の連峯薄かすむ遠景の前に清淨の白布に蔽はれたる玉座に肅然として立御あらせ給ふ聖姿の神々しさ、原頭に翻へる天皇旗、私共は餘りの感激に涙の頬を傳はるのを禁じ得なかつた。再び軍樂隊の「君が代」奏樂嘯啞と響けば滿場靜寂嚴肅にして原頭を吹き渡る風の戦ぎに校旗、團旗、青訓旗、分會旗が、そよ／＼と動いてゐる。吹奏が終つて本山本縣知事より御親閲を仰ぎ奉る旨奏上せられ、次に軍樂隊の行進曲に伴ひ分列式が行はれた。標旗かさし足並揃へて進む美事さ、丁度一大長蛇の陣渦卷形を描いて行く様である。時間たち愈々私共奉唱部隊の段となつた。私の胸は光榮と感激とに高なりつゝ玉座前に行進する足は強く大地を踏みしめて居た。私の心は緊張してゐるのか、それとも元氣にか、一種の強い氣力に滿ち滿ちてゐた。三奉唱隊は丁度黒潮の津浪の様に大きな揺らぎを見せて行進し、玉座に向つて凹字形を作つて靜止した。眞心からの最敬禮をなし軍樂隊の伴奏に一二三節を奉唱した。その時の私の心中は何一つ邪念なく唯々感激の心で歌の一句／＼を眞心こめて高くそして明瞭に奉唱した。後全員の「君が代」奉唱、次に本山本縣知事の音頭で七萬人の大衆は一齊に

「天皇陛下萬歳」の熱誠溢れる聲に大地を轟かした。かく天地を揺がし心の限りを聖壽の無窮を壽ぎ奉つた知事は玉座前にて行事終了の旨奏上された。時は二時十二分。一時十分より始まり約一時間の間、陛下には高き玉座に直立あらせられしまゝ身動き一つだに遊ばさず、終始參加隊に御眼を注がせ給ひし大御心を拜察するだに畏き極みであつた。私共はほんとに歌にもある様になんたる幸か、天皇陛下の御英姿を拜し光榮と感激とに無限の思ひを胸に秘めつゝ、鳳輦の還御を奉送した。あゝ私共はあの御尊容神々しき、天皇陛下の御英姿を拜し光榮と感激とに無限の思ひを胸に秘めつゝ、鳳輦の還御を縣命學業に勉勵し修養し以て皇恩に報い奉らねばならぬと堅く心に誓ひました。

御親閲拜受の感想

熊本縣立人吉高等女學校第二學年 得 田 徳 子

嗚呼昭和六年十一月十八日。何といふ感慨深き日でありませうか。此の日は私達にとつて、一生忘れる事の出来ない光榮の日として胸にきざまれるであります。彼の一夜はてしなき帯山の練兵場にて九州各縣の男女青年六萬餘人の御親閲にあたり、私達の思ひもよらぬ、陛下の寵顔を拜する事の出来た事は、私達の一生涯中今一度とあり得る事ではありませぬ。これこそ即、千載一遇であると云はねばなりません。一時間にわたる間を陛下には畏れ多くも直立不動の御姿勢で多數の青年を御親閲遊ばされ、將來有爲の臣民であるとお喜びになつた事でありませう。又私達一萬五千の女子團體が、「あゝこゝに」を奉唱した時には、只々感激に溢れて歌そのまゝに涙が頬を傳うのでありませぬ。

世界には澤山の國がありますが、日本のやうに萬世一系の 聖天子を戴き、君臣の間柄の美しい國は外にはないと聞いて居ります。此の立派な國に生れた事は何といふ有難い事でありませう。私達はこんな結構な國に生ひ立つて、かぎりない陛下の御恵をうけてゐるのでありますから、其の御恵に答へまつり、誠の心をもつて御奉公致さねばならぬと云ふ心が一層深く胸に刻まれました。

しかし只今の私達學生としては、先生の教のまゝに一心不亂に勉強し、両親や祖父母によくつかへ、兄弟姉妹と仲よくし、自分の修養につとめる事が即、立派な御奉公であると思ひます。私達は此の忘れ難き「昭和六年十一月十八日」を胸に刻み、其の日の感激を思ひおこして一生の思ひ出と致したいと思ひます。

御親閲拜受の感想

熊本縣立本渡高等女學校第四學年 平 田 ヤ エ

其の時はもう頭の中には何もありませんでした。自分が今何處に居るのか、今何をして居るのか、そんなことを思ふ時ではなかつたのです。豫定どほりのすべての行動を、無意識になし、誠心こめてうたはねばならぬ奉唱歌さへ、無意識の中に、うたつたのでした。

軍服をお召し遊ばした颯爽たる陛下の御姿を唯感激に燃えた眼で高鳴る心をおさへて拜して居ました。初めてお拜み申した陛下の御姿の如何に氣高く、麗しくおはしましたことよ！いまだに其の御姿があり〜と眼前に浮びます。御親閲が莊嚴な「君が代」の奏樂裡に、恙なく終りを告げた時、極度の緊張から、はつと我にかへつた私は、御親閲以前の倒れる様な苦しい疲があとかたもなく去つて居るのに氣づきました。おゝ！其の時の何と爽快な氣だつたことせう。

陛下の玉の様な御徳が、如何に偉大にましますかを今更ながら、しみ〜と感じ入りました。そして此の様な御徳高き聖天子を上に載いて居る私達國民はもつと〜自重して聖恩の萬分の一にも應へ奉らねばならぬと、固く自覺しました。

生涯を通じて又と再び來ぬであらうところの、此の無上の光榮に浴した私達は、如何なるみめぐみの下に、生を享けたのでせうか。御親閲を拜受して、口に出して言ひあらはすことの出来ないすべての感情が、唯「ありがたかつた」の一語に盡きて終ひます。

御親閲拜受の感想

熊本縣立本渡高等女學校第四學年 平 下 滋 子

秋空一碧、白雲輪に飛んで、帯山の眞中に日章旗高く翻り、ハタ〜と歡喜の音を立てぬ。

畏くも 至尊の行幸を仰ぎ得し今日の幸と譽とに、集ひし我等はらからは唯感激の涙もてふしおがみぬ。おゝ畏き聖天子の御姿は我々の眼に今現實の尊き御影として映じぬ。夢にあらぬか。否夢にあらず、夢にあらざる現實なり。はるか彼方の玉座に立ちおますよと思へば、自ら頭は下りぬ。秋とは言へ名ばかりの今日の寒さは冬に異らず、寒風は阿蘇の嶺より吹き來りて、茫漠たる帯山の廣野に吹きくるふ。其の真中に今 陛下は立たせ給ひて、御みじろぎだにし給はず。「君が代は千代に八千代に……」嚴かなる奏樂は始まりぬ。其の嚴かにも靜かなる音律！尊き國歌は我々の心を石の如くかたくしぼりて早や感激の涙頬を傳へり。男子分列式に續きて奏でらるゝ御親閱奉唱歌「あゝ我等生けるかひありおほけなき……いかなる幸か畏さに涙こぼるゝ」まことや、我が心の奥底をいつはらす歌ひいでし心地なりけり。この光榮！いふべき言の葉の術を知らず。我等如き賤しき身にして、目のあたり 聖の君を拜み得し今日の譽れのいづれの日にかまたとあらん。我等春秋に富む。さあれ、この光榮を得し今我が玉の緒の絶ゆとも些の悔なし。

忘我の一時は過ぎぬ。奏樂の裡に 陛下の御車は隔たりぬ。大なる感激は尙幾萬の赤子を包みて、隻語を發する者だに無し。あゝ尊き極み莊嚴の至りとはかくの如きを言ふならん。一時間の長き、陛下には御みじろぎだにし給はざりき畏き極みながら御乾徳の一端を窺ひ奉るべく、我等如きいやしき身には、いかにして報ゆべきかそのすべを知らず。

おゝとはに／＼記念すべき今日の佳き日！昭和六年十一月十八日、此の年月日は我が胸深く刻まれて、老いたる後にもなほ我がほこりとやならん。君の御惠の御光に、阿蘇の高嶺も、はた帯山の草原も輝きてあり。今日の佳き日よ。

御親閱拜受の感想

熊本縣立本渡高等女學校第二學年 上野 絢子

昭和六年十一月十八日！晩秋の空は心ゆくまで晴れ渡つた。至尊の御英姿を拜する今日の佳き日よ。雨降るな幸あれ

かした、幾度祈つた事であらう。その私達の至誠が神に通じて、悪天候勝ちの晩秋に稀な快晴となつた。天に太陽は輝き地は光榮に輝く。大阿蘇を背景に、廣い／＼帯山は天も地も人も草も、すべてが輝きに包まれて居る。風は強かつた。しかし 陛下をお迎へするためすべてを清める風である。四方の旗が爽かにはためいて居る。正直にいへば私達は疲れて居た。遠い天草から殆ど寝もやらずに海を渡つて來た上に、前夜は市立高女の舎營で冷たい夢を結んで、更に今日この帯山に集合してからも、相當長い時間がたつた。しかし今日の大きな光榮にくらべては身の疲れ位何でもない。心は感激に躍つて居る。

午後一時頃と思はれる頃、喇叭の音は響き渡つた。私達の心は夢から覺めた様に緊張した。遠い所に位置して居るので拜する事は出来ぬが、今しも 陛下が御着き遊ばしたのである。御自動車がある／＼とすべつて來たかと思ふと早くも玉座の上に御起立の 陛下の御姿を遠く／＼拜した。私達にとつて過去にも無く未來にも無い光榮と感激の時が、今や來たのである。學生、在郷軍人、青年團の分列式が開始せられた。團旗の林、人の波！大海の潮が寄せてはまた寄せる様である。廣い帯山を埋めた六萬幾千の集團に物聲一つ無い。聞えるのは勇ましい足音ばかり。すべての人が光榮に酔つて居るのである。分列式が一時間近くを要した。風は強くて寒い。この長い間陛下は高い玉座の上に御起立のまゝでゐらせられる。何と有難い大御心であらう。やがて軍樂隊が私達奉唱部隊の方に向つて來た。合圖の旗は振られた。あゝ私達の時は來た。私達は眞直ぐに進んだ。光榮に震へて、感激の眼を輝かして。陛下の御姿が次第々々に大きく拜されて來る。丁度神様の御前に一歩々々近づく。神様は次第々々に御尊體を現はし給ふといふ様な心地である。私達は今や 陛下の御前近く立つたのである。「あゝ我等生ける甲斐あり……」私達の様な草深い田舎の賤しい女子が、この光榮に浴する事を今まで夢にも思つた事があらうか。私達の最敬禮に 陛下は御答禮遊ばした。何といふ畏い事であらう。奉唱歌はま始つた私達は咽喉も裂けよと歌ひ奉つた。真心からの聲を張りあげて。豫行演習の時は兎角不揃ひ勝ちであつたのに、今日は幾萬人の聲がまるで一人の聲の様である。光榮に躍る心が一つになつて現はれたのである。奉唱歌は進んだ。もう天も無い

地も無い、人も無い。たゞ感激に震ふ聲があるばかり。無我の境！人の心が神の心と一つになるとは、眞にこの様な時の事であらう。「……………今日の生まれをよるづ代に語りつきつゝことほがん一つ心に」奉唱歌は終つた。誰の眼にも感激の涙が輝いて居る。あゝ光榮の時は終つた。

しかし光榮そのものは私達の子々孫々に至るまで永久に残るのである。陛下がこの寒い強い風の日高い玉座に長い間御立ちになつて、私達を御親閲遊ばしたのは、將來の日本を背負つて陛下に仕へ奉るべき私達を、頼もしく思召せばである。私達がこの光榮を記念とするたゞ一つの道は、今までの眠れる心を覺まして、修養につとめ、眞に立派な女子となり、母となり、以て陛下の御恩に報い奉る事である。

御親閲を仰ぎ奉りて

熊本縣立阿蘇高等女學校第四學年

甲

斐

澤

晴れの十一月十八日。胸躍らせつ指折り待つた光榮の日は遂におとづれた。絶好の小春日和に恵まれた私達は堂々たる姿勢で整列した人々に分列式の勇ましさを感しながら練兵場に着いた。私にはこの空をそして秋風そよぐ練兵場を、この日程廣やかに美しく思へた事はない。見上ぐる青空は一點の雲も止めず洋々たる水面の様に澄み、果てしなく山々の彼方に續く。見返れば大阿蘇の連峯がかすかに眺められる。金峯山は晩秋の青空を背景に紅葉した姿を麗かに輝かせて居た。爽やかな風に興奮した頬を吹かせつゝひたすらに陛下の着御をお待ち申上げた。やがて大本營御出發の合圖の花火が靜かな大空に一團の白煙を残してかゝげられた。大國旗は高く翻翻として翻つた。

時は私達の緊張の中に刻々と過ぎて行く。一時十六分。「シン」と靜まり返つた帯山原頭に莊重なラツパの音が塊々と響き渡つた。と共に私の全身を水の様な氣がスーッと走る。軍樂隊の吹奏につれて菊花の御紋章燦とした御召自動車の上

にゆるやかに着御あらせられる。直ちに勇壯なマーチは湧き起つていとも華やかに勇ましい大分列式の幕は切つて落された。黄に赤に色彩鮮やかな分隊旗は風にひらめき立並んだ銃剣が折からの陽光をあびてキラ／＼とまばゆく瞳を射る。力強い靴音は大地の底までもと響き、若き日本を負うて立つ熱血の人々の姿を眺めて居ると雄々しいとも頼もしいとも例へ様のない感じで胸が一杯になつた。分列式が恙なく終り整然として兩側に別れて並ぶとたちまち軍樂隊を先頭に奉唱すべき私達は玉座に向つて三方より靜々と前進する。今や私達の前にさへぎるものもなく神々しい純白の玉座に一人御微動だに遊ばされぬ御英姿は長くも厳かに拜された。合圖の赤旗がゆるやかに上下すると全員ビタリと止る。最敬禮にたゞ萬感胸に迫つて喉に熱い涙がにじみ出た。清朗とした樂の音と共に私は颯爽たる御姿を仰ぎつゝ魂の底より溢れ出る聲で歌つた。

あゝ此處にすめらみことの 風箏を迎へまつれり みくるまを……………

清らかな感激に包まれた一萬五千の若き少女の聲。
歌曲は深き／＼餘韻を残して終つた。本山知事の萬歳三唱に合した聲は四方の山々、青空にこだまして天と地と人と共に聖壽をことほぐと思はれた。續いて起る「君が代」の吹奏の中に御車は肅然とした人々の前を滑るが如く徐々に動く。限りなき譽れに私は唯感涙の瞳を上げて何時までも／＼御見送り申上げた。

御親閲

熊本縣立阿蘇高等女學校第三學年

江藤 富見子

紺青にすみ渡つた空遙かに瑞雲白く柵引いて、阿蘇の山脈も不知火の海も今日の聖駕を拜せんものと靜やかにひれ伏してゐる。帯山原頭、秋の日は輝き風少しく立ちて日章旗は翻翻と翻へる。あゝ此の長さ！尊さ！天皇旗は秋光に燦として

輝き、菊の御紋章はきら／＼と金色の光を放つ。

天皇陛下には長くも直立不動の御姿勢をもつて壇上に御立ち遊ばされ、我等女子奉唱部隊の最敬禮にかたじけなくも御手を上げさせられ御應酬遊ばされた。やがて湧き起る啾啾たる軍樂隊の吹奏樂と共に「あゝこゝに」の奉唱歌が全九州の若人の赤誠をこめて歌ひ出された。高く、ひく／＼、美はしく、和やかに、此の光榮をこの感激をと力のあらん限り、心のはらん限り、肥後の野に響けと歌つた時、涙は止めどもなくほ／＼を傳つて流れ落ちた。只！只！聖恩の畏さにひれ伏さずにはゐられぬ。此の大御代に陛下と時代を同じうして生れ来た光榮をひしと感じた。

あゝ我等生けるかひあり おほけなき今日のほまれを

おほけなき今日のほまれを

萬代に語りつぎつゝ ことほがむひとつ心に

此の御代の新しい光明と希望とを祈りつゝ感激に打ちふるひながら萬歳を三唱した。陛下には「君ヶ代」奏樂裏に還御あらせられた。あゝ其の御英姿よ。

外には滿州問題漸く急を告げ、内には經濟的、思想的な、多事多難なる折、陛下の颯爽たる御英姿を拜し、若き日本の將來洋洋たる事を感じ、我等若人は陛下の御爲、祖國日本の爲、より良き健全なる第二の國民として活動せん事をつかりと心に誓つた。あゝ光榮ある此の日、永久に／＼。

御親閲

熊本縣阿蘇高等女學校第二學年

横

手

リ

ッ

昭和六年十一月十八日。其の日は私達の一生涯を通じて永久に忘れる事の出来ない、又忘れ得ない感激の一日である。

縣内の御親閱奉唱隊に加はつて帶山の練兵場に着した時には流石に一同は緊張して何とも言ひ得ない感にうたれてゐる。廣々たる練兵場には點々とテントの白い色が見られる。お午のお辨當等たべたりお友達と話をしたりしてゐると、やがて「整列」の大號令と共に幾萬の民は一言をも發せずして整列する。私達は松下中隊長の指揮で整列した。眼前には縣内及縣外の男子が全く石像の様に身動きもせず言葉も發せず立つてゐる。大空は果もなく晴れて所々に點々と白雲が浮いてゐる。天使の白衣の様に。一時二十分になつたらラツバの甲高い音と共に陛下御召の風聲が靜に御臺の前まで進んで来る。私達の後ではラチオが今日の此の場の景を一般の人々に傳へてゐる。一同は謹みて陛下の御出御を待ちうけて最敬禮をした。白くはりつめた御臺の上に陛下の御勇ましい御英姿が拜されると私達は言ひあらはす言葉の術も知らない位心が引しまつて来た。最敬禮の後で男子の分列式が始まつた。軍樂隊の吹奏する樂の音が帶山一たいをとゞろかすかの様だ。練習の時とは全く異つて分列式も大へん早くすんだ様な氣がした。それも陛下の御前だからであらうと思はれる。男子が一定の場所に着いてしまふといよ／＼私達の行進である。六百米も離れた個所から全体が出て行く時の敬虔な氣持よ。途中で二度「中隊止れ」をして一問程高い所へ上つて来た私達、そぞろに涙の出るのを如何ともする事が出来なかつた。陛下を眼前に拜して進み行く私達の心、其れはこんな經驗のある人でなければ到底感ずる事が出来ないであらう。殊に私は一番の列なのであたりの様子を隈なく見る事が出来た。定まつた位置まで行つて一同は止つた。再び最敬禮をして精「君が代」を歌ふ。縣内外の奉唱隊が全部一聲に發するその聲は陛下の御心によりそうて皇國をお守りする國民の眞神の表れだ。するといよ／＼以て奉唱歌だ。

あゝ此所にすめらみことの風聲を……

澄みたる大空にはもう一點のくもりもなく、一同の發する一語一節の眞心こめた歌は何ともいへないうるはしい歌だつた。陛下には七米の高御臺にて御姿勢も正しくして私達の歌ふ歌を聞召され給うてお出になる。私達の最敬禮に對して舉手の禮を致させ給ふ御姿に陛下の嚴格なしかも其の中に情のこもつた御様子を拜する事が出来た。最後に軍樂隊の奏

する「君が代」が終ると、静かに御臺をお下り遊ばされた。此の時此の一瞬間こそ私達は涙の止めがたい感激の瞬間であつた。やがて赤いお召の自動車にて静に帯山練兵場を御出發遊ばされた。

此の光榮ある御親閲をうけた私達は全く生ける甲斐ある國民であると言はねばならない。あの緊張した心持をいつまでも永久に忘れずに修養につとめなければならない。

御親閲の光榮を偲ぶ

熊本縣立多良木高等女學校第四學年 鳥飼美典

空高く、秋深し、朝陽はさし昇り、婉然として下界に微笑みかける。高く低くそより立つ山々の、まだ霜を着ぬ紫の肌の輝かしさ、さや風に翻々と翻る天皇旗の何と言ふ朗明さ、何と言ふ純潔さ、何と言ふ崇高さ、何と言ふ偉大さぞ、白地の波を掻き立て、ばた／＼と鳴りはためく、あゝ、今日ぞこれ千載一遇のよき日——我等が帝のかしこき御姿をおろがみまつる。

嘯唳たる「君が代」の喇叭、茫漠たる曠野の涯から涯に響き渡れば、颯々たる風もしばしは鳴を潜め、天地の間、聲なく、人もなく、肅として氣神に入る。かくて玉歩ゆるやかに、おましにお立ちありかしこしや仰ぎ見る 萬乗の聖、あゝ大帝——大聖の陽光燦々として、あたり眩し。

折しも放たれた一羽の鳩は、銀色の翼を輝かせ、滑るが如く宙空を掠め、徐々に旋廻上昇する。榮光あまねく萬物に照り映え、歡喜の巷に平和の天使、萬民至誠の高らかなの歌聲、あゝ大帝、我等の帝、あらたかな御稜威に草木も木もひれ伏し有難さにただ感激の涙こぼるゝ。

御親閲の光榮に浴す

熊本縣立多良木高等女學校第三學年 橋本のぶ子

恰度その日——御親閲の前日だつた。和やかな陽光は、如何にも長閑に、平安に、天地の隅々まで照り輝き、一切は——見るもの聞くもの總てが——朗かな笑と、慷慨たる光の彩りと、それから受ける新鮮な刺戟と興奮と、——さうした輝かしい歡喜の姿であつた。私達の汽車は、斯うした雰圍氣を掻きわけてひた走りに御親閲の地——熊本市へ向つて突進した何と言ふ喜ばしさ、何と言ふ誇らしさ、それは、到底簡單な言葉や字句によつては表現されない喜びの絶頂だつた。

「でも考へても御覽なさい、私達は、その日初めて制服を着たんです、そして御親閲に参加するんです、それで、それで……」轟々と列車は驀進して居る。「肥筑の野山に朝日は映えて……」乙女等の樂し氣な歌を載せて、其處にも此處にも笑の爆發、はち切れさうな歡呼の渦巻、その中に在つて、私はふと——私の魂はふと多良木驛へ後戻りして居た。「ほんとにお氣の毒だつた。私は泌み／＼さう思つた。自分が幸福であればある程、人員の都合上、選に洩れて後に取り残された姉妹達への同情は深かつた。驛迄見送つてくれた彼女達の眸の中に、私は判然と、羨望に潤んだ光のあつたことを見逃さなかつた。「出来ることなら、ほんとにこの私の心に漲り溢れて居る——有り餘る程の幸福感を不遇な方々に分けてやりたい」と思へたのだつた。けれ共流石に喜の方が大きかつた。

走る／＼、爽かな風を押し切つて野も山も、川も、畑も民家も——何も彼も——車窓に映るありとあらゆるものは潑刺たる生氣と輝く希望と光明とに燃え、清新な呼吸に蘇つたかのやうに、芒の枯穂までにこやかに微笑みかけ、沿道の其處彼處、落穂を拾ふ雛鷄までが歡喜の羽叩きに躍り廻つて居る。沿線の村々、町々、光榮満ち／＼た華やかな光景は、次から次へと眼まぐるしく展開される。私達の血潮は、いやが上にも高鳴る。熊本！熊本驛！私は、此處で初めて先着の自分の魂に巡り遇つた様な氣持がした。けれ共、それもほんの束の間で、周圍の喧々轟々たる空氣は、忽ち私達の心を搔亂し

て了つた。物々しい警官や憲兵達の怒號叱咤の聲々、渦巻く群集、混亂の中を泳ぎ廻る自動車電車、等々々、さながら戦場の如き騒然雜然たる光景である。何が何だか分らない。小さい私達の頭には、全身の血が一時に逆上して、只茫然と先生の命令を待つて居るばかりである。駈け足！それだけは明瞭に聞えた。私達は半ば無意識に駈け出した。列を亂さない様に！そんなことは聞えない。無我無中で私達は走つて居る。私達の頭は「帶山練兵場——御親閲豫行演習」只それだけのことで占領されて居た「並足！」の號令を聞いた時には、ほつと救はれたやうな思がした。「聖上御駐蹕の地」それを考へると、私は、斯うやつて熊本市の一端を走つて居ても、淨化された心の緊張に足もすくみ、天地の間に漲る大聖の威光に撃たれて、自ら襟を正し、頭の下るのを意識したのであつた。

その日の豫行演習は、型の如くとも整然と嚴肅に行はれたのであつたが、その歸途、阿蘇御登山から御歸還遊ばす御召列車を拜觀した時、私達幾千萬同胞の父——否々神とおろがみ奉るやんごとなき御姿を想ひ見るだに恐懼の至であつた思は忽ち三千年の昔に溯り、光輝ある歴史に燦として邊を拂ふ菊花の御紋章、萬世一系ゆるみなく、いやが上にも榮えます皇室の御有難さに涙こぼれ、それこそ感激の極みであつた。

その夜、市立高女が私達の宿舍だつた。二階の窓際に立つて、靜かに暮れ行く聖恩の地、闇に白く浮び出た熊本城の雄大なる姿を眺めて居ると、新たな感激と感謝の念は、其處から湧然と私の心に襲ひかゝつて、震へるまでの五体の緊張を覺えるのであつた。瑞雲深く重く——やんわりと城内を閉ぢ込め奉り、如何にも平和な輝やう蕪幕の帳は、漸く薄絹のべールを以て、靜肅に、いとも莊嚴に被ひ隠さんとして居る。「陛下よ、安らげ快い御眠りに御つき遊ばせ」私はさう祈らずには居られなかつた。斯うした無上の歡喜を載せたまゝ大地は徐ろに一廻轉した。——長い興奮の一夜だつた。

明々とあけ放たれた蘇山の頂からは、さながら私達乙女子の心の様に、輝かしい希望と光明とに躍動し、萬民至誠の熱血を振りかけたかの如く、或は又文字通り千載一遇の今日の佳き日を祝福するかの如く眞紅の太陽は赫然として青天高く輝き渡つて居る。——御親閲の當日——十一月十八日の早朝である。身も心も、すつかり清められたすがすがしい朝、私

達は愈々市立高女を立つて、帶山練兵場へと向つた。

幾萬、幾十萬——群がる奉迎拜觀者の間を縫つて、間斷なき群集の行進、歡呼のどよめき、町並の後に靡く青空、軒々に鳴りはためく日章旗、何と言ふ至純な血潮に燃えた博大さだらう。私は暫くさうした沿道の光景に心奪はれながら、然し嬉々として爽かに歩いて行つた。程なく帶山へ到着、晝食を済まして整列した時、私は或る大きな責任感に打たれた。その責任感とは「陛下の御前へ出る」たゞそれだけの——けれ共極めて重大な意義と抱負とを持つた責任感だつた。

「果して……」さう考へると、私の体は尙更硬直して了つた。「この堅くなつた状態で式の最後まで完ふするか否か？」それは實に恐ろしい——畏れ多い極みだつた。「時」は刻一刻と經過する裡に、愈々陛下も御着裝遊ばす。

「氣をつけ——！」唼然たる喇叭の響、瞬間廣漠たる大平原には微風のおとづれもびたりと止つた。一草一木の小揺らぎさへもない。滿天地水をうつた如き靜寂さだつた。肅然たる「君が代」のラツバ、玉座高く翻翻とひるがへる天皇旗、遙におろがみまつる 聖上の御英姿、あゝ、何と言はふか、莊且嚴、いえ／＼とてもそんな生ぬるい形容詞などで描寫され得ない感激の至極であつた。

私は、今此處にその感想文を認むるに當つて、私自身の知識の淺薄さを省る外に、言葉や文字の如何に感情に對して不完全なものであるかを發見し得たかのやうである。

總て、戸山軍樂隊の奏でる莊重な行進曲に伴れて、大部隊は徐々に前進移動を開始した。一糸亂れざる分列式に續いて私達の奉唱隊も、御前間近に進み、最敬禮をして奉唱申し上げたのであつたが、赤子幾萬の朗な歌聲は秋の野の隅々まで流れ渡り、聖壽の無窮！萬歳！の歡呼の聲々はさながら萬雷の如くさやかな曠野に轟きわたつたのであつた。

あゝ光榮の思出、うれしくも亦かしこきことの……。

御親閲を仰ぎて

熊本市立高等女學校第五學年

畑 中 敏 子

御親閲拜受——遙々と海を隔て陸を異にした何百里の彼方の大内山の奥深く在します吾が大君をお偲び申し上げては遙拜をなし又「君が代」の無窮を歌つてゐた私達は今までのあたりに白布の壇上高くあの凜然たる御英姿を拜して奉迎歌を奉唱してゐる私達に氣がついた時あまりの有り難さとおそれ多さに或不思議さへ思つた……云ふべき言葉を知らなかつた。

あゝ今し——すめらみことの御姿を——おろがみまつる……」陛下の御姿か朝霧の中の様にかすんで來た。そして今自分が何處を歌つてゐるかそれすら無意識の裡に歌ひ終つたと同時に熱いものがはら／＼と頬を傳つて思はずはつと顔を上げた私の眼に映つた友の顔——友の顔にも涙の線が光つてその瞳はうるんでゐた。「あゝみんな／＼同じだつたんだ」私には何か知らぬ微笑ましい氣がした。あの心境、何と云ふ長くも尊い一時ではあらう。雑念を入れない、慾望を思はない、これこそ害よりも清き清淨無垢の一時、この一時こそ人間は眞の自己を見出す。眞の人格が生れる。鏡の如き秋の空の如き一點の曇を持たない透徹し切つた空虚な心。此處に有の儘に映し出された自己の姿。存在。を見つめた時、私は何か知らぬ硬直する様な感激を覺えた。これこそ日本國民たるものゝみに與へられた衷心からなる喜びであり、感謝である。私はさう思つた。

海行かばみづく屍山行かば草むす屍大君の邊にこそ死なめかへり見はせじ

家持の彼の歌もこんな心境から生れ出たものに違ない。折にふれた大和魂の叫び——あまりに尊い神の御姿の前には日本の國民はすべてのものを忘れる。否願みる餘裕を持たない。皇室讚美!!これこそ理論と法規とを超越した絶對的のものであり先天的に「大和魂」と云ふものによつて享けついで國民的信仰である。私は今一天萬乗の大君をおがみ奉つて今更ながらこの句に一人肯いて涙ぐましくなつた。親とも慕ひまつり赤子ともいつくしませる——此處に他國に見られぬ美が

輝き、義が生きる。私はつく／＼さう思つた。

萬有を包む

永遠に亘る大愛

大御心がそれである。

あの一舉手遊ばされるに於てすらすべての民草を、同胞を抱擁される限りなき吾が大君の御心が偲ばれて感慨無量の氣に打たれた。御微動だも遊ばされぬ御動靜、此處に私は我が日の本の礎の儼然としてゆるぎなきを思つた。

あゝ佳き日哉十一月十八日!!私はこの世に生を受けてゐる間この日を忘れないだらう。それは丁度胸に捺された焼印の如くに……。

空には白地に赤く燃え出た——國民の盡きぬ誠を象つた様な日章旗がうすら寒き晩秋の風に翻々として泳いでゐた。

御親閲を仰ぎて

熊本市立高等女學校第五學年

清 田 峰 子

十一月十八日!今日こそは我等七萬の若人が待ちにまつた光榮の日、御親閲の當日である。此の日、帶山練兵場は鹿兒島をのぞく九州各縣、並に山口、沖繩を加ふる八縣の男女學生、男女青年團、在郷軍人、これら御親閲を忝くする七萬の御親閲隊、並に數知れぬ拜觀者の群で埋められた。人!人!人の山だ。老も若きも皆 聖天子の御英姿を仰ぎ奉らんと涙ぐましい程の感激に慄へつゝ、集ひ來つた赤子の群なのだ。

午後〇時半、我等御親閲部隊は廣漠たる帶山練兵場の東部に玉座を正面にして整列し、ともすればはすむ胸の感激を押へながら 聖上の着御を御待ち申し上げる。天はどこまでも高く晴渡り片雲をだに認めない。遙かなる大阿蘇も今日ばか

りは鳴をしずめ、帯山の雑草まで蘇つて来たやうに思はれる。着御の時刻せまるや、嘯唳たるラツバが響いて正面高く大國旗が掲げられる。小豆色の御召自動車は「君が代」の吹奏裡に場内に滑べるが如く入つて来る。時に午後一時十分。秋陽麗かなる帯山原頭、金峯の秀峯を背景として雪白の高い玉座の上に、やがて凜然たる御英姿の眞直に立御あらせらるゝを、遙かに拜みまつつて總身に異常の緊張を感じる。さしも廣い帯山を埋めた人垣の一人として聲を發するものなく唯々満場静寂の極、原頭を吹き渡る秋風に無数の校旗、團旗がかすかに動くあるのみ。少時の後、分列式が開始される。その足なみの美しさよ。標旗を先頭に、五萬有餘の各部隊が長蛇の如く渦巻状を描いて進行する。聖上陛下におかせられては、各部隊に對して擧手の禮を給はり、身動きも遊ばされずとも熱心に聞せられる。遙かに其の御姿を拜してさへおそれ多さにたへられぬを、まして分列行進の若人の胸中はどんなだらう。皆々、聖上陛下に對し奉り、何物をも忘れ、たゞ忝さに夢中になつて行進してゐるに違ひない。心の奥の奥底から湧き出づる清水のやうな大和魂の渦巻。これがこの分列式の形となつて進行してゐるのだ。世の中の濁に沁みない尊い神の世界を見るやうな美しいそして儼として冒し難い氣分に陶醉してゐた私は「氣をつけッ」と云ふ聲にハツとして我に返つた。いよ／＼今から我等乙女等の御親閱の行進がはじまるのだ。「聖上陛下の御前に」と思へば、體全体に異様な引き締りを感じて思はず手をにぎりしめた。一步。一步しつかり大地を踏みしめながら、片唾をのみつゝ御前に進んで行く。玉座に向つて最敬禮の後奉迎歌の奉唱。

「あゝ、此處にすめらみことの みくるまをむかへまつれり」

聖上陛下には未だ寸分も御姿勢を變へさせられず、畏くも奉唱する我等一萬五千の乙女等をみそなわせ給ふ。私は其の御姿を拜し体が熱くなるのを感じた。目がうるんで霧がかゝつた。と思はず涙が頬を傳はつて流れるのを感じた。あゝ、今、此處に集へる幾萬の乙女等は皆、私と同じやうな感激に、頬には涙を流しながら 陛下の御英姿を拜しつゝ歌つてゐるのだ。おゝ、何たる感激ぞ。此の廣い帯山原頭につめよせた官民、ならびに潮の如き拜觀者の目も皆一樣にうすら寒い秋風の吹き附くる六尺の高臺の上に、あだかも固定せる直線の如く、一時間にもわたつて凜然として立御あそばされる

聖上陛下の此の御姿に集中してゐるのだ。此の御精勵に對して皆ひとしく感激の涙に咽んでゐるのだ。誰も彼も磨ぎすました鏡のやうに清い心で、此の 天子様の爲に死をも誓つてゐるのだ。何ものにも優つた信頼の心で、自己を忘れて感激してゐるのだ。これこそ、國民的感激の絶頂だ。我が國の生命たる君民一体の大和魂の發露でなくて何だらう。剛健、勇武、忠君愛國、正義、平和、これらの氣持の一つになつたものが今、此の寮圍氣の根本を流れてゐるのだ。それが今、躍動してゐるのだ。現今、青年の中で、ともすればいかゞはしい思想を抱くやうな者がゐる。しかし、それは單なる心の一時的病氣に過ぎないのだ。まだ／＼日本は墮落するやうな事はない。日本は強い。此の有難い 聖天子を載いてゐる以上我等は安心して力づくよく生きて行く事が出来るのだ。私はかう考へて、 聖上の御稜威のかしこさに感泣せずには居られなかつた。

奉唱歌につき「君ヶ代」に、はた萬歳三唱に、廣漠たる託摩原頭の地は裂けんばかりであつた。かくて我等若人の光輝ある御親閱は無事に終をとげた。おゝ、何たる幸か。「よくぞ日本に生れたる」私は心の底から、かう叫ばずにはゐられない。萬感胸にせまつてものを云ひ得ず、ふと打見れば、青空も、山も、木立も、はた此の大地も、胸には燃ゆる焔を抱きつゝも、靜かに息づいてゐる。おゝ、記念すべき光榮の日よ。十一月十八日!

光榮に浴して

尚綱高等女學校第五學年 村 井 末 子

時は十一月十八日午前九時半過、所は講堂西側の御歌奉唱室。私達は今や直立不動の姿勢で、一指をも一髪をも動かすまじと、石の像の様に整列して、 至尊陛下の御臨御を御待ちしてゐるのである。息もつけない程嚴肅な沈黙、針を落しても響かうと思はれる程張切つた静寂。あゝそれは激しい力で、潮の様に寄せては返し、焔の様に猛り狂ひ、瀑布の様に

高鳴り荒れる——。それらの心のオーケストラ！おほけなくも我校に行幸を仰ぐ事さへ光榮至極であるのに、取り分けて我等補習科生、五年生、二百有餘の生徒は、此の同じ一室内、眼前數歩の間近に龍顔を拜することが出来ようなど、誰が夢にも思つたらう。あゝ歡喜！憧憬！恐懼！そして涙ぐましい感激！潜める戦慄！今數間を距て、玉座に就いて居らせられるその御英姿、續いて校長の單獨拜謁のその態度が、私の胸に靜かに描き出されて来る。やがて校長の校務奏上の詞が途切れに聞えて來た。天覽品の説明が濟んだ。やがて此の部屋に尊き御姿を拜する筈だ。

今開かれんとする扉、私達の目頃見なれた、そして間斷なく開いてゐた其の扉、今は何とも形容し難い不可思議な扉。固形を脱け出て息苦しくひしめきあふ心の錯綜の渦を集めて、奇蹟の出現を暗不するかの様に見えるその扉！聞える。聞える。拭き清められた廊下の上を靜かに傳はり來る響。一刻又一刻、次第に近づく御靴音決して不思議ではない。夢でもない。力強い現實の響である。コトリ、コトリ、グツ、グツ、グツ……。其の一響にも激しく動く心を、ぐつと抑へつけて居る努力に、何とも云へぬ喜びがある。聞き漏らすまいとあせる御靴音は、正しくそして次第に大きくなるにつれて喜びに満ちた心の鼓動も次第に高まるのだ。今はもう我身は我身でありながら、別な世界に住んでゐる。この奉唱室に立つてゐる体は空しい形骸、魂なき自分である。扉は音もなくスウツと開いた。無意識に最敬禮をした。校長からの言上がすむ間、指を動かさうとするが、どうしても動かない。第二の最敬禮のピアノの音は、いやが上にも張つめた空気を破つて、「ひらけ行く」の曲が弾き出された。涙ぐましい程嚴かな空氣は、御下賜御歌のリズムと共に消えて行く。

(昭憲皇太后御歌)

ひらけ行く學の窓の花櫻世に匂ふべき春をこそ待て

時計の秒針のカチリと音のする間もない一瞬間、ちらと龍顔を拜した。あゝ何と氣高い神々しい御面影だらう。私の眼は永く拜する事を許さなかつた。ま今で小さい心臓にのみ封じ込められて、張りつめた様に思はれる血潮が、此の時凄まじい勢で頬を襲つて來るのを覺えた。嚴かな涙ぐましい一瞬！この氣持を言ひ表はさうとすればする程そこひなき焦躁を

感じるばかりである。千言萬語を費しても満足に言ひ表せないこの氣持。流れ逝くまゝの月日は行かしのより他はななく限られた貧しい記憶の力も、美しい夢も、あどけない思ひ出も、薄れ行くまゝに棄去る以外に術もない。あゝでも私は再び神々しい陛下の御眼差しを拜する時を失つてしまつた。それは心の弱さにか。陛下の御稜威にうたれてか。恐らくはそれ等の兩方であらう。

太陽の如く莊嚴に、日光の如く靜かに、輝きに満ちた一瞬よ。けれども太陽の如く永久であらう。一瞬なるが故に、また限りなき高價な満足であり。一瞬なるが故に、又一きは色濃く光り輝くであらう。

晴れのマスメーム

尙岡高等女學校第四學年 田 中 多 計

聖上陛下におかせられては、時局重大の秋にもかゝはらず、霜月中旬、肥筑の野山を中心として行はれる大演習御統監の爲、九重の帝都を御發聲あそばされ、一路森の都へ向はせられた。降り續く時雨を御いとひも無く、大演習御統監に續く地方行幸も終りに近づいたのである。あゝ學舎の我等一同を始とし、草も木も待ちに待ちこがれてゐた尊くも畏き行幸の朝は來た。

十一月十八日！連日の雨もからりと名残りなく晴れ、天には一點のちぎれ雲も見えず、張りまはされた青白の幔幕は、吹く微風にはためいて、天も地も私共の千載一遇の光榮を祝福してゐるかの如く見えた。九時三十三分二臺のオートバイは、雄々しくも校門をくぐつたのである。皆の身体も精神も緊張した。今頃藥專を御出まじで、やがて幾分かの後には、此處へ龍駕を寄せ給ふのであると思ふ間もなく、二臺のサイドカーについで濃い小豆色の御召自動車は、校門内にすべり込んだ。私共は極度に感激して呆然となつた。否極度に緊張したのだ。沈黙の幾秒かは過ぎ去つた。直に陛下には御

車を下り給ひ、並び居られる奉迎の方々に御會釋を賜ひ、校長先生御先導にて講堂なる假便殿に入らせられ、ついで生徒成績品天覽の後、第三室なる奉唱室に入らせられたのだらう。昭憲皇太后御下賜御歌を奉唱する五年及び補習科生の聲が、あざやかではあるが、かすかに私共の並び居る運動場に流れて来た。幾分かの後、陛下には、いよ／＼其の御英姿を玄關に御あらはしになつた。其の時長くも、陛下には御帽子を御取りになつていらせられたが、直に御かむりなされつゝ校長先生御先導にてマスケーム場へと向はせ給ひ、最敬禮の號令に私共は恭々しく頭をたれた。此の時、陛下には擧手の禮を賜うた。やがて始まるピアノとヴワイオリン合奏の「富士の嶺萬古……」の調に合せ、私共は身も心もかるやかに、そして又此の光榮の短時間を如何にすれば御満足あらせられるかと、一心になつたのであつた。其の五分か六分かの間、陛下に、長くもちつと御椅子に御掛けになつたまゝ、微動だになさなかつたのである。マスケーム終了後、全員最敬禮裡に、陛下には又玄關に向はせられた。二分間の御休みの後、再び玄關に御出御になり、自動車に御召あそばされた。私共肥の國少女は感激に胸をふるはしながら、御見送り申し上げた。陛下には擧手の禮を賜ひつゝ、日章旗ひるがへる校門を後に、天機いとも麗はしく、醫大へと鳳輦を進め給うたのである。

あゝ千載一遇の光榮に浴して、ホツとしたと同時に、私はまぶたのあつくなるのを覺えた。玄關前には重立つ職員内相夫人等奉迎の人々は皆感泣してゐられた。解散後私は無意識に控室に飛込んだ。思へばあまりにも光榮の度が過ぎてゐるやうだ。現實の世に、尊くも畏き一天萬乗の現御神を此の貧しい校舎に御迎へして、感激にふるへない者があるだらうか有難涙を流さない者が一人としてあるだらうか。思へば思ふ程、考へれば考へる程、知らず識らずあつた涙が兩頬を傳ふのであつた。

あゝ惟へば、天さかるひなの一森の都那本の、數ある女學校の中より擇ばれて、此の粗末なる一校舎に尊くも龍駕を迎へ奉るおほけなき光榮に浴した私共は、如何なる事を以て之に御對へしてよいかを知らないのである。あゝかうして十一月十八日は私共の永遠に忘れ得ない日となつたのである。九時三十三分より十時頃まで、其の二十何分の如何に尊きかは

私共ならで味ひ知る事の出来ないものであつた。永劫に、又永劫に我が尙綱の歴史上に一大光彩を放つ事であらう。

感 激

尙綱高等女學校第四學年 山 本 俊 子

いよ／＼その日が来た。十一月十八日。全校職員生徒こぞつて如何に此の日をお待ち申してゐたことか。霜月の空は澄み渡り、所々にちぎれ雲が軽く浮くのみで、草も木も山も川も皆々喜びに耀いてゐる。定刻純白のユニホームで、土色のグラウンドを埋めてしまつた。今迄練りに練つて来た此のマスケームをやがては天覽に供するのだと思へば、坐るに胸の高鳴るのを覺える。右側には卒業生花櫻會の方々、職員、家族の方々がつゝましく居並び、母校の光榮に鼻高々としてゐられる。

九時三十分頃、爆音けたゝましく門より躍り込んだオートバイ。あゝいよ／＼だ。皆緊張して来た。息づまる程嚴肅な沈黙。心臓の鼓動まで聞えさうに思はれる程張切つた静寂、邊の空氣迄が何となく重々しい。その沈黙を貫いて滑るが如くは入つて来るサイドカー。續いて鳳輦……。我知らず頭が下る。涙ぐましい感激……。今御座所に玉歩を運ばせられたのだと思ひ、講堂の屋根を見上げれば、今日のおき日を賀ぐかの如く、二、三羽の鳩が嬉しげに玄關の上をすれ／＼にはばたきをして飛び廻る。一秒、一分、時は流れる。「氣をつけ」號令の下に思はず姿勢を正し頭を下ぐれば、神々しき玉歩の響!!頭をあぐれば、臺の上の氣高い御英姿。今更ながら胸せまり、喉の熱くなるのをどうする事も出来ない。

聖上陛下だ。大元帥陛下だ。いや夢だ。幻だ。神々しき夢をみつゞけてゐる自分だ。でなければあの 至尊陛下を、目のあたりに拜しようなど、餘りにも勿體なさすぎる。だが、否、決して夢でもない。幻でもない。力強い現實の御英姿だ。靜かに最敬禮をなし、これよりマスケームを演ずるので。思はず足はあがる。体は敏速に動く。これは機械で我身を左右

してゐるのだ。間もなく終つた。今まで鍛へに鍛へて来たマッゲームが終つて、最後の最敬禮を受け給うた後、再び玄關の方へと玉歩を移させた。

あゝ、百の詞を費しても千萬の文字を列ねても満足に言ひ表すことの出来ないこの一瞬の嚴肅な氣持!!。森嚴な光景!!

御親閲の當日

大江高等女學校第五學年

森岡無有

見渡す限り澄みきつた日本晴の空、瑞雲たなびく御親閲場あたりを吹き通ふ風も妙じくめでたい。中空高く一羽のとびがいとゆたかに輪をまがいてゐる。折からひびき渡る喇叭の音、私達は思はず姿勢を正した。なんともいへない莊嚴な氣があたりたじよふ。

陛下の着御——あゝ今から御親閲が始まるのだ。秋風たえず寄する玉座あたりから、得も言へぬ氣が湧起つて来る。仰ぎたてまつると動かさざる泰山の如く重々しき直立不動の御姿。あゝ神々しくも聖上陛下の御姿!。旗手に依つて捧げられてゐる天皇旗は風にはためきながら燦然として秋陽の中に輝いてゐる。現ならぬこの様!あゝ私達は夢に夢見てゐるのではなからうか。在郷軍人、青年訓練所生、男子中等學校學生等の分列式が終る。「氣ヲ付ケ」「前へ進メ」私達は一せいに歩き出した。なんだか一步毎に莊嚴さがまして行く様に思へる。奉唱線まで進んで来た頃にはもうもつたいなさ嚴肅な氣持で一杯になつた。最敬禮をして、おそろく玉座あたりを仰ぎ見るに、私達から僅かばかりへだたつた所に陛下の颯爽たる英姿を拜し奉つた。あゝ私達はこんなに玉座近く侍つてゐるのだ。おそれ多い……。「あゝこゝに……」の調べもなんだかこの世ならぬ調べの様に思はれる。誰にも負けない眞心で歌ひあげた。「あゝ我等生ける甲斐あり……」本當にさうだ。思はずしらす涙がほゝを傳つてどうしても歌ひ切れない。しばらく黙してやつと歌を續けた。

縣知事閣下の音頭に和して起る。「天皇陛下萬歲」この託麻野もとよめとはかりに三唱する。「あゝ聖壽とこしへにあらせ給はんことを、聖壽とこしへに榮光あらせたまはんことを……」。萬歲三唱に引き續いて、今一度最敬禮を申し上げるややくしく頭を上げた時、陛下におかせられては御體顔いと御満足氣に私達に三度の舉手を賜はつた。「おそれ多いもつたない」なんとも形容出来ない或る感に打たれて御英姿を仰いだ。思ふもおそれ多いことであるが「私達の御父上様!おしたはしい國の御父様」と申し上げたい様な氣がした。折から起る「君が代」の奏樂、今還御だ、得も言はれぬ或る嚴肅な感に打たれてじいつとかたづをのんだ。莊嚴裡に野外略式自動車兩隊を進めさせられた。遂に御車のかげも見えなくなつてしまつた。不圖我にかへつた。あゝ今のは夢ではなかつた!事實だつた!!確かな實在だつたのだ!!!あゝ千載の一遇永久のこの日!!!かしこみて一絶を賦したてまつる。

親閲場頭金氣芳 錦旗燦爛耀秋陽

英姿仰拜玉壇上 奉唱三聲聖壽長

御親閲日

大江高等女學校第五學年

佐々照子

聖上陛下熊本へ御駐營遊ばされてより七日、いよ／＼今日は御親閲式の當日である。

總員約七萬が御親閲を仰ぐ、十八日の帶山の空は正に秋空一碧、東に大阿蘇の雄大なる巨姿が迫り、西に金峯山一帯に白雲は低く低く柵引く。この上もない秋日和。大國旗は高く晴空に翻る。間もなく高さ約二間純白な玉座に畏くも天皇陛下の颯爽たる御英姿を拜した、と同時に御親閲の大繪巻物は展開された。光り輝く色とり／＼の校旗湖旗を先頭に分列式が續く其間陛下を拜すれば一々舉手の禮を賜はり御微動だになく嚴然と御直立遊ばされたる御英姿、御劍は太陽にきら／＼と光る。旭日の青年訓練旗が波を打たせて前進す。軍樂隊の奏する輕快なマーチは曠い帶山に勇壯端麗極まり

なかつた。マーチにつれて分列式は終つた。

いよ／＼一時三十分より我々女學生と女子青年團はゆるやかな奏樂と共に純白な玉座を三方に圍みながら前進した。列整へてびたりと止つた。やがてマーチにつれて樂長のタクトと共に「あゝこゝにすめらみことのみくるまを……」とあらん限りの聲を出して御親閲奉迎歌を奉唱した。誠心こめて歌ふ其の聲は美しい調を彩つて帶山原頭に勇壯な音を響して私の胸にひし／＼と何物かがこみ上げて來るのをおぼえた。これが終ると本山知事の精一杯なる力で「天皇陛下萬歳」と奉唱され、私共もこれに和してあらん限りの聲をはり上げて原頭を揺がす萬歳を奉じた。其の響きは民草の眞心こめて天地をあつし遠く阿蘇の山々にこだませんかとのみ響き渡つた。私共はいよ／＼最後の最敬禮をした。其の時の私の心は、あゝこれが終りなのかしら、あゝあの 天皇陛下の颯爽たる御姿を拜するのは之が最後かしら、とおそるおそる頭を上げた。と同時に又もや御微動一つだにさせ給はず嚴然と御直立遊ばされ、御手をお上げになつた時、私の頬にはあまりの有難さに熱い熱い涙がとめどもなく傳はつた。

あゝなんと云ふ偉大な御稜威であらう。陛下には約二時間不動の御姿勢をおくづし遊ばされなかつたが靜かな國歌奉唱裡に小豆色の御召自動車へと御移り遊ばされ、紫紺色にかすみ渡る阿蘇連峯の大自然を背景に、拜觀せる二十萬の國民を後に御車はしづ／＼と音もなく進み、誰れ一人として微動だにせぬ嚴肅な静けさの中を還御遊ばされた。

感 激

大江高等女學校第四學年 三宅百合子

天皇陛下萬歳。感激のつくす所はこの一言。恐れ多くも辱なくも、過ぐる十一日鳳轡を迎へ奉りていまだ感激の涙乾きもあへぬに、又もや、かゝる光榮に浴しようとは。

十一月十八日午前九時四十分。畏くも 天皇陛下には鳳轡を尙洞高等女學校の校庭に止めさせ給ひ、同校に集ふ縣下高

等女學校生徒八百のマスゲームを御親閲遊ばされた。不動の姿勢を取り息をのんでおのぐ足をふみしめつつ御待ち申し上げた。大元帥陛下には今しも我等が前を御通りになる。あゝ其の瞬間。崇高と言はうか、森嚴と言はうか。頭は自づと下り、血液が一時に體中を駆けめぐる如き感じは到底筆舌には盡くさる可くもない。何分間たつたか。我等が恐る／＼頭を上げ玉座を拜したてまつた時、あゝ我等が幼き時より一日一時たりとも忘れ奉つた事のない大日本帝國皇帝陛下は、今我等の目前に其の颯爽たる御英姿を拜せしめ給ふではないか。かかる賤しき身をもつて天顏に咫尺し奉るを得るもの、民と言ふ民は多けれど果して幾人ぞ。あゝ吾等如何なる幸かたゞかたちけなさに涙こぼる。われかの思ひ無我無中でやるマスゲーム。天なく、地なく、人なく、有るはたゞ感激。濱田校長の奏上が終れば早や還御。同じ世に、又何時此の御英姿を拜し奉るを得べきかと御後姿をつく／＼拜し奉るに、畏れ多けれど御名ごりはつきず、我しらす涙は熱き頬を傳ふ。涙に曇る眼をあげて御姿の消え給ふまでと見送りたてまつる。

解散と同時に皆しめし合せた如く莖道の兩側にかけより、生々しい御靴跡を感激の眼でしばしうちながめ、各々御靴跡を印し給うた砂を丁寧紙におしただく。實にこそ吾等は大日本帝國の臣民だと又更に感激の涙は新しい。

あゝあの天顏。あの御姿勢。さうして吾等が一握の砂。思へば御齡いまだ若くおはして、大日本帝國を双肩になはせ給ふ畏さ。かゝる國に生れた身の果報をしみ／＼心にしめて思ふ。仰げ大空を、ふめ大地を、しかしてかゝる意氣をもつて大に君恩に報い奉らうではないか。此の世にあらん限り、竹の園生の御さかえを、天皇陛下の御健全を永遠に、いのちをあらうではないか。「天皇陛下萬歳」。感激のつくす所は此の一言。

御親閲を仰ぎ奉りて

九州中央高等女學校第四學年 柴田ナツヨ

今日は何と言ふ嬉しき日であらう。辱くも私達若人の大集團が帶山練共場に於て光輝ある至尊の御親閲を拜受するので

ある。日は朗かに明け放たれ、而も前日にまさる秋晴の爽かな好天氣に帶山一帶見渡す限りの臺地には、瑞氣隈なく、激り吹き来る風に若人の衣も袂も軽やかに翻つて居る。時は脈動の如く一刻一刻迫り来て、やがて數發の爆竹の音が帶山の空気を振はした時、式場入口の竿頭にするすると軽く引き揚げられたる日章旗、萬衆の胸は自ら引締まる。清淨雪をあざむく白布の高き玉座は、七萬の大集團を前に、數多の陪觀、拜觀者を後に儼然とつき出て居る。

遠く霞む阿蘇の連山から續いて常盤の翠折り重なりたる龍田山、その末は遠く金峯の峯まで、雄壯なる展望を廻らした帶山原頭に今こそ仰ぐも尊し、玉座の御前にある私達はたゞ々々思ひが胸に満ちて來た。そこに男子集團の分列式が始まる。旗、旗、旗、人、人、人、人、きらめく幾團かの、熱誠溢るゝ青壯年の運ぶ足も軽やかに、續々と何處からともなく現れ出づる。それが終ると次は女子集團の番となつて來た。三部隊がさながら潮の如く、大きな而して靜かな脈をうつて押し寄せて所定の位置につく。

やがて「あゝこゝにすめらみことの 鳳簾を迎へまつれり 鳳簾を……」至誠を籠めた奉迎歌は、一萬五千の若き少女等の血潮の高鳴る感激の響は、廣い帶山の空を振はして響き渡る。その末は秋空高く上りゆき微かに消えてしまふ。あゝ何と言ふ莊重な森嚴なことであらうか。どうしてこの詞、この聲が満足に出せやうか。息つまり、胸にこみ上げて來る厚い感激の涙をやう止めとして止められなかつた。次に「君が代」合唱で莊嚴極まりなく、續いて「天皇陛下萬歲」の熱叫三唱、熱誠と感激の聲は天地を振はした。

こゝに南九州七萬の大集團の御親閱は歡喜と感激の中に終つた。仰ぐも尊き極みである。近く龍顏を拜し奉つた今日の光榮は何と言ふ幸であつたらうか。

御親閱を仰ぎ奉りて

九州中央高等女學校第四學年 豊田 絹江

まだ朝暗き校庭に誰も彼も今日晴れの御親閱を胸に描きなが嬉々として集つた。時のきざみ行くのは早い。やがて、渡麗練兵場の廣々たる野原を、曲線を描いて帶山御親閱場へと急ぐ幾萬の若き女生徒、其の足どりは今日のよき日を歡び祝つて居るかの様である。間もなく帶山へ着いた。遠近を眺むれば空は清く澄み渡り、彼方此方の山々がゆつたりと濃緑に輝いて居る。

やがて時刻は進んだ。水をうつた様な静けさになつた。そして「君が代」の奏樂が聞えると間もなく、聖上陛下には玉座に着かせ給うた煙火の合圖が帶山の天高くひびき渡つた。樂隊の吹奏する「君が代」の奏樂が靜かにおごそかに流れ出る。やがて分列の式が初まつた。五彩陸離の國旗は千代草の花とみだれ、旗、旗、旗、人、人、人、旗のひらめき、人の流れ何時盡きるとも知れぬ大行列である。かしこくも陛下には御前を進む各隊の最敬禮に對し、一々御會釋を賜はる。何と畏れ多い事だらうか。やがて分列式も終りて引續き我々女子中等學校女子青年團の奉唱隊御親閱を受ける時は來た。私共は急に感激の氣持がわいた。前に進めの號令に足を運ばせながら、遙かに前方を見るにかすかに眞白く輝いた玉座が拜せらるゝ。樂隊のひびきの音ととも一步／＼と玉座へと歩き進めて行く。殆んど無我無中である。あゝ早畏れ多くも玉座近くに列は止まつた。奉唱歌は初まつた。心の底から歌ひ奉るも胸こみ上げてその聲はかすれ出づる。「涙こぼるゝ」と歌つた時、何やらあつてもが頬のあたりを流れるのを感じた。それが私は何の故たるかを知らぬ。

ふと、我に歸つた時は、「君が代」の奏樂裡に早や御還幸の御車を御送りするのであつた。斯くして、莊嚴そのものゝ中に私共の有難い御親閱はとゞこほりなく済んだのである。

御親閲を拜受して

九州中央高等女學校第二學年 田村 榮

十一月十八日、あゝ私共の血潮は高鳴り、抑へても抑へきれなく躍りに躍るのであります。至尊の御親閲、何とありがたい光榮幸福ではありませんか。

此の日、天高き帯山原頭、遠く霞める大阿蘇連峰を前にし、清浄なる白布を以て覆はれたる高き玉座に 陛下の颯爽たる御尊姿を仰ぎ拜した時、自然に頭は下りいひしれぬ莊嚴な氣に包まれ、身体痲痺したやうになり、身振ひを禁じ得ませんでした。感激に高鳴る鼓動の旋律につれ奉唱する吾等若き女性の熱誠籠めた歌声は、帯山の草木をゆるがせて御耳に達し、合圖の喇叭に一同が最敬禮をすれば 陛下には辱くも御應へ遊ばさるゝなど數々のことに心は躍り、感激に感激を加へて來ました。やがて「君が代」の樂が朗かに吹奏されました。其の時には感激は高潮に達し、萬感胸に迫り感涙流れて止みませんでした。實にあの時程嚴肅そのものに打たれたことはございません。惟ふに、此の瞬間の心情こそ至純至誠であつたらう、もしさうだとすれば、私も確に大和民族たる素因を傳統的に享有してゐることの自信を一層高めました。高き玉座に直立不動の御姿勢が、始より終まで一時間に亘る御親閲、其の長き間終始御微動もあらせられず、たゞ御上衣の端を、冷氣を帯びた廣野の荒風の弄ぶに任せられた御様子は、私の豫て想像だもしなかつたところで、只々感激の涙にくれました。

思へば此の光榮と幸福とは、今更の様に身にしみて何と表現してよいやら、その言葉を知りません。今でも奉迎歌を口ずさむ時、自然に自身緊張して、御親閲の時の情景が眼のあたりに展開されてまゐります。此の有難き深い印象は永へに鑄付けられ、少しでも薄らぐ時があらうとは思はれません。

御親閲に参加して

上林高等女學校第四學年 福田 フジエ

九州及び沖繩、山口各縣の六萬六千が御親閲を仰ぐ十八日は明けた。この日帯山の空は正に秋空一碧東に大阿蘇の雄大な姿が迫り西に金峯山一帯に瑞雲棚引く絶好の秋日和である。

阿蘇連峰の大自然を背景に奉唱隊は整然とならび四十餘萬坪の大平野を埋め盡したやがて一時十五分莊重な「君が代」吹奏がゆるやかに流れ、お召自動車はすべるが如く場内に着いた。大國旗が高くひるがへり純白な玉座に畏くも

天皇陛下の颯爽たる英姿を拜し奉る。天皇旗は燦然と輝き渡る。三十八大隊の分列式が行はれるこの間誰一人として微動だにせぬ嚴肅な静けさである。分列式が終ると奏樂と共に玉座に向つて前進玉座御近くに進み最敬禮の後樂長のタクトとともに「あゝこゝにすめらみことの」の奉唱は餘韻が遠く原頭にひびいて消える。感激が胸にこみ上げてくる萬歳三唱の聲にいつしか感激の涙がうるんでくる自分を見出した。

畏れ多くも 天皇陛下には終始御直立遊ばされ三十八部隊にいちいち御答禮遊ばされ一時間餘を御不動のまゝ御親閲あらせられたのである。

この光榮この幸ある日の本に生を受けた自分は何といふ幸福者だらう。千載一遇のこの光榮龍顏を拜し奉つた日私は心の中でさげばすにはゐられなかつた。

御親閲に参加して

上林高等女學校第四學年 古泉 須和

嚴肅な刻々が流れた。私達の全身は水を浴びせられた様に冷靜に、そして私達の眼は一せいに玉座に向つて集注せらるゝ

た。あゝ何といふ神々しさ……一生の思ひ出となるであらうあの御親閲當日の十一月十八日。空はいやが上にも清く晩秋の微風はあだかも此の喜び、嬉しさを祝するかの様に廣々とした帯山の平野を吹き盡してゐる。

順次に進み行く分列式、思ひ出すもかしこき 聖上陛下の御答禮、目の邊に拜して萬人唯感激の心のみです。一刻々々と私達の御親閲も近づいてきました。指揮者の號令は私達女性七千餘人の胸にこだました。今や御親閲式は嚴かに靜肅に奉唱歌はいとも高らかに 聖上陛下の御前にて御奉唱申上ぐる事が出来た。續いて「君が代」の合唱數萬の群集の眞心こめし國歌の奉唱は帯山の太平洋をゆるがせました。終りに熊本縣知事の音頭のもとに、幾萬かの大衆は 聖上陛下の萬歳を三唱した。かくして私達の最も期待した御親閲は恙なく終了した。追憶に残りし數々未だ彷彿として眼前にひらめく追憶を辿り……見るに、 聖上陛下の玉座に着御遊ばされてより約一時數十分とか承はる。誠に恐れ多き極みである。

夢の如く早く過ぎた大演習の大事業。限りなき光榮に浴せし私達幾萬かの同胞、いかにして此の鴻恩に報ひ奉る事ができるだらうか……。努力？そして眞面目に、私達は心一ぱい勉強しやう。さうしてこそはじめて私達としての唯一の報恩ではなからうか。

御親閲に参加して

上林高等女學校第三學年 大 熊 愛 子

菊花薫る森の都にも喜びの日が訪れた。十一月十八日御親閲當日である。秋空は麗かに晴れ渡り大阿蘇の連峯は空の彼方にその雄姿を見せてゐる。廣々たる帯山練兵場も、六萬六千の男女中等學生、青年處女會拜觀の群集によつて満たされた。全く人の波である。人々の顔は喜にみち……陛下の御着御を今か……と待つてゐる。「氣をつけ……」の號令と共にラツパの音が勇ましくひびき渡つた。戸山學校軍樂隊の「君が代」の奏樂の中に錦の御旗はスル……と青空に上つて行

くその時 陛下は着御遊ばされたのである。あゝ喜びの時は遂に來たのである。

あたりは靜寂……水を打つた様な静けさである。あゝこゝにすめらみことのみくるまを……。我等の熱誠こめて歌ふ奉唱歌は美しく清らかにひびき渡つた。あゝ!! その時の莊嚴さ……神々しさ……。今だかつてない嚴肅なる感に打たれた。

我々は今 陛下の御前で歌つてゐるのだ。陛下の御前で……と思ふと感激の涙が頬をつたはり落ちる。あゝ!!その時我等は龍顏を拜し奉る事が出来たのだ。一天萬乘の大君を拜み奉る事が出来たのだ。實に光榮ではないか。長くも 陛下は白布に蔽はれた玉坐の上に不動の御姿勢にて直立遊ばされ、龍顏いとも御麗しく、我々に御會釋を給はつた。やがて「君が代」の合唱。「君が代は千代に八千代にさざれ石の……」優しくそして莊嚴な「君が代」の調……

「天皇陛下萬歳……萬歳……」。本山知事の音頭により、我等の心から叫ぶ萬歳の聲は遠く大阿蘇の彼方迄とどく位勇ましくひびき渡つた。「最敬禮」その時 陛下は我々に最後の御會釋を給はり靜かに玉坐を御降り遊ばされ、御くるまの人とならせられた。陛下はいとも御名殘惜しげに、御還幸遊ばされたのである。……「君が代」の奏樂の中に……。

あゝ實に幸福感激の至りであつた。十一月十八日……永遠に忘るゝことのできない記念すべき日である。

女子奉唱隊に参加して

九州女學院第三學年 安 部 妙 子

みのりの秋深い肥筑の山野を舞臺として、舉行せられる特別大演習御統監のため、長くも 大元帥陛下には熊本に行幸あらせられました。この日町々には奉迎の提灯が軒毎につられ、國旗は微風にはためき、天に瑞雲たなびき地に赤子の歡呼湧き、銀杏城下百三十萬の民草ひとしく千載一遇の光榮に感泣致しました。かくて風聲こゝに止ること九日、その日毎夜毎が感激に明け感激にくれて行きました。中にわけて十八日御親閲の日こそいづれの日にもまして忘れ得ぬ一日でござ

いました。雨の日も風の日もひたすらにお待ち申したそのよき日、今日は市立高女に明日は帯山へと整列歩行、奉迎歌等の練習に日も亦足らずといそしみつゝお待ち申したそのよき日は遂に参りました。

昭和六年十一月十八日。あゝ何といふ榮ある日でありましたことか。秋冷の朝は薄曇りに明けて風は爽かに瑞氣たちこめた町々は、思ひ／＼に美しい装をこらして今日の光榮をことほぎ、山川草木悉くが御稜威になびき 聖壽を祈つてゐるのでございました。この日朝まだきから私共女子奉唱隊は市立高女に集合し種々と準備を整へ、四列になつて長く／＼うねりうねつて御親閲式場へと向ひました。さしに廣い帯山練兵場も今日は九州七萬の若き民草のために人の山を築きなしたかと思はれるばかりでございました。

やがて御車を最敬禮でお迎へ致しますと、私共女子奉唱隊は一直線に前進して、目的の所で直立し眞心こめた最敬禮を終へ、軍樂隊に合せて奉唱致しました。感激にみちた歌聲が空高く溶けこんで行きますと思はずも感きはまつてしまつた私の目からは、拭いても／＼涙がはふり落ちるのでした。仰げば 大元帥の御軍装も神々しく……恐れ多さに龍顔もよくは拜しかねる程でございました。本山知事の音頭にて萬歳三唱一齊に起る聲は乙女の胸の感激が一つに凝つて爆發したかと思はれ、天もどよみ地に震ふかとあやしまれました。國歌「君が代」が終つて最敬禮の中に 陛下は、帯山を御發聲あらせられ、緊張と興奮と感激のとばりは下されました。

あゝかくて光榮ある一日は過ぎました。

晩秋の黄昏は今朝の緊張に引き比べて何と云ふなみでありませう。しつとりと落着いた帯山に淡い夕陽がものしづかに照りはじめると、私共は黙々として家路につきました。あゝ今日のよき日を萬世に語りつぎつゝことほぎませう一つ心に……。

女子奉唱隊に参加して

九州女學院 井上百合子

思ひ返すも恐れ多い極みである。時は昭和六年十一月十八日、それは長くも 天皇陛下が帯山練兵場に行幸あらせられた日である。地上のあらゆるものゝ上に絶大の幸福は齎されたのであつた。我等一同は千載一遇の御親閲を仰ぎ、永劫に忘れる事の出来ない最大の光榮に感泣したのである。

朝まだきより待ち奉る幾萬の赤子、此の日阿蘇、金峯の靈姿には一片の雲影も無く愈々清く澄み渡つてゐる。時は刻々と進んで来る、折から人無きが如き静けさを破つて「君が代」の吹奏。二分三分遂に玉座に立ち給ひし 陛下の神々しい御英姿を拜し奉つた時、その御威光に知らず／＼頭は下り、威大な御力に引き付けられて動けなかつた。あゝ我等が未だ嘗て味つた事のない喜悅と緊張に充された瞬間、閃いた忠君愛國の四字は心の奥底深く刻みこまれたのである。この昭和の聖代にあひ奉る、何といふ光榮であらう。 聖天子の御前に忠誠を誓ふ若人の捧ぐる美しき旗は翻り、銃剣はきらめく陛下には幾度か擧手の禮を賜ひ御熱心に御親閲遊ばされる。次に大空高く響く我等の奉迎歌。

あゝ我等生けるかひあり おほけなき今日のほまれを

おほけなき今日のほまれを

萬世に語りつぎつゝ ことほがむ一つ心に。

歌か心か赤誠に燃ゆる若人のなみだ、こゝにあの尊い御人格の光に浴する事を得た我等の幸、あゝこの無窮の聖恩に如何にしてこたへまつるべきかを知らず。あまりに畏れ多い神々しさにうたれ、私自身の把持せる感想そのものを表現する事は不可能である。たゞ記憶のまゝを記して幸多かりし日の思出草とする。

天皇陛下を奉迎して

八代成美高等女學校第四學年 久保みち子

十一月十七日。朝、家の人達に見送られつつ、八代驛を出發した。列車内は大へんな混雑だつた。平常ならば不平の一つも言ふ人もあつたらうが、皆緊張しきつてゐる時なのでそれもなかつた。處女會の人々の親切で、席をゆづつていたりして熊本に着いた。驛前の混雑といつたら、目もまふ程だつたが、それも冷靜に見渡す隙もない私達の身だつた。休む間もなく出發した。水前寺で中食をとり帯山へと向つた。

群衆!! 丁度、夏の日中に、餌をさがしもとめる蟻の様に、長い行列をつくり、足並そろへて、帯山を目ざして行進して行く幾隊の女群、やがて私達もこの行進軍にまじつて、奉唱隊の練習を行つた。さて、一夜の夢を結ぶべく、あたへられた市立高女へと向つた時は、早や、明るい都にも夕闇がせまつてゐた。五時過ぎ、淋しくつきいだす寺の鐘に迎へられつつ、重たい足をひきすり、校門をくゞつた。と同時に、目に映つたものは、懐かしき先生のお出迎ひと、それから、私達のために我が身をわすれて、御飯の用意に餘念のないやさしい人達の姿であつた。この姿が目映するや、今まで疲れきつてゐた私の心身は、元氣づいた。これ等の人達に感謝しつゝ室内に入ると、何といふことだらう。眞暗だ。外の空は皎々としてゐるのに、……せつかく、わすれかけてゐた私の心は、いひしれぬ淋しさ、たよりなさを感じた。すると「わあ!!!。宇土櫓の美しさ」といふ聲に誘はれて、その方を見ると、まあ、なんといふ美しさだらう。夜の宇土櫓!! ぼうつと、空間に浮んだ龍宮城、偉大な玉の御殿、うるんでゐる私の目には、なほ一そう、かがやかく見えるのだつた。そして、私はお伽噺の世界の人となるのだつた。友と二人片隅に座つて、今日の疲れをなくさめあつてゐると、ついた。電燈が。あたりはまぶしい程かがやき始めた。この室も、やうやく闇から、光明へと出でたのだ。今まで、めいりさうになつてゐた私の心は生々となつた。それからは、すべてが愉快だつた。夕飯をいただきつゝ、妹達の語らひに耳を

かたむけてゐると、猶面白い。前後をもわきまへず、大聲でおしゃべりに夢中になつてゐる。無邪氣な様には、思はず、ほゝゑまされる。七時過ぎ、講堂で蓄音機をならして下さるので、行つて見ると、そのさわがしさ。蓄音機がなりだしても、まださわいでゐる。市立高女の先生や、生徒の方々の親切は、すべての點に、涙ぐましまでにあらはれてゐる。今もかうして、疲れきつてゐる私達を、少しでもなぐさめんがために、レコードをかけて下さるのに、何といふことだらうこのさわがしさは! 又軍樂隊の人々の音樂を聞いた時は、飛び立ちたい程嬉しかつた。やがて、かうしたやさしき人達のまもりにかこまれて、楽しく夢路をたどつた。

十八日。昨日の疲れも一夜の夢に、すつかりなほつた。熊本縣の第三奉唱隊の人は、朝霧晴れやらぬ中から、ひし／＼と市立高女の校庭に集つた。七千人の顔には、希望と歡喜の光があふれてゐた。午前八時二十分、元氣よく出發、晴れの場所、帯山へと向つた。長い行進軍は、續いて行く。目的地へついたので十時過ぎ、この時はもう、帯山は人でもつて埋まつてゐた。十二時三十分頃、一せいに整列を終ると、「キョツケ」の號令は下る。直立不動の姿勢にある事一時間水を打つたる静けさの中に、おでましをまつてゐると、式場正面に大國旗があげられ、煙火はあがつた。さあ 陛下御出發の合圖だ。場内は更に静まり返つた。やがて、高く、低く、奏する「君が代」の樂の音、最敬禮の中に 陛下には、玉座へとおつき遊ばされた。その御英姿をあふぎ奉つた時の私達の感激!!。御親閱は始まる。分列式の壯觀さ! それがつむと、奉唱隊は、玉座近くへ進んで行つた。強く、軽く、美しく、三ヶ月間にわたつて、練りに練つた足並、隊列、遺憾なく、發揮された。部隊は、一度止つて、更に美しく列んで御前近く二十メートルの處に止まつた。この時の私達女子の心は、皆一つであつた。そして「あゝここに」と歌ひ出すより、もう髪の毛迄震へてゐる。私は聲を限りに歌ひつゞけた。只もう聲は、かすれるばかりに、涙は、たえず、はら／＼と流れるのみだつた。有難いやら、尊いやらで、渾身をひたした。萬歳三唱、「君が代」合唱、さうして 陛下を御送り申し上げた。御親閱も終つた。大感激の中に……歸路についた時は、皆もう、ぐつたりと力のぬけた人になつてゐた。今までのあのひきしまつた態度は、どこにも見いだす

ことは出来なかつた。けれども、そのぬれた目がしらは、見落すことの出来ない尊いものであつた。再び市立校で夕食をとり、やさしかつた人々と別れを告げなければならぬ時が来た。「さやうなら、御休を大切に。」と、いふ聲にひきつけられ、別れたくないかんじさへおこつた。驛へ行く途中、賑やかな通りを通つた。何といふ美しさだらう。目につくすべてが、目さめるばかりにかがやいてゐるこだけは、森の都でなくて、光の都である。が、名譽の使命をはたして歸る私達には、何の用もないものであつた。混雑！大混雑！驛を目前に見つゝ三十分間以上も立往生した。やつと列車の人となつて、我が家についたのが、十一時頃だつた。

あゝ、かくして私達のまぢにまつた、御親閲もすんだ。あの暑い日中に流れる汗をものともせずきたへあげた私達の、この強々体と、清き心とで、つゝがなく……」

大演習について

八代成美高等女學校第四學年

桑原光子

大演習、——マステージ、——御親閲——頭の中を、走馬燈のやうにかけめぐる。何といふ幸か、老も若きも、男も女も、一人としてこの榮ある輝く日を、仰がぬものがあらうか。喜悅せぬものがあらうか。眞に、私達は生ける甲斐があつた。昭和の御代に、生れ合せた事を喜ぶのである。御寫眞で、御姿を拜するに止る私達縣民が、都を遠く離れた熊本で、天顔を拜し得るのだもの。私達はこぞつて、御途中つゝがなく、御着遊ばします様、赤心から祈つてやまなかつた。軒端に揚げた日章旗、町といふ町、山にも野にも、一際生氣溢れ、燦然と輝やう。火の國の男子、火の國の乙女は、寂覽に入れ奉らん。陛下の御心を御慰安申上げんと、縣下の各小學校、中等學校では、縣下の珍らしい動植物を、一葉、一疋でも叮嚀に心から採集したのだつた。そして、雄々しい休軀にと鍛錬するのだつた。出場の光榮を得た奉唱部隊、マstage

ーム部隊の稽古が始まる。「病氣等してたまるものか。倒れたらそれまでだ。火の國の乙女の盛な意氣を御眼にかけなくては。」皆非常な意氣込である。雨の日にも、焼けつく日の下にも、猛練習をしながら、時の來るのを、指折り待つのであつた。

十月十六日、天氣晴朗、代陽校グラウンドで、郡内の中等學生、青訓、處女、在郷軍人、千餘の人が集つて、豫行演習が始まる。私達は傍より拜觀する。「君が代」を歌ふ。自ら頭の下るを覺える。分列式、何といふ勇ましさを、奉唱部隊の御親閲の歌、涙の出る程しんみりとなる。最後の萬歳三唱、天地も爲にゆるがすかと思ふばかり。十一月の帯山の様子を思はせる。午後終る。皆日に焼け、一層健康さうに見える。十月二十日、奉唱部隊、續いて二十一日は、私達マステージの豫行演習がある。十一月七日、八日、八代で大演習豫行演習がある。ブーブー操音すさまじく縦横にかけめぐる、空の王者、走る、追ふ。ばらばら機關銃の音、急がしさうにかけめぐる兵士、重さうに足を引きすつて歩いたし。八日は、第二回目のマステージ豫行演習がある。式の始めから、午後まで、二時間餘續けて稽古がある。焼けつくやうな日の下に、倒れさうに苦しかつた。

十一月十一日、今日 陛下には、熊本に御着遊ばす。草木も奉迎するかのやう。三時十五分、今正に、熊本に御着遊ばす。學校ではおごそかに、奉迎式を擧げる。萬歳三唱。何ともなく、涙の出るのだつた。十二、三、四、大演習。雨の中で、活躍する兵士。馬上豊かに雨の中で、外套も召さず、御統監遊ばされる。陛下の英姿を、仰ぎ見る國民の胸中や如何感涙を禁じ得なかつた事であらう。進んで十五日。觀兵式。やつと雲の雲晴れて、日の神は照らし給ふ。十六日。玉體を安め給ふ御暇もあらせられず、八代宮に御親拜遊ばされる。陛下をお拜み申さうと、早くから御道筋に集る群集、八代宮馬場に居並ぶ、小學生、中等學生、青訓、處女、消防組、皆しんとして、直立して御車を待つ。十時三十五分、サイレンの音を響かせて、ザ、ザ、ザ、小氣味よく報告車が滑り來る。第二先乗、「敬禮」四邊の空氣をふるはせて、先生の號令がかかる。皆の頭が、一様に下る。身がひきしまつて、何ともいはれぬ莊嚴さにうたれる。やがて御車、屋根高く赤茶

色の前に金色の御紋のあるきれいな車の中に、陛下は侍従とお二人お掛け遊ばす。率直にお手を上げさせられて、御應酬遊ばす御優しさ。私達は心から、陛下に對し奉つて、崇敬の意と、親愛の念を寄せ奉るのである。默迎、默送、心は同じく感激にもえる。それより、水俣に窒素肥料會社を御覽遊ばして、二時十五分八代を通過して、熊本に御歸り遊ばす御召列車を、私は仕合せにも、お拜みする光榮を得た。

十七日、熊本驛前は、雲霞の群集。バスも市電も、地上に無数の人を吐き出す。午前十時半私達マスケム隊は、我が校の奉唱隊とはなれて、街をうねつて市立高女に行く。午後、九州女學院で稽古があつた。入相の鐘を聞きながら、遠い異郷に居る様な、物淋しい氣がする。市立高女一泊。夜講堂で、軍樂を聞く。遠くの空でパチ／＼火花が上つてゐる。一室に、板の間に毛布を並べ、六十餘人頭を合せてころりと寝る。この後皆と一緒に、板の間に寝る事は、恐らくあるまい。忘れ難い、尊い思出となるこの夜。明日はいよいよマスケム、御親閲がある。寝やうとしても、一層目が冴える。明くれば十八日、今日の晴れの日、満天に星のきらめく六時半に、集合して尙桐校に向ふ。心も軽く、身も軽し。朝風が冷々する。晴天満空、輝く御代を齎ぐ。尙桐校に着いてから、二三回稽古して、さて、いよいよ陛下の御車を待つ。十時〇〇分、靜々と御車は門に入る。十分ばかり立つたかと思ふ頃、最敬禮の中に、陛下は白布をおほうである境上に直立遊ばして、御答禮遊ばされる。その神々しさ、嗚呼何と尊い御姿であらう。陛下の御前で躍る!! 一生の中に一度だ。私は有難い感激に夢中に躍つた。躍り終つた時は顔は熱くほてつて、涙がにじみ出てゐた。嗚呼尊い此の日、此の時。

陛下御還幸後、陛下の少しも亂れぬ御靴の跡を、カメラに巻かれる。私達は御跡の砂を我も／＼と拾ふ。待ちに待つた今日の、私達の眞心は盡し終つた。輝く昭和の御代今日この日、私達。一生の有難い思出として、記念として永々に傳へ、英邁な御資質を語り傳へよう。

思ふに、今、彼方滿洲の地に、祖國の爲、全人類の平和の爲、正義を持つて戦ふ我が同胞もある。私達も、日本國民として、國を守り、比類なき皇室の隆盛を祈り、皇威を海外に及ぼし、益々我國文化の發展を祈り、大御心を安じ奉るべき

ではないか。

聖輦を歓迎して

八代成美高等女學校第四學年

古市鈴子

我等の故郷たる、彼の森の都熊本の地に於て、聖上陛下を迎へ申す熊本の縣民の歡びは筆舌の盡しやうもなかつた。私達は暮れ易い秋の日に、雨の降る日も厭はないで、マスケムの稽古に没頭したのでつた。陛下の御前でマスケムをなすのだ。と、つぶやく私の心は震へてゐた。辱けない思ひで一ぱいだつた。身に餘る光榮を深く／＼感謝したのでつた。指折り數へてお待ちして、双手の指の餘る程に大演習の迫つた時、私達は唯々身の幸福を思ふのみだつた。愈々横須賀港御出發、海路佐世保に向ひ給ふ。との先生よりの御言葉を耳にしては、唯々波穩かなれと祈るのでつた。胸のときめく裡に目を重ねたのだつた。嗚呼遂に十一日の日は來た。歡びの日は訪れた。全校生徒は講堂に集合し、陛下の御着熊時を待つてゐた。十五分の默想裡に長洲或は高瀬、木葉等の驛に於ての國民の歡喜の聲は遠くの八代からさへ耳近くに聞かされるやうな思ひがした。三時十五分誇りに輝くステーション。文官、武官、朝野紳士、淑女のいかめしい美しい服装。中等學校生徒。描かれる總ては歡喜そのものだつた。聖輦を奉迎した人々の幸福を羨ましく思つた。そして遠き地より奉唱し奉つた。「肥筑の野山に紅葉は映えて……」親しく陛下御統監の下に、大演習はいとも勇壯に行はれて、九州健兒の澄潤たる氣象は十二分に發揮されたのだつた。十六日には此の八代に聖輦をお迎へするやうになつた。豫定の時刻に定まつた場處に着き、ひたすら聖輦を御待ちした。やがて報告員の報告に否が應にも緊張して直立不動の姿勢を取つた。金色燦爛とした御召車は見えた。號令によつて恭々しく敬禮した。車上の御英姿。私達は唯感激のみだつた。長くも萬乗の陛下。私共はもつとも良き陛下の國民となるため、大に努力してその本分を果すのであります。御召車の行き去つ

た後一人さう思つた。

十七日、ステーションの混雑から車中の雑沓へ放りこまれた私達であつた。汽車は眞しぐらに 陛下の在す熊本へと向つて行く。五十分餘りして熊本の驛に着いた。そしてどよめきの中を滑り抜けて、美しく飾られた町から町へ進んで行つた。途中市役所から大本營なる偕行社の光榮に輝く、青塗りの屋根を望む。自然と頭を下げた。今夜は市立高女校に泊めて戴く。九時に就床した。床といつても赤い薄い毛布の敷布團である。戦争にでも行つた氣持が一寸泡の様に結んでは消える。「電氣を消して下さい」「消したら頭を踏まれるから厭だ」と、色々喋ること一時間餘り、一人眠り、二人眠りして私の眼の覺めた時は四時だつた。

十八日、それから洗面、髮結、食事等忙しく濟ませて、六時半學校を出發した。薄暗い町も未だ靜かに眠つてゐる。電車の軌る響が靜かな朝方の町へ何らか物語つてゐた。晝のどよめきは想像だに出来ぬ程の靜けさだつた。やがて尙糶校へ着いた。練習三回にして愈々定刻は來た。私は胸の高鳴るのをどうする事も出来なかつた。御召車は校門に見えた。御降車し給うて校内に御這入り遊ばした。十五分して「氣ヲ付ケツ」の號令が掛る。陛下には玉座に着かせ給うた。敬禮をすれば 陛下に於かせられても答禮を賜はつた。ピアノとヴァイオリンの前奏で愈々始まる。身に餘る光榮に、私の眼には白露が宿つた。感激の涙である。私は今日の歡びを深く感謝したのだつた。「生ける甲斐あり」との歌詞が深く大きくうなづかれた。此の年に四年生であつた喜を感謝した。玉座に在す 陛下の下で一片の雲すらもない秋晴の日、奏でる調べに合はせて躍る、此の私共の動作を、親しく御覽遊ばされるのだと思ふ時、身に餘る幸福を 陛下に感謝した。

陛下への赤誠は何人も變りやうがないけれど 陛下のいとも深き恵に浴した私は、大君のため小さな腕を以て有らん限りの心を盡す爲に、今日の歡びを心に念じ置く様にと思つた。午後六時半に市立高女を辭して市のどよめきと混雑を横ぎつて、アスファルトの鋪道を走り續けて驛へ着いた。暫時にして、車中の人となつて十一時に疲れた身を暖い寢床に投げた。

榮 の 日

宇土郡宇土實科高等女學校第二學年

藤 井 タ ツ 子

十九日、八代の町を離れた村の道で、つきぬ名残りを惜んで還幸し給ふ 陛下を奉送し奉つた。そして還り給ふ 陛下へ畏くも私は無言の誓をした。私は 陛下の赤子である、日本國民の一人である。國の爲、君の爲、小さき腕の折れる迄倒れる迄に、努力しよう、奮闘しよう。陛下の大なる恵の萬分の一にもなるやう、心から心から奮闘しよう。國に誓ひ君に誓つた私の此の誓は鐵よりも石よりも堅いものだつた。何ものにも屈しない決心だつた。あゝ思へば昭和六年の秋は何たる思出深き秋だつたらうか。生れて十七年の歳月を重ね、かつて一度も經驗し得なかつた所の敬虔な思ひ、私の一生を通じてもつとも深い感激に満ちた思ひで送つた秋だつた。此の時の決心こそ覺悟こそ私の一生を通じて最も眞剣なものであつた。

昭和六年十一月十八日！おゝ其の日こそ、私達にとつて終生忘るゝ事の出来ない榮ある日であります。おゝ……待ちわびしその日！

畏き 聖上陛下の御親閱式！ 私達の胸は只々異常の感激と昂奮にときめき、式場の嚴肅な光景を胸にゑがきつゝ、帯山練兵場に整列したのでした。やがて喇叭と響き渡る莊重な喇叭の音、つゞいて莊嚴なる分列式、そして愈々私達の榮ある奉迎歌奉唱、私の胸は更に新しき昂奮と緊張とを覺え、すべて感激の裡に御親閱式を終へてしまひました。只私の腦裡に残るものは、生れて初めて見るその餘りに嚴肅な情景と畏き 聖上陛下の御英姿並に幾萬とも知れぬ若人の群であります其の異常な情景と私の受けた實感とを如實に表現する事は到底私には出来得ないのであります。

只々私達は此の千載一遇の秋に遇ひ奉り晴れの御親閱を拜受したるを無上の光榮と歡喜を終生の記念として忘るゝ事が

出来ないだらうと思ひます。

榮 の 日

宇土郡宇土實科高等女學校第一學年 芥 川 芳 子

勇ましい軍樂隊の奏する音につれて、喜びと感激に緊張してゐる軽い歩を進めた。一足々々の草原の上を進んで行く毎に、遙か向ふに仰ぐ 聖上陛下の尊い御姿が、恰も神様の御像のやうに感ぜられて、辱けなさ嬉しさに、微かに體がふるへてゐた。眞白い高い玉座に立たせ給ふ 天皇陛下を一心に仰ぎ乍ら、一足毎に元氣が迸り出るやうな氣がした。このまゝ何處までも歩いて行きたい、まだくづつと進んで行きたいと思ひつゝ夢中で行進した。だんく 陛下の御姿がはつきりと拜めるやうになつた時、有難さと嬉しさとで私の胸は一杯になつた。行進が止んで、何十萬とも知れない人々は皆、御健やかな玉體を拜して、感激にむせんである。精一つばいの力で、そして眞心を罩めて奉迎歌を歌ひ始めた。「あゝこゝにすめらみことの……」あの歌と私達の心がびつたり合つて、其の他の事は何も彼も忘れて歌つた。終つた時には、何時の間にかまぶたがうるんでゐた。自分でも驚く程の聲を出して、萬歳を三唱した。其の時四方の山々もこぞつて歡喜の聲を上げた。そして恐れ多くも 天皇陛下は、御機嫌麗しく舉手の禮を賜はつた。帯山の芝生の上に君臨し給ふ御軍服姿の 陛下、私達の爲に、一時間以上も不動の御姿勢だつたお健やかな御姿が、深く深く私の頭に刻み込まれてゐる。

御親閲拜受の記

阿蘇南部實科高等女學校 渡 邊 み さ こ

曉の空はほのぼのと……雲の紅がゆるぎ初めた。ゴーンと黎明の鐘は、おほらかに莊重に洛中洛外の上にその餘韻を

ひろげて行く。大江高女に宿泊した私達も、いつしか目覺めてかしこき榮えある今日の一日を空想しつゝ高鳴る胸をおさへて其の準備にいそしむのでした。私達の集地は市立高女でした。集ひよつた九州各縣下一萬五千有餘の人々の心には誰一人として今日のよき日を祝福してゐないものはありません。

午前八時、旭光は輝く。長蛇の陣を造つて御親閲地帯山練兵場へ進み行く。心も朗かに、いと朗かに。秋陽朗かなる帯山原頭、吹き渡る和風のそよぎ、大阿蘇の連峯海かすむ遠景を前に、輝く御親閲の光榮に浴する若人約七萬、何といふ盛儀でありませう。私達は整列して、すめらみことの御出でましを奉迎しました。廣漠たる練兵場も、草も、木も、唯ひたすらに光榮に輝き、嚴肅そのものでした。そこに長い沈黙が続けられるのでした。

午後一時十分。鹵纏肅々として、御召自動車のタイヤの音もかろやかに、清淨の白布に蔽はれたる高き玉座の上に 聖上陛下の御英姿を仰ぎました時、私はいひしれぬ感にうたれました。青訓生、在郷軍人、青年團、中等學校以上の男生徒の分列部隊の御親閲が終ると、いよゝ私達奉唱部隊の行動が行はれるのでした。指揮官の合圖により、奉唱線に進んだ時私は一層の緊張をおぼえました。

あゝこゝにすめら尊の 御くるまをむかへまつれり

みくるまをむかへまつれり

御光に阿蘇の高峯も 有明の海もかゞよふ。

軍樂隊の伴奏につれて、奉唱歌を奉唱しました。一人々々の口から熱と誠と光榮と感激と緊張と、眞心こめてほとばしり出るのでした。

「みめぐみのいかなる幸か、かしこさに涙こぼるる。」

あゝ何と感慨のこもつた歌でせう。私は目がしらがあつくなるのおぼえました。

「あゝ吾等生けるかひあり……」さうです、私は帝國の一臣民として生を享けたことの幸福さを感謝せずには居られま

せん。幾時間ともしれぬ長い間、不動の姿勢にて立たせ給ひ、微動だになし給はぬ。聖上陛下の颯爽たる御英姿を拜し、光榮と感激と矜持とに無限の思ひを抱きました。私はこの光榮に浴し、更に忠誠の微意を表し、聖壽の無疆と國運の隆昌とを祈つてやみません。

天覽マスゲームに参加して

阿蘇南部實科高等女學校 光 木 八 重 子

天は、今日の佳き日を祝福する様に、風和やかにすみ渡る日本晴。

天覽マスゲーム、何といふ有り難いことでせう。私は、この無上の光榮に浴することの出来たのを感謝し奉る。

天には瑞雲漲り、地は限りなき歡喜に滿つ。太陽は燦として輝く。

玉座に即かせ給ひし御英姿……唯有り難さに涙こぼる。龍顏を拜し奉りたる刹那の——光榮!!感激!!緊張!!日本の大君として仰ぎ奉る有り難さ。吾れ世に出でしより十幾年、帝國の一臣民として、生を享けたる事をしみく幸福に感ずる。

廣い清々しい尙桐校の校庭に奉迎した八百の女生徒、けふの光榮に胸躍り、その感激に頬は紅潮する、上は白い運動服一種清爽な光景に感を深くする。ピアノ、ヴァイオリンの伴奏につれて、緊張に漲つた顔が一層引きしまつて、軽く白い姿が動き出す。一舉——一踏——熱と誠のこもる華やかなマスゲーム、天覽の光榮に、火の國の乙女の感激を「富士の嶺萬古」の快調に跳る。

嗚呼、昭和六年十一月十八日。お、この日こそ永久に記念すべき、無上の光榮の日ではないでせうか。

御親閲當日の感想

熊本縣小國實科高等女學校第四學年 松 本 き こ 子

薄ら寒い晩秋の拂曉、私達は第三奉唱隊の集合所たる市立高女に着きました。昨夜の舎營生の焚いた焚火の跡がまだ明けやらぬ校庭の所々に燃えさかつて居ます。そこには決つた様に五六人宛の一群が見られました。皆の顔にはありく緊張の色が窺はれます。待ちに待つた御親閲、それが今日の午後に行はれるのだと思ふと私達は無精に嬉しかつた。やがて集合の合圖と共に各校それ々の位置に着き四列を組んで帯山へと向ひました。清々しい朝の冷氣を感じ乍ら靴音高く行進する列はまるで長蛇の様だつた。

間もなく晴の御親閲場に入場やうやく明放たれた秋空、空には太陽が和やかな光を私達幸運児の上に注ぎかけてゐます。暫くの間芝生の上に腰を下して休憩し、やがて午後の一時にもならうかと思ふ頃、突然——大隊長の「氣を付け」の號令が掛る。一同は整列する。この時私達は何となく胸がそはくする様な氣がしました。すると玉座の前と思はれる邊に、オートバイが見られた。次いで御召自動車に着御あらせられました。満場寂として咳一つ聞えませんが、聽て學生團の分列式が始まらうとする頃、「最敬禮」の號令が下る。私達は一齊に頭を下げる。こんなつゝましやかな最敬禮をした事も始めてだつた。そして頭を上げた刹那、遙か玉座に御尊影を拜し奉る事が出来た。「まあ!!あそこに陛下が……」と思ふ時、私共は何とも名付け様のない涙がこみ上げてきました。私は瞬もせず仰いで居ました。折から晴渡つた秋空に、陽は燦々として輝き、一望千里の帯山練兵場の彼方には墨繪の様な金峯山がくつきり浮き出されてゐる。それを背景として設けられた玉座、そこに颯爽たる御英姿を拜する。まるで繪の様であつた。間もなく分列に入る。赤ズボンの軍樂隊がちら／＼玉座間近に進んで来た。と思ふ頃からむく／＼黒い塊の様なもの大地から湧き出て来る。陛下は各分列隊毎に擧手の御答禮を遊ばす。私達にはその時御擧げになる眞白な御手が伺はれるばかりだつた。そして私共は心の中で實に御

立派な御態度だと思つた。今までどうかすると私共は、天皇陛下を神様の様に感じて、どことなく畏敬すると言ふ傾があつた。然し陛下と私共とはもつと／＼近い關係にあるものと思はれた。神様と思ふには餘りに外々しい様に思はれた。此の時始めて情に於ては父子だと言ふ言葉の眞意が呑み込めた様に思つた。今若し私が陛下の間に進む事が出来たとしたら陛下はこ／＼お笑ひになつて私の頭を撫て下さるのではあるまいか。畏れ多い事乍らそんなに考へられてならなかつた。分列は次々に進んで今や終結を告げようとする頃、奉唱部隊には前進の命令が下つた。小高い丘の上を乗越す時の壯觀は見事なものだつた。この大群が吾等の陛下を御護りするのだと思ふと、俄かに心強く思つた。日本は大丈夫だと言ふ事を強く感じたのもこの時だつた。玉座の御前數十米の地點で進行を停止して、愈々奉唱する事になつた。間に龍顔を拝した時のあの感じ……。さては奉唱し終つた時、陛下が軽く御答禮下さつた時の事等、あゝ此時の印象と言ふものは、眞に私達が一生忘れる事の出来ないものでありませう。感激と名付けるさへ餘りに限定的に餘りに説明的なる感があります。唯名づけ様のない涙がこみ上げてくるばかりだつた。

それから「君が代」吹奏が終るまでに再び自動車に御召になり、御名残盡きせぬ内に還御あらせられました。

御親閲當日の感想

熊本縣小國實科高等女學校第三學年

武石 ちよの

此の度は、光榮ある御親閲に參加する事を得て、數ならぬ身の面目これに過ぎるものはございません。洪大無邊なる聖恩に今更の如く、感泣すると同時に、將來第二の國民として社會の全面に活躍しなければならぬ私共の責任は愈々重大なることを知らなければなりません。殊にこの度の御親閲に於ては、私共の未だ且て体験したことのないものであつた。教訓以上の教訓を体験したのであります。國史や修身で、國体の尊嚴に就いては幾度か聞かされました。そしてその度に、皇國

に生を享けた此の自分を上なき幸福者に感じたことも一度ならずありました。然し其れは理論上から見た。國体の崇高さであつて、只其處に眞理の存する事を知つたまでで、言はゞ熱の伴はない愛國心であつたのであります。處が此の度、龍顔を間近に拜する事を得ました私は、茲に一つの大きな眞理を發見することが出来たのであります。私共が陛下を御慕ひ申すその至情には今少し感情的要素が多分に混有されてゐるのに氣づくのであります。あの颯爽たる御英姿を拜した時ぞゞる感涙を催したのは果して何の爲であつたのでせうか、歴史の糸を辿つて始めて知つた感謝の涙なのであります。か、それとも冷く照らす御恵に對へまつる感謝の涙であつたのでありませうか、私共は其處に何かしら不思議な力の存在することを知つてゐるばかりであります。單なる感謝と名づくべきのであらうか、否もつと直感的な、もつと原始的な先天的なある力を感じるのであります。不思議な力とは何でありませうか、朝風に翻へる日章旗を仰ぐ時、只何となき胸の轟きを感じるのであります。これが日章旗の語る心なのであります。私共は焦うした、心を國民の誰もが享けてゐる事を知つてゐます。説明の出来ない然し何かしら尊い力なのであります。理論で動かすことの出来ない力。それは時に奇跡を産むことがあります。四十年足らずで今日の日本を築き上げたことを外國人は世界歴史上の一奇跡だと云ひました。なる程奇跡かも知れませんが。維新の大業をなさしめたのも畢竟はこの力なのであります。それは日本人のみの知る事實であるからであります。私共の祖先はあの大蒙古帝國にも勝つことが出来ましたし、北歐の大帝國露西亞にも侮り受けずに済みました。日本は何處が偉いのでせうか。体力が優秀なのでせうか、それとも國力が勝つてゐたのでありませうか何一つとして彼等に優つてゐたものは無かつた筈であります。では何處か強いのか、茲にも不思議な力の存在を肯かなければなりません。何かしら陛下と私共とは眼に見えない心の琴線が一脈相通じてゐる様な氣がします。そしてその琴線は事ある毎に高鳴り高鳴る毎に日本は一大飛躍を續けて來たのであります。現今思想國難なる言葉はよく耳にする處がありますが、然しそれはそれだけのもので、日本國民の凡てがさう考へてゐる譯ではありません、此の度聖駕をお迎へした時の庶民のあの熱誠。あれがほんとうの日本の姿ではありませうか。私共は眞の姿に還らなければなりません。私共は日本

人であります。日本人の心を忘れて果して其處に何が残るのでせうか。私共の進む途は只一つあるばかりであります。一旦緩急ある時は大君の御前に頼づく、これだけで充分であります。榮ある御親閲に参加することを得た私は、茲に眞の日本精神に立ち返ることを得て大變嬉しいことに思つてゐます。

感想

熊本縣小國實科高等女學校第三學年 柴尾多津世

十八日の朝である。私達は胸一杯の喜びを持つて帯山練兵場に急いだ。幾萬かの群集を抱く帯山の有様に私は今更の様に驚いた。山の如き民草の集ひ彼等は皆歡喜に顫へてゐる。鳳舞御着も後數分に迫つてゐる。暫くすると今まで靜かだつた大群集が俄かにどよめき始めた。私は思はず「はつ」として襟を正す。恐ろしい程の沈黙が続く。やがて玉座に尊く神々しい天皇陛下の御英姿を仰いだ時呼吸が止まりはしないかと思はれる程だつた。私は夢中で最敬禮をした、そして私共は前進を始めた。練習の時は辛く思つて歩いた所も一寸の苦痛も感せずいつどうして歩いて來たのか知らない位だつた。そしてこんな大群集の行進を目撃したことも始めてだつた、お側近く進んだ時は顔を上げることが出来なかつた、感激が胸に迫つて額きたい様な衝動を感じた。暫くすると大地から湧いて來るやうな莊嚴な音楽が響いて來た、そしてどつと關を破つて流れ出たやうな感激に顫へる歌聲にもうの凄く大群の沈黙が破られた嚴かな君ガ代は歡喜に満ちた國民の聲となつて大阿蘇をおほひつくして四海の外にも響きつゝ、天皇陛下の大稜威は聽て全世界を壓服かすものと思はれた。天皇陛下萬歳の聲は私達の感動をより高く叩つた。陛下の御一舉御一動凡て私達の感動しないものはなかつた。私達幾萬の國民のこの喜びが何十米の間を置いて、陛下の御胸にお通じならせられるかと思ふと涙が流れるばかりである、玉座からお去り遊ばされた後も聲を發することが出来ない程感激が持續してゐた。あの神々しいお姿を拜した時あらゆる心の濁

り汚れが盡く洗ひ流され其處に日本國民の眞の姿を發見することが出來たやうな氣がした。

思想國難の叫ばれる今日此の光榮の日に誰が其の非を悟らないものがあらう私共は日本人である。そして道の國日本人である。此の皇國に生を受けた事を心から感謝すると共に將來の日本を擔つて立つべく責任のある事を考へなくてはならぬ。

御親閲に参加して

熊本縣水俣實科高等女學校第二學年 中村和枝

一日千秋の想して、待ちに待つた日も、いよ／＼來た。御親閲に参加出来る。嗚呼、何といふ幸福な事であらう。千年願つても、出來得ない事なのに……。唯々感激の胸で一杯になる。

見渡す限り雲一つない青空は、陛下の英姿を一層嚴かにする。あの、龍顏御麗しい陛下を、拜み奉つた時、誰か、神の御姿を想像しない者があらう。畏れ多い事であるが、分列式のある間、一時間餘りの長時間に、一步も御動き遊ばされぬ、其の御態度。神でなくて、誰が出來ませう。殊に陛下には、毎日地方行幸や、御見學等、大變御勞れの御身であらせ乍ら、少しも御動き遊ばされなかつたのである。私は、唯々畏さに涙がこぼれるのを、止め得なかつた。

「あゝ今し、すめらみことの御姿を……」と奏迎歌を奉唱し乍ら、有難さや、畏さに胸が迫つて、どうしても歌はれなかつた。數萬の乙女。私達の歌ふ聲の餘韻が、山にこだまして一層、恐れ多さが身に沁みて來る。何と言ふ嚴かな事であらう。身も心も淨められてしまふ。

天皇旗が風にもゆるがず、立つて居る。嗚呼私達は幸福だ。此神の様な陛下の國に生きる事が出來て——。祖先に對して感謝致さねばならない。本山知事の「天皇陛下萬歳」の聲は、隅々迄響き渡つた。「萬歳」「萬歳」私達は聲の限り叫

んだ。あゝ陛下の天壽の無窮を祈らずには居れない。「君が代」の奏樂は、心の奥底迄響いて来る。陛下は挙手の禮を遊ばされて、樂の音のまにまに御還遊ばされた。

「みたま我生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらくおもへば」眞當に私達は、出生の時機が良かったのだらう。永久に——此有難い、此譽を語りつがふ。そして少しでも、皇國の爲、家の爲になる事をなさう。阿蘇の高嶺よりいや高く、有明の海よりいや深い、陛下の御恵みの大御心を安んじ奉らん爲に。

御親閲に参加して

熊本縣水俣實科高等女學校第二學年

緒方典子

十一月十八日、午前七時いよ／＼市立高女を出發して、帶山練兵場にと向つた。何萬とも知れぬ人々が、後から後から續いてまるで人間の道とも思はれる程、道路は人で一ぱいである。

間もなく目的地に着いた。あの廣い／＼練兵場には、見渡す限り人の山が築かれてゐて、縦横共に正しく整列して、今か今かとばかり、時間の迫るのを待ちつづけた。午後一時勇ましく合圖の打上げは、高く鳴り響いて、襟も正さるゝやうな何とも言はれぬ感に打たれた。廣い練兵場は水を打つたやうに、靜かである。其の靜けさを破つて自動車の音が聞え出した。一時十分、天皇陛下の御召自動車が見れて、天皇陛下は玉座に、御立ち遊ばされると同時に、青年團の分列式が始まつた。私達はまのあたり、天皇陛下を御拜み申して、何とも言はれぬ畏さに、唯涙がこぼれて、眞直して居ても、自然と頭の下る思ひがした。青年團の分列式は、大へん長い時間であつたが、天皇陛下におかせられましたは、玉座に御立ち遊ばされたまゝ一寸も御動き遊ばされなかつた。

分列式がすんで、私達奉唱隊は前方に進んで行つた。そして御親閲奉迎歌を奉唱した。御親閲が終るまでには、一時間ばかり、かゝつたが、天皇陛下は直立不動の御姿で、一々臣民に對して、御答禮を賜はられた事など、かたじけなく涙の出ると言ふより外には、何ともたとへやうもなかつた。又「君が代」の奏樂のおごそかな事と申したら、とても筆舌には言盡されず、それと共に、萬歳三唱の時のおごそかさ、縣知事さんの聲までが何時もと違つてゐたのに、心から涙が出た萬歳三唱が終へて、「君が代」の奏樂と共に、天皇陛下は玉座より、御下り遊ばされて、再び御召自動車にて、御還遊ばされた。後ではあまりに、かたじけなく、しばしは言葉も出でず、たゞぼんやりと玉座を見つめてゐた。誠に何と言つて、この畏き、おごそかな有様を人々にお話してよいか、分らなかつた。こんな光榮の御代に生れた私達は、申すも畏き、天皇陛下の御姿を、御側近く御拜み申す事が出来て、どんなに幸福な事であらうかと、思へば思ふ程一日としても、天皇陛下の御有難さを忘れる事が出来ない。こんな光榮な御代に生まれた人々は、自分の仕事に忠實に、まじめに働いて、天皇陛下に少しでも忠義を盡したいと思ふ。

御親閲に参加して

熊本縣水俣實科高等女學校第二學年

副島トシ

嗚呼今日なんと、輝かしい晴れやかな日であらうか。感激の極み、歡喜の潮、九州幾萬の人々が溢るゝ歡びと熱誠をこめて待ちに待つた。御親閲参加の日は遂に來た。吾々賤の乙女等も光榮ある今日の譽に浴する事が出来たのである。目さず幾方哩とも知れぬ帶山の練兵場に、感激と歡喜に満ち満ちたる幾萬の同門よ。天高く晴れ、阿蘇のれい峯も今日の佳き日を、ことほがむ様にすつきりとして居る。只、只、感謝の念に打たれ、時の過ぎ行くも知らなかつた。

十二時三十分整列の號令が掛つた。一分、一秒、時は過ぎて行く。皆、天皇陛下の聖駕を御待ち奉つた。一時十分、天皇御着聲の號報は邊の山野を轟かした。皆一齊に氣を付に復した。

やがて戸山音楽隊のおごそかな曲は奏せられた。萬物悉く此の曲に……何んと言ふ神々しいおごそかな曲であらう。朝日に輝く幾百の旗が動く、何んとも言へぬ思、只行進の音だけ聞えて来る。僅かの距離で眼のあたり龍顔を拜する事が出来たのである。あの高臺の上、不動の御姿にて分列式を御覽せられておはしませる。聖上陛下、特に其の行動に就いて、御眼を注がせ給うたのである。やがて、聖上陛下の御廻りを廻轉した、分列式の行動は終えた。やがて赤白の旗の發進と共に、第三奉唱隊の吾々は行進し始めた。最後の地點で整列をなして奉唱歌を歌った。第二番目の「かしこさに涙こぼるる」の所を歌う時、只眼のあたり、天皇陛下の英姿を拜した其の思が胸に高まり涙がとめどもなく頬を傳へて諸列國に類のない萬世一系の、天皇の御威徳が種々によりがへつて来た。感激の中にやがて歌は終つた。おそれ多い、聖上陛下におかせられては、絶へず不動の御姿勢にて、奉唱隊の御歌をお聞き下されたのであらう。幾萬人の歌つたあの歌は永久に一帯山の原に残されるであらう。何んとも言へぬ莊嚴の感。「君が代」の奏樂と共に、今日の晴れやかな式は終えた。滿場致悉く今日の佳き譽に加はる事が出来たのは何んと言ふ幸福であらう。希望に燃ゆる若き人々に御召の御車は勇ましく群衆を後に、大本營なる千葉城偕行社に向はせられたのである。古の事を考えて見ますに、明治天皇御在位の時吾が熊本に、大演習御統裁の爲行幸になりましたから、星霜早や三十年の今日、再、今上陛下の御幸を仰ぐ事になつたのも之等祖先の遺業と皇恩のあまねきに、只々感奮する外はありません。この譽ある天子の行幸の有難さを感じ、次代國民として國運を益々隆盛ならしめ、聖上陛下の御趣旨に副ひ奉る事が出来る様に、各人自個の職務に忠實に……あらゆる事を思ひながら、感激にむせびつゝ、帯山の原を出でました。

御親閲の榮を拜受して

熊本縣牛深實科高等女學校第二學年

岡 田 千 町

秋まさに閑なる昭和六年十一月十八日こそ私達の終生を通じて最も光榮ある感激の日とはありませんでした。待ちに

待つた此の佳き日私達は和かな秋空の下にゆくりなく展げられた一幅の絢爛たる聖代繪巻物を想はせられた帯山練兵場の御親閲式場に於て畏くも、聖上陛下の御前に眞心からの御迎への御歌を唱ひ奉る光榮に浴しました。これこそ千載一遇の光榮として生涯永へに語り傳ふべき憶ひ出の日でなくて何でありませう。

私は生れて初めて畏くも、聖上陛下の御英姿を間近か御玉座のほとりに拜し奉り誠に恐懼措く所を知らず、たゞ御親閲奉迎歌の御詞書にあるまゝの忝さと有難さとに胸詰り今更此の尊嚴な日本國民に生れ來て慶賀此の上もなき歳に生き合はせた幸と誇りのために自ら双頬の潤みゆくのをどうすることも出来ませんでした。そして私は私達の愛する帝國日本の上に劫久の榮光と祝福のあれと祈りつゝ併せてより良き小國民としての道を辿るべく益々努力せねばならぬと強く自らに誓ひました。

御親閲の榮を拜受して

熊本縣牛深實科高等女學校第二學年

江 上 房 美

昭和六年十一月十八日秋草匂ふ帯山練兵場に於て、私達は私達の生涯にまたとない千載一遇の御親閲の榮を賜はりました。今更皇恩の廣大さと國運の盛大さとを痛切に感じさせられました。島の南端、巖を嚼む外海の怒濤を搖籃の唄と聞かされつゝひそかに育つて來た私達も畏き、聖天子の御玉座の御前に奉唱部隊として御親閲の榮を辱くする由を承はりました。時の喜悅はとて筆舌に盡されぬ程でした。愈々御親閲の當日、私は脊順により第二大隊第二中隊第六十列目の一番先頭に列せられましたので、わけても畏き、聖天子の御尊影を咫尺の間に拜み奉りまして一層忝い感泣に咽ばされました。

この光輝ある國に、この隆盛なる聖代に生れ合せたこよなき幸と悦びの爲か、私達數千人の胸々は急に感極まつてやゝもすれば滞り勝た歌聲を強ひて佳き日の永遠の思ひ出の爲にと、嚴肅な軍樂隊の樂奏につけて奉唱致しました。そしてこ

の若き赤誠を籠めた大奉唱は一の愛國的階調を織りなして清冷なる託摩ヶ原の草木を揺がせて秋天高く反響してゆくのでした。

御親閲を拜受し奉りて

御船實科高等女學校第四學年 吉 田 と め 子

嗚呼、昭和六年十一月十八日、思ひ起しても頭の垂れる。この日長くも我等は 聖天子の御親閲を拜受するの光榮に浴した。其の日は空は飽くまでも澄み渡りて一片の雲もなく、山は紅葉に映えて一入我等の光榮を祝福してゐるやうに思へた。

此の時、若人の燃え立つ様な心は彌が上にも昂り、双頬は歡喜と希望とに紅潮して刻々に迫る薄霧の臨御を只管に待ち奉る。程なく一發の號砲と共に、一大國旗はする／＼と秋空高く掲揚され、壓するが如き緊張裡に聖駕は御着、間もなく玉座に立ち給ひし 陛下の御英姿を遙に拜して、滿場肅然として聲のみ莊重の氣漲り渡る。やがて陸軍々樂隊の奏する陸軍行進曲につれて、勇壯美觀なる分列行進の繪巻物は展開され、次で我等女子の奉唱隊は前進して目のあたり

陛下の御尊顔を拜して、感激に胸はせまり、からうじて奉唱する事が出来た。續いて 天皇陛下の萬歳三唱、此の時我等はあらん限りの聲を出して聖壽の無窮を祝ひ奉る。然るに 陛下には、御親閲の間直立不動の御姿勢にて終始参加部隊に御目を注がれ給ふ大御心は拜察するだに畏き極みである。

我等は斯くの如く御仁光深き 聖天子を此の國難の際に拜することを無上の光榮とし粉骨碎身以て聖恩の萬分の一に報い奉らなければならぬことを痛切に感ずる。あの尊い、あの感激の涙を流した莊嚴な光景は、終生腦裡に刻まれて後世の思ひ出となるであらう。

御親閲感想

濱町實科高等女學校第二學年 小 野 綾 子

御親閲。そのひびきは私共に嚴かなそして燃ゆるやうな、いやそれは何とも言ひ表はされない感じを自らいだかせます此の一種不可思議な感じに胸をおどらせて待つた御親閲でありました。當時のことを思つただけで、私の心の自然に緊張してゆくのをはつきり感じます。

陛下の御前です。感激の時です。軍樂隊は今御親閲奉唱歌を奏してゐます。軍樂隊長のタクトに合わせて私達は聲のあらん限り、息のつゞかん限りを盡して眞心より奉唱してゐます。恐れ多くも此の赤心よりほとばしり出づる歌の玉耳に達するかを思へば餘りの忝けなさに全身のかすかなふるへ、たゞ夢中に歌ひつゞけました。樂隊が終りました。しんと静まり返つてゐます。私は再び 陛下の御姿を仰ぎました。其の時非常な勢で私からだをおほひつくしたものがありません。すべての雜念が飛んでしまつて 天皇陛下の御爲なら一命を捨てても 天皇陛下の御爲なら、どのようなことでも。其の一念で私の心は、からだは一ぱいでした。異様な感情が全身で躍つてゐます。私は又新しく涙のあふれるのを感じました。

私共は 陛下の赤子として日本に生れたことを喜ぶと同時に、陛下の御仁慈にお應へ奉らねばなりません。その爲の方法はいくらでもございませう。しかし私達學生は學問を勉強し、運動に勵み、父母長上の教に従つてゆくことがとりもなほさず大御心にお應へ申し奉ることになるのではありますまいか。

御親閲感想

濱町實科高等女學校第二學年 赤星つる子

廣々とした帯山の練兵場。美しく清く澄みわたつた秋の天空。太陽は午すぎの強い光を何萬かの若人の頭上になげてる。しんと静まりかへつた帯山の空気をふるはして、ラツバが一聲高くひびいた。御着になつたのだ。一同最敬礼する。緊張した皆の顔には喜びの色があふれた。分列式が初まつて學生青年訓練の人々が軍樂隊に合せて歩き出した。一校ごとに陛下には御答禮あらせられた。分列式も終りいよいよ私たちの御親閲となつた。軍樂隊の引率に伴つて、一步々陛下の御前に近づいて行く私たち、緊張した顔、はりつめた心、軍樂隊に歩調を合せて進んで行く。定められた位置について最敬礼をし、静かに陛下の御姿を仰ぎ見た。眞白き玉座の上にたゞせられた陛下の御姿の神々しさ、思はず頭が下る。奉唱歌が奏し初められた。指揮者のタクトに合せて一齊に口を開いた。「あゝここにすめらみことのみくるまを……」眞心よりほとばしり出る歌。眞心こめて歌ふ歌詞の陛下の御耳に達することの尊さに、この光榮に浴した者のありがたさが、しみじみと感せられた。歌はうと思つても聲が出ない。まぶたが熱くなつてくる。あゝ私たちはほんたうに幸福だ日本に生れた者の幸がしみじみと感せられた。「今日のほまれをよろづよに……」この光榮をよろづよにかたりつぐことの出来る私たちである。

おゝ昭和六年の十一月十八日、一生を通して忘れることの出来ない日である。この日を深く心に銘して大御心に答へまつる爲に、人の道を、をみなの道をつとめねばならない。

御親閲感想

濱町實科高等女學校第二學年 村井式子

十一月十八日此の日は私達女學生にとりて、忘れることの出来ない日であります。昭和六年十一月陸軍特別大演習を肥筑の平野に舉行せられました。其のみぎり、秋の空は高くすみ渡つて、私達幾萬の乙女は今日の光榮を浴する爲に身も心も清くきよめられ、陛下の出御をお待ちして居ますと、やがてしづ／＼と、眞白の布ではりまはされた高臺におのぼりになると、一同は陛下に向つて最敬礼を致します。陛下には一同に對して、有難くも御答禮をあそばされ、それより學生、青年訓練の分列式があり、次に女學生、女子青年團の御親閲でありました。私達は第三奉唱隊でありましたので、よく陛下を拜することが出来ました。御親閲奉迎歌を奉唱致し、陛下をまづかに拜し、あまりおそれ多くて自然に涙が出て奉唱することが出来ませんでした。それより陛下は大本營に御還幸になり私達は先生に引率されて歸途に就きました。こんな光榮に浴することが又と私達一生を通じてあらうかと思ひますと、私達はこの皇恩にみちた國に生まれたことを、よろこぶと同時に皇室の御榮へを祈りつゝ君に御恩を奉ずるの心掛を以て、日々の學業をいそしめねばならぬと深く覺悟いたしました。

御親閲感想

濱町實科高等女學校第二學年 坂田道子

清く澄み切つた秋空の下に、私達幾萬かの乙女は、希望に燃ゆるひとみを輝かせながら、今陛下のみくるまを迎へ奉つた。はるか九尺の眞白き玉座にお立ち遊ばす陛下の英姿を今目前に拜し、有難いと言ふか、光榮と言ふか、感激の餘り自ら頭のさがるのを、感ぜずにはみられなかつた。軍樂隊の引率に一步／＼御前近く前進した私達は指揮臺に登つて夕

クトを振る軍樂隊長の生氣ある伴奏に「あゝこゝにすめらみことのみくるまを」と幾萬かの我等は、心から奉唱し申し上げた。この奉唱が、陛下の御耳に達するかと思ふと、たゞ畏さに聲がふるへ次第、かすれて、喉の熱くなつて行くのを感じた。やがて縣知事の萬歳三唱は全練兵場をとゞろかした。軍樂隊の「君が代」の音楽に、陛下を奉送申し上げ、はてしない帯山の彼方を、靜かに、すべる様に消えて行く雨籜を眺めた時、言ひ知れぬ榮光と感激にみたされた。

御親閱を拜受して

植木實科高等女學校第二學年 久塚良子

顧みるさへ胸のおどるを覺ゆる千載一遇の榮ある御親閱を拜受した其の日、昭和六年十一月十八日、すきとほる様に無限に續く大空には空の微笑の様に二三の雲流れて、大空迄が今日のよき日を祝つてゐる。この日午後一時、四方よりぞくぞくと集つて大原野帯山練兵場に溢れた數十萬の民草は、希望と歡喜と緊張とを以て、一天萬乗の、大元帥陛下の御姿を慈母を慕ふ幼な兒の心を以て御待ち申し上げて居る。

秋の陽は包みきれぬ悦びを投げて玉座近くの日章旗と對してゐる。「タタ……タタ」四方に起るラツバの音と共に人を以てうすめられた地上には、靜寂と沈黙とが流れた。じいつと立つて居ると胸が高鳴る。多くの人を透しておそるゝ拜する六百米の向ふの玉座には、いつしか、天皇陛下には神の如く太陽の如く尊くも有難く御立遊ばして居られる。雑念の一時に消滅して自ら澄み徹つた頭を靜かに深く下げた時かつて經驗した事のない涙がとめどもなく流れた。あゝ今や吾等は、帝國のみ親、現し神にまします大君の御前にしかもその尊き御視野の中に立つてゐるのである、全身の血潮が湧き立たずにどうしよう。第二のラツバは吹きならされた。五萬餘の長々しい分列式も莊嚴の裡に終つた。いよゝ私達の番となつた、嚴肅な氣分で前進する。御英姿はいよゝはつきりと拜される、と共に、感激は一層増して來て最後の百米の

間近に進み寄つた時には全く我を忘れて、踏んで居る草も、あたりの人も、何もかも意識されず、軍服を御つけ遊ばした御英姿が眼底に輝いてゐた。擧手の答禮をあそばす外みじろぎも遊ばさぬ御姿の美しさに一同は全く魅せられてそここゝに感涙をのむ者しきりである。やがて重々しい軍樂は奏でられた。「あゝこゝに」三萬餘の女學生女子青年の奉唱は始められて、其の聲は廣い原野に嚴かに響き渡つた。あゝすべての希望と悦びで胸おどろかせて御待ち申した奉唱の時は今なのか、と思へば感極まつて聲はのど先でつめられてしまつた。これではと思つて次のを唱つて居ると涙がはらゝと落ちてたまらなくなる。「お唱ひ、唱ひなさい」自分で自分を叱つてはみるが緊張して居るのか、ぼんやりしてゐるのか、漫然として、何も解らなくなる。「君が代」今度こそはと思つて胸にこみ上げる感激をじいつとおさへ乍ら唱つた。唱ひ終つて我にかへり、九尺臺上の玉座におはす御姿をつくゝと拜すると、世界に比類なき一系の聖天子を奉持した我が日本國民の一員たるの光榮が油然として湧き起り、「あゝ我等生ける甲斐有り」の奉唱歌を聲高らかに唱へた。「萬歳、萬歳、萬歳」の三唱は思はず口をついて迸り出た。帯山大原野で、七萬の民草の心中から流れ出た萬歳の聲は、野に山に海原を越えて世界中にこだまして、いつまでも續いたであらう。

幸の幸、忝けなさと悦びが一時に湧き立つて、胸の血潮の逆流する思ひがした。萬歳三唱を最後に數日の大演習後、今こゝに一時間も御直立あそばした陛下には、御つかれの御いとひも御見せ遊ばされず、御聲にうつり給ふ。「君が代」の奏樂の下に、靜かに下げた頭の空漠としてゐるのを覺えた。「君が代」の樂につれて、御聲は音もなく進み、後には眞白の御臺だけが尊き御名残りをとゞめて嚴かに残されて居た。思ひ出深き御親閱は事なく終へて、一時の都として光榮に輝いた吾熊本は、御親にお別れた後の寂しさにたへねばならなくなつた。

あゝ、我が帝國は千代に八千代に榮え行くこと未だ春秋に富ませ給ふ陛下には、永へに御壯健にましますさん事をお祈りせずにはゐられないのである。昭和の御代に生れ、身に餘るこの光榮に浴した私達は、より以上の勉強と努力とを以て御親閱拜受の記念とする次第である。

あゝ此の日

熊本縣北實科高等女學校第四學年

本田

幸

秋空いや高し。濛々たる砂煙青天を霞め、一帯の氣、歡喜に充ち満てり。定刻になりぬれば御召自動車砂塵をついて、玉體帶山御親閱所に入らせ給ふ。全身一時にサツと冷氣流る。玉座に着かせ給へる。陛下の御儼然たる御態度、眞に畏き極みなり。やがて軍樂隊の奏する行進曲につれ、進み行く分列式の壯觀いまだ眼底に残れり。縦隊の隊伍堂々と進行する數多の各種團休旗ハタ、ハタ、と風に靡き、從ひ續く諸團休の靴音と相和して、複雑なる交響樂をも凌ぐ。丘かけより徐々に見るる槍の穂先の陽光にキラメク様、形容の道なし。團休旗玉座の御前を通過する際は、陛下におかせられては、畏れ多くも一つ一つ、御手を舉げさせ給ひ御答禮遊ばさる。涙を禁じ得ず。分列式終りたれば、いよ／＼我等奉唱部隊の進行開始さる。萬感胸にこみ上げ、一步一步の歩みさへ異様のふるへを覺ゆ。奉唱歌第一節、第二節、最高音の部聲出づ。餘念一切念頭になし。第三節、いよ／＼最後の奉唱と考へしかば、云ひ知れぬ感激わき興り、我が聲の續くかぎり歌ひ居たき心地す。「君が代」の奉唱、萬歳の三唱、何れも萬身の力にて。戸山學校軍樂隊の「君が代」、奏樂裡に御召車は靜かにすべり行けり。帶山一帯、寂として聲なし。やがて散り行く各團休、或は西へ、或は東へ、今日の喜を胸にいだきつゝ、

あゝ我等生けるかひあり おほけなき今日のほまれを

おほけなき今日のほまれを

萬世に語りつぎつゝことほがん一つ心に

あゝ十一月十八日、此の日こそ我等六萬同胞永久の記念日なり。

御親閱を拜受して

熊本縣菊池西部實業學校第三學年

大島

トメ

昭和六年十一月十八日!! 御親閱拜受の日。惠まれたる光榮の日よ。一生涯忘られない日だ。この日の事を追想すれば私はすぐに此の間國語の時間に御習ひした萬葉集の人聲の歌、「大君は神にしませば天雲のいかづちの上に庵せるかも」を思ひ浮べる。すべては唯夢のやうだ。

天皇陛下。現人神。とても拜む事さへも許されなれと思つてゐたのに御親閱の拜受とは……。あゝあの時の感激が胸に甦る。

その日、私達六十五名は嬉しさ胸に満ちて、朝まだきから起ち出でた。御天氣? そんな懸念は一寸も入らぬ秋晴!! 両手高く差上げて思はず叫び出した程だつた。市立高女は私達第三奉唱隊の集合地、既に私達が行くより早く、同じ友は充滿してゐる。そこで整列して本舞臺の帶山練兵場への行進が始まつた。四列縦隊の蜿蜒たる長蛇の列足取はいとも軽やかだ練兵場へ到着した時四方から集つてくる人の群——分列部隊、奉唱隊、陪觀者一般拜觀者で其の數幾十萬あらう。各々の場所を示された立札を辨つて所定の位置につき指揮者の號令で整列する。やがて他の分列部隊奉唱隊の集合も終へた。中食を濟せば、時間は刻々に迫つてくる。私達の心は次第に緊張を覺える。

やがて煙火一發!! 啾唳たる喇叭が鳴りわたつた。「君が代」吹奏である。正面高く大日章旗は揚げられた。着御!! 「氣をつけ」!! 號令までもなく身も心も引締るだけ引締つてゐる。おゝ!! 次の瞬間。純白の布もて青空をかぎつた玉座に、陛下はお立ち遊ばされた。一同思はず識らずの中に最敬禮。顔を舉ぐれば御英姿さだかに拜むべくはないけれど

いかづちの岳ならぬこの帶山原頭の秋光の裡現人神は立たれ給うたのである。目がしらが熱くなつて來た。突如、戸山學

校軍樂隊の奏樂につれ、分列式は華々しく開始された。雲ともまがふ學生、青年團、郷軍は各々其の旗を先頭に、一絲亂れぬ分列振りである。銃劍の林の秋陽に照り輝くさまは形容の言葉も知らぬ壯觀さ。其の間、陛下には長くも各大隊に御答禮を遊ばされる。その御手袋の純白が、はつきりとうかゞはれて、この上もない恐れ多い事に思つた。かくて分列式は終つた。

愈々、私達が奉唱する時が来たのだ。そゞろに身の中の戦く思ひ。大隊長の指揮で第二線へ進んだ。次いで軍樂隊の奏樂につれ歩調を合せて進む。おゝ一步は一步玉座は近まるのだ。踏みしめてくさうでなければ自分の大地に立つてゐる事をさへ忘れてしまふ。所定の位置にきた。玉座の近さ。すぐ目のあたりに御英姿!! おゝ御微動だに遊ばさぬ御英姿!! 敬虔……感激……光榮。再び目がしらが熱くなつて来た。「あゝこゝにすめら尊の……」次の瞬間何物も忘れて奉唱申上げてゐた。竹しい一少女の聲も、陛下の御耳に達するののか。この上の幸福があらうか。歌は終つた。次で「君が代」の奉唱、これは私達奉唱隊ばかりでない。全員の奉唱である。其の餘韻遠々と引いてまだ阿蘇の彼方に消えやらぬ中に、本山知事の音頭による、萬歳三唱は野も山も轟くばかり、碧落の空落ちくとばかり、叫ばれた。「天皇陛下萬歳!!」今迄に幾度唱へた言葉だらう。然し此の時程、眞に精神こめて叫ばれたことはない。叫ばずに居られぬ本然の聲が口をついて出たのだつた。おゝ萬歳!! 萬歳!! 聖壽萬歳は即ち國運の無窮その所一つの矛盾なき有難の國体よ。

あゝこの氣持、そこに理屈はない。幾百萬、幾千萬の人あらうとも、渾然一つになるの喜びあるのみである。そして私の心には、古へより今に至るまでの人が、君の爲には身を鴻毛の輕きにして盡し奉つた事が、よく分る氣がした。

それは今までも持つてゐない氣持ではなかつたけれど、この瞬間、強く深く深められたのだつた。

長くも陛下には、この若人七萬人の萬歳を御納受あつたに違ない。御會釋いともうるはしく拜された。再び「君が代」の奏樂、全員最敬禮の裡に、御召自動車は還幸の途につかれると窺はれた。

X

X

X

たゞ感激の帯山原頭御親閱の一日よ。「み恵みの如何なる幸か、かしこさに涙こぼれた」彼の日。同じ世に生れ乍ら、此の光榮に浴せるもの、其の残百分の一幾千分の一なるを……。恵まれたる私達。「負氣なき今日のほまれ、萬代に語りつぎつゝ誇がん一つ心に。」一つ心に語りつぎ行かん。この名譽!! さうだ。これが前の人聲の歌と合致する所だ。一千年の距りはあれ、「大君は神にしませば」の心に何の變りもない、又この先幾代々を経ても其れに變りはない。變りがあつてはならないのだ。有難き國よ!! 又しても感激の泪が流れてくる。

御親閱拜受の感想

熊本女子職業學校第四學年本科四年 吉村五十子

萬歳! 萬歳! 萬々歳! 菊薫る十一月肥筑の野山は 聖上陛下の行幸を仰ぎ奉り歡呼の聲は天地を揺すばかり。澄み渡つた高空のもとに光榮の渦巻返す晚秋の帯山練兵場。

滿家の風雲は急に於て外患に憂へる時、長くも 聖上陛下には千里の波濤を越えさせられ肥筑の曠野に展開せる陸軍特別大演習御統監、續く雨の日もお厭ひなく白馬白雲號に鞭うたせられ昨日は東、今日は西にと將卒と共に辛酸を煩ち給ふ日數重ねての御親裁、誠に恐れ多き極にこそ。おゝ幸多き二千五百九十一年の霜月十八日我等が御親閱に浴する光榮の日は來た。霜晴れて練兵場の中央に悠然として揚げられし日の丸の御旗は朝日に映え……晴空に翻る。

今しも東西より雲集せる赤子の波は何れも歡喜の色に満ち、流石の帯山練兵場も無慮七萬に近き男女學生、在郷軍人、青年處女を以て埋め幾萬の拜觀者は十重二十重に人垣を繞らした。午後の一時といふに御親閱の式は始められ人々の心は皆緊張した。

「君が代」の奏樂裡に壇上に立たせ給ひし陛下には連日の大演習御統監に御疲勞の御色もあらせられず、端麗なる御容

姿はいとも御健勝に拜せられた。陛下の御稜威は限なくわたり、さしも廣き練兵場も水をうちたる如き静寂さ、唯ラツバの叭奏だけこだま返す其の莊嚴さ、口にすることあたはず。分列式が終りいよ／＼我等女學生の御親閲である、全隊進めの號令に三萬有餘の女學生は一舉動を共にして長くも玉座に咫尺す。おゝ心は躍る我等乙女子、秋空高く澄み渡り、熱誠こめたる奉唱歌も高らかに……賀ぐ天皇を……生けるかひあり我等あゝ其の瞬間、我等は感激の餘り落る涙も御稜威に光る。あまつさへ舉手の禮さへ賜はり我等の光榮至れりである、萬歳聲裡に式を閉されるまで數時間、寒風吹まくる壇上に快活なる御態度をつゞけさせ給ひし陛下の御仁慈、場の内外に集ひし赤子皆感歎せぬ者なく全世界に冠たる帝國君民の情誼はこの機會に於て明らかに發露せられた。

御駐蹕の九日間千載一遇の此の好機に龍顏を拜せむと集ふ全九州の民草に歡樂の巷と化せし熊本の賑ひ、日毎各所に起る萬歳の聲感激の渦、沸返る我等の郷土よ……

殊に教育、産業御獎勵の爲の行幸、竝に侍從御差遣の光浴に榮せし、學校、會社、工場、これ皆現代に於ける立國の大本に大御心を傾けさせ給ふ陛下の御御慮、唯々畏れ多き極なり。嗚呼、御足跡を刻む熊本の地よ、咫尺に龍顏を拜せし我等の光榮永久に語りつぎつゝ大御心を體して只管、皇恩の萬一に報ひん事を誓ふのみ。

御親閲に浴して

熊本女子職業學校第四學年 島 内 梅 子

嗚呼我等の光榮の日……肥後の野に風聲を迎へ奉つてから八日……地方行幸最後の日に帶山での晴れの御親閲こそ我等の無上の光榮であつた。光榮漲る帶山の空は、正に晴空一碧、東に紫河色にかすむ大阿蘇の雄大な英姿が迫り、西は金峯山一帯に瑞雲引く、絶好の秋日和。——大國旗高空に翻り、秋の日燦爛と輝く午後一時十五分莊重な「君が代」の

吹奏がゆるやかに流れて長くも 天皇陛下の颯爽たる御英姿を、純白の玉座に拜した七萬餘りの御親閲總動員は輝かしくも整然たる姿で誰一人微動だにせず、嚴肅な静けさで 天皇の御威光に浴した。やがて莊重輕快なマーチの吹奏と共に男子中等學校及び青訓の勇壯極みなき御親閲式……分列式が行はれた。遂に拜せば陛下には一々御會釋を賜はるその忝けなさ、分列式は勇躍極まれる光景を呈し終つて、一時四十分いよ／＼我等若き女性の御親閲の繪巻物は、り擴げられたゆるやかな奏樂と共に前進。……おそれ多くも陛下の御前十間近くの距離でびたりと止り體形を整へた。其の時の心持何とも形容するに言葉なくひたすら感激が胸に滿ち溢れた。嗚呼一生に一度をも奉唱することの出來難い光榮の御親閲奉唱歌「あゝこゝにすめらみことの」を真心こめた民草の轟きは原動を揺し、天地を壓し、莊嚴な餘韻は遠く阿蘇の峰にひびいてひし／＼と胸にこみあげ感激の涙が瞳を濕はしてくる。拜すれば天皇陛下には御微動だにさせ給はず儼然と御直立遊ばし、いとも御熱心に御親閲遊ばせらる。此の恐懼に絶えない光榮に浴した私達團體を始め、陪觀の群はもとより我が帝國の民草たるもの誰か感泣せざるものあらふか、大平原に埋まつた群集は水を撒いたやうな嚴肅な静けさでこの皇恩に感泣した。この一時間餘りの御親閲式は、莊嚴嚴肅の裡に終つて莊重なお名残惜しい吹奏がゆるやかに流れて、御惠洽く漲り渡つた山川、民草のつきせぬ名残の中に御還幸あらせられた。

天皇陛下の御親閲によつて千載一遇の光榮に浴することの出來た我々は、いたくこの皇恩に感泣され、若き血潮はたぎり、忠君愛國の情は一層火の如く燃え出でた。たゞこの上はますます國民の本分をつくすことに努め、國家の繁榮をはかつて皇恩の萬分の一に報いんことを誓つた。

御親閲に浴して

熊本女子職業學校第四學年 福 本 イ ヲ ノ

菊花咲き匂ふ十一月十三日 天皇陛下には肥筑の野に於ける大演習御統監のため、熊本に行幸遊ばさる。此の月連日の

陰霧は消え失せ春光の如く輝き出たり。こはひとへに御稜威の輝きとのみ仰がれてそゞろに身にしむ心地す。錦飾る肥後の山野鹽目に映えて亦御代の榮と此の日を壽げ。畏くも 大元帥陛下には風雲の急なる滿蒙問題紛糾せる時剛勇不屈なる肥薩の兵と敏活精銳なる兩筑兵の三日に亘る大會戦をつゝがなく御統監の後我等青年學生七萬の御親閱を帶山練兵場に行ひ給ふ。

其の日 陛下には純白の御臺に立ち給ふ我等は其御前にて分列式を行ふ仰げば胸にせまる御威厳心にせまる御仁愛謙嚴なる直立不動の御姿勢のまゝ、咫尺間近き我等に一一御答禮遊ばさる。一天萬乘の大君としてかくも御優しき御態度は畏くも尊く嬉し、歡喜の至情は凝つて沈黙となり發しては萬歳の聲となり天地間に横溢す。云ふべからざる神々しさ有難さに感激全身を燃し思はず涙の眼瞼にせまり云ふ言葉も知らず。

願れば今や我國はこの聖上のもとに國威は赫灼として四表に輝き文化は燦然として世界に輝く。武備又備はり世界の最強國の伍班に在り。然れども今日の世界大勢は日に益々せまり月に益々急に我等の奮起を待つ事又甚だ急なり。此の時に當り我等七萬の若人が允武なる 天皇陛下の御親閱を忝うせしは意深極めて深し。我等は固より百三十萬の國民も下つては路傍の一木一草に至るまで此の千載一遇の機會に接して御代を護り御代を立て千代に八千代に其の榮を受継ぎ 聖上の下我死なんの決意を生々と胸に刻めり。古人の「御民われ生けるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば」と歌へるは眞に我等が今日の心事を歌ひて餘す所なし。希くば我等は第二の國民養育の大任を負ひ曠古の盛事に逢ひ眞接國家の干城たり得ずとも此の大御心を體して臣子の本分を盡すことに於て人後に立たざらんことを期す。

生けるしるし

熊本縣南國實科高等女學校第四學年 菅 原 清 子

私達は靜かに 陛下の御出ましをお待ち申してゐた。御召しの自動車のエンジンが止つた。御靴の音もかすかに聞える

やうな靜けさだつた。玉座に立たせられた 陛下は、まことに御質素なる陸軍御軍服にましまし、御氣高き御容姿！始終御端正、御活潑なる御動作！率直なる御舉手にこもる赤子御いづくしみの御眞情！時折の御眼鏡の反射光！

私達は、日本人が嘗て味つたであらう至尊に對する至情の渦の中に立つてゐた。そこには「大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりせずかも」と歌つた萬葉人の氣持もそのまゝあつたし、「山行かば……」の一死報國の氣慨の高鳴りも。そしてまた「否と言へど……」の臣子の君に對する愛慕の切なるときめきもあつた。

御民われ生けるしあり天地の

さかゆる御代に逢へらく思へば (萬)

御親閱拜受の感想

熊本縣玉名女子職業學校第四學年 兼 田 好

あゝ何んと幸な私達で御座いませう。十一月十八日。この日こそ、幾月前から私共が、血潮に高なる胸を抱いて、待ち惚びた日で御座いませう。今思ふさへ、畏さに私共の胸は打震ひます。

見渡す限り、果てしもない帶山練兵場の草生には、晩秋の氣が忍びより、やがては、うらがれ行くであらう。果敢ない生命をも、光榮の日には、それも忘れたかの如く、折からの微風にそよいでゐるのです。

午後一時十五分、大君の着御を知らせる「君が代」の吹奏に、全身の肉は凍りついた様な嚴肅さを覺えました。その折遙か彼方の高臺の上に、御英姿を拜み奉つた時の、私の氣持、あゝ何にたとへたらいでせう。約一時間に亘つての分列式も終へ、私共奉唱隊は進めの號令で、二萬四千五百八十二人の若き女性が一齊に行進を始めました。私共は一步毎に大君の御前に近づいてゐるのだと思ふと、畏さに足がすくむ様な氣が致しました。いよいよ御前近く進んで、軍樂の吹奏と

共に、私共は「御親閲奉迎歌」を奉唱しはじめました。陛下の御前である、再び迎へる事の出来ぬ光榮の日である。しつかり歌はふと思へば思ふ程、唇が震ひ、どうしても朗らかな聲が出ませんでした。忝さの涙ばかりが幾筋も頬を傳うのでした。

「あゝ我等生ける甲斐あり」の奉唱歌の通り、日の本の乙女として生れた幸福をこの時ほど、はつきり感じた事はありません。私共はこの光榮の日を記念として、ます／＼學藝にはげみ、御恵み深き陛下のよき國民となる様、つとめなければならぬと思ひます。この日の幸福、又何日の世にか忘れられませう。私共はこの光榮の日は大和女性の覺悟をいよいよ指示された様な氣が致します。

御親閲奉受の感想

熊本縣玉名女子職業學校第四學年 明石八千代

秋空高く晴れ渡つた、十一月十八日。この日こそ、私共六萬餘の若人が、永久に忘れ得ぬ、幸多い日でございました。薄ら黄ばんだ帯山の廣野には、小草も今日の行幸を、待ち顔に折からの風に快く戦いで居ました。とゞろく胸をおさへ拜受者一同が、定め場所に整列を終りますと、風流着御を報ずる、國歌吹奏の音は、いとも朗らかに、廣野の果まで響くのでございました。その時、遙か高臺の上に立たせられた玉姿を拜して、私共の兩眼はあまりの畏さに、つぶれ、すまいかと思はれました。壯觀を極めた分列式について、奉唱部全員が行進する歩調の音は、ソク／＼として、秋の中空につたへて行くのでございました。かくて、御前近き場所に整頓して、御親閲式奉迎歌を奉唱いたしました。この時、歌詞の一つ一つの意が、食入る様に心に沁みて、懸命にしぼる歌聲が、あまりの畏さに、震へてくるのを制する事が出来ませんでした。

又喜びと辱さに、閉された心の奥から、拭いても／＼、ふききれぬ涙を、おさへる事が出来ませんでした。あゝ十一月十八日の光榮の日。私共はこの日を何時の世にかは忘れられませう。輝く大空の下に、拜み奉つた玉姿は、今もなほ鮮かに、眼底におさめ奉つて居ります。私共はこの御慈愛深き陛下の、より良き國民となる様一層眞剣に、學藝に勵みたいと思ひます。

御親閲奉受感想の歌五首

熊本縣玉名女子職業學校第四學年 新名公子

秋清き帯山原に仰ぎ見る我大君のみ姿尊き
天さかる鄙の民草待ちまちし現人神ををろかみまつる
畏さとかたしけなさをのゝきてうたひそまつる我ら乙女子
このあした千草もいと、光榮にさゆらきわたる秋の帯山
大君はこの帯山に今もなほ高ひかります心地こそすれ

御親閲に参加し奉りて

山鹿實踐女學校第四學年 中原トミ子

ああここにすめらみことの みくるまをむかへまつれり
みくるまをむかへまつれり
みひかりにあそのたかねも ありあけのうみもかがよふ

針を落す音さへききとれる様に静まりかへつた帯山練兵場に奉唱歌のおごそかな調が高く低くひびき渡りました。ふと頭を上げて玉座を仰ぐと曇りがちな弱い太陽に玉座は白々と光り輝いておりました。奉唱の半ば頃にはかしこさと嬉しさに溢れ出る涙をどうしても止める事が出来ませんでした。感涙にうるむ眼でなほ御姿を仰がふとあせればあせるほど御姿は益々涙でぼんやりとかすかになつて行くのでした。奉唱が終り静かに最敬礼を致しますと、陛下には静かにお手を舉げさせられて御應酬遊ばされました。おそれ多い陛下のこの様な御態度を拜するにつけても崇敬の念と親愛の心を起さない民草はありませんでした。

「きみがよはちよにやちよにさざれいしの いはほとなりてこけのむすまで」これがお別れのしらべでした。お迎へした嬉しさとお別れの悲しみとで私の胸は一ぱいでした。最後の最敬礼が終つて物足りない淋しさで静かに玉座を仰いだ其の時、「君が代」の樂の中に御退座にならせられる筈の陛下が以前のまゝ玉座にお立ち遊ばしてゐられるではありませんか。思ひがけない陛下の御態度に私達はどんなにか喜んだことせう。一秒間でも長く陛下の御姿を仰がふと焦つてゐた私達の喜びは、例へるに物もありませんでした。唯かしこさとめどもないものは涙でありました。陛下のこの様な御名残おしげた御態度で以外な時間までも私達の前にお立ち遊ばされようとは、御親閱拜受者の誰が豫期してゐた御恵であります。陛下のこの大御心は拜察するのもおそれ多いことです。やがて陛下のお召自動車は秋の陽に輝きながらすべるが如く、はしり去りました。

あゝ思へばみめぐみのいかなる幸でありましたらうか。今は只大日本國國民として昭和の聖代に生れあはせたことをひたすら感謝して居ります。

御親閱に参加し奉りて

山鹿實踐女學校第四學年

徳 永 直 子

阿蘇の連山に抱かれた、豊かな歴史に富む熊本の地に……嗚呼とうとう榮ある慶き日は訪れた。恵まれた熊本の地よ!! 吾等よ!! 昭和の御代にして女性に生れた甲斐あつて私共は奉唱部隊として思ひもかけず大君にまみゆるの光榮に浴し其の喜びは筆舌に盡せない。

あゝいませすめらみことのみすがたを おろがみまつるみすがたを

おろがみまつるみめぐみの

いかなるさちか かしこさになみだこぼるゝ

涙!! かたじけなさ限りない喜びとおほけなき身の譽れと——、其の他幾多のえも云へぬ微妙な感激の情が涙となつて止めどもない。何といふ嚴かな尊いしらべであらう。恐れ多くも陛下の御前にあつては、其の御威光に打たれて身も心も清められのどもさけよと誠心こめて歌ふ其の聲は、静かな静かな帯山の空気を顫はして美しいコバルト色の秋空に幽かな餘韻を残して消えて行く。

陛下には直立の御姿勢をもつて、私共の奉唱歌を聞き召された。その御姿の何と神々しい事だらう。神そのものゝ御姿である。それを拜し奉つては心では懸命に奉唱して居る筈の歌詞も後から後から溢れ出る感激の涙にかすれて行くのをどうする事も出来ない。奉唱が終り一齊に最敬礼を申し上げると陛下には静かに擧手の禮でお答へ遊ばされた。

陛下のかやうな御態度を拜し奉つては大御心の一端がしのばれて崇敬と親愛の念とを加味した云ふに云はれぬ心持になるのだつた。かゝる間にも陛下には眞白き高臺の玉座にあつて絶えず民草の上に御眼を注がれて居らせられる。水を打つた様な帯山原頭の静寂の中に莊重な國歌「君が代」が軍樂隊の手によつて奏されて、最後のお別れの最敬礼に一同は静

かに頭を下げた。これが最後かといふお名残惜しい物足りない淋しい心を抱きながら……

きみがよはちよにやちよにさざれいしの

いはほとなりてこけのむすまで

生れてより此の方敷へきれない程聞かされたしらべではあつたが、今日の様にしんみりと心の奥底にしみ込んだ事は無い。大和魂を象徴した其のしらがが様に數萬の大和民族の胸底に流れ込んだ時私は或見えなない強いもので同胞の心と心とをしっかりとつなぎ合はせた様な気がした。陛下の御爲だつたら……。さう云ふ念が心の奥からこみ上げて来る。おそらく皆もさうであつたらう。しらべ終つて頭を上げた。まあ意外!!もうお下りになつて自動車にお召し遊ばして居れると思ひの外まだ玉座にあつてお別れの禮を遊ばして居らせられる。何といふ畏さの極みだらう。御慈愛溢るゝ大君の大御心に再び止めどもないものは感激の涙であつた。民草の名残りの勇ましい萬歳の聲に送られて御召自動車は去つた。御恵の如何なる幸か千載一遇の今日の譽れを私達は若き日の大きな胸の繪巻に疊み込んで永久に忘れないであらう。この澤山の人達がおほけない光榮を孫子に傳へ聞かせん遠い日を想像する時満心の微笑が込み上げて来る。

あゝわれらいけるかひありおほけなき けふのほまれをおほけなき

けふのほまれをよろづよに

かたりつぎつゝことほがむ ひとつこゝろに

遙か東の大阿蘇の噴煙を仰ぎつゝもう一度奉唱歌の終りの句を低唱し乍ら玉歩の御跡を止めた譽れの帶山におさらばを告げた。後世の歴史に行幸地として永く其の名を止めるであらう帶山……。

私共の 陛下よ何時迄も〜み健やかにおはします様に!!

御親閲に参加し奉りて

山鹿實踐女學校第四學年

竹下 イ ツ エ

みめぐみのいかなるさちか、待ち得た榮光の昭和六年十一月十八日は、今までの雨がちな大演習日和にひきかへてからりと晴れ渡つた、一天雲なき絶好の御親閲日和でありました。晴れの御親閲場たる帶山練兵場は、見渡すかぎり草枯れて野末には阿蘇の山々が秋の日に紫色に映えておりました。

はるかに拜せられる 陛下の御立ち遊ばします眞白の玉座に向つて整列した奉唱部隊たる私達數萬の少女は、限りない歡喜に胸をどらせながら「前へ進め」の號令一下、一分のゆがみもなく進んでゆきました。やがて最初の最敬禮が終りますと樂長の合圖の旗の一振りに戸山軍樂隊の奏する樂の音に合せて愈々奉唱しはじめました。

あゝこゝにすめらみことの みくるまをむかへまつれり

みくるまをむかへまつれり

みひかりにあそのたかねも ありあけのうみもかゞよふ

天にとゞけと歌ひ続ける私でしたが奉唱歌の第一節が終り第二節が終る頃には、かしこさ、ありがたさの極み涙は溢れ聲は震へてどうしても歌ひ続けることが出来なくなりましたので、私は只じつと頭を下げ奉唱歌の終るのを待つてゐました。この間 陛下は前後一時間餘の御親閲にもかゝはらず、些の御疲勞の様もなく不動の姿勢のままにて終始御注目をたまはりました。陛下には民やすかれと日夜大御心をなやまし給ひ、ましては近時の滿州事情のために一時の御暇もあらせられない折柄にもかゝはらずわさ〜都よりかゝる田舎まで御行幸になつて御親閲をたまうてゐらせられることを思ひますとかたじけなさに先だつものは只涙でありました。

やがて晴の御親閲は終りをつけましたがおほけなくも今日のほまれに浴した私達はこの光榮をいかにして子々孫々に傳

へませうか。銅像の様に御微動だにあそばされなかつた。陛下の御姿は永久に私達の心の中の眞白き高臺の上に無窮の光を放つてゐることでありませう。

御親閲所感

熊本市立第一青年訓練所第三年次 若宮信吉

昭和六年十一月十八日、今日程感激深い日は二度とないだらう。未だほの暗い朝まだきから御親閲場帯山原頭には、湖の様な人の波、そして黄塵萬丈の帯山平坦道路には、次から次から人の波が続く。今日は長くも、今上陛下の御親閲を受ける日だ。先日來の雨名残りなく晴れて、秋陽うららかな日和に、本日の光榮に浴する學生青年團在郷軍人等無慮六萬六千、更にこの壯觀を拜せんとする拜觀者の群を合したならば、實に十萬に近かるべき人々、皆皇恩の有難さに、感激の涙を流してゐた。午後一時十五分啣唳たる喇叭の音帯山練兵場にひびけば、陛下の着御、満場寂として聲なく、唯陸軍戸山學校軍樂隊の奏する勇壯なるマーチが聞ゆるのみ。時間は來た。六萬六千の、御親閲を受ける部隊は一段の緊張を加へた今や廣い帯山練兵場は、軍樂隊の勇壯なる行進曲と、感激の若人六萬の歩調の響があふれてゐる。劍尖燦として輝き伍隊堂々颯爽たる玉座の御英姿の御前數間の所を行進する。其の時のおそれ多さ、頭に殘る何物もなく、萬感交々胸にせまつて、皇恩の有難さを一層強く感じた。此の日北風強く、阿蘇山嵐吹き荒ぶ中に、高さ二間餘の玉座に直立遊ばす

陛下には、長くも一時間の長きに亘つて御微動だにあらせられず、其の御体力の御絶倫なる其の御忍耐力の御強さに、益々感涙にむせぶのみであつた。かゝる有難き聖天子を上戴く我等は、實に幸福である。

今や滿蒙問題益々紛争を極め時局いよ／＼多端なる秋、本日の意義ある御親閲の光榮に浴し、益々身心の鍛錬を爲し、以て皇恩にむくい奉る事を感銘した。

噫!! 我等に取つて、銘記すべき、意義ある昭和六年 秋 十一月十八日。

御親閲所感

熊本市立第一青年訓練所第三年次 川田春男

十一月十八日長くも、聖駕を帯山練兵場に御迎へした事は、我等青年の千載一遇の光榮である。民草を思召す聖慮の無邊なる事を思へば、只々感激措く能はざる處である。長時間に亘る大分列式にも拘はらず、長くも、聖上陛下には直立不動の御英姿にて御嚴格なることを御示し給ふ事を思へば只感涙にむせぶ次第である。起てよ誠忠無比なる肥後人の血潮を汲める若人よ、靈峯大阿蘇の如き天にも沖する彼の意氣と熱とを以て、思想經濟の二大國難、滿洲大事變に直面せる此の際、皇恩の萬分の一にも報いん爲め、大に皇國の爲に戦はふではないか。倒れて猶止まぬ肥後男子の意氣を發揮するのは今だ。奮へ青年……青年の義務を遂行するのだ。此の光榮に添ふべく大に日本青年の向上發展に努めたならば、それが即ち又第一訓練所の發展に外ならない。

允文允武なる聖天子の治き宏恩に親しく直面して無上の歡喜に感激し一層の發奮を思ふのである。

御親閲を回顧して

熊本市立第二青年訓練所第四年次 中野一俊

昭和六年十一月十八日歴史輝く託摩原頭に榮しくも亦雄々しく華やかに繰り擴げられたる一大繪卷、嗚呼!!是こそ余に取て必命に徹して忘るべからざる千載一遇の光榮ある御親閲を拜受せし日である。余は此の榮ある御親閲に遭遇して言ひ知れぬ國力を意識すると共に一種の感激に熱涙を禁じ得なかつたのである。余は今此處にあらためて昭和六年十一月十八日を回顧し當時の感激を追想す。

十一月十一日長くも、聖上陛下には特別大演習御統監の御目的を以て、秋猛き肥筑の野に玉歩を止めさせられること此

處旬日御想ひの御暇とてあらせられず、御疲勞をも御厭はせ給はず。陛下には恐れ多くも御還幸前日即ち十一月十八日を期して九州七縣の在郷軍人、男女青年團、青年訓練所生、男女學生の御親閲を賜はつたのである。折しも滿洲事變に際會して大演習後の御親閲何たる意義深き光榮ぞ。此の日前日よりの雲を拂ひし空には瑞雲湧り午前十一時集結を終れる光榮の各團體の上にはさなきだに嚴肅なる空氣漂ひ思はず緊張して今は、陛下の御臨御を待つのみ。間斷なき時は流れる。用意はなれり。折から清澄の中天高く轟く。陛下行在所御發聲の號砲、時正に午後一時、緊張は今や絶頂！。時計の針は歩を進める。御着報を報ずる戸山軍樂隊の「君が代」の吹奏は各集團を縫うていとも莊嚴に奏でられて行く。行在所御發聲後約十分餘、たゞ今地方行幸を終へさせられ行在所御着かと思ひしに、陛下には早くも御親閲場御着、何と恐れ多き御時間間の御尊さぞ。余は先づ此の一事にまぶたの暖まるを覺ゆ。陛下には御着と同時に純白の御臺へ、折しも起る若人の分列紅黃紫百花爛漫の旗の波、眞紅に燃ゆる旭日旗の渦卷、大和魂を發揮する莊嚴なる步調、颯爽たる銃劍の閃き、すべてが嚴肅だ、お、踏み出だす足音の何と力強き響ぞ。陛下には連日の御疲勞を御厭はせ給はず御顔麗はしく各集團毎に擧手の答禮を送らせられる。今余の腦裡には我を忘れて唯君國あるのみ「頭右」の號令も夢の如く、刻み行く足の運びも意識し得ず込み上ぐる感激に胸塞りて總てが神祕だ「頭直れ」の號令に始めて我にかへる。斯くして女子青年團、女學生の奉迎歌を最後に榮ある御親閲は終了を告げ濛々たる灰塵の中に竹の園生の萬歳を祈る熱聲は天に反響して地を揺がす。時に午後二時十一分、此の間實に一時間、陛下には恐れ多くも終始直立不動の御姿勢を取らせ給うたのである。一時間!! 直立不動!! 噫々何と恐れ多き極ぞ、何時の日か大作家持が

海行かば水づく屍、山行かば草むす屍

大君の邊にこそ死なめ返りみはせじ

斯く歌ひしを今其の儘身に受けて感涙にむせび乍ら思ひは滿洲の野に馳せて歸路を取る余の胸は唯報國の二字に閉ざされて居た。

御親閲を拜受して

熊本市立第二青年訓練所第二年度

市尾忠雄

昭和六年秋十一月、肥後平野に於て陸軍特別大演習を舉行せられ畏くも、聖上陛下親しく御統監九州精兵の士氣を饒はせられ、越えて十八日、城東帯山練兵場に於て九州、沖繩、山口八縣下の學生、青年の御親閲を行はせらる。

燦然たる日章旗は翻々として託摩原頭高くひるがへつてゐる。定刻に到れば嘔啞たる國歌の調、發聲たる瑞雲にひびき掩野の集團恭しき捧銃禮の裡に御兩簿肅々として着御あらせらる。戸山學校軍樂隊の勇壯なる行進曲の吹奏と共に嚴かなる分列式は開始せられた。第一集團より順次行進、我等は第二集團第一中隊なれば、集團の基準部隊にして最右翼なり、「頭右」大隊長の號令一下齊しく玉座に注目し奉る。嗚呼こゝに錦旗の下に立たせ給ふ至尊の龍顏を咫尺の間に拜し奉り洵に恐懼措くところを知らず。

恭しく惟みるに、我が帝國は皇統二千六百年、金匱無缺尊嚴なる國體である。皇室は一國徳化の根源におはし、歴代の天皇惠澤を遍く民草の上に垂れ給ふこと恰も草木に雨露の惠あるが如くである。こゝに宏大無邊の聖恩の滉きに浴し更に感激を深くす。

女子奉唱部隊の誠を捧げて歌ひまいらす「風聲を迎へ奉りて」の奉迎歌の調もいと明朗に、託摩原頭祥雲罩め、瑞氣漲れり。此處に集ふ光榮の若人六萬六千、齊しくこよなき歡喜に満ちたり。「君が代」の合唱、本山知事の音頭にて、謹みて聖壽の萬歳を三唱し奉る。かくて御豫定通り御恙なく御親閲を終へさせられ、軍樂隊の國歌の吹奏、全集團最敬禮の裡に御還幸あらせらる。

今や時局極めて困難にして、内に於ては未曾有の經濟難に悩み、外に於ては滿洲事變を中心として諸種の外交上の難問題に遭遇し、所謂内憂外患交々到るの重大危機に直面してゐる。此の秋に臨みて、適々錦旗を東肥の野に進め給ひ、且、

地方に行幸し給ひて惠澤を遍く垂れ給ひしことは洵に恐れ多き極みである。此の受難日本の國民生活を革新し、光輝ある更生日本を建設することが、憂國の熱血に燃ゆる我等青年の双肩に擔ふべき重大使命である。こゝに於て我等は自覺し、奮勵努力、大に我が國固有の國民精神を發揮して事に當り、以て聖旨に對へ奉るべきである。

御親閲を受けて

熊本市立第三青年訓練所生第二年次 上野 勇

鶴首して待ち奉つて居た十一月十八日、あゝ何として忘れる事が出来得やう。此の日こそ吾等の最も期待してゐた尊い思出深き月なのだ。草木鳥獸も榮ある此の日をあたかも待ち詫びて居たかの様に思はれる。目に映ずる物總べてが皆感激と勇躍の結晶の様だ、朝來の暗雲も何時しか晴れて眩しい光が光榮の肥後の森一面を照して朝より七萬餘名の若人が續々と忘れ難き印象と云ひ知れぬ歡喜を胸に秘めて示されたる式場に向ふ。やがて整列も終了し、靜肅嚴正なる胸も高鳴る「君が代」の吹奏が始まつた。暫く待ちあぐれば燦たる天皇旗ひるがへり來る。自動車は玉座に着かせられ長期間に亘る大演習の御疲勞の御氣色更に拜せられず若き吾等が目の邊に立たせ給ひいと嚴肅なる陸軍御制服にて御起立のまゝ御微動だに致されず響々渡る喇叭の合圖にて分列式は始まりたれば 陛下には各集團に對し一々有り難き擧手の禮を賜ふ約一時間御親閲を終へさせられ再び喇叭の響くや軍樂隊は御前近くに進み奉り女子青年團女學校生徒等の聲高く「あゝ今しすめらみことは目のあたり立たせ給へり」の奉迎歌は實に感激の極みであつた。奉迎歌終れば 陛下は玉座より直に御召の自動車に移り給ひ軍樂隊の「君が代」を奏する裡に式場を出でさせられ再び大本營たる偕行社にと向はせ給へり。我等臣民、大和魂を、おゝ若人よ、身中に漲る赤き血潮は湧き上り若き心は無上に高鳴る。あゝ何たる光榮ぞ。我等は益々奮勵努力し訓練所生徒たるの使命の重且大なる事に自覺して眞に國家の中堅となり聖旨に副ひ奉る事を誓ふ。

晴れの御親閲を受けての感想

熊本市第四青年訓練所第三年次 貝 島 勇 夫

十一月十八日、その昔誠忠菊池氏勤王義舉の地廣狹數里にわたる託麻原頭に於て、吾等全九州の若人が長くも天皇陛下の御親閲を受けたのであります。晩秋の此の日、天は限りなく高く清く一點の雲もなく晴れわたり、四圍の遠山も心あつて正裝せるか、はるか東方の大阿蘇が峯と共に清く美しき雄姿を見せてゐるよき日ではあります。

廣漠たる黄色草野の原頭にある純白そのものゝ高臺、玉座に面して整列せる若き國民は無慮七萬餘人、その周圍に蟬集せる拜觀の人々も亦これ數萬に上りました。此の嚴肅なる式場の寮圍氣は、先づ私共の心をして異様の緊張味と嚴肅味とを帯びさせたのであります。拾數萬の國民を擁する式場の靜肅さ、それこそは、何を以て解すべきか、私共一同の陛下を御迎へ奉る眞心の誰言ふともなく一點に集中せるものか、其れはまさに信仰、神秘の絶對境ではあります。

時まさに、午後一時十六分、陛下の着御を報する喇叭の音、續いて起こる軍樂隊の「君が代」の奏樂は、莊嚴にも明朗に場内に響きわたつたのであります。かくして、御親閲臺上に立御あそばされたる陛下の御英姿、その右方の斜陽に燦然として輝く錦の御旗とを拜し奉つた時に、最敬禮の令なくも、それは自ら頭をひくうせざるを得ぬ、絶えざる感激にて胸一杯であつたのであります。而して軍樂隊の行進曲によつて、分列式が行はれました。この間、約一時間、陛下は畏れ多くも嚴然たる直立不動の御姿勢にて、各集團毎に一々御擧手の禮さへも賜はり、私におきましては未だかつて驗なき徹底と感激の至りでありました又、女子一萬五千の奉唱隊が玉座近く進み、奉唱せし奉迎歌は、輝く御稜威を仰ぐ、皇恩の忝けなさに、身の幸運さに感泣せる朗かなる涙の聲ではあります。

最後に十數萬の臣草が萬歳を唱へ奉つた時、それは、陛下の萬歳を壽ぎ奉れると共に、現代日本の誇りと、強さと、美しさを象徴せるものであつて、其の聲の波は重く強く、天地世界に波及し、戰慄、羨望せしめたであらうと思はれた

のであります。「おゝこの貴き世界無比の御國に、生を受けたる我が身の幸榮なることか!!而かも陛下は常に此の度の如く、私共青年に向つて親しく御自ら質實剛健、自強不息の徳を垂れ給ひ、活ける典型、活ける模範を示し給ひ躬を以て國民を率ひ給ふ大御心の程を思へば、血湧き、肉躍り、それは歡天喜地、感激、隨喜の至りであると同時に亦私共の、大なる覺悟と使命とを感ぜざるを得ないのであります。

こゝに於て私共は、君の爲に我が身を思ひ、單に至尊の聖徳を、奉頌す可きのみならず自ら進んで此の聖徳に獎勵し、此の聖徳を對揚せんことを務めなければならぬと思ふのであります。今や思想的にも經濟的にも、掛念すべき事、多少ありといへども、護國の要素は私共國民の護國的精神に依る外何物もないのであります。「時はまさに來れり」私共若き青年は、又この若き昭和の陣頭に立つて陛下の大御心を奉体し一心協力以て、祖神の雄大なる理想を發揚進展せしめ、朝日に花咲き匂う日本の眞文化を世界に唱揚しなければなりません。波瀾さかまく、太平洋上に踊り上る旭光は、まさに我が帝國のシンボルであります。

若人よ、青年よ、

天皇旗のもとに團結せよ、

而して吾人は、大アジヤの運命を双肩に擔つて立ち上り、この帝國を中心點として、世界を周邊とする一大圓環を畫かんとことを、期してやまないであります。

御親閲に参加して

熊本市池田實業補習學校

吉 村 利 男

肥州の天地託摩原頭に長くも聖駕を迎へ奉るの光榮を得歡喜の裡に吾等肥筑の民草は明白に我光輝ある國体の有難さを

味ひ得た事であらう。千代八千代に彌榮ます大君を拜し奉つては唯感激の外に何物もない。然るに如何なる幸福であらう我等は更に又御親閲に参加するの光榮に浴したのである。

此の日高く澄み渡つた秋晴の好天氣、天も亦我等に幸した。嗚呼今日こそ實に陛下の御前に於て御親閲を拜受するところが出来るのだと思へば晴の制服を着飾るさへ心地よい未だ曾てない喜は胸中に溢れるばかりで足取も軽く登校する、過ぎ行く兩側の並木さへ朝風に吹かれながら我等の前奏曲を奏でてゐる様に思はれ眼にうつる總てが此の幸福と喜びとをたゞへてくれるやうに感ぜられて何となく愛らしさを覺へてならない。學校に着いた「やあ、御早う」同僚の挨拶の中に溢れ出る喜びはやがて晴やかな笑聲となつて幾度も爆發する。

何時であつたか櫻井忠温先生の征衣上途を讀んだ事が思ひ出される、誠にあの時の情景の幾分なりとも味へる様な氣持がする男子の本懐と云ひ得ないであらうか我等の現在として本懐之に過ぎるものはない。意氣揚々たりだ。

定刻所定の集合地に整列が終る。云ひしれぬ心の静けさが來るのをどうする事も出來ぬ唯無言の中に時の経過を待つのみ咳一つする者さへない、やがて下るべき號令を待遠く待つてゐる嵐の前の静けさを思はせる。唯喜びよりも神々しさにふるひ上る様な思ひだ。所々でどつと笑聲が起る而し之も暗に吸ひ込まれるかの様に元の靜肅にかへつて仕舞ふ、何たる神々しさであらう。幾多の光輝ある否光榮にあづかる青訓旗はやわらかな東風に吹かれながら旗手の手にしつかとにぎりしめられて秋空につゝ立つてゐる。各々の手ににぎりしめられたこぶしは次第に汗ばんでくる而し今だに號令は下らない遙か前方の秋空高く揚げられた大國旗の後に黒山の様な陪觀の人々を見出した。

總ての視線が此の大部隊に集つてゐる。恐らく此の今日の我等の光榮を心から祝福してくれる事であらう。そして又將來を双肩に擔ふべき若人をして期待の眼を以て見つめてゐてくれる事であらう。まさしく「第一集團………」と云ふ力強い號令が静けさを破つて聞えた。「おゝ」待ちに待つた時は來たのだ。

第二集團の行進が始まる次は我等第三集團の行進である唯無言の中に第一、二集團の行進を見つめながら號令を今や遅

しと待つてゐる。やがて志摩先生の號令一下行進は始められた。この時こそ何物もない唯時々足音のさく／＼と云ふのが聞へるのみ、……

やがて天皇旗を見出した一段眼を高く上げる時長くも白布の臺の上に龍顔を拜し奉つた時……唯神々しさに頭の下るのを覺へるばかり。

「陛下日本男兒の私も加はつてゐます將來身を以て國家の御爲に……」

感慨無量、恐れ多い事だ張り裂けんばかりの思ひであるやがて靜肅の中に部隊と共に止つてゐる自分の姿を見出した。

御親閱拜受感想

熊本市立島崎青年訓練所 田代國彦

名残り惜しい霖雨はからりと晴れて今日よき日を祝ひ奉るが如く遠く、見渡す阿蘇連峯は濃い灰色に色彩され廣漠たる帶山練兵場を背景に帶山の式場は正装なり 聖上陛下を迎え奉る用意整ひたり待つこと暫し 聖上陛下には御臨御遊ばされた御着裝の報傳はるや七萬の御親閱拜受者はたゞならぬ躍動を感じた、我等の如き卑賤なる者を九重の奥深く御座します。玉身にありながら親しく御親閱遊ばされるかと思へば忠義の心胸を轟かし聖恩の萬分の一にも報い奉らんものと誰一人として感受せざるものはなかつたであらう。大隊長の進軍の命により我等は、御玉顔を拜し奉るの光榮に浴するかと思へば其歩調も自然に神玉に充ちた一同一直線コースの隊形を取るや一段と元氣に充ち「君が代」の吹奏につれ歩武堂々と進み行き御玉顔を咫尺の間に拜し奉つた時何とも言へぬ有難き雰圍氣に包まれ聖恩の偉大さをつく／＼感受した。かくして皇御國が千代に八千代にこけのむす迄永遠に隆昌に趣くのを我々乍ら故らに深く深く感じた御親閱に浴した我等千載一遇の事として身に餘る光榮にひたり一段と緊張の意氣勃興し國家社會の爲に盡すべき事を堅く／＼決心を起さしめた。

御親閱拜受感想

熊本市花園青年訓練所 松浦安美

特別大演習終了後十一月十八日長くも 聖上陛下は帶山練兵場に臨御親しく鎮西の健兒七萬を閲し給ふ、眞に大御心を拜するだに感激の血高鳴るを覺ゆる七萬の群集一糸亂れず各指揮官統制の基に其號令は彼の大練兵場の群集をして正しく起律せしめ七萬の群集其靜かなる事林の如き内に 聖上陛下は高臺に御起立あらせられ「君が代」の喇叭の聲終るや分列の隊形に移り天顔を咫尺の間に拜し奉りその光榮に誰か感激せざるものあらん誰か感泣せざるものあらんや吾等は此の一生通じて再びかゝる光榮に浴する事あたはず實に千載一遇の光榮にして終生忘れざると共に益々奮勵努力國運進展の基礎を固くし聖恩の萬分の一たりとも報ぜん熱血の精神を發揮し以て青年の本分を盡さん事を盟ふ、今や思想財政國難の波はひし／＼と我が大和島根を襲ひつゝあり而して其國難の中堅に奮然として起ち國難打開の聲を揚げんとするものは大臣に非ず衣冠裝束厳しき貴族院議員に非ず又民選代議士に非ずして其日の希望を持ちその日稼業にいそしみ青年日本の意氣を眞に發揮するところの若き青年に非ずや御親閱拜受の感想の精神は他に比類なき大和民族にのみ此の光榮に浴する事を得只々感激の二字あるのみにして他に用ゆる言葉を知らず。

吾等は國民の中堅として一意専心奮勵努力以て報國の心を養はん。

御親閱を拜受して

熊本市出水町青年團員 富永秀雄

昭和六年十一月十八日。此佳日を私は永久忘れる事は出来ない。それは單に、熊本縣青年團員として、陛下の御親閱を辱うしたといふ光榮ばかりでなく、大和民族として、將又、日本人として、御皇室に對し、教育眞理化精神の實在を、

確實に把握し得たからである、過去に於けるあらゆる方面よりの教育の成果は、從來の私達に何を齎したか。それはより良き青年たらしめんとし、又、より良き公民たらしめんとする修養を激勵してくれたのである。だがそればかりで満足せられたであらうか、勿論満足はしなかつた。今後と雖もあらゆる方面より受けた教育の眞理と現實とを一致させるために微々たるものは云へ相當苦しんで来た。従つて、教育觀念の偉大な力を信じてゐるが故に、如何なる事をも國家の爲めなら身命を棄て、盡さねばならぬ日本人としての義務に忠實ならん事を誓つてゐる。だが、國家の爲なら一身をも犠牲にするといふ考察は單なる——通俗的な、あまりに通俗的な國家觀念でしかない。それは何故か。私はその事を無理とは決していひたくない。又過去にうけた教育を否定するものでもないが、只教育觀念としての自己意識に過なく、それが普通人としての偽りない考察であらうと思ふ。だが今度拜受した御親閲では、從來の教育觀念から来た御皇室に對する思想がそこで始めて、日本人だ——といふ眞意を確實に、然も明白に、把握し得た事を無上の喜びとするもので、今始めて日本臣民と御皇室とは如何なる密接さがあるかを、つくづく體驗し、陛下の御聖徳の如何に廣大かつ尊嚴なものであるかを更に深くした事を光榮とせねばならないと思ふ。いよ／＼陛下の御親閲拜受となる瞬間、自己一切の觀念は全く無く、陛下の御爲めなら一身を棄てねばならぬと云ふ過去の教育觀念が、無我の中に自ら、心の底に蘇つてゐた。この體驗こそ私が過去に於て一度も味つた事のないもので青年日本人として、將又大和民族として、陛下に捧げるために生れて来たのだといふ眞意が實に自然に迸り出た。自分は陛下の赤子だ、そして日本人だ、陛下の御爲めなら——といふあの崇高な氣持こそ、日本人にだけしか味へない特種なものではなからうか。それは日本人としての精華であり、日本の世界に誇る眞理でなければならぬと思ふ。私は御親閲後靜に考へて見た。日本人と外國人との相異は實にこゝにあるのではあるまいか、未だ會て一度たりとも外夷の侵略をうけた事なく、連綿として二千五百餘年の永い國体を有する事は、もとより御皇室の御威徳のしからしめるところではあらうけれども、又身を挺して國難にあたる臣民の誠實の賜でもなければならぬ。私は永い過去の教育からうけた眞理を、陛下の直前に於て體驗し得たのと同時に、現代青年として爲さねばならぬ

重大使命のある事を、峻烈に意識した。さうだ青年として現代の世相に如何に處して来たか、教育勅語を遵守してゐるか令旨を實行しつゝあるか。など現實に即した幾多の考察が私をせめたてた。

昭和六年十一月十八日。私は此の佳日を單に光榮ある日として記憶するばかりでなく、内外多事多難に直面してゐる日本の青年として、より健康な青年として、より堅忍不拔な精神の持主として、併せて世界の強國日本たらしめんとして責任を荷へる強き青年として、永久努力すべき記念日。昭和六年十一月十八日でなければならぬと確信するものである。謹書。

御親閲を拜受して

熊本市田水實業補習學校補四年次

外村

正

維時昭和六年十一月十八日、畏くも 聖上陛下、銀杏城御駐紮茲に第八日を數へ、光榮の若人七萬御親閲を拜受すべき日は来た。

此の日早朝來秋空澄みて天高く、御親閲を拜受するには最上の爽快な日和となつた。各所の集合所より陸續として、山練兵場に入場する總勢七萬の偉容壯觀、實に言語に絶する。やがて定刻近く西方の玉座に面し所定の位置に整列する吾々は第二集團に屬し、第二中隊として緊張其の極に達した。數百千の校旗團旗は麗かな秋風にひるがへり、莊重の氣分ひし／＼とせまり來るを覺えた。此の時場の西方より喇叭吹奏「氣を付け」と共に大國旗上がり着御の時刻は迫つた。「君が代」の莊重たる流れと共に聖上御着齎を知る、時に定刻一時十分。莊嚴寂として聲なく滿場感激に滿ちた。陛下には喇叭吹奏、注目裡に玉座に立たせ給うたのである再び「君が代」吹奏。吾々は大磐石の國家に生を享けたる我身の幸を今更に痛感した。やがて行進の合圖と共に迂回して場の北端に向ふ。周圍を包む數多の陪觀者列を正して聲なく、勇ましい陸

軍行進曲の音調に清められて、分列發起點に達する喇叭たる行進曲、嚴肅そのもの、裡に愈々御親閱分列にうつる。前部隊の堂々たる歩調に引きづられる様に歩武堂々進む。進む……御玉座近くなれば自らなる心身の統整極度の緊張を覺える其の裡に「頭右」の號令と共に御玉座の方に向きつゝ行進。居並ぶ陪觀者の威容も自ら嚴然たらざるを得ない。斯くて御玉座の純白なるものに映す。錦旗嚴然としてひるがへり、玆にかけまくも畏き、聖上陛下の御尊姿を拜したのである。そこには總てを清淨化した御聖徳の神々しき輝きがあるのみであつた。陛下には長くも此の時御英姿颯爽不動の御姿勢をもつて御舉手を賜りた。御前を通過すれば再び陪觀者の緊張せる目が吾々に注がれるのを視た。奏樂を耳にし一段と歩調に意を注ぎ此處に於て初めてこみ上げて來る感激に胸も張裂けんばかりで思はず落涙したのである。大迂回と共に感懐の中に御玉座に面して停止整列行進を終つた。なほ陸續として後隊は長蛇の如く行進を續け絶えず秋空に擴がり行く奏樂其の勇ましい嚴肅な雰囲気それは大日本帝國の確乎たる行進の象徴に外ならぬ。分列行進終るや軍樂隊の誘導と共に奉唱部隊女子中等女子青年の一萬五千威容を正して進出する。やがて玉座正面の高所に止るや最敬禮、軍樂伴奏にて若き女性の皇恩に感激せる奉唱歌は晴れ渡つたコバルトの秋空をふるはせ聞く者をして催涙の想をなさしめたのである。奉唱終るや全員緊張裡に「君が代」を奉唱す。聲天地をゆるがせ皇國の力強さをひし／＼と胸に覺える。やがて縣知事の發聲になる「天皇陛下萬歲」は全員張り裂ける赤誠のほとばしりであつた。かく全員注目最敬禮の裡に最後の御送りの「君が代」は奏せられ御退出と拜し奉つた。お召車の軽いエンジンの音が空にひびく。かくて吾々は千載一遇晴れの御親閱拜受を事なく終つたのである。陛下には將に一時間有餘不動の御姿勢にて、直立せられ御親閱遊ばされた。大御心は拜察するだに畏き極みである。

吾々は幸にも御英姿を仰ぎ拜して感激おく處を知らないと共に御聖徳の萬一に報ゆべく永久に其の感激を忘れず奮闘を續け、今や我帝國の經濟、外交、思想の諸國難を一日も早く打開し、聖慮を安んじ奉ることを心がけねばならぬ。此の力強き吾々の國家的團結こそ我國傳統の大和魂の流露であり、此の精神こそ皇室中心主義の表れでなくては何であらう。こ

の意氣をもつて猛進したなら現下の對支問題の如き足下に解決を觀るのであり、此の感激を一時的ならしめずして全國民が永久に忘れない間は我が帝國は全世界に其の雄名を轟かすであらう事を痛感したのである。

御親閱拜受の感想

熊本市白坪青年訓練所第三年次 古 閑 哲 雄

昭和六年十一月十八日畏くも 天皇陛下には、連日の行幸の御疲れを少しも御いとひあらせられず城東練兵場にて地上數尺の高座より親しく御親閱遊ばされしことは、吾等民草には只畏れ多くも有難き次第であります。

此の日は飽くまで晴れ渡り、練兵場頭高く掲げられし日章旗は、遙か阿蘇嵐に吹きなびき 陛下の御着聲を御待ち申上げる。縣下の中等、専門學校の各學生、青年訓練生、在郷軍人、青年團及處女會員を初めとし、縣外之等の各代表者數萬の九州健兒は、東雲晴るゝ朝まだきより所定の地に集合、正午までには整列を終り、ひたすら 陛下の御着をお待ち申上げる。午後一時と思はしき時、一發の號砲あがるや今まで騒々しかつた鎮西男子は言合せたかの様に緊張し、指揮官の指揮に従ふ。午後一時を過ぐる數分、再び號砲あがりそれと共に軍樂隊の奏する「君が代」の曲につれて、玉座に向つて最敬禮をなした。此の時、四邊皆靜寂にして、せき一つ聞えず遠くに響く御聲の音のみ聞え、只莊嚴さ筆舌につくされない一瞬が訪れた。而して續いて起る行進曲に歩武を合せ、第一集團より分列を開始した。地上數尺の玉座より舉手の禮を賜はせられる 陛下の御英姿を拜し奉つては、益々榮えゆく天津御國の有難さを深く感ぜざるを得なかつた。歩武堂々、蛇々長蛇の如き分列式は終へてやがて火の國少女等が奉唱する御親閱奉唱歌終りて後、六萬の健兒 陛下の萬歲を三唱し國歌合唱を以て一路恙なく大本營に御聲を送り奉る。

御親閲感想

熊本市池田處女會員 末永芳子

待ちに待ちたる御親閲の日十一月十八日、今日こそは すめら皇子を親しく拜みまつる日で私一生の譽として永久に忘れることの出来ぬ日で御座います。私は處女會員として此の盛典に選ばれたことは何といふ光榮何といふ幸福でありませう。

私共ははりつめた氣持であの廣々たる帯山に集みました。あたりはもう人垣で埋められてゐました。午後一時過御着の花火が上がりました時はあたりは静かで我を忘れて自然に頭が下つて何とも言ひ知れぬ氣持に充たされました。御親閲始めの喇叭に合わせて校旗團旗を先頭に隊伍を組んだ學生生徒青年團幾萬かの分列行進がありそれからいよ／＼奉唱部隊私共の奉唱の番となりました。第一のライン迄進み第二のラインにさしかゝつた時に軍樂隊に合わせて行進しいよ／＼御玉座上の御英姿をはつきりと拜し奉ることが出来ました時は唯有難さ、かたじけなさに其の氣持は筆にも言葉にも言ひ表すことが出来ず萬感胸に迫るとは此のことかと思ひました。

軍樂隊に合せて

「あゝこゝにすめらみことの御車を」と唱ひ出した時ははげしい感激に打たれ全く夢の様で知らず知らず涙が頬を傳つて流れました。

御親閲が終つた時始めて我にかへりました。そしてみ恵み深い今日の一日位私は感激に満ち感涙にむせんだことはありません。名も無き私共の様な民草まで親しく見そなはず大御心は魂の底の底までもしみ入つて終世忘れることは出来ません。私は今日の光榮を深く胸に秘めて自分の職務を一層はげみ御皇恩の萬一に報い奉らんと覺悟を致しました。

御親閲を仰ぎ奉りて

熊本市慶徳女子青年團 八木紀子

四方の連山は風の紅葉に映え、菊花榎郁として薫る秋に私共の多年御待ち申し上げて居りました 聖上陛下を吾が熊本に、大演習を機と致しまして御迎え申し上げる事が出来ましたのは、誠に有難き極みでございます。特に私共女子青年團は親しく 陛下の御親閲を仰ぎ奉りまして此の上ない光榮に浴する事が出来まして只々感泣致して居ります。この日、昭和六年十一月十八日は、私共の永久に／＼忘れ得ぬ尊い日でございます。恐れ多くも御座所に御直立遊ばされました

陛下の御姿を御側近く拜し奉りまして、只々限りない感激と、大きな／＼御光に包まれたかのような氣持と申しませうか全く何とも筆舌には現はされない御威光に、感泣致すのみでございました。私共、奉迎歌を奉唱致します時、兩頬は尊さと有難さに誠の心の奥底から湧いて来る涙にぬれ乍ら、最初は餘りのかたじけなさに出なかつた聲も、自然に何ものかの力のこもつた大きな／＼聲で奉唱致して居るのを自覺しましたのでございます。この感激の涙、何とも底知れぬ大きな力こそ 陛下の御下に居ります日本臣民ならではの味ひ得ぬものでございませう。覺束ぬ身乍ら幸にもこの光榮に浴します事が出来ましたのも全く 陛下の御光の致されました事と、一生の間、永久に一時も忘れずに、今一層の御恩報じの念を高からしめ度いと存じて居ります。あの 陛下の御前に出ました時の氣持を始終念頭に持ちまして、女性としての道を全うし、大きくは我が日本臣民の繁榮を圖るべく、より以上の理想と、緊張とを持ちまして少々なりとも 陛下の御恩に報い度いとそれのみを念じて居ります。終に臨みまして我が皇室の彌が上にも御榮えあらん事を祈つてやみません。

御親閲に参して

熊本市慶徳女子青年團 高橋君子

昭和六年十一月十八日此の日 天皇の御親閲を仰ぐべく帯山原に集る光榮の若人は實に六萬七千人と云ふ事でした。朝

來の快時に天は輝き地は喜びに躍るかと思はれるばかりでした。誰の顔にも歡びが溢れ高まる感激をじつと抱き締めてゐるかの様、此の見果しもつかない大廣場に満ち満ちている幾萬の人々が皆同じ想ひに同じ感激に、全く一つなる純真な喜びに浸り切つてゐる姿は例へやうもなく尊く思はれました。はるか西の方から行在所出御の煙火が傳はると、人々の間にそれとなきさゞめきを起しましたが間もなく軍樂隊の奏するかすかな「君が代」の曲が流れて来て、いつとはなしに水を打つた様な静肅に返りました。

あゝ愈々御親閱式が始まらうとしてゐます。なだらかな岡のうねりの向ふには風にはためきながら 天皇旗が上りました。待ちに待ちし此の日あゝ輝きわたる大空の美しさ喜びの人々と抱く地上の麗しさ、はるか軍樂隊のメロディはいつの間にか勇壯な行進曲を奏して居ます。早前の一隊は分行進を始めたのでせうか、足踏のひびきがかすかに感ぜられます。美しい曲の流れ、力強い行進の足音だん／＼近まつて來ます。あゝ光の波、美しい銀蛇の流れと見へたのは、郷軍青訓團の一齊に捧ぐるその團旗の金具の光でした。學生團の指揮刀の所々に光を受けて、キラリと空を切るものも又見事でした。軍樂隊は絶間なく新しい曲を奏し、一隊又一隊果しもなく行進隊は続きます。一絲亂れぬその隊列の見事さ遂に私達の前に屯してゐた青訓團が行進を始めました。愈々女子奉唱團皆黙々と目を輝し頬をほてらして進みます。野原の一つうねりを越へた時、

あゝ御旗が、御玉臺が、光を斜めに受けさせられて、さながら御塑像の如くに拜される 天皇の御姿、尙も私達は進みます。廣い草原をめぐつて山々は濃く淡く重なり連つて居ます。玉臺は御後の山並の中段に、白く夢の如く浮いて見えます。ああ 天皇は少しも御動きあそばされず、御傍の御旗でさえあんなにはためくのに神ながらの御身にましますとは云へ、この草原を吹く風は、どんなにかお厳しい事です。あゝ我等すめら尊を迎へまつり、こゝにかく奉唱を捧ぐ、如何なる幸か、如何なる恵みか、只嬉しさに涙こぼれし、萬餘の奉唱隊は只一つ心に感激にふるへつゝ唱ひました。

天皇陛下萬歲／＼／＼幾萬の人々のさけびは空をどよもし地をゆるがし山々は精あるものゝ如く、こだまして繰返しま

した。御親閱式は終りました。陛下着御より、一時十分間縦り擴げられし、繪巻物を只一瞬の夢なりしと想はれたのはその餘りの豪華に酔ひしたためにか、その壯觀に打たれたためにか、否あらず。この式の神秘の力に導かれて、無心の境に行はれたからでせうと思はれます。人々は早や四方に流れ行き、帶山が原は、又靜かに眠りに入るでせう。美しい山膚に懸る純白の玉臺、依然と立ち給ひし、神ながらの御姿、降りそゞぐ陽光満ちたゞやう地の精氣世を絶したこの美しい光景は、今日のこの感激と共にいつまでも忘れられないこととせう。

御親閱を拜受して

熊本市一新女子青年團 小川千代

あゝ長くも 聖上陛下を帶山原頭にお迎へ致し私共七萬の若人が晴れの御親閱を仰ぐ光榮を胸に描いて待ちに待ち奉つた輝かしい歡びの日十一月十八日は遂に迎へられました。

此の日光榮に輝く南國の空は明朗として一抹の雲も無く紺碧の空に陽光は麗かに照つて唯々榮光其のものゝ姿なのでした。光榮と歡喜とに喧燥とスピートがまるで熊本と云ふ坩堝の中で湧き返つて居る中を帶山へ帶山へと進む私共の感激何にか例へませう緊張と興奮と矜持と唯々之あるばかりです。早くも午前十一時頃にはあの廣大な帶山練兵場は空前の大壯觀を眼前に十重二十重の人の波でうづまりました。遙か東方には遠く天に沖する噴煙を抱いてそゞり立つた大阿蘇の雄姿を仰ぎ樞紅葉照り映ゆる西山一帯の連山に圍まれてやがてはおこる光榮に血湧き、踊る胸を肅として陛下の臨御を御待ち申すことしばらく校旗、團旗、訓練所旗、在郷軍人分會旗眼もあやに林立する錦旗はいとも鮮やかに輝き、吹き渡る微風にはためき抜刀着剣した劍光は陽光に煌き刻々に迫る薄の着御を滿場只管に御待ち奉つたのです。

やがて瑞陽普く晴れ渡つた紺碧の空に轟然たる一發の煙火の合圖に式場正面の大日章旗は橋頭高く掲げられ場内は愈々

無限の緊張に包まれ壯嚴の氣凛へば嘯唳たる喇叭の音は満場を壓し肅として聲なく軍樂隊のいとも莊重な「君が代」の奏樂は始まつたと思ふ間も無く玉座に立たせ給うた御英姿を仰いだのです。金色燦たる天皇旗は高く清澄の天空に翻る時正に午後一時十二分。鳴り渡つた喇叭の合圖と共に軍樂隊のマーチに連れて緊張しきつた分列は開始せられました。陽光に煌く劍光一絲亂れぬ歩調の足並、輝く錦旗不動の御姿勢で各隊毎に一々賜はる擧手の玉姿が遠く離れた私共の眼に灑然として拜されるのです男子各部隊の分列が全く終ると私共若き乙女が無限の歡喜を胸に秘めた六千の奉唱隊の前進が始まりました一歩々々。陛下の御前に近づく心、軍樂隊のマーチに誘導せられ乍ら歩く氣持神氣益々迫つてその何たるかも覺えませんが、あゝ玉座を距る事幾何も無い處に。陛下の颯爽たる御英姿を拜して感激に高潮して奉迎歌を奉唱した私共、こんな印象的な莊嚴が何處にありませうか聖壽の無窮を祈り奉る萬歳の奉唱すら口こもる位でした。かくて行幸掉尾の大盛事である御親閱の式も歡天歡地空前の盛觀裡に終了いたしました。誇と歡びと身に餘る光榮に輝いた眼は無限の思ひを抱いたまゝしばらく茫然として動くことを忘れ我が日本の輝かしさと力強さを深く感ぜられました。

あゝ何時の代にかゝる無限の幸福があらませう。二度と返らぬ若き日の輝かしい榮光は一族の名譽として末永く語りつくされる事せう。

御親閱を拜受して

熊本市向山女子青年團員 前田りえ子

待ちに待つた御親閱の日は來た。十一月十八日！九州全土の青年男女が最大の感激と喜悅の渦の中に溶けこんだ此の日よ。空が素晴らしい青さに澄んで、帶山原頭の秋風は随分冷たかつた。七萬と數へられた若人達の群は早朝から集合して榮ある時を待つて居る。何と朗らかなさゞめきだらう。すべての人の顔が明るく輝いて居る。凛々しい制服の中學等

生女學生、その中に女子青年團の取り取りの装ひが一抹のやわらか味を添えて居た。煙火が一發上つた。俄かに場内が緊張する。

天皇陛下が御着き遊ばされたのだ。嘯唳たる喇叭の音、私達の胸が高鳴る。何といふ靜寂な一瞬であつたらう。御召自動車のかすかなエンヂンの響き。軍樂隊の奏する國歌の莊重な音律、今し全員最敬禮の中に玉歩を進め給うて玉座に御起立遊ばされた。何といふ御英姿であらう。燦として輝く天皇旗、ひらめく日章旗。日本國民たるの喜びが湧き上つて來る場内は水を打つた様な靜かさだ。華やかな軍樂隊のマーチが起る、莊烈な分列式が始まる。校旗を先頭に若人達の勇ましい行進。青訓生の華やかな國旗とカーキ色の制服が續く。銃劍がキラ／＼と輝く。一糸みだれず何萬といふ人が只一線になつて進行する。天皇陛下には一々擧手の禮を賜うた。何といふ有難さであらう。分列式が終る。次は女子部隊の奉唱だ。軍樂隊の奏樂につれて乙女達の行進が始まる。靜かな靜かな行進だ。玉座の前方六十米の所に凹子形に整列する、あゝ何といふ感激。陛下には御微動だに遊ばされず御起立遊ばされてゐる、有難さで一杯だ。辻樂長の指揮につれて私達は勢一杯唱つた。帶山一杯にやはらかな音階が流れる。涙！！涙！！感極まつて聲が出ない。力強い國歌の合唱。次に本山知事の發聲に依つて萬歳を三唱する。天を壓する萬歳のひびき。山も空も草も木もものみなが聖壽の無窮を祝福して居るかの様だつた。天皇陛下は幾度も御丁寧な擧手の禮を賜うた。やがていささかの御勞れも見えず全員奉送裡に御還幸遊ばされた。唯感激で一杯だつた。今日此の榮ある御親閱に参加して、新しい日本、力強い日本の一員として生きることの喜びをはつきりと味はつた。この時私の腦裏に強く浮んだ印象は、新時代の婦人としての修養を怠らず御國の爲に精一杯根限りつくさねばならないとの覺悟であつた。あゝ永久に記念すべき此の日よ！！

喜びの十一月十八日よ！！

御親閲を仰ぎ奉りて

熊本市向山女子青年團員 浦田美穂子

菊の花香る秋。十一月十八日。おゝ光榮に輝く此の日。秋晴れの帯山原頭に集ひし數萬の若人は親しく、大元帥陛下の御親閲を仰ぎ奉りました。この限りない御聖徳に只々喜びと感激にひたつたので御座いました。此の日こそまことに私達若人の若き血潮と意氣に描き出された雄々しくも壯大な華々しい大繪巻圖でありました。

御親閲場なる帯山練兵場は大阿蘇の連山を背後に、薄絹を張りめぐらしたような青空の下に、大君の限りない御光に隈なく照り映へていやが上にもはやる若人達を照らしました。輝かしい日の丸の旗のそよぐ波は麗はしく、「君が代」の奏樂は嚴かなる中に颯爽たる大君の御英姿をまのあたり拜し奉つた私達の心臓は、たゞ今生の喜びと光明の強き力に躍り上りました。

あゝわれら生けるかいあり おほけなき今日のほまれを

おほけなき今日のほまれを

萬世に語りつぎつゝことほがむひとつ心に

と高らかに歌ふ奉唱歌に、涙は止めどもなく頬をぬらしました。この光榮に浴しました一生の喜びを如何にして語り得ませう。あまりの有難さ尊さに申上げる言葉さへ知りません。

幸ある御國に生まれまして數々の御恵にひたつて居ります私達は、少しでも大君の御恩にむくいなければなりません。皆様と共に私共女性の本分を盡して益々奉公の念を堅くし、一切を捧げ奉りまして御國の彌榮をはかりませう。陛下の御聖徳を仰ぎ奉りまして玉体の益々御健かに涉らせられんことを祈り奉ります。

御親閲を拜受して

熊本市向山女子青年團員 高野志久

空は一點の雲もなく晴れ渡り、廣々とした野には晩秋の風肌寒いまでに吹く。

甲子の分列式も終りに近づき、今や私達がいよゝゝ陛下の御前に出て奉唱する光榮に浴すかと思ふと、心身自ら緊張するのをおぼへる。やがて軍樂隊の吹奏に合せて一歩一歩踏みしめて、御前百米足らずの地點まで進んだ。今更ながら恐多くて全身が堅くなる様な氣がする。一段高くしつらへられた純白の布におほはれた玉座に、大元帥の軍服を召された直立不動の御英姿を拜した時、かたじけなさに心も身も云ひ様のない、冷氣さへも感じた。こんな近くにと思ふと奉唱の聲も涙ぐもりになり、はてはむせぶが如くかすれるが如く息すまつた様な心持になつた。私達の奉唱に靜かに敬禮を賜はる知事の萬歳に合せて聲をかぎりに萬歳をお祝ひ申し上げる。陛下にはいと靜かに擧手の答禮を賜はる。勿休ないかぎりである。神々しいみ姿を目前に拜し、いつまでもと竹の園生の隆盛をお祈り申し上げる。錦の御旗はひらりと風にひるがへり全色はまばゆいばかりにきらめく。

千歳一遇「生ける甲斐有り」の歌の通り、私達は何時の日か再び御親閲拜受の光榮に浴することが出来ませう。御前に進み出てより、天皇陛下を目送し終るまでの張りつめた氣持、この氣持こそげに口にも筆にも云ひ現せない眞の赤誠であつて、又御親閲拜受者ならではの味はへぬ氣持ではあるまいか。拜聞する所によれば、あの寒い野に私達の爲に、一時間餘の永きにわたつて微動だになし賜はなかつた由、げに勿休ない事である。この一端によつても如何に民草を御愛撫なさるかを伺ひ知る事が出来る。

あゝ十一月十八日、此の日の深き印象を其のまゝ心にひめて、海よりも深く山よりも高い大御心の萬分の一にでも報い奉る様いそしみ努めたいと覺悟を固くした。

御親閲を拜受して

熊本市向山女子青年團員 寺 本文子

白、赤、黄、色とりどりの菊の花薫る十一月の佳き日に我が大熊本市に聖天子を迎へ奉つた市民はあはたしい潮流にも似た歡喜のどよめきと、云ひしれぬ清淨境とに莊嚴な感激にひたつた。この榮ある秋に當り私達は女子青年團員として千載一遇の晴れの御親閲に参加するの榮譽をになつた。聖上陛下の九州山口、沖繩各縣男女學生、男女青年團、青訓生在郷軍人等の晴れの御親閲は秋色のいや映えた帶山原頭に於て舉行された。

おい、この日!! 私達の若き血潮は燃え、胸は高鳴つた。何と輝かしく歡び溢れる日ではないか。秋空高く帶山原頭は東に大阿蘇の雄大な巨姿がせまり、西に金峯山一帯に瑞雲棚引き、絶好の秋日和に原頭の秋色はいや映えた。大團旗が高く／＼翻つた。莊嚴の氣漂ふ定刻に及び、嘯として響き渡る軍樂隊の國歌奏樂と共に着御あらせられた。うら／＼かな陽光を浴びて銀色に光る高臺の純白な玉座に、畏くも 聖上陛下の颯爽たる御英姿を拜した。天皇旗が燦然と輝き渡る。誰一人として微動だにせぬ嚴肅な静けさだ。きらびやかな旗の波をうたせて前進する青訓と、在郷軍人の整然たる分列式が勇躍嚴肅極まる光景の中に終つた。定刻に及び莊嚴の氣漂ふ中に、無限の歡喜を胸にひめた若き六千の乙女等——私達は軍樂隊のマーチにつれて、三方面より行進を開始し、玉座の前方約五十米の地點に隊形を整へた。やがて「あゝ、ここにすめらみことの御車を迎へまつれり」の奉唱歌は歌ひ出された。莊嚴な餘韻が遠く／＼原頭にひびいて、ひし／＼と胸にこみあげて来る。私達は貴い感激の瞳を潤はせた。私達の脳裡には湧然として忠君の赤誠と愛國の熱情とがすさまじい勢で漲つた。何と云ふ尊い清い美しい心のめばえであつたらうか。過ぎ來し二十餘年を通じての一番の清淨な、そして力強い何物をもひしく偉大な心の叫びであつたのだ。本山知事は臺上に上つて精一ばいの力をはりあげて萬歳を奉唱し、是に和して原頭を搖がす萬歳の轟きは民草の眞心をこめて天地を壓し、遠く阿蘇の山々にもこだませよとばかりにひびいた。輝

かしい光榮と感激の裡に御親閲式は過ぎ去つた。

この千載一遇の御親閲を拜受して私達は、愈々益々相勵み、相努めて、奉公の誠を致し、聖恩の萬一に酬い度いと固く固く心にちかつた。

御親閲を拜して

熊本市向山女子青年團員 古 田 ヤ ス エ

私達が幾月か待ちに待ち奉つた其の日は來た。陛下の行幸ましまして親しく玉顔を拜します今日の上よき日よ、老若男女一齊に帶山へ帶山へと走り出でて 陛下の行幸を奉迎せんとし、年老いたる老人は筵を敷いて御待ち申し上げてゐる。何と涙ぐましい程の有様ではありませんか。

秋草萌ゆる帶山もおほけなく惠の露に光り輝いて帝の御代に千代に八千代にと壽き奉るかの様に、さしもに前日まで氣づかはれた天氣もからりと晴れ渡りて今日の行幸を祝ふ秋晴の日でありました。あの廣い帶山に朝早くから押しかけて尊き大君の御姿を拜し奉り、おほけなき今日のほまれを萬代に語りつけつゝ壽がんとて、御車の御着を待ち奉る幾萬の人々の顔は晴やかに時の移るのを今か今かと待ちわびて胸の高鳴るのをどうする事も出来ませんでした。

待つ間程なく御召自動車御着の喇叭の吹奏によつて全員に「氣を付け」の號令がありますと、いとも嚴かに聞ゆる軍樂隊の「君が代」の音、 天皇陛下には今し御親閲の爲、帶山練兵場にしつらへたる眞白の高き玉座にお立ち遊ばされたのであります。間近に仰ぎ奉れば唯神々しく、あゝ如何なる幸か、かしこさに涙こぼるるばかりでありました。續いて火の國幾萬の若き乙女が熱誠こめて歌ふ奉迎の歌。唯足の踏む所も忘れてしばし茫然としてしまつたのであります。仰げば尊し 陛下には玉顔いとも朗らかに拜する事が出来ました。やがて起る「君が代」今日の上よき日を清く心に留め残さうと

誠心こめて奉送申上ぐる中を、天皇陛下にはいとも神々しく還幸遊ばされたのであります。遠ざかりゆく御車を拜しつゝ幾十萬の民草は「君が代」は千代に八千代にと壽ぎつゝこの上の努力と奉公とを永久に君に捧ぐ可くひとしく心に誓つたことであります。

御親閲を拜受して

熊本市向山女子青年團員 東大森貞女

かしこくもすめらみことの御前にみうたうたひしわがほまれかな
ながらへて後の世までも傳へなん若きをみなの方にあまるほまれ
千載一遇大君むかへて今日こゝに熱血七萬御親閲をうく
天地に神とも御親とも慕ひまつりし大君拜がむ
空すめる霜月なかば帯山に大君むかへて若き血おどる
みうたうたふ若きをみなの心一つになりてひびきわたれり

御親閲を拜受して

熊本市黒髪女子青年團員 早川富貴子

長くも 天皇陛下には、熊本縣下に舉行遊ばされる陸軍特別大演習御統裁の爲、十一月十一日、大本營たる熊本偕行社に着御遊ばされました。翌十二日から三日間、雨降りしきる中を御いとひも無く、勇ましく活躍する南北兩軍の状況を御統監遊ばされ、十五日にはいとも莊嚴な觀兵式に臨ませられ、次の日も其の次の日も寸時の御休もあらせられず、官廳や

學校や或は實業施設の御天覽、さては官幣社への御參拜やらと、各種各方面への地方行幸遊ばされ、いよ／＼十八日には帯山練兵場で、私共は晴の御親閲を拜受することになりました。其の日空に一點の雲もなく、此の大原野につゞく大阿蘇も、一きは高く聳えて、噴煙さへも今日は晴やかにたなびいてをります。私達は一同所定の位地に着いて靜かに時の移るのを待つてゐました。見渡せば彼の帯山練兵場には、今日の光榮を荷ふべく各地から集まつた。在郷軍人、學生生徒、青年訓練所生徒、幾萬と數知れず控へてゐる。其の周圍には、之も今日の御親閲を拜觀せんものと、さしにも廣い練兵場に十重二十重に一般群衆が押しかけてゐます。私は此の様を見ては、何ともいへぬ心強さを覚え、やがて始まる御親閲の式の光景を思ひ浮べながら、胸の躍るのを覺えました。

十二時頃にもなりますと、自然と邊が靜かになり、在郷軍人や、青年團の方では整列をして 陛下の御臨幸を今やおそしと御待ち申し上げて居ります。やがてズドンと一發火花が大空にひびきました。今 陛下は行在所を御發し遊ばされたのであります。喇叭が勇ましくひびき渡りました。みんなしんと靜まりかへつて、十幾萬の人々、聲一つありません。いよ／＼サイドカーの音がして先行の人が式場の方へ來ました。つゞいて先驅の自動車が見え、まもなく御召の自動車が見えて、やがて高い御親閱臺に 陛下の御姿が拜せられ、天皇旗が日に輝いて御側に翻つてゐます。いよ／＼分列式が始まり、青年團、在郷軍人が行進を始め戸山軍樂隊の演奏する軍樂の音に足並そろへて續き行く有様は何とも申されません。最後に私共女子青年團は、隊長の指揮に従つてしづ／＼御前へ進み出ました。前方の高臺の上には長くも尊き御姿が、凜として私共の方をみそなはしゐられるのが拜せられ、思はず頭が下りました。やがて樂長の振上げるタクトに連れて心の底から歌出しました。けれども聲がかすれてうまく歌へないやうな氣がして、たゞ熱い涙がハラ／＼と頬を傳つて落ちます。陛下には一節の歌が終る毎に一々御答禮遊ばすやうでございます。

あゝ今し生ける甲斐あり

おほけなき今日のほまれを

と歌ふ時には、もう私の心は胸一ぱいで、有難さに體がふるへました。「君が代」の唱歌を合唱しますと 陛下には御鄭重な御答禮を遊ばされ、之で一時間に亘る御親閲の式がとゞこほりなく済み、陛下にはまた御召の自動車に召されて御發車になりました。私は始めて我にかへつて、何だか大任を果した様な気がしました。

それから一同と家に歸り、彼の尊嚴な御姿を拜し、其の御前で奉迎の御歌を奉唱し奉つた身の光榮を思ひ、歌の文句の様「今し生ける甲斐あり」としみじみ思ひ、此の今日の感じを永久に永久に身につけて、陛下の御爲に盡さねばならぬと思ひました。

御親閲を拜受して

熊本市本莊聖光會員

角 江 ト ヨ

十一月十八日は約七萬名の若人達が帶山練兵場に於て、光輝ある御親閲を拜受した感激の日である。此の日、秋空は清く澄み渡り榮ある日を壽ぐものゝ様であつた。吹き來る喇叭の音にさしもに廣き帶山練兵場も寂として聲なく、全衆は姿勢を正して 陛下を御迎へ申上げた。龍顏うるはしく玉歩を運ばせられ、高き玉座に肅然として立ち給ふ御聖姿の神々しさ——錦の御旗は朝日に輝き目もさめるばかりであつた。軍樂隊の行進曲に伴ひ、各青年團隊は標旗をかざして分列し、足並揃ふ美事さに、一步々大地を踏みしめる足音に、皇國の力強さを思はずには居られなかつた。分列式終了後、女子奉唱隊七千幾百名は潮の如く大きい静かな搖ぎを見せて押寄せ、玉座の前に静止した。總指揮者の最敬禮の號令に一同頭を下げ「あゝこゝにすめらみことの風聲を迎へまつれり」と私達の心其のまゝの奉唱は美しい旋律となつて、帶山の野に流れた。次ぎに「君が代」の奏樂が全大衆によつて合唱され、熱誠あふるゝ十數萬の民草の聲は大空に響き、莊嚴の極みであつた。續いて起る「天皇陛下萬歲」の聲は帶山原頭をゆるがせた。初めの萬歲を聲高らかに唱へることの出來た私は

陛下の御前に立つ事を得たうれしさに、感激の涙湧きいで、次ぎの萬歲はかすかに——最後は満身の勇を以て「天皇陛下萬歲」と聲を限りに叫んだ。陛下の赤子としての幸福を喜ぶ私は感激に満たされた一日を意義あらせる爲、自己の修養に益々はげまなければならぬと堅く心に誓つた。

御親閲拜受の所感

熊本市春竹處女會員

諏 訪 律 子

昭和六年十一月十八日、此の日こそ私共九州女子青年の畏れ多くも 聖上陛下の御前にて御親閲を拜受する榮ある日でございます。早朝より此の喜びにふるふ胸を白衿も清き木綿の紋服に身を固めた私共はやがては拜受すべき御親閲の様を想像し歡喜に胸おどらせ乍ら帶山に 陛下着御を待ち奉つたのでございます。

時正しく午後一時十六分、殷々として 天皇陛下着御を報ずる砲の音天地にこだますれば全員一同最敬禮裡に 陛下には玉座に歩を進め給うたのでございます。私共は畏れ多くも 陛下百米の御前に進み奉れば喇叭として戸山軍樂隊の奏する樂の音、吾が女子青年奉唱隊は感激にふるふ聲にて御親閲の御歌を奉唱致したのでございます。奉唱中感極まつてあつきものゝ頬を流れるを覺えました。その時こそ私共の胸は異様な感激と、緊張の最高潮裡でございました。最後に知事閣下の音頭にて 陛下の萬歲を三唱致しました。それこそ赤子の衷心よりほとぼり出づる聲でございました。その間一時間餘 陛下には御微動だも遊ばされず、たゞ〜かしこき極みでございました。誠に千載一遇こよなき日に生れ合せ榮あるものゝ一員として加へて頂きました私、私の生涯中の輝かしい思ひ出として、ほこりとして、いつまでも残る事でございますませう。

女性の私達、國家の干城として軍の庭に起つ事は出來ませずとも、良妻賢母の道を全うし、忠良なる第二國民の養育を

期して 陛下に報ゆる覺悟が大切と存じます。
最後に此の英明なる若き天子を戴き奉る私共の幸福を感謝致します。

御親閲に臨みて

熊本市春日町處女會 岩越たか子

紺青の空からふりそぐ陽光を眞ともに浴びて、折からの微風を快く頬に受けて立てば、廣々たる帯山練兵場はなだらかな傾斜をつゞかせつゝ、茶褐色の色も今日はさえさえと、其の一葉々に歡喜の波をゆらめかしてゐる。場に満ちた御親閲受者、場をめぐつて何萬とも數知れぬ拜觀者の群、それ等がまき起す感激の波紋は、草の一葉々の歡喜と相呼應しつゝ、總ての雑念を押し流して四方へ擴がつて行く。實に壯觀と言はうか、偉觀と言はうか、名狀しがたい一種異様の喜びが私の心をしつかりと擱んでゐる。

X

X

X

「ドーン！バン、バン、バン!!」

中天にさく裂する打ち上げ花火。今正に一時だ。

かしこき聖の君は今こそ場内にその玉歩を御運びになつたのだ。居並ぶ群衆の上を無言の歡喜の渦がどよめく。私達が待ちに待つた喜びは目前にせまつた。一秒、二秒、三秒——時が飛んだ。私の心は躍る。皆無言だ。と、あたりの静寂を破つて喇叭の聲が朗々と響き渡つた。やがて起る「君が代」の吹奏。私の心は極度に緊張した。私の頭からすべての雑念が消えた。指揮者の最敬禮の號令も聞えなかつたか覺えてゐない。頭をあげた時、私の奉拜し得たものは陛下のたくましくも勇ましき、御健やかな御姿であつた。陛下は慈愛こもる温きそのまなざしを私達に下し賜はりつゝ、

恐れ多くも擧手の答禮を賜はるのであつた。何と有難い御心ではないか。私の心は唯々感激の涙にふるへた。私はかゝる陛下をいただく日本國民たり得た事を今又強く喜ばずには居られない。

折しも高くひびき渡る前進の號令、靴音と折り重なつて雄々しき階調をかもし出す軍樂の調。勇壯な分列式は開始された。微風にひるがへる旗の列は熱血ほとばしる青年の意氣に燃え、穂すゝきときらめく銃劍の切尖には剛健の火花を散らし、踏みしめる足音には何物をも恐れざるますら男の意氣が躍動する。何と言ふ力强さだ。さうだ、この意氣だ。輝かしい過去三千年の歴史を綴つたものもこの意氣に外ならない。總べてを捨てて唯一途に、君の爲、國の爲につくす赤誠。大和魂をうつし出した一幅の美事な繪巻物だ。

何と言ふ心強さだ。再び私は考へる。私はこの國民の一人として生れ合はした事をしみじみ感謝せずには居られない。と同時に私は強く強く誓ふ、この國、この天子の爲にすべてを捧げて働くことを。部隊は進んで、私達女子奉唱部隊の出動すべき時が來た。軍樂に合はせて行進する時、一步は一步より胸は高なり感激の血潮はたぎつた。奉唱歌奉唱、「君が代」の奉唱。今靜かに顧る時、私はどうして歌つたかはつきり覺えてゐない。唯出來る丈の力で一生懸命に歌つたと言ふ事がわかるばかりだ。さうだ。私の心の中には、奉迎の誠心の外には何にも考へる餘裕を持たなかつたのだ。奉唱を終つて知事の發聲で萬歳を三唱した時、本當に満場の歡喜は天に押し地に壓した。

X

X

X

やがて「君が代」の奏樂裡にすべり出す御車を御送りしつゝ私は心から何度も何度も 陛下の御高恩に感泣しつゝ、我が君のいや榮へまさん事を祈つてやまなかつた。

御親閲を拜受して

熊本市出水町處女會員

原 口 幸 枝

十一月十八日これは私達の永久に忘れる事の出来ない光榮の日で御座います。一生を通じて記念すべき日なので御座います。

此の日畏くも 聖上陛下には七萬の中等學校生徒男女青年團を御親閲遊ばされました。不束ながら私も其の一人に加へて戴き、私の胸は無上の喜びと感謝でふるへました。あの一時間にも亘る御親閲の間を微動だになし給はぬ畏き御姿を目のあたりに拜しましてたゞ、有難さに自ら頭の下るのを覚えます。私達奉唱隊は此の喜び、此の感激を其のまゝに天にもひびけと歌つたので御座います。あゝほんとに思ひがけ無くも此の鴻恩に浴する事が出来たのは、なんと云ふ幸なことで御座いませうか。

私は此の有難い御恵に感謝致しますと共に大君の大御心に添ひ奉る様力強い女性にならねばならぬと強く感ずるもので御座います。

御親閲に浴して

熊本市白坪女子青年團員

櫛 野 ふ み 子

昭和六年十一月十八日畏くも 聖上陛下には九州、山口、沖繩各縣下男女學生、男女青年團、青訓生、在郷軍人代表者七萬餘名に對する、御親閲の盛儀を行はせられました。

此の日風和らかに空澄み渡り、阿蘇の山は薄紫に壽ぐかの様に照り映へて居りました。朝早くから勢揃ひした各部隊は帶山練兵場の所定の場所に整列致しまして、刻々に近まる御親閲の時間を破裂しさうな胸の高鳴りを抑へながら待つので

した。大本營御發聲を報ずる花火は澄んだ大氣を震はせて朗らかに上げられました。午後一時十八分式場正面の大國旗は櫛頭高く掲揚されました、嚴肅の氣は廣い廣い練兵場にこめ、高鳴る鼓動の音の聞へる様な静けさでした。やがて御兩衛は着御になりました。軍樂隊の奏する「君が代」の曲とともに 天皇陛下には玉座に玉歩を御運び遊ばされました。最敬礼を致し颯爽たる御英姿を仰ぎ奉つた七萬餘の若人は只々光榮と感激にうたれました。それから大分列式は開始されました。軍樂隊の奏する勇壯なる行進曲につれて進む足なみ、先頭に輝く團旗、校旗、皆光榮に溢れてゐます。その意氣、私は國威の日と共に舉がり、如何なる國難に遭うとも恐れぬ、我が國の強い強い力を感じました。

畏くも 天皇陛下におかせられましたは、御前通過の分隊に對して一々擧手の禮を以て御答禮遊ばされました。神の國に生れた者の限りない幸を思はずには居られませんでした。次に女子中等學校生徒、並びに女子青年團員一萬五千を以て組織された奉唱部隊が前進致しまして、最敬礼を致し御親閲奉唱歌をある限りの力で奉唱致しました。たゞ感激と涙が湧くばかりでございました。それがすむと、集れる七萬餘の民草一つ心で「君が代」の奉唱を終り、本山知事の發聲に合はせて 天皇陛下下萬歳を三唱し聖壽の無窮を祈り奉りました。

此の有難き御親閲に浴し得た私達は益々奉公至誠に燃へ、生き甲斐のある生活をして、少しでも世の爲人の爲に奮勵努力し聖恩の萬分の一にでも酬ひ奉らんことを心に誓はずには居られませんでした。

御親閲を拜受して

飽託郡清水村青年團員

丸 山 廣

昭和六年十一月十八日！此日こそ、我等の若き血潮は燃え、胸は高鳴る誠に輝かしくも、歡び溢れる日であつた。

日本晴の託摩原頭に於て、畏くも 聖上陛下の九州、山口、沖繩各縣男女學生、男女青年團、青訓生、在郷軍人、六萬六

千餘人の御親閲を燦たる錦旗の下で其光榮を拜受した。實に我等の生涯に於て千載一遇の盛事にして、特に日本國民たる自覺を一層強からしめた記念すべき日である。

此の日、空は紺碧に澄み互り、阿蘇の連山は浮影の如く鮮かに晴れ渡る帯山練兵場、集まる若人六萬六千餘の中に我等は清水村青年團員として其光榮に浴することを得誠に一身一家の名譽、男子の本懐此の上もなかつた、この榮えある日を待つた多くの参加團員は早朝から詰めかけ、午前十一時には全く集合を終つた。劍尖は陽光にかゞやき、校旗、團旗はそよ風に翻り場を圍む拜觀者は三十萬といはれてゐる壯觀である、陛下の着御を御待ちする裡に午後一時十六分、嚙曉として響き渡る軍樂隊の國歌の奏樂と共に、萬象靜まりて萬感胸に迫り、皇恩普く無限の感激に湧いた、陛下には直に展望臺に成らせられ、軍樂隊の奏する行進曲に分列式は開始せられた、我等青年團は大隊長の指揮により行進を續けた、我等は陛下の御尊顔を咫尺の間に拜し奉り只感激措く處を知らず歡びと有難さで胸は勇躍した、分列式終つて女子奉唱隊一萬五千の奉迎歌高らかに奉唱せられ、聖壽の萬歳三唱は山野を壓して天に沖した、此間一時間餘に亘りて陛下には長くも御直立不動の御姿勢にて御親閲を賜ひ、誠に恐懼の至りであつた。

嗚呼、我等は此の有難き御親閲を拜受して、嘗に我皇室の彌榮を祈り聖壽の萬歳を祝し奉る。今や内外の時局重大なる秋に際し、我等は常に心身を鍛錬し、日々修養を怠らず、青年の本分を盡し、益々國威の發揚に盡すべき大なる使命と自覺を以て皇恩の萬分の一に報ひ奉るべきである。茲に御親閲を拜受して其感想の一端を記し其の光榮ある此日を深く胸に銘する次第である。

御親閲に對する感想

徳託郡西里農業公民學校高等科第三學年

野 口 年 勝

鶏鳴曉を報じ星影を潜める十七日の夜は輝く希望の中に明けはなれた。

此の日心身の奥底から清めた健兒七万は午前十二時全く整列を終へて光榮の來るをお待ち申し上げた。場内も亦掃き清められて見渡す限りの帯山練兵場には塵一點すらみとめない。只靜肅の中に時刻は過ぎて行く……「氣を付け」！突如靜かな御親閲場に大隊長の緊張せる號令が響き渡つて場内は益々緊張の度を加はへた。「捧げ……銃」！數萬の健兒一糸乱れず敬禮を行つた、御召自動車は靜かにいと嚴かに御入御遊ばされる。直ちに分列式は初まる、さしもの廣い練兵場に充ち満ちた、萬の若者の分列は流石に嚴肅そのものであつた、秋風そよぐ中に幾千の訓練旗團旗は勇ましく燦として光る劍尖は多くの觀覽者を如何に心強く感ぜられた事であらうか。我が西里健兒が陛下の玉体近く進んだ時陛下には錦旗燦たる下に御直立遊ばされたる颯爽たる御英姿を拜し奉りし時……「萬感胸に迫りて恐懼措く所を知らず只々感慨無量であつた、其の時の心境を表現する言葉を知らない。皇恩にむせび、御前を退下したと云ふ言葉の通りであつた。嗚呼我等は此の所謂千載一遇の御親閲に参加の光榮と無窮の皇恩に浴したる事を喜ぶと同時に我等は我等の責務を忘れてはならない。顧るに陛下におかせられては一時間といふ長き時間に亘つて直立不動の姿勢にて七萬に餘る若人を親しく御親閲遊ばされ尙も聊かの御心勞も拜し奉らず且つ至極御健康にわたらせられる御龍顏のうるはしさを拜み奉つた時は畏れ多き事なるも非常なる心強さを感じると同時に君に對する誠忠の念をいやが上にも盛んにした。噫！我等帝國青年として國家を擔へる我等は此の無上の光榮に浴したる事を永久に記念すると共に今後我等は一層の奮勵努力を拂ひ以て帝國の萬々歳と共に慶ぶべきである。

感想

徳託郡西里農業公民學校

水 上 幸 一

今回の特別大演習に際して陛下の御英姿を咫尺して御奉迎申し上げる事の出來た事は我々青年に取つてはこの上もな

い光榮であります。

十一月十八日御親閲の分列式は初まりました軍樂に歩調を合せて分列は進んで行きます。唯、しんとした中に音樂の音と歩調のみが進んで何となく尊い感にうたれました。「頭右」の號令に御玉體を拜し奉つた時多くの人は如何なる感でしたか。自分は、唯感激に咽んだのです。

御玉體の御前を通り過ぎた時君の尊さや國の有難さを想ひ浮べました。此の時我々青年の責任の重大なる事を知り得ました。分列終つて女子青年の奉迎にうつりました。「君が代」の奉曲を奏して一同は熱狂して萬歳の三唱を上げました萬歳の聲は天地に響き渡り、日の丸の國旗は空高く翻つてゐました。

我々は斯の如き 陛下を上と仰ぎ奉る時に自分の胸に深い印象を刻せられました。我々青年は此の尊い御親閲を深く感謝すると共に 陛下の威徳をかしこみ益々皇運の發揚と青年の修養に努めて一層奮闘努力して、陛下の御恩に報ひなくてはならないと思ひます。

御親閲を受けて

飽託郡西里青年訓練所第三年次 坂 田 眞 敏

嗚呼九州全土の若き人々の指折數えて御待ち申した御親閲の日は來ました。私達に二度と迎えられない、而して永久に記念すべき有難い十一月十八日は氣遣はれてゐた天氣もがらりと晴れて、七萬幾千からの若人、數萬の倍觀拜觀の人達によつてさしもの帯山練兵場も埋められました。

聖上陛下の御人御を御待ち申す人達の緊張した態度は今まで嘗て見たことのない本當の緊張そのものでした。このまゝかうして此處で拜し奉るのかと思ひますと全く夢ではないか、それとも眞實かとさへ思はれる感が致してなりません。

天に高く響く爆竹の音、氣を付け 電氣にでも打たれたやうにビリツとなりました。「君が代」の奏樂の裡に玉座に御上ります、御英姿を遙かに拜し奉つた時の私は全く自分を忘れしました。今まで幾度となく國歌を聞きましたが、生れて始めてこんな只何と言つてよいか涙が出るばかりで神々しく有難く感ぜられた事は有りませんでした。こんな心持は屹度こんな場所に居なかつた人の知る所でないと思ひます。第二集團は分列が式始まると直ぐ發進しました。今私は 聖上の御側近くに進み行きつゝある時に只感激に満ちた全身は夢中の人となり、餘りの畏さにはつきりと御英姿を拜み得ない様な感さへいたしました。感激と云ふ言葉は幾度か聞き又口にもし筆にもしましたが、口にも筆にも盡すことの出来ない文字通りの感激、私自身が感激そのものでありました。又これ程感激に満ちた同志の姿を見たことがありませんでした。今後とも決してあるまいと思ひます。我が國を措いて外國の人達にこんな感激を体験することが出来ませうか。日本臣民として生れ、聖上を拜し奉り、親しく御親閲を受くるこれ程有難い事があるでせうか。青年なればこそ、あゝ有難いと思はざるを得ませぬ。然し御親閲を拜受した時はそんな事を考へてゐない只自分の体は、 聖上陛下の御前にあることさへ忘れてゐるやうな有様でありました。御親閲の終ると共に私は 聖上陛下を盤石の安きにおき奉るべき一分子たることを自覺したいや一分子たるのみならず一人を以てでも御奉公すべき嬉しさ有難さを今更感じました。陪觀の高貴の御方々でも拜觀の人達も等しく日本臣民たる以上 陛下に對する赤心は變らぬことは申すまでもないが、當日此處にありし人達の感想も皆同じであらうと思ひます。只御親閲を拜受した私の心持を筆拙き爲め充分表し得ない愚さを遺憾に思ひます。

皇室中心の感念

飽託郡松尾東青年訓練所第三年次 松 本 鶴 彦

昭和六年十一月十八日、何と輝かしい日であつたらふ。秋氣は爽やかに、大阿蘇の噴煙を遙かに望む、廣漠な帯山練山

兵場で、忝くも 大元帥陛下の御親閲を拜受したのであります。草莽の微臣の一青年と生れて、分列隊中に加はつて、静々肅々、歩調整々として、頭右の敬禮の其の瞬間、あゝ、莊嚴極みなき 陛下の御視線にカチと合つた。あゝ其の時、大聖の慈眼よりも尙ほ且つ尊く、形容し難い感激に打たれたのであります。

御親閲の式は滞りなく済みました。けれども、皇恩の有り難かさは、何時迄も忘れません、子々孫々までも傳へるのであります。

我々青年は、否、同胞全體は皇室中心主義に據り、一致協力して、邦家の隆盛を圖りたいのであります。

光榮に浴して

徳託郡池上青年訓練所第四年次 清 田 正

去りぬる十一月十一日、此の日こそ、吾等縣民百四十萬の老若男女を問はず、終生記念すべき鳳釐着御の日なり。三百幾里の御鳳程を何等の御疲勞をも拜せられず、御恙なき御英姿を西陲の地にて親しく拜し奉りたるは何たる光榮ぞや。

御駐紮旬日に及ぶも、陛下には、陰雲空を蔽ひて、秋雨時に降りしきるも、御愛馬に召されて大演習を御統監遊ばされ或は地方行幸に移らせ給ひては、連日各方面に臨行遊ばされ、具さに民情を視察して産業教育社會事業等を御奨勵遊ばされたり。又各地の神社に御親拜あらせられ、親しく敬神崇祖の範を垂れ給ひし等、殆んど寸刻の御休息もあらせられざる其の御精勵の程は、承るだに畏き極みなり。

特に十八日には吾等青年の爲に御親閲を給ひし日なり。此の日天氣晴朗、陽光麗らかにして、遠く阿蘇の靈峯は初冬の澄み切つたる大空に雄姿一層鮮やかに、宛も本日祝するものゝ如く聳えたり。

今日の光榮に浴せんとして集ひ來れるもの六萬餘千。場に臨御あらせらるゝや、萬衆一齊に最敬禮をなし、軍樂隊の勇

ましき行進曲につれて分列式に入れり。

おゝ、此の時こそ吾等は一夫萬乘の大君の御健やかなる龍顔と、颯爽たる御英姿とを、全く咫尺の間に拜したるなり。女子團体の奉唱する奉迎歌を聞きては愈々感迫り、感涙の滂沱たるを禁じ得ざりしなり。御親閲の時間正に一時間。その間嚴然として微動だになし給はず若人達の捧ぐる至純至誠の行動を嚮はせ給ひしを思ひては、誰が感奮興起せざるものあらんや。

吾等は此の光榮に浴して何を酬いんとするか。此の期を劃して、愈々奮勵努力、以て邦家の爲盡瘁せんことを誓ふべきの秋なり。

御親閲を拜受して

徳託郡池上村青年團員 北 村 篤 郎

大演習の一語は確に我等縣民の腦裏に深く刻み込まれた。肥筑の野に展開された九州男子、鍊りに鍊りたる五萬の兵士の壯快なる活動。思ふ丈でも肉は躍る。あまつさえ鳳釐御統監に臨御あらせられ三日間の御激勞にも其の餘暇を以て親しく縣下の教育産業方面にも御軫念あらせられ或は學校行幸或は青年處女一般に亙りての御親閲又は侍從御差遣の御事共誠に御暇なき御繁忙と承はる我等縣民として誠に恐懼措く處を知らぬ次第である、かゝる中に更に更に御疲れの色も拜せられず我等の待ちに待つたる御親閲に平日。帯山練兵場には同じ思ひの青年男女併せて六萬人、場内には此處數日仰かざりし旭日さへも輝き士氣いよゝ緊張し中小隊長の號令は秋天に響く。

午後一時十分氣を附けの吹奏は場内に滿ち捧銃の號令にて奉迎す萬場肅として莊嚴なり其の中に 陛下玉座に御着座あらせらるゝと共に先頭軍樂隊は分列行進を始む中等學校青年訓練所青年團在郷軍人と其の編制は長蛇の如く行進し御親閲

は進む、嗚呼我等草莽の一縣民に至るまで一天萬乗の君を咫尺の間に拜し奉り、皇君の惠の有難さに誰か感激の涙なきものがあらうか。女子青年團の奉唱隊は赤心さへげて奉唱しその聲その音律、ひし／＼と胸をさす。

あゝこの一場面我等の心はたゞ有難さの一言あるのみであつた。此の心やがては社會を回轉する原動力となるに違いない、廣大無邊なる皇恩に浴し誰か報恩の一念もて奮ひ立ちその萬分の一にも酬ひたてまつらん覺悟を起さざるものがあらうか。

御親閱拜受の感想

飽託郡城山村 宮 本 一 眞

思へば、天皇陛下を拜するといふ事は、我々下人民にとつて中々難い事であつて、又これ程嬉しい事はない。幸にもこの度大演習御統裁の爲、御いであらせらるゝと聞くや、夢の心地して喜んだ。而も青訓生として、御親閱を拜受するといふ事は、年來の希望も叶ひ、身にとつて此上満足する事はない。人もさうあるのだらう、いつも五人寄れば五口、矢張り喜びの中に 天皇陛下を御待ち申上げて居た。

十一月十八日、澄みきつた秋空の練兵場は、異様に緊張しきつて、鳥さへ飛ばない。夜を侵して集り來れる同胞ははや帯山も狭きを感じる程だが、今日こゝに集り來れる人々こそ、大和心の美しい人達ばかりかと思へば、何時となく涙ぐみ名も知らぬ萬人が、皆兄弟の如き感じがした。こんな事ばかり氣をとられてゐる僕の頭上で、「ぼん、どーん」非常に驚いた。皆が急にしんとつた。陛下の着御だ。やがて長蛇の如き我團體は動き出した。日頃訓練せし行進は、大地もくぼむかと思はれた。愈々御前近くなると、より一層に嚴肅な氣が漲つた。「かしら！右」其時、神々しくも天皇陛下は白衣の臺に居り立たせ給ひ嚴かに御舉手遊ばされた。あゝ何といふ辱い事か、陛下が我等に對して、——と

思ふと、僕はつい大きな涙滴が頬を傳つて落ちた。仰見る我々、見下し給ふ陛下——親心と子心。嗚呼そこに、泰然として如何なるものも侵すべからざる無限の力を覺えた時、常にない底力が湧返つた。そして獨り悦んだ。今の、全世界を相手に多事多端な折柄も御厭ひあらせられず、萬難を排して御出であらせられ、我等迄親しく御親閱あらせらるゝ大御心を拜察しては、唯無限の皇恩の有難さを思ひ、心の底から感涙に咽ばざるを得なかつた。噫、幸福なる世、斯くの如き天子の 深き惠の下に、安んじて生きゆく事の出來る我身こそ。——かゝる君恩を今迄、忘れ勝ちの日を送つて來た、獸にも劣り果てたる過去の吾身の淺はかさよ。恥しさの餘り、じつとうな垂れた首さへ揚がらなかつた。

然し、俺こそ大和魂の塊だ。鍛ひつ、磨きつ、光の添ふを唯一の楽しみとして、大に剛健なる精神の涵養に力めて、聊かなりとも、叡慮を安んじ奉るは、吾等青年たる者の、第一の任務である事を思ふた。そして深く心に誓つた。將來、如何かして一身を捧げて、日頃蒙りし 皇恩 の萬分の一を報すべきことを。

御親閱を拜受して

飽託郡健軍公民學校高等科 森 下 信 之

秋空一碧散雲を見ず、託麻原頭には、秋風さわやかに吹き流れて、人波の頭上にそよぐ、十一月十八日。

此の日吾等は長くも 聖上陛下の御側近く御親閱の光榮に浴したのである。集合所で編成を終つて、御親閱場に入つた廣漠たる吾等の帯山練兵場も榮ある御親閱場で、見渡す限り人々、旗々の渦の波だ。御待ち申上ぐる休憩の時も、今日の晴れやかさを思つて、嬉しくてじつとして居る事も出來ない。紅白黄緑色とり／＼の中に、小春の朗さをあびて中食をすました。刻一刻と時の進むにつれて、吾等の胸は歡喜に跳つて居る。秋の日脚も頭上に上つた頃、集合の號令一下、七萬の大集團は整然と半圓形を描いた。見よその緊張味を。日章旗は秋天高く靜かに上る。煙火一發原頭に響けば一層の緊張

が私の胸に高鳴る。

やがて 陛下には嘸啞たる軍樂隊の「君が代」奉奏裡に玉座に着御遊ばされる。吁々何たる神々しき御姿よ。緊張、静寂、咳一つ聞えず、夢心地である。長蛇の陣容の一角はくづれて、七萬の光榮集團の行進は開始される。思はぬ歩調の力強さ頭の波、劍光の波、旗の波。若人集團の力強さ。御前近くに迫る。いきづまる緊張。「頭右」ハット頭を右にして拜すれば、陛下には白雲の如き白布玉座の上に立御の御英姿いとも神々しく、擧手の御答禮あらせらる。御前には天龍昇るが如き錦旗燦然として秋風にそよぐ。一心に御英姿を見つめての行進に涙が湧き出てくる。秒一秒。「直れ」の號令にて吾れにかへつても、幸ある光榮、身に餘る榮譽を偲ぶ時、感激の涙がにじみ出て来る。所定の位置に歸り次から次に行事がすゝむ。奉唱隊の聖壽を壽ぐ奉唱歌の朗かさ。最後に「君が代」を奉唱し 陛下の萬歳を三唱した時、私のこの聲が天聽に達すると思つて、震へた。

今日の此の日の御親閲を拜受して、陛下の御前近くに進んで益々 陛下の萬歳と皇國の隆昌を願ふ心が、切に起つて来る。私は此の光榮を深く胸深く刻みこんで、國家が要求し時代の翹望してやまない青年となつて、奉公の誠を捧げたのである。

御親閲に参加して

徳託郡健軍村青年團員 坂 本 善 喜

待ちに待つた御親閲の日は愈々來た。曉天の空には朝から一點の雲もなく、うららかに晴れ渡つて、私共の光榮を祝福して居る。私の心は勇みに勇んで居る。

此の日、畏くも 天皇陛下には、九州各縣七萬の學生、生徒、團員會員の御親閲を遊ばします日である。我等青年に取

りては、誠に千歳一遇の有難い日である。

廣漠たる帯山練兵場には、校旗訓練旗團旗分會旗、數百の旗は朝風になびき、翻々として勇躍の心がおどつてゐる。煙火一發御着御の合圖に、今迄の靜肅は、嚴肅莊嚴にかわる。軍樂の「君が代」、敬禮、唯だもう頭から爪先まで、言ひ知れぬ感激に引きしまる。大隊毎の行進、軍樂隊の樂の音と共に次々に進む。劍尖のきらめき、歩調のどよみ人の波。我等が玉座近く進んだ時、畏くも 陛下には、高き玉座に微動だも遊ばされぬ御直立にて、擧手の御答禮を遊ばされる。神々しさにおのずと、感激の涙が湧き出てくる。

今となつて有難かりし當時の様を思ふ時まさしくと繪巻物の様に私の頭に強く刻みつけられて居る。若かりし日の此の光榮は終世の記念日であつて、唯々盡忠報國の青年となつて、聖旨の萬一に副ひ奉る覺悟を、日と共に深み行くのである。

御親閲を拜受して

徳託郡田迎青年訓練所第二年次 田 中 正 雪

肥筑の野山に紅葉は映へて、昭和六年十一月十一日陸軍特別大演習は開始された。一天萬乘の大君は 大元帥として御統監あらせられた。尊き御英姿を我々肥後の國民は幾度も俯し拜むことが出來た。「砲聲股々として鳴り響き、小銃、機關銃の鳴り止まず」未だに湧然たる面影がある。

十四日、大演習の終るや翌十五日は大觀兵式である。拜觀團として特別の拜觀を得て、愈々我等青年訓練所並に男女青年團、其他各中等學校生徒の御親閲である。忘れんとして忘れ得ざる當日は來た。十一月十八日。

此の日畏くも 聖上陛下の大前に進み出た。あゝ何たる光榮か、永久に輝く記念の日だ。朝まだ未明、我村全御親閲部隊は高天の校庭に集合、一路集合所へと向つたのである。

帯山練兵場は今や先着部隊により大波の如き蠢きを示してゐる。何たる廣大さ、莊嚴さよ、我々の胸は高鳴り、運ぶ足は軽やかである、やがて入場し終つた。

天も此の日を愛でてか、秋天晴れ渡り御親閱に最適の日和を呈した。七萬五千の拜受團体。校旗、團旗のそよ風にさくはた／＼と靡く。萬丈氣を吐く九州の健兒。意氣揚々として天をつく。やがて時は來た。午後一時喇叭たるラツバの響き秋空に鳴り響く。處々に起る「氣を付け」の號令。間もなく嚴かに響く「君が代」の奏樂。吾々七萬五千の團体は「捧げ銃」をなす。頭の前から足の爪先まで、これ氣、これ心、發する言なし。

今上陛下臨御あらせられるのかと思ふと愈々もつて緊張するのを感じる。軍樂隊の奏する行進曲につれて次々と進む部隊、陛下の御前に至る。「頭右」中隊長の號令、お、御英姿颯爽たる——直立不動の御姿。大元帥陛下にはこの間微動をも遊ばされず。擧手の答禮をなされたのである。有難さ——吾々の身にしみ／＼としみわたる。團体は次々と進む歩武堂々。きらめく銃劍。轟く樂隊。調子も揃つて長く、そして分列は終了した。終つて奉唱部隊の奉唱である。滿目黒山の一群。肅々と進み、軍樂隊に合せて陛下御前に止る。やがて乙女的美聲は響き渡つた。秋空高く森嚴其のものである奉唱部隊に合して分列部隊も、全員の「君ヶ代」奉唱——そして萬歳三唱をなした。この間何時を経たか、陛下は長多も直立の御姿勢である。

あゝ我が日の本の 大君陛下、かくも長き御聖跡を我が火の國、熊本の地に御残し遊ばされたのである。肥後熊本の健兒男よ、心からなる萬歳を唱へた。永久に聖壽萬歳を唱へざるべからず。

御親閱を拜受し奉りて

徳託郡日吉青年團員 赤 星 藤 男

今秋肥筑の山野に陸軍特別大演習の舉行せらるゝに當り、 聖上陛下には親しく 大元帥としてこれが御統監の任に當

らせ給ひ、又神社、學校、工場等に御親臨ましまし、御親ら下、萬民に敬神崇祖の範を垂れさせられ、或は教育、産業の興隆發展に大御心を注がせ給ふ等、玉体の御寸暇でもあらせ給はざるに、辱けなくも私共六萬五千有餘の青年男女御親閱拜受の光榮を賜ふに至つた。聖代の餘澤であるとは申し乍ら何といふ幸福であらう。又誠に有難き極みである。聖上陛下が如何に第二の國民たる私共青年男女に對し御期待遊ばされ給ふかを謹みて拜察する時、自ら心身の緊張躍動するの感ずる。

昭和六年十一月十八日。此の日、帯山の空は瑞雲たなびき、地を吹く清風は聖場を拂ひ、集團の若人は皆、光榮と感激に輝いて居た。午後一時十分。 聖上陛下御到着遊ばされ「君が代」の奏樂裡に迎へ奉る。やがて 聖上陛下には設けの玉座に着御あらせられた。此の時群衆の緊張は其の極に達した。

間もなく陸軍々樂隊の奏する「扶桑行進曲」により第一集團第一大隊より本日の大分列の行進は開始せられた。私共は第三集團第一大隊、大隊長は島中尉殿である。大隊は行進を始めた。途中一回、左に向きを換へて、南進し分列發起點にて一旦隊列の整頓を行ひ、大隊長の「分列に前へ……」の號令にて分列に移る。軍樂が間近に聞えて來る。一語を洩す者もない。たゞ軍樂の曲に合せた靴の音が、ツ／＼、ダツ／＼と聞えるばかりである。此の時大隊長の澄み切つた聲で號令が下だる。「頭ら……右イツ。」サツトきらめく指揮刀。團旗……私は今迄會て斯んな緊張した「頭右」を体験したことがない。頭も折れよと「頭右」をする。あらん限りに眼をみひらく。電氣に打たれた様な言ひ得ざる何物か、全身に漲る。一齊に行ふ頭右……。眼は、感激の眸は、玉座に立たせ給ふ至尊の龍顏に對つて注がれた。畏くも陛下には御擧手の禮にてこれに答へ給うた。あゝ其の一瞬、大隊の若人の肺腑を衝いたものは……啻感激そのみであつた。恐れ多くも大隊の右翼は玉座を距る僅かに二十五米。私はあとからあとからと込み上げて來る涙をグツト耐へて居た爲めに、龍顏をよく拜することが出来なかつた。しかし、玉顔はいと靜かに微笑を御含みあらせられ宛も慈父の我が愛し兒に對ふ如くに拜されて。

抑も我が大日本帝國は世界萬邦に類例のない神の國である。神の御裔の 聖上陛下におかせられては私共九千萬臣民を宛も赤子の様に思召され、臣民は 陛下を國父と仰ぎ奉り懐いで居るのである。而して臣民は互に睦み合一國學つて一家の体をなし所謂獨特の大家族主義を顯現して居るのである。私はそれをマザ／＼と直感し、一身を捨て、大君の御爲に國家の爲めに一大勇猛心を奮ひ起して奉公の誠を盡し皇恩の萬一に酬ひ奉らなければならぬと堅く深く心に誓つた。

斯くて分列の式は終了し、女子集團の奉唱があり、終つて本山熊本縣知事の發聲音頭にて、「天皇陛下萬歲」は三唱せられた。その聲は會て今迄に出た事のない赤誠の叫びであつた。

帶山原頭萬歳の聲は百雷の如く野を越え谷を渡り山にこだまして餘韻はながく／＼何處迄も響いて行つた。此の間一時間餘仰ぎ見れば 陛下には微動だも遊ばされず直立不動の御姿勢にて居給ひしが、思ふだに誠にかしこき極みである。玉座より下り立たせ給ふや「君が代」は第一集團の彼方より嵐の如く潮の如く歌はれて來た。私共は有るだけの聲で「こけのむすまで」と歌つて聖壽の無窮と皇室の彌榮を祈り奉つた。午後二時十二分。陛下には再び自動車に召し給ひ「君が代」の奏樂裡に龍顏殊の外麗はしく御還幸の途に就かせ給うた。思へば邊土の一農家の子弟に過ぎぬあるかなきかの私共が一天萬乘の大君に咫尺し奉りて御親閱に浴すると云ふ事は誠に千載一遇のことであつて何と云ふ幸福、何といふ光榮であらうか。

靜かに考へて見れば今、世のあらゆる方面に於て未曾有の國難に直面して居るといふ。斯る時に國民の精神は不健全に流れて思想は悪化し世は擧げて實を去り華に就くの現状である。しかも滿蒙問題、財政經濟の問題等、國民の最も緊張を要し大勇猛心を振起して一大決心を要するの秋、斯る世相を見るは誠に慨歎痛心に堪へないところである。然しながら私の心身の奥底には建國三千年來練磨されたる大和民族の眞精魂、傳統の熱血が流れて居る。火の國の名に呼ばれる吾が熊本縣實質剛健を以て鳴る九州男子の意氣と力を眞に覺醒して立つのは此の時ではあるまいか。必然、將來の國家を負擔して立つべき私共すべての青年が今日、帶山原頭に於ける莊嚴極まりなき大分列行進のあの力強き歩調、身に餘る光榮

に打ち震ひたる感激、之に呼び醒まされたる意氣、覺悟、私共はいつまでも此の心境を確固把握して寸時も忘れず、或は青年團員として或は青訓生として、はた又村民國民としてあらゆる場所、如何なる場合、萬事に處して此の意氣により心身を傾注して努力し精進したならば如何なる難局と雖も必ず突破し打開することが出來て國難の聲もいつしか消滅してしまふであらうと信するのである。私共は此の眞に千載一遇の光榮に浴せるを一轉期として益々心身を修養練磨し有爲忠良の臣民となり無邊宏大なる皇恩に萬一たりとも報い奉る様、大決心大覺悟をしなければならぬ。東海の表に屹然と存し萬世一系の皇室を奉戴し三千年來未曾有の微塵も外侮を受けたためしのない光輝ある歴史を有する我が金甌無缺の大日本帝國微動だにせず擁護し、永遠無窮に發展せしむべく今御親閱を拜受し天顏を咫尺の間に奉拜して私共青年の使命、責任の重且つ大なるに想到し、更に新に痛感するとともに眞に一大決心を以て奮闘努力を繼續しなければならぬと思ふのである。

御親閱に参加して

飽託郡小島町女子青年團 筑

琴

御親閱、それは私達鄙人にとつて何とかがやかしい生涯の光榮ではありませんでせうか。感激に満ちた私達は秋晴のすが／＼しい朝今日の歡びを語り合ひながら御親閱場にと向つたのです。

整理して御行幸を御待ち申し上げて居る時、突如高らかにひびく喇叭の音にあだかも靈感にふれた様に、嚴肅な感じに打たれました。軍樂隊の奏樂の中に 聖上陛下には白布に包まれた御座所にお立ちになりました。私達は感激に満ちた心で拜するので御座いました。やがて緊張の中に分列式が初まり幾百の團旗、校旗が秋風になびきながら行進するのは何とも云へない壯觀なものでした。それから私達の奉唱にうつり軍樂隊の奏樂について行進する間も唯歡びで一ぱいでした。指定の位置についたときは感激し緊張してかたくなつて、奉唱歌を奉唱するにも唯、夢中でした。そして聖上陛下の御

側近く奉拜した事と、此の光榮の奉唱隊に参加し得た事を感謝し家の名譽として永久に記念したいと思ひます。

御親閲拜受の感想

他託郡清水村女子青年團 宮本澄江

十一月十八日、あゝ此の日こそ六萬六千の若き民草が御親閲を拜受する事の出来ました當日であります。不束な私も、其の中の一員としまして千載一遇の光榮に浴する事が出来ました。

其の日御親閲拜受者は、城東山練兵場に於てお迎へ致しますことになりました。秋の陽ざしは金色の雲間を洩れて、麗かに照り映え、清澄の氣は草木に満ち溢れ、やゝ冷氣をおびた微風は徐ろに私共の熱し切つた双頬をなでるやうに吹き過ぎ、恰も今日の晴れの御親閲を祝福してくれるかの様で御座いました。一時十六分、いとも莊重なる御着裝の「君が代」の吹奏の音は、空氣を縫うて響き渡り、神嚴の氣はひし／＼と私たちの胸裡に迫りました。錦の天皇旗は玉座の前にかがやきました。と見る玉座には一天萬乗の 聖天子の御英姿を遙かに拜むことが出来ました。嚴肅其のものゝ中には進行して行きます。在郷軍人、青年團、中學生の分列式が三十分、其の間 陛下には大隊旗の通過する毎に、一々擧手禮を賜はります。玉座の直前を過ぎる一隊、又一隊、涙ぐましまでに莊重をきはめたこの光景は筆にも舌にもつくされません。さながら洋々たる大海の漣の如く流れてゆきます。それが濟んで、私共奉唱部隊は戸山軍樂隊の行進曲の音につれて行進し、天顏を咫尺の間に拜する事が出来ました。畏さの極みであります。

「あゝ此處にすめらみことの御車を迎へまつれり」奉唱歌を歌ふ中にも傍に人も無く、風も止み、草も木も微動だにせず、たゞ感激の中に双頬にはふり落つる涙のみは止め得ませんでした。やがて本山熊本縣知事の音頭に和して「天皇陛下萬歲」の聲は、心の底から心血しぼつて、高らかに叫びました。御親閲時間一時間、玉体には直立不動の姿勢を取らせ給

ひ、おいとひもありませんでした。たゞ感激と感涙、そのみか私たちの心を奮ひとつてしまひました。六萬六千の若人の胸には感激の波が渦を卷いた事でせう。

この瞬間の中には、感激から永遠への感銘にと、心のひらめきは偉大なる印象を腦裡深く刻みつけました。どうしても此の無上の光榮に浴しました事が、私共として一生忘れることが出来ませう。此の上は忠實業に服しますことを誓ひ、萬國に比類なき我が帝國の益々發展し、いや榮えますことをお祈り致します。

御英姿を拜みて

他託郡清水村女子青年團員 藤井嘉壽子

幾朝夕をくりかへし、くりかへし待ちわびし此の日、秋陽輝かき朝託摩原頭に於て 天皇陛下の御聖駕を御迎へまつる七萬に近き若き民草の心はよろこびにおどつてゐます。

御政務御多忙の御中にも民業をみそなはず大御心の程拜察致して唯々感激の外ございません。身は神の身にあらせられても御敬神の念の御厚きに今更乍ら感じ入る次第であります。寸暇も憩はせ給ふ御暇もあらせられず 陛下におかせられは、ます／＼御元氣うるはしく漏れ承はります。前途輝く大日本を想ふ時、大手を揚げて大日本帝國萬歲と叫びたくありません。長時間に亘つて親しく御親閲を給ひし後拙なき女子青年團の奉唱歌も聞こし召され、萬感胸に迫つて感激の涙と共にうたつた思出もまだ／＼新なる事でありませう。

兵士は滿洲の野に送り吉報、凶報に胸驚かし、多端なる國事に直面しても民草の事ども御憂慮遊ばします大御心に何もつて報いますか。海原の如き御聖徳に如何にしてそひまつるか。私共は與へられた一日を無意味にしないで萬分の一でも御報恩の出来ませう様に祈つて居ります。こゝに謹んで御親閲の感想をのべて永久の記念に致します。

御親閲感想

他託郡河内公民學校後期第一學年 川上つぎの

晩秋の空はあくまで高く晴れ渡り遙か彼方の山々はほんのり秋霧におほはれてゐる。私達は有難くも奉唱隊の一員として此のよき日この上もなき光榮に浴する事を得た。嗚呼！十一月十八日、御親閲當日、畏くも 聖上陛下におかせられては三日間に亘る大演習御終了後續いて觀兵式、地方御巡幸等寸暇もなき御日程を恙なく終へさせられいとも御機嫌麗はしく觀衆漲る帯山練兵場の一端に玉歩を御進め遊ばされた。此時日章旗は空中高く掲げられ、若人の心はいやが上にも緊張し邊りの空氣さへ重々しさを感じさせられる。やがて軍樂隊の國歌吹奏聞え愈々分列式が始まる。學生、青訓、青年團、在郷軍人、幾萬とも數知れぬ各團體は長蛇をなして遙かに拜せられる玉座の下を過ぎ行く。其の間、恐れ多くも 陛下には一々擧手の禮を取らせられる様、さながら神其のまゝの如き感に打たれた。指揮官の號令により愈々私達奉唱隊は前進に移り一步二歩三步と一足毎に恐れ多くも玉座に近づき行くと思へば何時しか胸の高鳴るを感じる。前進又前進。軍樂隊の合奏が次第に高く、莊嚴に響いて來る。眞白き高臺の玉座におはす 陛下の神々しい御姿に近まり愈々所定の位置に静止した時言ひ知れぬ無量の感に打たれまぶたの熱するを禁じ得なかつた。此の時私は西行法師の

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

の古歌を思ひ出した。

千載一遇の此の光榮に浴し 陛下の御英姿を目のあたりに拜して私達も 陛下の赤子である事を今更の如く嬉しく感ぜられた。

嗚呼、我等生ける甲斐ありおほけなき 今日の譽れを萬代に

語り繼がらんおほけなき

君のみ恵み仰ぐこそ 千代の譽と我等ことほぐ。

御親閲感想

他託郡河内公民學校後期第二學年 中村 静子

秋日和に恵まれたる十一月十八日は來た。

九州の若き男女性は帯山原頭に畏くも 陛下の御車を迎へまつた。愈々 陛下御臨幸の花火の合圖に思はず襟を正す御召自動車練兵場の一端に現はれた時人々の視線は一齊に注目され、氣分はいやが上にも緊張せり。やがて玉座に御立ち給へる御英姿の神々しさに思はずもぬかづく。嗚呼我等拜受者一同の喜び何物にか例ふべき。萬感胸にせまりて眞心こめて歌はんとする奉迎歌さへも思ふにまかせず只無量の感慨に打たれ胸の高鳴るを感じるのみ。

あゝ我等 陛下の赤子として目のあたりに神そのもの、如き御英姿を拜し奉り今まで緊張せる眼は何時しか涙にうるほひたり。永久に輝く御稜威の下に生ける我等の幸福を今更の如く感ぜさせられ御鴻恩の萬分の一にも報い奉らんと深く胸に誓ひ最後の萬歳の聲は天地もさけんばかりに唱和した。

嗚呼幾萬の若人達よ……此の千載一遇の記念すべき光榮の日にあたり我等は一層の覺悟と努力とを以て國家の中堅となり陛下の御心を安じ奉らん事を誓はん。

萬歳の叫び

他託郡松尾村處女會員 小島 玉枝

私は熊本市から西の方へ三里餘の處に聳える金峯山の麓に生れました、世にも淋しい處女で御座います。有り難い大御

代に生まれまして、義務教育も恙なくて、一日の缺席さへ致さずに終了することが出来ました。其の日々を忘れることが出来ませんのは、天皇陛下の鴻大無邊なる御恩で御座いました。一生涯に唯の一度でも天顔を拜し奉りたいと心の中で繰り返して叫んでおりました。

然るに、本年の秋十一月には、我が熊本縣に御行幸あそばすとのことで、私の胸の中は紅の血潮が湧き立つやうで御座いました。

月日は矢の如く過ぎました。思ひもかけない光榮の日は來ました。私は奉唱部隊に加はることが出来ました。十一月十日帯山練兵場に於いて、玉座高く立たせ給ふ麗かな御英姿を拜しつゝ奉迎歌を、咽喉の奥底から、憤ましく高らかに唱へました時の、心の喜びは生れてこのかた、初めて御座いました。私は美しい夢のやうな心地で、家に歸りました。

父にも母にも弟にも妹にも、天恩の忝なきこと、御英姿の麗かにして御優しさを物語りました。家庭の皆の者が有り難たさに涙を流して嬉しがりました。そして誓ひました。この御恩に報い奉るには、皆一緒に精一ぱい働かしまして、農業の振興を圖り、文化の進展を期したいと申すのであります。

あゝ、私の追憶は、何時迄も消えませんが。あの晴れやかな帯山練兵場頭の玉座に高く立、せ給うた麗かな天顔は眼底に強く、焼き付けられました。

茲に改めて、陛下の萬歳を高らかに叫んで筆を擱きます。

御親閲に際して

他託郡池上村處女會員

高 木 ウ メ

今秋陸軍大演習が我が熊本縣下に行はれますにあたり、畏くも 聖上陛下には親しく御統監あらせられ更に我が熊本縣

下は勿論近縣から集まれる數萬の處女は奉唱隊の一部に加へられ御親閲の光榮に浴し得ましたのは私共に取つて無上の光榮と致す次第でございます。私は此處にあの時の所感の一端を述べて見たいと思ひます。

廣漠たる帯山練兵場に始めて足を歩みし私にはすべてが物珍しいものばかり、首を右に廻せば目下より目の及ぶ限りぎつしりと箱づめにした椎の實の如く果は動くとも見えず唯模糊としてゐる、二つのラヂヲ擴聲機に驚かされ首を反對に轉すれば又々人の波黒山とはこの事を言つたのであらう、さすがの帯山練兵場も今日と云ふ今日はぎつしりで溢れさうだ。

然し烏合の衆ではない様に通へる新なる空氣何あらう歡喜と感激の涙である。「プー」いよ／＼御到着のラツバの音は帯山狭しと響き渡つた同時に全身の筋肉はきつと硬くなつてしまつた様だつた、しきりに興を振舞つてゐた隣りの人も無言である、下手だと吐り飛ばされた敬禮の心配もてんでなくなつた。日の丸の大國旗は風にひるがへる、我が奉唱部隊の前方にある純白の高臺にはおそれおほくも 大元帥陛下の御英姿を拜する事が出来ました、帯山一休を吹き荒れし風も御稜威になびいてしまつたのが少し穩かになつた。カーキ色の軍服ピカ／＼光る御けん白雪も劣るかと思はれる眞白い御手袋恐れ多いまでに尊いおごそかな御英姿である。分列式の都度々々擧げられる御手一時間餘も身動き一つなさらぬ御英姿、拜する度に感激致しました、そして十分ですら動かすにおかぬ我が身を考へて不甲斐なくも恥かしくも感じました。

「お前は自信があるか奉唱申上げる聲は確かなのか」と叱られる如く我と我が身を反省致しました、そうだ奉唱申上げるのは最初で最後のだ眞心込めてしつかり歌はう聲の限りを盡して、この時であつたお隣同志手を取り合つて誓つたのは今なほ新なる涙と共に記憶に蘇つてくる、軍樂隊の樂の音に導かれて一步一步に歩みしめしは……さく／＼と草を歩む幾萬の正音が耳に入る、顔を上げれば御毫を去る數間の如くだのに向に止まらうとしない、かたじけなさに歩はずんずんとゆるくなる内「プー」と云ふ止まれの響後は水うつ様である。

始めて 聖上陛下のおそば近くはべつた私否おそらく私共は夢かとはばかり驚き且つ涙にむせびました。私風情が正視に御龍顏を拜する事の出来るとは、勿論せき拂ひ一つする者もない静寂そのものの姿である。無我無中の奉唱が終つて我に

省つて見ると、陛下の御車は早や左彼方に拜せられた、長い／＼と思つてゐた此の歌が、夢心地の中にのどがかすれて聲が出なかつた。今人々に御親閱拜受の感想はと問はれたら感激そのものだつたと答へよう。

御親閱を拜受して

館託郡力合村女子青年團 藤城ますえ

謹んで御親閱日の感謝文を捧げます。あゝ十一月の十八日長くも一天萬乗の 天皇陛下が我等赤子に親しく御親閱遊ばされし日私は一生を通じて忘れる事は出来ません。此のふつ／＼かな私の奉唱隊の一人として加へさせて載きました事を身に餘る光榮と感謝致します、ときめく胸をおさへてどんなに十八日をお待ちして居た事でせう、氣づかはれた天候も快く晴れて私共は喜び勇んで帯山へ急ぎました。来て見ればあの廣い野原も青年や學生で一ぱいなのに驚きました錦の旗は朝日に輝きらつばの聲は勇ましく思はず心が延び／＼として胸が高鳴ります運ぶ足も軽々しく私共は定められたる場所へつきまじやがて勇ましく 陛下の御乗り遊ばされた自動車はるか向ふに見へました、私はすべてを忘れて注目致しました 陛下は直ちに玉座に立たせられ青年學生の進行を御覽遊ばされました。軍樂隊に歩調合せて次から次へと續く軍旗の勇ましく美しく 陛下にもきつ／＼御満足に思召された事と深く感じました。長き進行もやがて終りいよ／＼私共の進行となりました。軍樂隊の合圖で歩き始めまるる夢の様でした。陛下の御前にほんとうに行くのかと思へば有難さ畏さで涙がこぼれまして奉唱歌を歌つた時は胸が一ぱいになつて思ふ様に聲が出ませんでした。さうして私は今迄よりもより以上 天皇陛下の御爲君國の爲一生懸命に働かうと深く／＼心に誓ひました。

御親閱に浴して

前託郡藤富村女子青年團幹事 奥村ノブ
太み親の駕をはせ給ふみならしに、肥の民草はことほぎて迎へむ

十一月十二日以来肥筑の野に展開せられし第六師團對第十二師團の精銳第六回陸軍特別大演習は 天皇陛下の御臨幸を仰ぎ九州男兒の赤誠を披瀝し、こゝに南北兩軍に別れてならしの火蓋は時雨けぶる十二日南軍の退却北軍の追撃を開始せられました。最近の新兵器、偵察飛行機、タンク等、策戦に策戦をめぐらし、龍虎相打つ様、或はころび或は倒れ不眠不休、互に剣をとぐ勇士の面々汗とよこれと疲勞の姿は市内の各民家或は學校等の休營所に歸る兵士の姿あり／＼と伺はれました。連日に亘る白兵戦も遂に十四日の拂曉戦に南軍の勝利となり、戦の幕は閉ぢられました此の間、陛下には龍田の陣内にお野立あらせられ、時雨に御かさも召し給はず親しく御統監あらせられました。

寸刻もいとまなき御統監のあひだ／＼各地方神社、中等學校、さては展覽會等へ、行幸あらせられ親しく肥の民草の民情を憐はせられました。あゝ申すもかしこき上御一人の御身を以て民草を愛撫し給ふ御宸襟の有難さ只々に感激措くあたはざる所でございます。一週間に亘る大演習御統監 陛下の御多端な御日常を毎日の新聞に拜聴致しますとき、しもうすき肥後の御旅情を如何にして御慰さめ致せしやと、ひとり賤卑の身を以て憂慮に堪へなかつたのであります。申すも恐多い事でございますが大演習舉行前、陛下の本縣知事をお召しの時、本縣教育には特に御留意あらせられ「ありのまゝを示せ」との有難き御言葉、かくまでに我が國民の爲に御心を下し給ふ、あゝ此の皇國に生れし喜び大和島根の榮ふるもしるしなりと覺えて尊くかたぢけなく覺えました。

十一月十八日 連日の雨は残りなく晴れて、錦織なす山野、帯山原頭に於て九州の鹿兒島をのぞく各縣下福岡、佐賀、沖繩、山口、長崎、大分、宮崎、熊本八縣下の青年男女、中、高等學校生徒の集り實に六萬六千人に對しての御親閱は舉行せられました。

此の日 天皇旗高く翻る帯山原頭の壯觀姪々として長蛇なす團体の轟き定刻十二時四〇分迄に一聲もなく集合しましたやがて一時一〇分「君が代」奏樂裡に 陛下着御あらせられました。各集團より發せられる號令の天地の閑を破つて發せられるや、木の香新しい玉座に 陛下の御英姿をおぼろげに仰ぐ事の出来る様になつた時、萬場一聲もなく莊嚴な雰圍氣

が帯山原頭をついでしまひました。やがて青年訓練、在郷軍人高等学校の生徒の分列が喇叭と共に始められました。一足／＼燦として輝く幾百の訓練旗、校旗は吹く風にはた／＼とはためいて、第二の國民護國の勇士となる縣下幾百の高等學生の銃剣の林、歩調規律正しい行動は私共の前途に力づよい感じを與へました。幾年の間、國家の中堅人物となりて向上の一路をたどりながら堅實な礎をきき、大日本を擔ふ在郷軍人の旗は、彼の鎌倉時代の勇士、佐野源佐衛門常世が「ちぎれたりともあの具足に身を堅め、やせたりともあの馬に打乗り、さびたりとも劍を取りし様に似て憂國の士の心情をほのかにいきづかせてゐました。小一時間に亘る分列が終りました。その間各團休毎に答禮遊ばさるゝ擧手の禮

心なく吹く秋風は大君の玉の身よけて吹かましものを

やゝ風強き玉座に御微動もあらせられぬ 陛下の御姿……たゞ感謝と感激のみ、各分列部隊が所定の場所につくや、女子奉唱休は 陛下の面前へと進行致しました。今のよろこびをお答へまつる今日の光榮、水底の眞砂と共につきぬよろこび、約二〇米前に進み出た奉唱休は戸山軍樂隊の指揮によつて奉唱致しました。

「あゝこゝにすめらみことの……」

皇國の女性の心からほとばしり出る聲は餘韻瀟々として幾百の群衆の胸をゆるがせながら中秋の空に消えて行きました。かん極まつて言葉出でず幾百の乙女等は嬉しさにむせびないてゐるのでした。やがて奉唱終り靜かに頭を上げた時、目頭にあつくなるのを覺えました。知事閣下の奏上せられし萬歳の聲は秋空にそびゆる金峯の山にこだまして天も地も山も河も相響應して、千載一遇の幸榮を祝福してゐました。かくて二時一〇分御親閱を無事終了せられました。陛下には自動車にて大本營に還御あらせられました。あゝ何のえにしありて今日の宏大無邊の光榮に浴せん、とこしなへにかたりつきつゝ今日の佳き日を記念せん。

御親閱を拜受して

他託郡健軍村女子青年團員 中原チヨノ

御親閱拜受の日を多少不安は感じつゝも一日千秋の思で待つてゐました。前の日まで床に付いて居た私もその日は病氣もすつかり全快致しました。午前三時の時計の音にはね起き準備をなし學校で勢ぞろひをして集合所に當てられた市立高女に向ひ、ここで集合してそれから帯山練兵場に急ぎました其の時は既に多くの人が集まつてゐてあの廣い練兵場も全く人でうすめられてゐました。午後一時すぎ畏れ多くも 天皇陛下の御輦をお迎へする事が出来ました。「君が代」の奏樂に何とも云はれぬ感じに打たれました。九州一圓から集合した約五萬の男子中等學校生徒、青年、在郷軍人の分列次いで女子中等學校生徒女子青年團約一萬五千の奉唱歌奉唱。農村にありて朝から晩まで専ら農業に手傳ふのみで何の修養もない私も奉唱隊の一人として参加し得た事は一生を通じて此の上もない光榮と存じます。天皇陛下に最敬禮して奉唱しました。「あゝこゝにすめらみことの御輦を迎へまつれり御くるまを」 天皇陛下に目を注ぎ聲高らかに奉唱しやうと努めますけれども御顔を拜する事さへ畏れ多くたゞ有難さに涙でぼうつとなります。聲はふるひいつもの高い聲はどうしても出てきません。奉唱歌のすんだ後で天皇陛下萬歳を三唱、今度こそと出來得る限りの聲を出しました。かうして御親閱拜受も無事にすみました。

此の御親閱に参加しました事は身に余る光榮であつた事を感じますと共に當日のひきしまつた、精神をもつてこの後職業に生活に精進して聖恩の萬分の一に報いる事を誓ひます。

御親閱を拜受して

他託郡健軍村女子青年團員 上野よし子

時は正に秋たけなはにして萬樹紅葉の色彩も 大君の行幸を奉祝する様平年より一入雅美を増す十一月十八日畏くも

天皇陛下には帯山練兵場に於て學生、在郷軍人、青年團員に御親閱を賜はりました。

おほけなき今日の響に浴せんと集ひ来る幾十萬の民草はさしもひろくたる式場も尙所狭しと埋め、歡喜にもゆる人心意氣發洩として映ゆる面持、定刻、菊桐の御紋章鮮かに御覽は着きました。流石に水を打つたる如き靜肅なる中に軍樂隊の奏する「君が代」のみ莊嚴に縷々として響き渡ります。集ひ寄りたる十幾萬の人々にも御聖恩の辱けなさを忍ばれた事と思ひます。玉座に立ち給ふ御英姿は御そばに閃く錦の御旗に映えて實に神々しく拜せられました。指揮官の指揮により隊の分列式、今日を晴れと誇らしき各校各團体の旗も美しく。御前にて敬意を表せば毎々に舉手を賜はりと赤子を慈しみ給ふ大御心が拜察されるのであります。分列式終り私等奉唱部隊は玉座の側近くまで進み出でました。大衆の歌ふ合唱に若し不自然有らんとも測り知れざればとてタクトを御許可有らせられたと恭けない感じを深く致しました。

陛下には一時間にも餘る長時間の聖跡を止めさせられしとは何といふ畏れ多い事でありませう、今更乍ら、私自身の平生を省みて感泣致しました。終りに 天皇陛下萬歳の三唱は天地も裂けん計りで遠く奔ゆる大阿蘇の高峯も靜に漂ふ有海の海もその響に應じたでありませう。

御尊顔を拜し御恵み深きを思へば山行かば草むす屍海行かばれつくかばね大君の邊にこそ死なめ省みはせじと誓ひを立ですには居られません。

奉唱部隊に参加して

徳託郡田迎村女子青年團 竹崎みさお

美しく澄んだ空!!暖か過ぎる陽光!!快い微風!!思つたゞけでも氣持よい秋の一日、廣い帯山に集つた青年男女、雜草のやゝ寂びれた帯山も今日はさすがに喜びに満ちて、優しく私達を迎へてくれた。幾萬と集つた見知らぬ友、然し皆な優

しい微笑をなげやり、何か知ら柔い和かな空氣に我知らず嬉しかつた。陛下の御臨幸まで、今日の結果のみ心に掛りて考へれば考へる程、私達の責任の重さを一層痛切に感じさせられた、……………日誌をめくつて見ると、去る十一月の御親閱の日が新しく甦つて重き責任を無事果たした事を深く感謝します。陛下の御英姿を拜み奉り、奉唱部隊から靜かにそして何となく有難さにふるふる聲で奉唱された。……………あゝいまし、すめらみことの御姿を……………唯かしこさと嬉しさに涙のみこぼれて胸が一ぱいで思ふように奉唱が出来なかつた。

其の夜寝につく時自分はしづかに考へた。「日本の國であればこそ!陛下のよき子であればこそ」と、靜かに目をつむり、心を落ちつけ、おほけなくも御代に生れし我身の幸多きことをつくく感じた。こんなに何もわからぬ、そして唯毎日を土と共に生き、何一つとして教養なき我自身、かくまでもかしこき恩恵に浴し、何かをつかみしか……………田迎村を表として参加させて戴き、何一つとしてみんなの爲にならぬ私、思つてみるとみんなの方に恥しいけれどもやらう!この後懸命やらう。暮れかゝつて歸つた時、みんな喜んで迎へてくれたではないか。代表として行きし、私を考へるとたまらなくなる……………嬉しいやら何やら……………何時までもくく一日の唯有難く、そして長い大御心に感泣するのみである。他村の人をとらへて「あなたはどんな氣持」と尋ねた時、私はほんとに羨しく又嬉しかつた。「とても幸福です。嬉しくて歸つたら友達に話します」と、私達は幸福だ。乙女の此の上なき幸福。生涯忘れようとして忘れることの出来ない幸福であるぞ、……………く誓つた。「よき子、よき女とならう、と」……………

御親閱を拜受し奉りて

徳託郡日吉村女子青年團員 東サカエ

過ぎし御親閱日は私共一生を通じて又とない光輝ある、恵まれし日で御座いました。

歡喜に満たされた心を抱きつつあの日未明に起き出でて集場所市立高女校へと急ぎました。縣下各處女會高女校等既定の人員集合後同校を出發することになりました。清らかな朝日は早や東天にかがやき神々は榮ある今日のよき日を御守り下さるかと思はれる位の爽かな快晴でございました。いよ／＼目的地帶山練兵場へ到着致しますれば前夜より附近に天幕野營せる青訓中等校約一萬有余早式場に先着してゐます。到達後ゆつくりと朝食兼晝食を済ますうちやがて整列の時刻は参りました。帶山練兵場の七ヶ所の入口より彩色さまざまの校旗團旗が朝日に翻つて續々として入場致します。郷軍男女青年團男女中等校専門學校高等學校凡そ五萬有餘の行列は先着隊と合して見る／＼人の山を築きました遙か正面の玉座には燦然として菊花の御紋章が輝いてゐます。玉座の後方左右には各縣の有資格者陪觀せられ一角の婦人席にも正装せる夫人にて場を満してゐます。堵列部隊の外側は一般拜觀者にて立錐の餘地もなくそれぞれ既定の場所に整列してゐます。早や萬端の準備が整ひました午後一時。號音一發勇ましく場の内外に響きますと今や式場入口の竿頭に清らかなる大日章旗がスル／＼と引揚げられ、續いて嘸啞たる合圖の喇叭、すめらみことの御着御を報じますればさしもに廣き帶山原頭を埋めた。陛下の赤子は水をうつたる如くでございます。遠く軍樂隊の吹奏する「君が代」の音色が靜かに流れ渡つて實に莊嚴の極みでございます。折しも薄の先驅到着し、續いて秋陽に映じて眩ゆいばかりの莊麗なる高き御召車は玉座の後方に着御あらせられました。萬衆一齊に最敬禮を行ひ頭を上ぐれば清淨雪を欺く純白の高き玉座に肅然たる御英姿を拜しました時涙のじむのを禁じ得ませんでした。それよりただちに玉座の御前にて大分列式が開始せられました。合圖の喇叭と共に軍樂隊を先頭に私共七萬の行列は畏れ多くも御聖姿を奉拜しつつ一巡致しました。後いよいよ私共奉唱部隊の整列は終りました。そして奉唱は始まりました。今聖上陛下の御前に立ちて「あゝここにすめらみことの風聲を」と奉唱致しました時の私共の心は只感激と尊さとですべてを忘れて只々赤誠を以て奉唱致したのでございます。奉唱終つて我に歸りますと私共の眼には涙がにじんでゐました。これこそ感激其のもので御座いませう。約一時間にして總ての御親閱は恙なく終了致し奉送の時刻となりました。十萬にも充たんとする全員が 聖上陛下萬歳を三唱した時こそ實に 陛下をお

慕ひ申上げる赤子の眞心からの叫びでございました。世にはお召車さへ奉迎出來得ぬ人々にくらべて御聖姿を奉拜しつつ奉唱を許されし私共は最上の光榮でございましたこの日こそ永久に忘れることの出來ぬ日で御さひます。

御聖徳に感激

宇土郡三角町青年訓練所主事 渡邊尙廣

畏くも上御一人の九州西陲の地我が熊本に御駐營ましまして昭和六年十一月十一日より九日間の長きに亘りぬ。其間錦旗を進め給ひて大演習を御統監遊ばされし外二十三箇所の行幸と四十餘箇所の勅使御派遣等分秒の御餘裕もあらせ給はらざりしはあやに畏く尊く誠に恐懼の外なし。然かも御恙もあらせ給はず寵顔特に麗はし。ああ、神にして現人神におはしますこそ嬉しけれ。斯くして政治、教育、産業、軍事、さては敬神崇祖等御模範を垂れ給ふことの深き幾千代かけて尊くも畏し。又御駐營長きに亘らせ給ふ中に草莽の臣我等は天顏を拜せしこと幾度ぞ、其中特に御聖徳の彌高きに感涙の禁じ難きものありしは御賜饌の日と御親閱の日なりしなり。

草莽の微臣今此處に筆執るも喜びの手は震ひ胸は高鳴る。嗚呼彼の十三聯隊の營庭に輝きし御賜饌の日の五千餘人の光榮!!昭和六年十一月十五日大觀兵式後の午後一時 陛下は皇族方及侍從を隨へさせられて臨御。「君が代」の奏樂——忽ち滿場の民草は一種のインスピレーションに打たれて涙滂沱たり。今しがた 陛下御玉盃を舉げさせられて御賜饌は始まる分一分。恰も百花燎爛の春陽に紅葉散り敷く秋季の感靈を交へたるが如き喜悅の中に肅然たるもの四十分間。此四十分間の長きを御厭ひもあらせ給はで御談笑遊ばさる。然かも酒を召されず煙草を召されず單に飲料はサイダーのみなりき。おゝ諸人よ。辱けなさに涙こぼるるにあらずや。

次には七萬の若人を御親閱遊ばされしとき拜せし事なり。廣茫たる帶山原頭錦旗朔風に翻り、大國旗又へんぼんとして

中天に輝く、斯くて長くもあこがれの天子の大御前に「君が代」を唱へし時と「分列式」の時とは吾も人も言ひ知れぬ感激の波に打たれて胸迫り時に落涙して唯ありがたさに此身を忘れたるは今猶回想してさへ心身のおののくを覺ゆ。
重ねて申す「御聖徳の長しとも長き極み。天長地久に彌榮あれ」

御親閲を拜受して

宇土郡宇土青年訓練所 米倉 卯一郎

十八日、朗らかに靈峯大阿蘇の彼方から明け放された。意義、何たる深長、天は秋を示し、地上我が心中を示して居るかのやうだ。碧落高く澄み冴え、秋陽朗らかに照り映へて、今日の光榮を祝するの七萬と算せらるゝ人々の心胸を表してくれるのか、あの光！この彩色！とり／＼の校旗、郷旗、團旗數百流絢爛、整然として林立し、黒に、カキ色にさしもに廣き帯山原頭も埋められてゐる。彼方に見ゆるは陪觀者であらう。満場靜寂ならんとする頃天高く轟く號砲一發大國旗は竿頭に掲揚された。突如響き渡る「氣ヲ付ケ」のラツバ續く號令、忽破られし今迄の空氣、七萬有餘の人員肅然として神威自から場を壓す！戸山軍樂隊に依て吹奏せられる「君が代」のメロデーが靜かに流れ、赤子の眞意を表示し居る日章旗は碧空高く翻つて居る。心は只々張り詰めて身をも堅くしてしまつた。太陽の物靜かに輝きゐる中に霞める金峯山に浮きし如き清淨の白布に蔽はれたる高き玉座に、やがて、聖上の御尊姿を拜し奉りし時、其の心情！不動の姿勢は取りおれ共、胸の呼動高鳴り、足の痙攣を如何ともする事が出来無い。再び起る喇叭の一聲に一同捧銃。再び軍樂隊の吹奏する「君が代」は靜寂嚴肅の極へと誘導し、一聲の喇叭を合圖に愈々大分列式は行進曲より始められた。號令下るや、踏出す第一步！心頭に響き、心身に一新！一步一步、刻一刻、迫る此の身上。誰が此の胸中を察し得よう。方向轉換の足取りも輕々と擴聲器より送られる行進曲に足並合せ、軍樂隊の奏曲は、心に、激し身にこたへ踏む足、踏む足、地上に印し、全

身には只旗の動き有るのみだ。旗は下つた！天顔を拜せしも暈熱くなり幾重にも見へ、今にも昏倒しさうであつた。

長き極みにも 聖上陛下には御答禮遊ばされてゐられるでは無いか、この時の心境何ぞ筆に表し語に發し得ようか、今始めて神の御姿を見出す事が出来た。白臺の上に直立不動の御姿勢をお取り遊ばしたる 陛下こそ、一に神様だ、神の御姿と拜する。外に何と拜し得よう。

次から次と順を追ひて進行し行く御親閲、只々光榮に、感激に浸り、我が身に、我が心地は無いのである。全員「君が代」の奉唱にて我にかへり。本山知事の音頭で奥より進りし「萬歳」三唱心の限り聖壽の無窮を祝ぎ奉り、御英姿を胸に光榮と感激と矜持とに無限の思ひを抱きつゝ鳳聲の還御を送り奉つた。おゝ、始めて我が心胸は大阿蘇山上より昇り朗らかに映へし朝日の如くそのまゝになつた。

御親閲を忝うして

宇土郡三角町青年團員 山 神 一 郎

私等青年團の名譽ある御親閲に自分の如き凡人が選抜の光榮に浴し參加出来た事は、此の上も無い一生一代の面目とする所です。

待ちに待つたる十一月十八日午前二時三〇分三角發列車は我等數千の參加團員で充滿された。聖上陛下の御英姿を數分時の後に拜し奉る忝けなさを、歡喜と興奮とに躍動する我々を乗せて長蛇の如き列車は大熊本の玄關に發進する。大熊本驛頭は全々新裝成つて、聖駕奉迎の大奉迎門、白熱燈の光は晝をあさむくばかりである。心躍る中にも自然と嚴肅さへ感ぜられる。霜月十一月中旬午前三時三十分とは言ひ乍ら全身は眞夏の日をうけた様に汗さへにちみ出るかと思はれる。援助員上等兵の引率で我等の集合所濟々着いた時は、汗も何處へ行つたやら寒ささへばつゝ感ぜられる、直に設備

された炭火に暖を取り陣をつくる。未だ夜は暗い、刻一刻と大地は朝を迎へやうとして居る。やがて夜も明け放れ、先頭部隊出發八時三〇分いよいよ晴れの帯山練兵場へと押し進む。七萬の御親閲部隊が蟻のやうに行進する光景、場内の大群集氣づがはれたる天候も實に恵まれたる青空と變り、時分秒と腕巻時計の針は鹵簿御着御の時刻〇時一〇分近くなつて行く、私の心は早鐘のやうになりひびく忽ち氣を付けの喇叭吹奏、吹響軍樂隊の「君が代」の奏樂、場内寂として聲なく、今の今玉座に直立遊ばされたる我等の 天皇聖上陛下を拜し奉る、尊しとも有難しとも只夢の様である。いよいよ大部隊の分列行進かしくも陛下二十歩の御前に於て御親閲の光榮に浴するので。軍樂隊の勇ましくも感激的なる行進曲。大地を踏む力強い歩一歩よ、大隊長の頭右の號令、陛下の御龍顔に接せし時の、其の尊さ、拜せんとして拜し得られぬ現人神の神々しさよ、たゞ感激湧き出づる熱涙止めんとするも止むることが出来ない。一時間の長い間端然直立御親閲遊ばされる御英姿の立派さよ忝けなさよ、誰か感泣しないものがあらうに。かしくも陛下を御前にしての「君が代」意義深さ萬歳の力強さ。我大日本帝國が萬國に卓越せる所以のもの十八歳の今日、今までのあたりいやが上にも強く印象づけられたやうだ。今日の感激いつの世に忘れ得やう。

大日本臣民の一人として青年團の一員として自重自愛粉骨碎身國のため 陛下のために御盡し申して皇國の彌榮を祈つてやまぬ次第である。

御親閲拜受者の感想

宇土郡戸馳村青年團員 吉 田 勉

時は秋晴れの十一月十八日千載一遇の記念すべき光榮の日だ所は帯山の原頭、威儀正しく莊嚴な式場に入場すれば自ら感徳無量、位置に着き時を待つ、やがて一時十六分「氣を付け」の號令で一同の顔は緊張に漲つてゐる。「前へ進め」幾百

流とも知れぬ國旗が秋風に翻る。御親閲は開始された。緊張しきつた一同の心と体は軍樂隊の行進曲によつて足並みも揃ふ、「頭右！」大隊長の命令は下つた、瞬間玉座に龍顔美しき玉体を奉拜し感激の餘り目頭は熱くなる。

嗚呼一青年團員の身を以て、一天萬乗の天顏を咫尺の間に拜し奉るの光榮に浴し感激措く所を知らず、この時にこの國に生を得た事は實に幸福であり且又御慈愛深き大御心に非常の力強さを感じた。天皇陛下には時局重大のこの時大演習御統監後各地に行幸遊ばされ寸暇だにあらせられぬ御多忙の玉体を我等のために費し給ひ一時間有餘に亘つて御微動だに遊ばし給はず御親閲を終らせ給ふ誠に恐れ多き極みである。この御慈愛の又皇恩の無疆なることに感激の外はない。

この御慈愛に且又皇恩に如何にして、報ひ奉ることが出来るか？我々の任務は重且大である。現今の日本の立場を思ふに内に財政に外に外交に時局の黒雲は暗澹としてゐる。隣邦支那との外交問題は曾てあらざる緊張を示してゐる。この重大なるこの時、國民の覺悟は否青年團員の覺悟は？かゝる時に際して國家を荷うてたつべき義務と責任ある吾々青年團員はこゝに一大決心を以て國體を守り死を以て盡し極みなき御慈愛の一部に報ひ奉る責任のあることを感ずるものである。

御親閲に参加して

宇土郡浦村青年訓練所 新 野 教 一

あゝ思へば昭和六年十一月十八日、この日こそ我等が一生忘れることの出来ない最大吉日といはねばならない。十一月十八日熊本を中心に舉行せられた特別大演習の朝、畏くも 天皇陛下御統監の下に、九州近縣八縣下の男女中等學校生、男女青年團員、青年訓練所、在郷軍人等六萬六千の若人の御親閲式の擧げらるゝ日である。この御親閲に際して不肖片田舎の微臣愚な私が、六萬六千名の一員として、この一大盛儀に參列すべき榮譽をになひ得たことは、身に餘る千載一遇の光榮であつて、たゞ有難さ勿体なさで溢れ落ちる感謝の涙をどうすることも出来ない、是れ實に一生一代の大吉事といふ

べきである。

御親閲前二度の豫行演習の時から高鳴る胸をおししづめながら不都合なきやう、見苦しき態度をとらない様にと、色々失禮なき様にとの注意を思ひ浮べながら無事豫行演習を終へたのである。十一月十八日の御親閲日となり、次第々々熊本土地近くなるにつけ愈々心の緊張し来るをおぼゆる。

熊本驛前の廣場に第一步を踏んだ瞬間、直ぐ我等に直感せしめたのは参加者が如何に緊張し一生一度の光榮に感泣し感激してゐるかといふことであつた。静寂そのまゝ、唯指揮者の號令ばかりが静かな夜中に高く響き渡る。愈々中隊編成を終へ上官の注意を聞き營舎から、陸續と式場に參入する時の私の心何ともいはれない。一舉一動に氣を付けて、おそれ多くも大元帥陛下の御満足、御安心あそばさるゝ様にとの心頭で胸一ぱいであつた。此の日一大盛儀を祝してか、天氣清澄にして北の風やはらかに吹く。愈々整列し終り間もなく高く響き渡る爆竹の音、瞬間サツと胸が高鳴る。涙が出さうである。

暫くして軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂があつた。練兵場一ぱい響き渡る時、私は泣いた。涙が出る。本當に或るいひ知れぬ心がシーンとして來た。とても筆舌で盡くし得ない。あの大阿蘇の連峯海かすむ遠景の前に、清淨の白布に蔽はれたる高き玉座の前にやがて 聖上陛下の御尊姿を仰ぎ見たのである。行進を起し御前通過の際「頭右」の敬禮を行ひつゝ分列を行ふた時おのづから喉の熱くなり、なんともわからない感激の涙で朦朧となり、御尊姿を眞正面から拜し得ないたゞ無我夢中夢ではないだらうかと自分で自分を疑ふ程であつた。有難さ勿体なさで感泣するばかり何とも言葉が出ない。この有難いといふ二字で外に言ひ盡くし得ない。此の涙こそ我が帝國大和民族特有の萬國無比な大和魂の發露、祖國を護る愛國心であらう。この精神を以て益々盡忠報國、國家のために御奉公致さなければならぬと胸の中で固く誓つた。あゝ今より回想して見れば誠に千載一遇のこの光榮に浴した我等は何と感謝すべきか、御親閲の際、一時間餘りも微動だもあらせず御熱心に御親閲を終へさせられた 陛下、廣大無限の御仁慈に對して我等は感涙にむせぶばかりであつた。

質實剛健な精神を以て國家の安定聖壽の萬歳を企圖することは正しく吾等青年の責務ではあるまいか。

竹の園生の御榮へ聖壽萬々歳。

御親閲參加感想

宇土郡浦村青年團 新野 日吉

回想するに昭和八年十一月十八日、是ぞ我等の一生忘れる事の出來ない、最も光榮な日である。畏くも天皇陛下には、熊本地方に行はれたる大演習御統監に際して、九州近縣下の男女青年を始め、青訓、在郷軍人、學生、六萬有餘の若人の御親閲が廣々たる帯山の練兵場で行はれたのである。此の千載一遇の御親閲に、愚なる身を持つて參加を得たのは決して忘れる事の出來得ない、最も印象として残るのである。其の日、南國の冬とは云へ、其の頃になき晴快な日で、最も絶好な御親閲日和であつた。忘れもしない、午後一時十五分 陛下御臨場の爆竹打上と共に、練兵場を埋むる何萬の若人は緊張、静寂其のまゝ、只氣合ある指揮者の號令のみが、一齊にかゝるのだつた。其の瞬間、「君が代」の喇叭と共に陸軍戸山學校軍樂隊の奏する「君が代」は、高く澄み切つた大空に遠くに、近くに登ゆる連峯に響き、六萬餘の若人の心の中に染み込むのであつた。樂隊は勇ましい行進曲となり、愈々分列は開始された。

蛇々として進む分列の光景、金峯の空高く登ゆる眞白い玉座に立たせ給ふ御英姿の尊さ。なごやかな風にひらめく錦の御旗。嗚呼、何たる莊嚴さであらう。刻一刻……陛下の御前に近付くにつれ、息詰る……緊張……愚身を引きしめる。進む一步に感激の力強く、莊重を極めた軍樂の音は底から強く湧く。一分……一秒。「頭右」、……血走る緊張の鼓膜にひびく其の瞬間、全身はグツとしまつた。二分……三分續いた。「ナホレ」、ほつと一息……我に還る。其の時、軍樂の音は遠くはなれてゐた。恐れ多くも陛下には長時間に亘る御親閲にもかゝらず、直立不動の御姿勢で微動だもなき御姿

勢神様其のまゝ……。只一同感泣せざるを得なかつた。其の時、己の脳裡には感激が燃えた。微身を忘れ、灼熱の如き愛國の心は湧出、内外多事多難の帝國の現状を思ふ時如何、我等青年の使命の重大さを一層自覺したのだつた。それは御親閲に受けた鋭き感動であつた。

御親閲の光榮に浴して

宇土郡不知穴東部青年訓練所第三年次 猿 渡 鐵 雄

明くれば空に一片の雲なく萬物悉く輝かしく歡び溢る、男女青年六萬六千餘名の晴れの御親閲は十一月十八日帶山原頭に行はせられた。早朝より陸續として湖の如く原頭を集る集團は午後零時半には廣漠たる帶山練兵場に紅葉絢爛林立の旗風を吹かせ、陛下の着御を待ち奉る。午後一時、一發の號音響くや式場正面には青空高く大日章旗翻る。さしもの大衆も一齊に緊張し帶山原頭は音を潜む。突如「氣を付け」の喇叭は一聲に吹き繼ぐ軍樂隊の吹奏する「君が代」の音は靜かに流る。御召車の着御を奉迎するや、陛下は間もなく清淨雪を欺く白敷布の高き玉座に肅然として立御あらせ給ふ御英姿を拜し奉りし時電氣に打れたる如く心身極度に緊張し忝けなくも有難く唯々感激の情禁じ難いのであつた。

「前へ進め」の號令によつて軍樂隊の行進曲と共に大集團の分列行進は順次華かに展開された。畏くも陛下には一々御會釋を賜ふ。分列行進の光景は五彩陸離の校旗團旗は千草の花と咲き歩武肅々人の流れはいつつきるとも知れず集團々々が蜿蜒長蛇大陣形となつて大きい渦巻を帶山一杯に巻き立てる。何と云ふ壯觀であらう。斯くて分列行進は終了した。やがて軍樂隊は三方に分れ奉唱隊を誘導する。恰かも黒潮津波の如く大きく靜かに玉座前方に靜止し「あゝこゝにすめらみこと風聲を迎へまつれり」の奉唱歌は若き少女の口から美しい旋律、血潮高鳴る感激の響きは帶山の平原を流れて其の莊嚴さは例へんにもなく感激の涙を催さざるを得なかつた。次で熱誠溢るゝ力強き「君が代」の奉唱は天地を響かし莊嚴

無比其の尊さ其の力強さ躍如として全身に漲る。續いて本山熊本縣知事の音頭にて「天皇陛下萬歳」の熱叫三唱は再び原頭を轟かした。かくて御親閲は終了す。此の間實に一時間餘、陛下には終始不動の御姿勢を稱させ給はぬ大御心、げに拜察するだに恐懼の限りである。

天皇陛下に於かせられては十一月十一日熊本の地に風聲を迎へ奉りてより大演習御統監引續き八代、水俣、阿蘇御登山と遠く龍駕を枉げさせられ畏くも一日とて御寧日とてなき有様にて十八日の如きは熊本市御巡幸の御多端なる御日程をも厭はせられず青年の爲め御親閲を賜ひたることは如何に、陛下の青年教育に大御心を注がせられることを拜察し奉り誠に恐懼措く所を知らざる次第である。

嗚呼、上に一天萬乗の君を戴き他に誇る金匱無缺の國体を有する我等は國家を雙肩に擔ふべき重大なる使命のあることを忘れてはならぬ。

謹で惟みるに大正九年十一月二十二日畏くも 聖上陛下より青年團に

「國運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツコト多シ諸子ヨク内外ノ情勢ニ顧ミ恒ニ其ノ本分ヲ盡シ奮勵協力以テ所期ノ目的ヲ達スルニ島メンコトヲ望ム」

と優渥なる御令旨を賜はり青年の進むべき道を示し賜へり。

今や國家は外に滿洲の問題内に經濟問題等重大時機に頻する秋に當り我等は一層御令旨の意の存する所を守り、忠君愛國の志を強固にし思想を正純にして質實剛健に趣き國民精神を涵養振作し、常に恭儉勤敏業に服し國力の増進につとめ青年の中堅となり國家社會に貢獻せんことを。意義深き今日を永遠に記念し奉らん。

御親閲を拜受して

宇土郡花園青年訓練所 内田 三代 志

昭和六年十一月十八日、我等は此の日の来るのを如何に待つたか我山村の里にも話題はいつも御親閲、大演習のことのみであつた。其の間我は青訓生として拜受の光榮に浴すべく選に加へられ村に於て郡に於て、はた縣に出でて豫行に餘念なく練習した。而して内外多端なる時期とて 聖上陛下行幸御取止めかとの報導さへも耳にした其の時は實に失望落膽した。しかし我等赤子の念願が達せられてか行幸御確定の報が傳へられた時は新に胸の高鳴るを禁せずにはゐられなかつた。聖上の龍顔を拜することの出来る我等の光榮は人生の思出としてはあまりにおそれ多い事である。

愈々其の日は來た。我等は星の夜の露を踏んで御親閲場たる帯山練兵場に着いた。さしにも廣い練兵場も七萬人を突破したる拜受者の集團で充たされてしまつたこの堂々たる光景こそ未だ曾て経験した事のない莊重其のものであつた。玉休を仰いで、午後一時我等の胸に秘められたる赤誠は 聖上陛下の玉休を仰いで高潮に達した。一步々踏みしめて分列行進する我等の心中何物もなく只自らを省みて過失なからんことのみを祈つた。實に夢の心地であつた。而して冷靜に返つた時我心の奥に深く強く映じたものは玉休のいとも健かに涉らせられること、あの長時間を微動もあらせられず不動の御姿勢を以て一々御答禮遊ばされしことである。之を拜察するとき我等は聖旨の萬分の一に報ゆることが出来たであらう年としての責任の重大なるを反省せずにはゐられなかつた。思ふに我等は聖旨の萬分の一に報ゆることが出来たであらうか今迄五分の間も不動の姿勢をとることの出来なかつた愚な青年の一人ではないか。夏の日盛に田の中に入つては暑さを訴へたではないか、意志の薄弱なことを思へば實につまらない人間であつた、全く駄目であつた。しかし今後どの様なつらいことに遭つても苦痛は云はぬ、青訓公民學校に出では主事諸先生の御指導を守り家にあつては農事に精勵し修養を積んで全力をあげてかゝらねばならない。千載一遇の御親閲を拜受し堅く誓つたことは

1. 朝起 2. 時間厳守 3. 儉約

の三つである。之が實行に入つたことが尊い記念日を守る私の約束である。十一月十八日この日を思ひ起す毎に其の時の總ての光景が湧き出て一生忘れんとして忘るることは出来ない。

御親閲を拜受して

宇土郡轟青訓練所第三年次 田 中 貞 男

昭和の御光は普き森の都、熊本城下に御鳳鵠を仰ぎ奉る火の國の赤子は齊しく御聖徳に感涙、御聖代の忝けなさに遠き昔日、麻の如く亂れし彼の封建時代を偲び低回俯仰、轉た感慨に堪へぬものがある。

秋風も清き十一月十八日、轟青年訓練所生を代表し御親閲拜受の光榮に浴した私達一同、帯山練兵場に親しく天皇陛下の御英姿を拜し、往年御下賜の御令旨を奉戴回憶する時、如何に吾々青年に於て 陛下の御軫念と御期待とを賜ふかと畏き御聖旨に涙せずには居られなかつた。今此處に帯山練兵場、御親閲場の 陛下の御英姿を再び回憶するに、陛下には一時有餘の長い間、一分の微動だに召させ給はず、畏き極みにも不動の御姿勢にて數萬の拜受者に親しく答禮遊ばせし事を。思ふに天地皇恩の普きに草木もなびく、六萬七千の拜受者の全身からほとばしり出る 天皇陛下萬歳の聲こそ實に 陛下の御聖徳に感涙する赤子の赤誠の現はれでなくて何であらう。この赤誠の現はれこそ、千古不朽の大和魂であり日に新なる昭和の生命であらう。

顧みるに建國悠々三千載上に歴代天皇の御聖徳を仰ぎ爍然たる國体を擁護する赤誠盡忠の士の如何に多かりしか。和氣清麻呂出で楠公父子出る。豈偶然ならんや。森の都下親しく御英姿を拜する青年誰か國に報ゆるの心無かるべき。まして内憂外患相次ぎ輕兆激の風漸く生れんとする今日、思想に經濟に國防に第一戰の戦士として立つべきは誰か、世界平和

の維持者として帝國の將來を擔ふべきは誰か。吾々意氣剛健の青年、而も質實剛健勇往邁進、御令旨を眞に奉戴せし青年でなくて何者であらう。轟青年訓練所を代表して光榮ある御親閱を拜受した我等は大日本帝國を泰山の安きに置く覺悟が必要である。況んや青訓生を代表し千古一遇の御親閱拜受の光榮に浴した吾々青訓生に於てをや。

御親閱を拜受して

宇土郡網津村青年團員 稻葉正滿

昭和六年度の特別大演習が當所本の地に舉行せらるるに當つて、聖上陛下はその御統裁のため駕を熊本に駐紮し給ふ。三日間の特別大演習の御統裁を終へさせ給ひて愈々十一月十八日は學生在郷軍人青年團青年訓練生の御親閱遊ばされる日であつた。私も網津村青年團の一員として御親閱参加の光榮に浴する事が出来たのである。鹿兒島を除く九州山口八縣の是等若人の七萬は定刻前に帶山練兵場に整列を終へた。この御親閱の一大盛儀を拜觀せんとて、帶山さしてぐる拜觀の人々幾萬なるかを知らず帶山原頭は人を以て埋められた。午後一時の陛下行在所發聲の號砲に正面高く國旗は掲げられたこの時は七萬の大集團も靜肅に歸りただ一語をも發するものなく緊張した。聖上着御あらせられて「君が代」の喇叭の吹奏に七萬の大集團一齊に最敬禮を行ふ。陛下は「君が代」の奏樂裏に白布に覆はれたる高き玉座に立たせられた。分列は開始され、戸山學校の軍樂隊の奏樂のマーチにつれて第一集團の學生隊より順々に行はる。次第次第に我が第三集團は玉座近くになつて来る。大隊長の頭右の號令によつて第三集團の第一大隊は一齊に頭を右に向け、二十五米右に陛下の御英姿を拜する事が出来た。この時私は私であつて私でない様な何とも云ひ難い感を深くした。陛下が擧手の御答禮を拜察しては今更に聖恩の廣大無邊なるに感激して只感激の涙を催したのである。第一集團より十二集團まで約一時間餘り御身動きもあらせられず直立不動の姿勢で一大隊毎に擧手の御答禮を遊ばさる拜察する者誰か感激の涙を催さぬもの

がありませうか。分列終つて女子青年團女子學生の奉唱歌を歌ひ奉り、式は終つて最後に、聖上陛下の萬歳を三唱し、再び「君が代」の奏樂裏に還御あらせられた。かくして大盛儀たる御親閱は無事に終了した。私は千載一遇とも云ふべき陸軍特別大演習が、この熊本の地に舉行せられ尙御親閱に参加する事の出来た事は、私の最も光榮とする所であります。この御親閱に際して陛下を目前に拜し奉りては只感涙を催すのみであります。この日本の國に生れて有り難さを深く感謝するのであります。今や國家多事多端滿洲の風雲、國際聯盟の空氣實に陛下の御叙慮をなやます事多きにも關せず私達のため御盡し下さる大御心に對しては衷心至誠奉公を捧げ奉るべきであると深く感じた。

御親閱拜受の感想

宇土郡網津村青年團員 森田市喜

十一月十八日 噫十一月十八日此の日ぞ吾等が子々孫々に傳ふべき記念の日、光榮と感激とに自ら胸塞がるの日……九州近縣八ヶ縣下に亘る男女中等學生、男女青年團、青訓生、在郷軍人會等十五集團よりなる六萬六千の若人が御親閱を仰ぎし日、其の日や快なれ、晴なれと熱願したる吾等の真心、天も思召してか、北東の風稍々強けれども一片の雲なく晴れて思はず我等をして欣喜雀躍せしめた、午前九時宿舎濟々發出發、徒歩にて長蛇の如き我第三集團は帶山練兵場に向ふ我が大君を奉祝し、聖壽の萬歳を壽ぎ奉る日の丸の旗は朝まだきに翻り、異様に奥床しくも心を刺戟するのであつた、時を計つて彼方方から繰込んだ雲霞の如き七萬の健兒、五彩陸離の校旗團旗は千草の花かと咲き亂れ、紅い日脚の郷軍、青訓旗は簇立移動して練原の火と見え、噫壯觀……噫美觀、思はず熱血のたぎるを覺え、九州健兒の意氣止に昇天、……「暴辰飽なき支那を打て、干涉極まりなき聯盟何物ぞ、此の意氣、此の熱、此の壯觀を見る時彼等は立所に戰慄するならん」等々ひそ／＼話し合ふ聲の其處彼處に聞ゆるも心強し、午前十時十一時、時は進む、噫今日ぞ日頃夢にだに思はぬ御親閱

を拜受し得るか、と思ふ時血湧き肉躍り極度に緊張せしめた、午後一時號砲一發、式場入口の竿頭にスル／＼引揚げられた大國旗、祖國の聖き姿赤き心を青空高く描いた日の丸の旗風に七萬の健兒はもとより數萬の拜觀者の心々も自から引締る、突如「氣を付けッ」合圖の喇叭一聲ビリ／＼ッ恰も感電せる如く、極度に緊張せしめ、さしにも廣き帶山原頭叔として聲を潜む、嗚呼我大君、今日の佳き日……自分は思はず、心の中では力限り、天皇陛下萬歲——を聲高らかに叫ばざるを得なかつた、やがて 大君陛下には高き玉座に着かせ給へば「前へ」の喇叭一聲を合圖に軍樂隊の奏曲裡に壯又快なる御親閱の一大分列式は展開せられた、身は西陣の民草、昔ならば藩主の行列にも土下座して頭も上げられざりし土百姓の我、今目前に神々しき御聖姿を拜するを得るとは、唯々恐怖幾度か夢にあらざるかと自からを疑はしむ……

「夢ではないぞツ至尊の御前に於て不敬の行爲あつては何とするツ緊張々々」と我心を鞭つ我が心、大隊長の「前進」の號令、感極まつて無我無中の行進、玉座の御前に「頭右ツ」の號令一下……碧空高く澄み冴えて燃ゆる日輪の輝く下、仰げは尊し玉座の上凛然たる御聖姿を拜せし時、恐懼、感激、一種言ひ知れぬ靈感胸に迫り頭は向けども感涙目を塞いで如何しても御聖姿を拜し得なかつた、噴夢にあらすして眞實の御親閱を拜受するを得たるか、感激々々唯感激……かくて男子十二集團の分列式終り一萬五千の女子奉唱隊の血汐高鳴る感激の中より出づる奉迎歌、次で君が代の奏樂有る限り全大衆の合唱である、我も人も熱誠溢れ、帶山原頭爲に揺ぐかと思はれた、續いて本山知事の音頭で「天皇陛下萬歲」の熱叫三唱は肥後の山野に響き渡り心の限り聖壽の無窮を祝し奉つた、茲に於て光榮と感激に満ち満ち御親閱の盛儀は終つた、是我神國に於てのみ味はれる事にして他國に求むるの不可なるを思へば言ひ知れぬ有難さと暗涙に咽ばざるを得ない、此の間實に一時間有餘、陛下には金枝玉葉の御身を以て御親閱臺上終始直立不動の御姿勢を頼させ給はずいとも御熱心に精銳の行動を御親閱遊ばし給ふ大御心、拜察するだに恐懼の限りである、又かくの如く長時間に亘らせ給ひしに拘らず尙御疲勞だにあらせ給はぬ、御壯健の御勇姿を拜せし時、云ひ知れぬ力強さを感じ、天皇陛下萬々歳大日本帝國萬々歳と心の中に絶叫した、我々凡夫にして 陛下の御眞似の萬一たりとや出来得べき事ぞ……僅かの暑さに僅かの寒さに、少しの

辛勞に愚痴不平を言ひし自己の過去、靜に反省する時、思へば冷水三斗唯恐懼身の措く所を知らず、かくも御精勵の範を垂れ給ひかくも御仁慈厚き 聖天子の下にある我々は何たる有難さ何たる幸福、感奮興起日々業に精勵し自己の修養に邁進し微力乍ら村自治理想郷の建設に努力し、御聖恩の萬が一にも報ひ奉らん、感激の涙に咽びつゝ御親閱拜受の感想を記す、噫十一月十八日子々孫々に傳え御聖恩をしのび奉らん。

大君の御前に歌ふ

宇土郡宇土町處女會員 淺井きく子

十一月十八日、おゝこの日こそ私の終生忘れ得ない感激の日である。この日秋空は高く晴れて少し風はあつたけれど絶好の御親閱日和、數旬の前からこの榮ある日をごんごんに私達は胸おどらせて待つてゐた事であらう。日支事件のため或はお取止めになるかも知れないと云ふ新聞記事をごんごんに恨めしく眺めたことか、しかし愈々御確定になつた時のその喜びは以前に倍して大きかつた。

あゝその榮ある日は今日なのだと思ふ様な喜びの渦に皆の顔は輝きに輝いてゐた、花火一發 聖上陛下大本營出御の合圖日の丸の國旗はす／＼とか／＼げられた、此の頃から私達の緊張の度は益々加へられ 陛下の着御を御待ち申上げる一分二分 陛下は刻々にこの御親閱場へお近づきになりつゝあるのだと思へば私の胸は感激に打ふるへて頭がしいんとなる おゝ「君が代」のラッパ啾啾と響き渡る、聲一つない静けさの中に陛下の着御だ、お立ち遊ばされた。あゝ一萬乗の大君は私達の前數百歩の玉座に御立ち遊ばされた。神々しき御姿を拜したその、その瞬間の云ひしれぬ森嚴な思ひはこの日本國民なればこそひたすらに湧きおこる感激であり誇りであり喜びである分列式の壯觀は言語に絶する若人の意氣潑刺たる足取りも晴れやかに堂々たる行進美しく輝く旗の波劍の波、陛下は長くも擧手の禮を賜ふ、その颯爽たる御英姿を

はるかに拜して愈々胸はおどる。私達は 陛下の御前近く進んだ、微動だに遊ばされぬ 陛下を目のあたりに拜して有難さに熱涙ほとばしり出で奉迎歌も「君が代」も萬歳の聲も唯感激に満ち満ちて天地もさけんばかり。

北滿の地に零下三四十度の酷寒と數十萬の敵兵を向ふに勇敢に御國のために戦ふ兵士もこの大君のましませばこそ、あゝよくぞこの國に生れし、あゝよくぞこの國に生れし、幸よ、あの光榮の日を思へばすでに時を経し今も尙私の胸は感激にふるへ高なる。

御親閲の光榮に浴して

宇土郡松合町處女會 河野 絹子

あゝ思ひ起すだにかしこき極みである。空はあくまで澄んで今日の御式に一そうの華やかさをそへてゐる秋晴れ爽やかな十一月十八日、帶山一帯の高地は瑞氣漲り渡るの思ひあり。こゝに光榮に輝く若人六萬六千、晴れの御親閲の盛儀は行はれた。薄がすむ廣野も今日の光榮をひたすら壽ぐ人々の群に危くおしつぶされようとしてゐる。日に輝く銃剣、原頭を吹き渡る和風のそよぎに紅葉絢爛林立の旗風をふかせ、その壯觀實に言語に盡し難く、只その氣に酔ふのみ。

午後零時半整列終へてひたすらに聖上の着御をお待ち申し上げ。やがて號音一發、式場入口の竿頭にすゝと引揚げられた大國旗、さながら祖國の威光を一そう強く思はず如く。……萬衆も自と其の衿を正す、突如「氣をつけ」の喇叭一聲吹きつき一聲又一聲遠近にひびき渡ればさしもの廣き帶山の原頭も寂として音をひそめ、軍樂隊の吹奏する「君が代」の調が靜かに流るるのみ。……鹵簿の先驅にて着御あらせられ、清淨雪を欺く白敷布の高き玉座に肅然として立御あらせ給ふ御聖姿の神々しさ、御紋章の金色に燃ゆる錦の御旗は原頭の風に翻る。只貴く感極まつて目禮するのみ。

やがて分列式が始まる、大地もゆるがすばかりの集團の動き、一大隊毎に丁寧なるお會釋を賜ふ大御心のかしこさ、遠くよりこれを拜して一ツの御手の動きにもこれを見のがすまじと緊張しきつた心をいやが上にも引きしめて行くのをどう

する事も出来得なかつた。分列式終つていよいよ奉唱部隊進出し、玉座前九十米の近きに進み、一萬五千の乙女らの口々から清く澄んだ美しい旋律が張りさけんばかり血汐高鳴る感激のひびきと共にほとばしつて廣い帶山の平原を流れ〜て人々の胸を打ち、秋空に餘韻してきえて行く。あゝ感慨無量。近く龍顏を拜し奉り、真心こめて奉迎歌を奏上申し上げる光榮一生に又として出来得る事であらうか、只々貴く有難く感涙にむせび胸につまつて聲さへ出ない有様、しつかとかみしめては又續ける。歌ひ終つた私の目には何時しか涙があつた。老人が感泣されるのもつとも、若くしてこんな光榮に浸ることの出来た私達こそ眞に幸福と言ふべきだらう。萬人の中よりこの私を見出した時、今日の光榮に浴する事の出来たことを深く〜神に謝せず居られなかつた。しかも一時間餘に亘る長時間の間、微動だに遊ばさずひたすら若人の爲めに御親閲を賜ふ大御心程、拜察申し上げるだに恐れ多い。

さうだ私達女性は何としてこの御聖恩にむくゆべきか。一國民としていや日本の女性として、婦人として忠實に其の任務を全うする事がせめてもの報恩の一ツだらう。起たう。もつと眞剣に自己を見つめ、自己をむち打ちつゝ、國家の一員として國家のため奮つて起たう。そして恥ぢざる日本婦人とならう。

光榮に浴して

宇土郡大岳處女會員 高瀬 初子

昭和六年十一月 我熊本縣民の腦裡に深ききざみこまれ、永久に忘れ得ぬ佳き思出の月であります。聖上陛下を奉迎する肥筑の山野は實り、秋深く一本一草悉く生氣に漲り、菊花香る野に親しく聖駕を進め給ひ、縣民の感激如何ばかり……あゝ歡天歡地の盛觀、畏くも 聖上陛下には連日の御行幸にも、いささかの御疲勞の御模様拜せず天機麗しく十七日には帶山練兵場にて御親閲を賜はる、參拜者の感激如何ばかり、陛下の御臨場をあほぐ式場は朝まだきより人、人また

人にてうすもれ、朝日輝く萬本の旗？その莊嚴、莊觀、筆古の盡す所にあらず。

緊張そのもの、時は流れ、陛下御發聲の報天にとゞろけば三萬の赤子は、赤心をもつて奉迎の準備はなり、今や〜とお待ち申上ぐれば、陛下の御召自動車はエンジンの音も軽やかに静々と式場に進ませ給ふ。赤子の歡喜、頂點に達し身のおく所を知らぬ感激のシーンであります。軍樂隊の奏する樂の音は、高く或は低く阿蘇の峯にひびき、有明の海にたゞよふが如く、萬本の旗は金色に輝き、秋風になびくその中に、畏くも陛下には、一々御丁寧なる御答禮をはるかに拜し得ましたときの赤子の心、有難さに涙こぼれ、低頭の有難さを禁じ得ませんでした。陛下の玉座近く前進し、御聖姿をおろがみ申上での奉唱身にあまり、何を思ひ、何を奉唱せしか、自分を知らぬ位であります赤子の眞心なる萬歳の聲、「君が代」のたへなる樂の音の中に麗しく御還幸になります、御英姿、畏多きに胸は裂けぬばかり涙こぼれ、百の言行連ねても、千萬の文字綴り合はせてもとうてい表現の出來ぬ感激のきはみであります。

一女性の身を以て、之に忝けなくも陛下の拜顔を得たる千載一遇の光榮に浴し、感激にたへぬ次第でありま大に自ず。この感激を永久に胸にして、自己の務めに精勵し善良なる、國民として各時局に善處し涯分を盡し、第二の國民として覺致す覺悟で御さいます。

御親閱を拜受して

宇土郡花園村女子青年團 末 松 菊 枝

御親閱の日十一月十八日の朝は來た。この日何と恵まれたる日であらう。風和かにすみ渡る日本晴！薄紫に光る阿蘇の連峯をバックとするこゝ帯山練兵場には御親閱を拜受する約七萬の青年男女と陪觀の官民及雲霞の如き一般拜觀者とが夜をこめて陸續と集まり正午前には既に各部隊とも整列を終り 聖上の着御を待ち奉る。時刻せまるや肅然として神威自ら

場を壓する時第六師團司令部の御發聲を報ずる花火は秋空高くあげられ式場正面高く大國旗は上がる。場内は全く水を打ちたる如き静けさとなる。

やがて「君が代」吹奏裡に風聲着御。清淨なる白布をもつて蔽はれたる高き玉座に聖上の御尊姿を仰いで滿場たゞ感激にむせび莊重の氣溢るゝ。やがて中等學校の生徒を先頭に大分列式は開始された。廣漠たる帯山原頭に數百旆の校旗團旗は燦然と輝く。各大隊は勇壯なる軍樂隊の行進曲につれて歩武堂々と玉座の御前に進み御親閱を受く。嗚呼勇ましくも力強く踏み若人の快い足どりよ。輝く日本の姿がうつる心地して嬉しさがひとりで心底に湧き上つた。やがて吾にかへつて陛下を仰げば陛下には各團体の行進ある毎に一々御舉手をもつて御答へ遊ばさる。畏き極みである。次いで女子中等學校並に私共女子青年團員約一萬五千名をもつて組織されたる奉唱部隊は場の三方より靜かに前進し玉座に向つて最敬禮の後軍樂隊の奏する樂の音につれて御親閱奉迎歌「あゝこゝにすめらみことの風聲を迎へまつれり」と歌ふ、あゝ何と言ふ有難さかたじけなさ。たゞ感激のあまり涙に頬を濡らしこの胸もさけよとばかりせい一杯に歌ひ奉る。奉唱終るや續いて全員「君が代」を奉唱し熊本縣知事の發聲に合して天皇陛下萬歳を唱へ心の限り聖壽の無窮を壽ぎ奉つた。かくて全員の奉送を受けさせられ「君が代」奏樂裡に龍顔いとも麗はしく御退出遊ばされた。この間聖上には一時間に亘る長き間直立不動の御姿勢にて御親閱遊ばされたる御姿は尊くも神々しく拜せられ、風聲還御のあとも光榮と感激とに身動きもせずそこに立ちつくしたのであつた。この有難さとこの感激とは永遠に聖壽の無窮と國家の萬歳を祈る心となるであらう。今や我が國は經濟外交思想の諸方面とも容易ならざる難局に直面してゐる。この際局面を打開し國難を排除するものは尊王愛國の旗幟の下に集ふ眞劍な國民自身でなくてはならぬ。而も聖上九州行幸に際し特に九州の青年男女を御親閱遊ばされた所以のものは國家興隆の基は青年の意氣の如何に依るものであるが故にその意氣をみそなはすためではなかつたかと恐察し奉る。もし然りとすれば私共は大御心の存する所をよく肝に銘じ今よりなほ一層強固なる志操を持ち、眞劍なる努力を以て現下の時局に善處するの覺悟がなくてはならぬと思ふ。

千載一遇の光榮

宇土郡轟村處女會 栗田ふみゑ

清麗の白菊の香も高く、南國の野山は秋色濃やかに開けて、肥筑の里に錦旗翻る十一月中旬、野に山に展開されました。陸軍特別大演習に御統監の爲め、聖上陛下には、聖駕を親しく西陣の地に御進めになりました。誠に光榮でありまして百六十萬縣民、否九州各縣民の歡喜措く能はざる所であります。

聖上陛下には、大元帥陛下として十一月十一日午後三時十五分大本營の地森の都に入らせられ、御駐蹕實に九日間、雨降りしきる大演習の御統監に、或は炎日の下に縣下の名所古跡の下に、産業を嚮はす大御心の行幸と寸分の暇さへあらせられざる聖休、聞くだに誠に恐懼感激の外ありません。

豫行練習の頃をかへり見て

今茲に御親閱の當時を熟々考へて見ますに、私の心身は自と緊張せずにはゐられません。願れば早や十月の頃シオン、コスモスの花も微風にゆらく頃、私共火の國乙女達は御親閱豫行練習に時には子供の如くオイチニの掛聲も勇ましく或は奉迎歌練習に宵暗もせまる灯の村里にきらめく迄よく無中になつて、一生懸命練習したものでございました其當時共に御親閱そのものが全部なのでした。指折り數へ、御親閱の光榮を夢見つゝ、日夜誠意の手をのべて、重大なる任務を遂行します様、神に念頭すると共に、實際におきまして全身全靈をこめて任務を果さうと、努力致したので御座います。大多數の仲間より選ばれて、現代女性の代表と感謝と共に又一方に於ては、それに報ゆる丈の努力と修養が必要と思ひます。

今日の佳き日

黎明の大氣を吸ひ、曉の霜をふんで、清々しい靈氣に満ちた心を抱いて、十一月十七日宇土驛午前六時出發「どうか立

派に使命を果して來ます様に」と念頭に呼びつゝ、我懐しの故郷を後に、森の都を指してゆく若き女性私共は發車のベルと共に……輝く火の國乙女の大きな使命をのせて、汽車は熊本指して走つてゆきました。大本營の熊本は、さすがに希望そのものゝ都市でありました。竝木にならぶ日の丸の旗は、朝日に輝き、奉迎門も金びらやかに高くそびへ、道行く人もアスファルトの上をすべり行く自動車も、今日の佳き日を壽ぎ待つてゐます。私達一同は隊伍を整へて黒髮校へと進行して行きました。不見不知の人と一夜苦樂を共にして一心同体相通する點を見出した時現代女性として十二分修養になつた事と思ひます。明くれば待ちに待つた光榮の御親閱日、十一月十八日之の目を如何に赤心燃ゆるが如き情にて待つた事で御座いませう。曉の静けさを破つて起床の呼笛、一合八勺の情のこもつた、有難い御飯に舌鼓打ちつゝ、頭上に星を戴き清々しい靈氣に満ちた心を抱いて帯山練兵場へと進んで行きました。六萬七千餘の男女青年團は風聲を靜かにお待ち申しておりました。

御親閱

夢見多い森の都、帯山練兵場に於きまして、若人は御親閱を賜はるのであります。十一月十八日午後一時十分、ラツパの音は高らかに天地に響き長くも、聖上陛下には直立不動の御英姿を遙か彼方に拜し奉つたのであります。天皇旗は目まばしきまでにヒラ／＼と秋風に翻つてゐます。文武百官の人々、分列部隊は各々の武装に身を固め、日章旗は炎日の太陽に輝き、旗の森、劍の林、軍樂隊の音も勇ましく、一目瞭然、壯觀を呈したのでした。恐れ多くも陛下には一々、御應答を賜はり、誠に恐懼感激に堪へない所が御座いました。又女子中等學校生徒並に私共は奉唱部隊として玉座前間近に侍べり、恭しく龍顏を拜し奉り、熱誠籠めし、火の國乙女の唇より、もれ出づる奉迎歌は、森の都の野に山に夢見る如くこだまし、「君が代」の音と共に萬歳の聲天地に響き彼方に流れる時、あゝ此時私がかたぢなさに一條の涙が、ほゝを傳はりました。此の極みなき光榮は、永久に深く腦裡に刻み込まれたのであります。

御親閱を顧みて

今ここに筆を走らせてゐる間に、胸の鼓動は高く鳴り感激の涙は此の白紙をぬらしてゐます。恐れ多くも會員として末席に望みました私には誠に過分の光榮でありますと同時に唯々感激の外はございません。けれども私は唯感激にのみ留まると云ふ事は餘りに恐れ多い事でございます。晏如としてゐられないのであります。假初にも一員として参列致しました私共は意義ある御親閲に臨みまして、感激に満てる我が心もて永久に變りなく、御國のため、盡さんと契る友達でありたいので御座います。奉迎歌を心に唱ひつゝ永遠に忘れる事なく、益々奉公の至誠に燃ゆる火の國乙女である様に御親閲を祝福すると共に皆々様の萬福を祈つて終りと致します。

御親閲感想

宇土郡緑川村青年團員 宮 本 正 衛

菊之香薫り紅葉映ゆる昭和六年の深秋そは我が熊本縣民の寸時も忘れ難き千載一遇の光榮のシーズンであつた。十一月十八日陸軍特別大演習御統監を無事了へさせられたる 天皇陛下には畏れ多くも六萬六千の九州健兒を御親閲遊ばされる爲託麻原頭帯山練兵場に御行幸を仰いだのである。

其の日夜來の曇は名残なく解けて秋空一碧微吹く秋風に草木も頭を垂れて無限の慶をさゝやいて居た。遙か東の空に座す靈峰阿蘇は雄大なる容姿して火の國民の熱と意氣とを示し吾等が今日の晴れの動作を監視して居るかの様に感ぜられた御着場を合圖に莊重な「君が代」喇叭の吹奏せらるゝや一時に發する「氣を付け」の號令に全員の緊張味は極度に達し、寂として息なく、嚴肅なる式場は輝かしくも大日本帝國の若き力をつぶさに物語つて居た。

やがて純白な玉座に御英姿颯爽たる 聖上陛下を拜した。「頭右ツ」の號令と共にサツと倒したる團旗がきらびやかに垂れて進んで行く秋光に閃く劍尖、軍樂隊のマーチに和して歩武堂々たる大部隊の分列行進が次から次へ展開せられて行

く畏れ多くも 陛下には、各團休毎に、一々嚴格なる答禮を遊ばさる此の間一時間餘 陛下には玉座につかせられてより嚴然として御直立せられたるまゝ微動だになし給はぬ、御勇姿吾等は實に恐懼惜く處を知らず感激はひししと胸にこみ上げて來るのであつた、そして斯くも厳しく御勇健な聖天子を戴く日本國民としての幸福感が今更ながら甦つて心の底から湧出する喜びをどうしても制する事が出来なかつた。と同時に奮起一躍國民としての使命の爲に粉骨砕心、深遠なる皇恩の萬分の一にも報うべき事を堅く誓つた。分列が終つて女子の奉唱部隊が前進した。「あゝすめらみこと」の奉唱が澄める秋空を流れて靜かに消へて行く。「おゝ親愛なる諸姉妹達よ、陛下の御旅情を慰め奉る様赤誠の限りを盡して奉迎の眞意を謳つて呉れ」と祈りつゝ吾等も共に奉唱歌の趣旨を捧ぐべく黙待して居た最後に天地を震撼する萬歳の轟は奉唱の余韻と共にどんなにか玉座の邊に響いたのであらう玉座を下りさせ給う玉体を眼のあたりに拜する時懼れながら無限の惜別の情に襲はれて熱涙の浮ぶを覺へた。

御親閲を仰ぎ奉りて

宇土郡緑川村處女會員 中 園 ス ミ

凍つた様な鉛色の雲が低く流れて熱のさめてしまつた大地に冷たい影を寫す夕暮靜かに沈み行くあの赤陽夕闇の中に包まれ行く雲仙の山身動きもしないでし——と考へて見ました。私に取りまして終生忘れる事の出来ない過去拾一月、拾八日千載一遇の光榮…噫…不束な私もその歡びを得られた事でございました。若き血潮は燃え胸は高鳴りなんと輝かしくも歡び溢れたる日であつたことか…聖上陛下の九州、山口、沖繩、各縣男女學生男女青年團青訓生在郷軍人の御親閲秋空は一片の千切れ雲さへなく東の空に阿蘇の連山は浮彫の如く鮮かに西の方に雲煙の彼方に雲仙を望み日本晴の託麻原に錦旗はいともあざやかに輝き吹き渡る微風にはためき總てが若人の輝かしさと歡び慄へてゐるのであります。この日集る

若人は遠い山口沖繩からその數幾萬餘に達しその夜は野營舎營してその榮ある日を待ちました。劍尖は陽光に燦き掲ぐる校旗團旗はそよ風に翻へり場を取り囲む幾萬の觀衆皆肅として 陛下の着御を御待ち致します裡に一發の煙火清秋の空高く響きました。大元帥陛下には嚴肅なる「君が代」の奏樂と共に各部隊より起る嘯唳たる喇叭の音に着御直ちに展望臺に玉歩を運ばせ給ひ全員之最敬禮を受けさせられました。軍樂隊が奏する華かにも胸おどる行進曲につれ各學校の分列式が始まりました。陛下には長くも終始直立不動の御姿にて一々御答禮を賜ひました。噫……この御盛儀に唯々涙の滲むを覺ゆるのみでした。

この御稜威に答へまつる民草の誠忠こそ皇運を萬世に扶翼し奉り我が神州日本をして永遠に東洋盟主たらしむる所以でなくて何んでありませう。

奉唱隊御座所下まで行進し軍樂隊の伴奏で若き女性の聲も高らかに御盛徳と歡喜を謳ふ奉迎歌を奉唱し聖壽萬歳を三唱して盛儀も滞りなく奏樂裡に一同 陛下の還御を送り奉りました。顧みれば眼前數十歩舉手の御答禮さへ拜するを得ました事何と無上の幸福に浴しましたことで御座いませう。誠に感激の極でございました。筆舌にてはどうしても表す事は出来ません。この榮あるこの時を期しまして國の爲一身を捧げて奮勵努力し將來益々精神肉休共に健全なる發達を遂げ以て皇恩の萬分の一に報ひ奉らん事を誓ひました。

御親閱を拜受して

玉名郡高瀬青年訓練所生 西 里 政 雄

十一月十八日！待ちに待ちたるわれらが光榮の日は來れり。この日空は秋晴れと晴れ渡りて廣々たる御親閱場帯山の草野には清澄の氣みちみちて、はるかに遠き山々は青々と連り、ことに金峯の雄姿、草野の高處に設けられし純白の玉座

の背後に陽にけぶらひて青く染えたるも心うれし。かたじけなくも 陛下には御親閱場に臨御になる途すがらわれらの天幕野營の跡を御覽になるとの事に、塵拾ひ清めはしたれど何か勿體なしと思ふ念残しつゝも、悦に躍る胸をおさへ、いまだしめれる草野をわが集團は指定のところまできたり 陛下の臨御をお待ち申しぬ時に午前十一時頃。見渡せば傍より遠に及び今日の光榮に悦ぶ人々實に七萬五千餘、同じ思にひたすらに時の到るを待ちぬたり。

午後一時いよ／＼臨御の時となれり。喇叭一聲「氣を付け」を告ぐるや緊張せる隊長の號令各所におこり、われら姿を正し心身共に緊張す。拜受集團七萬五千の私語、全く鳴りを潜める。をりからおごそかに「君が代」の樂がおこる。樂の音は据ゑられし擴聲機によりて大きく大きく響き渡り、場内今は全く靜まり水を打ちたる如く莊嚴の氣にうたれる。その時草野の一角に御車が現はれ「君が代」の奏樂裡に御車は進み來り玉座の下に止まる。陛下は御車より降り給ひ直ちに玉座にあがらせられ、嚴として立たせ給ふ。喇叭一聲鳴りひびきわれらの敬禮をなすや 陛下は辱けなくも親しく舉手の禮をたまはる。あまりのかたじけなさあまりの有難さ胸に迫りわが胸の熱くなるのをどうする事も出来なかつた。知事は靜かに玉座の下に進み出で御親閱を仰ぎ奉る旨を奏上し退きてより直ちに「前へ」の喇叭鳴り軍樂隊の行進曲がおこり分列は開始される。第一集團が今 陛下の御前をすぎつゝある時、われら第二集團は分列發起點に足踏を——足踏をなしつゝ考へた、われらは二集團の最右翼だ、しかも自分は第二列だ、恐れ多い事だが 陛下には最も近いのである。光榮の至りである。陛下の御前に火の國男子の意氣を平素の訓練を遺憾なく發揮せねばならない。われは第一步を力強く踏みつけた。奏樂につれてわれらが歩調自ら揃ふも嬉しく、悦に高鳴りつゝもいよ／＼緊張し 陛下の御前へと進みゆく。號令は今かいまかと先頭の青訓旗を見守りゆく時、旗は一せいに垂れた。忽ちわれらも跳ねかへす如く「頭右」をなし 陛下をおろがみまつる。陛下は辱けなくもしづかに手を舉げ給ひ禮を賜はる。

かたじけなさのきわまりにけり大君の手を舉げたまひ禮賜はれり

かたじけなき心きわまり大君のみ前をいませわれすむとす

われらは親しく御覽遊ばす 陛下の御前を限りなき光榮と感激に一ばいの胸を抱きつゝすぎ來たれり。陛下は實に長時間を玉座に立たせられしまゝ御姿勢毫も動き給はず、各隊毎に擧手の禮を賜れり。やがて幾萬の奉唱隊の奉唱をなしてよりわれら「君が代」を奉唱し次いで知事の音頭にて萬歳三唱秋空にひびきわたりゆく。只すべてが感激のみなり。——今はすでに還御の時となり喇叭を合圖に最後の敬禮をなす。折からおこる「君が代」の奏樂裡に 陛下は御車に召され、しづ／＼と御退場遊ばさる。再びかゝる光榮を辱けなうする日のあるやと思へば過ぎ行く御車を奉送して堪へがたき情胸に迫りくる。

御親閱拜受の感想

玉名郡彌富村青年團員

橘

時

次

時は昭和六年の 野山紅葉の秋深く

秋冷清く馬肥えていななく駒の聲高し

都へだてて三百里 我が生ひ立ちし肥後の地に

おそれ多くも大君をお迎へせしぞ幸なる

あゝ十一月十八日 あの帯山の大平野

秋風薫る原頭に聖徳高き大君の

天顔間近く拜されし 七萬人の同胞の

光榮體にあふるなり光榮體にあふるなり

はるか連る山々や 風吹く原の小松原

清き流れの川水も無上の幸にむせば泣く

今日十八日帯山の かりの御座所に立たせらる

威風あふるゝ大君のあの御英姿こそはかしこけれ

秋風立てる原頭に ひらめく錦旗と諸共に

深く頭にきざまれて永久に忘れぬ記念なり

あゝ幸なるぞ肥後の國 千載一遇の光榮に

戸毎に立てる日の丸は盛ゆる御代を喜べり

立てよ同胞手を取りて 輕き命を強く持ち

國運計る時ぞ今御國につくす時ぞ今

世界に名高き大阿蘇の もゆるほのほは肥後民の

千代にかはらぬ赤誠をこめてぞ燃ゆる火の柱

こめてぞ燃ゆる火の柱

御親閱

玉名郡築山青年訓練所

櫻

井

正

次

朝!!朝!!朗らかな朝、今日は九州八縣に亘る男女中等學生、男女青年團、青訓生、高専校、在郷軍人等約七萬名の一大集團が帯山練兵場に於て光輝ある御親閱を拜受すべき十一月十八日、我等熊本縣青年團は濟々費に集合し間もあらず太陽は大阿蘇の彼方より朗らかに明け放れて來た。前日に劣らぬ秋晴れ校庭、一帯には瑞氣漲る思ひあり、北東の風稍々強く寒く遠廻りして帯山に着いた。先着部隊は満密し昨夜公設グラウンド附近の天幕野營に晩秋の夜寒を凌ぎ明かした。青訓生男子中等上級生はそれ／＼武裝結束して先づ隣接の帯山式場に入れば間もあらず彩色さまざまの旗印を朝風に翻へし百足

の行列を描いて續く果がない。帶山四方七ヶ所の參入道から繰り込んだ在郷軍人、男女青年團、女學生、中學下級生、先着部隊等、渡鹿より帶山まで目路及ばぬ程一大曲線を廣々たる帶山平原に描き遙かに東面する玉座を遠巻きにして整列終る……。

時に午後零時半、見渡せば薄かすむ廣原の隅々、四方遙かに黒色は男女學生の服地、灰色の線は郷軍、青訓生の服地と知られ秋の野の群、銀星まばゆく見えるは銃剣の輝くもの、撫子の花の叢立つ如きは郷軍、青訓旗の立並んだのである……御式はまだ開けずして此の盛況を呈した。

錦の御旗原頭の風に翻へる……拜觀の群集は帶山本道兩側に溢れて其の數又幾數萬とも知れない玉座後方左右の陪觀席には九州各縣有格者等が赤白だんだら卷きの枠内におさまり其の一角には白えり紋付きの婦人席も設けられ……時移る……やがて一時、號音一發式場に引き揚げられた大國旗、祖國の聖き姿、赤き心を青空高く描いた日の丸の旗風萬衆の心々も自ら引き締まる、突如「氣を付け」の合圖喇叭一聲吹き響きの一聲又一聲遠近に響き渡ればさしもに廣き帶山原頭音をひそめた。

戸山學校軍樂隊の吹奏する「君が代」のメロデーが靜かに流れるのみ……雪の様に見ゆる白敷布の高き玉座に肅然として立御あらせ給ふ聖姿の神々しさ御文章金色に燃ゆる錦の御旗は原頭の風に翻へる。再び喇叭一聲すれば全員「最敬禮」
「君が代」の奏樂やがて大分列式は始められた。群旗の閃めき長蛇の渦巻き高く澄みはえて燃ゆる日輪の輝く下に仰げば尊し玉座の上を遠く近くに拜參する民草の目に溢れ出づる感激の清き涙……分列して玉座の前を「頭右」しての行進に畏くも 聖上陛下には玉座の上から一會釋を賜ふ……國旗は千草の花と咲きみだれ旗々々々黒い服、カーキ色の服夢心地のうちに重くて強い階調の足音がドン／＼と頭に響いて來る、先頭部隊は既に目も遙か彼方にうごめいて進み、打續く集團／＼が長蛇の大陣形となつて、大きい渦巻を帶山一杯に卷立てる何と云ふ素晴らしい事、斯くて分列式は終了し各集團再び位置に整列す、此の時軍樂隊は三方に分れて女子奉唱隊の進出するは宛ら黒潮の津浪の如く大きい靜かな揺ぎを

見せて押寄せ玉座の前に靜止した。

最初「最敬禮」の號令に一齊に頭を下ぐ軍樂隊指揮者の合圖に依つて奉迎歌は若き乙女達の口々から清く澄んで美しく血潮高鳴る感激の響きと共に廣い帶山の平原を流れる……ついで「君が代」の奏樂有る限りの全大衆の合唱である。熱誠溢るゝ十數萬の中音の聲は大地を響かし續いて「天皇陛下萬歲」の熱叫三唱は再び全大衆の口々からほとばしりて帶山平原を揺がした。

茲に我が西日本の精華を擧げた。七萬大衆集團御親閱の歴史的大繪巻を目出度閉ぢた。此の間實に一時閑餘 聖上陛下には終始直立不動の御姿勢を執らせ給ふ……陛下御還幸ありし後解散し、くもの巢を散らした如く赤旗目かけて金箭没する頃歸路!!

光榮ある御親閱を拜受して

玉名郡横島青年訓練所

小 村 勉

秋陽燦然と輝く晚秋の野に畏くも 聖上陛下の御親閱を拜受すべき千載一遇の光榮ある一大盛儀は來た。

廣漠たる帶山練兵場は燦爛たる林立の旗風になびき我々七萬の大集團は 聖上陛下の着御を今やと待ち奉る、十一月十八日午後一時合圖の號音鳴るや式場入口の竿頭高く揚げられる日の丸の國旗、寂として聲なし「氣を付け」の喇叭一聲秋空に高鳴ればやがて「君が代」の奉樂が靜かに流れる……清淨雪の如き玉座に肅然と立御あらせ給ふ聖姿、嗚呼何と尊き神々しさよ！莊嚴の感みなぎりたとへんに物なし、感激に打ちふるう七萬の健男女颯々長蛇の如く分列の隊形となり軍樂隊の吹奏する行進曲に歩武堂々分列を拜受し奉る、長くも 陛下には玉座より一々擧手を以て答禮を賜ふのである。遙か前方より黒潮の如く靜かに玉座近くに參る奉唱隊「あゝこゝにすめらみことの鳳輦を迎へまつれり」の奉唱歌は健氣な女

性の口から清く澄んだ美しい旋律が血潮高鳴る感激の響きと共に進み廣い／＼帯山練兵場を流れ／＼て秋空に餘韻々と消えて行く、續いて知事の音頭で「天皇陛下萬歳」三唱は心の限り聖壽の無窮を祈り奉る。

おう一時間餘直立不動の姿勢にて終始一貫直立し給ひし大御心を拜察するに恐懼の極みである。

此の御英姿を拜し光榮と感激とに無限の思ひを抱きつゝなだれ行く部隊只々嚴肅と云はずに何と云はるか。日本帝國の前途は無窮我等は此の國此の地に生を受け何と幸福ぞや。此の千載一遇の光榮に浴した我々は力の限り日夜自己の完成に志し奮勵努力優良なる一國民となり尊き聖恩の萬分の一にも酬ひ奉らん事を期す。

御親閲の感想

玉名郡山北青年訓練所第二年度 牛 島 時 澄

我等青訓生が一日千秋の思で待つてゐた晴の御親閲は愈よ今だ楽しい野營一夜の夢はいつしかさめて鶴鳴曉を報する頃にはもう目をさまし幕舎内は雑談がにぎやかだ。午前六時起床の喇叭は幕舎連なる夜營地のすみすみまで響き渡る、一同起床し朝の行事をすまし御親閲場へといそいだ。

おう！千載一遇の御親閲の光榮に浴する事の出来た我等は何たる至幸ぞやに、御親閲場に集う青訓生はみんな喜の色に充ち満ち燃たつ訓練旗は今を晴の日と願ふ。

愈よ 陛下を奉迎しお召の自動車はしすしすと場内に進み入る、畏くも 陛下は玉座に立御あらせらる、如何にも凛々しい御雄姿を拜する時唯だ言知ぬ、熱い熱い涙でうるほされた。「前へ」の號令で分列行進が開始せられ軍樂隊の行進曲につれて行進する時一種の靈感にうたれたやうな感激を禁じ得なかつた。如何にも若々しい意氣に燃えた青訓生の分列行進は終つた。其の時玉座の前に「君が代」を奉唱し一齊に唱和する萬歳！萬歳！！萬歳！！やがて喇叭の合圖で最敬禮を行ひ

天皇陛下には龍顔いともおん麗しく御還御遊ばさる、「君が代」の吹奏は御あとを慕ひ奉るかのやうに靜かに靜かに場内に響き渡つた。

おう！光榮に充たされた今日、希望に輝く我等若人よ、感激の日！今日の日の感銘を以て堅實な訓練生として否、忠良なる臣民となり社會の第一線に立ち訓練生としての意氣を遺憾なく發揚しようと思つた。

御親閲拜受の感想

玉名郡木葉村青年團 中 尾 一 則

十一月十八日は來た。空を見れば日本晴の天氣であつた。雲一つ見えず最も御親閲式にふさはしい非常な上天氣であつた。あゝ今日の良き日を僕等は 陛下の前に於て御親閲を受けられる事の出来るのは何と云ふ幸福な運命でありませう何と云ふ光榮の至りでありませう。

時計が十時を報するや僕等一同青年團は帯山練兵場に集合した。時刻は過ぎてやがて十二時頃となれば左の方よりけたましく自動車の音が聞えた。氣を付けの號令下るや一同は注目した一天萬上の 陛下を目の前に拜み奉りて唯々恐懼に堪へなかつた。やがて 陛下は三米の高き玉座に御登り遊ばされ錦旗さんぜんとして高き中空にひらめいた。「君が代」の奏樂が忽ち起つた。あゝ何と云ふ有難く勿體無い事であつたらう。僕等は第三中隊の三分隊として青年團として代表的に選拔された一員である。やがて分列式が始まつて各中隊毎に分列を開始した僕等も今 陛下の玉座の前にと進んで來た一同頭右の命下るや 陛下の方を拜み奉つた。又一天萬上の 陛下におかせられても御自身に玉手を舉げて御敬禮遊ばされた事は、唯此の筆に此の紙に書き表はす事の出来ぬ深い感激にのみ打たれた唯畏み奉り唯恐懼に堪へず唯々言語に云ひ表はす事の出来ぬ感に打たれたのだつた。かくして二時間餘りの長時間に渡つてかしくも 陛下は不動の姿勢であらせ

られた事は實に私共一同かしこみ奉つた。かくして分列式の幕は閉ぢられた。此の光榮ある僕の心より書きこれを感想文としたい。先づ分列式の間、陛下が不動の御姿勢であらせられた事は私の心より死んでも忘れはされぬのである。一天萬乗の陛下におかせられてもあんなに御熱心であらせられたと云ふ事を絶えず頭において今後は一生懸命に訓練に補習學校に勉強し又家事にも精勵して立派な青年團を作り立派な公民として純良なる村を立て此の御親閱氣分を失はず陽に陰に唯君國の御爲に身命を捧げ身命を投じてでもと云ふ覺悟をもつ次第であります。あゝ畏き天子様を間近に拜み奉り陛下の前に於て御親閱を受けたと云ふ事は家のほこりであり又村のほこりでありありますこの事を永久に忘れず今後は君國の爲になほ一層勉勵する覺悟であります。

御親閱

玉名郡石貫青年訓練所

石橋

亘

昭和六年十一月大演習は肥筑の兩野に渡り行はせられ長くも大元帥陛下には御統監の爲大本營を熊本に置かせられ、三日にわたる大演習を終始御統監遊ばされたのであります。又觀兵式地方御巡幸等御忙しき中に鹿兒島を除く九州沖繩諸縣並に山口縣の青年訓練所青年團在郷軍人男女中等學校高等専門學校及處女會等七萬人餘を御親閱遊ばされたのであります。私も其の一員として加はる事の出來たのは誠に有難く光榮の至りであります。

時は十一月十八日午前十時野營地を後にして一路帯山練兵場へと向つた。我等は三集團第一中隊だ。位置について待つ刻々と近づく御親閱の儀式愈々我等の血は高鳴り胸はおどる。午後一時過ぎ突如莊嚴なる喇叭「君が代」の奏樂おゝ陛下の臨御だ、我等は思はず襟を正した。何も例へ様もない、莊嚴なる氣持ちせき一つするものもない。陛下には直ちに御玉座に立たせられ給うた。時に燦と輝く天皇旗思はず知らず自然と頭が下る。突如起る勇壯なる行進の調これぞ戸山

學校音樂隊、赤のズボンも美しく一際くつきりと見える。御親閱が始まつたのだ。愈々我等の番だ、大隊長のかける號令「頭右」仰げば長くも陛下には直立不動の御姿勢にて擧手の禮、之を仰いだ時私の心は萬感胸にせまり唯々有難く感激に打たれ陛下の御爲何事か成さで置くべきかと獨、胸に答へたのでした。

分列が愈々女子奉唱隊「すめらみこと」及全部一齊「君が代」の奉唱も終り最後に本山熊本縣知事の發聲にて天皇陛下萬歳を御祝ひ申し上げたのであります。其の間陛下には約一時間直立不動の御姿勢であらせられました。何とも感激にたえない次第でありました。愈々御親閱も終りました。戸山學校音樂隊の奏でる「君が代」を後に陛下には御出發になりました。御召自動車徐徐と動き出す時には知らず／＼眼には玉の露が宿つて居ました。

あゝ此度の光榮は一人の光榮のみでなく我青年訓練所の代表でありました。私は陛下に對し奉り至誠奉公をばげみ皇恩の萬分の一に報い奉りたいと堅く誓ひます。

御親閱を仰ぎ奉りて

玉名郡練青年訓練所第三年次

井上宇志夫

畏くも天皇陛下は遠く肥筑の山野に錦旗を進め給ひ親しく大演習を御統監遊ばされ又帯山練兵場にて御親閱を行はせ給ひました。謹みて顧みますれば我が縣下の青訓生は何の幸ひ多き事で御座いませう、私は青年訓練生として選抜に預り此の千載一遇の晴れの御親閱に参加の光榮を得ましてどんなに歡喜に胸を躍らせた事ぞせう、我等は十七日勇躍して野營地に集合致しました、準備を終へし託麻原原頭に夕闇漸く迫るや標識燈の灯搖ぎ規律と節制の下に訓話軍樂隊の演奏等野營の夕は圓らかに進み團樂の夜は冷氣と共に深まり明日の光榮を胸に描き無限の緊張と感激を覺へ恙なく野營の一夜の夢を結びました明くれば十八日空は紺碧に澄み互り千切れ雲さへない。數時間後の光榮を前に若人の血潮は燃へ胸は高鳴り

我等の腦裡には湧然として忠君愛國の熱情が漲り平素の訓練に於て練磨したる精神を長くも陛下の御前に表現し聖鑑に供し奉るべく士氣極度に緊張して帶山の廣野に集合致しました。

大阿蘇を背景としたる帶山の原頭には劍尖陽光に輝き掲ぐる校旗、團旗、訓練所旗は微風に翻るやがて被る光榮を前に六萬六千の全部隊は肅として陛下の臨御を待ち奉ればやがて嘯として響き渡る軍樂隊の「君が代」の奏樂裡に玉座に立たせ給うた御英姿を仰いで全員最敬禮を行ひ再び起る軍樂隊の華やかに胸躍るマーチにつれて各隊榮へある校旗所旗を先導に分列を行へば陛下には長くも各隊毎に一々舉手を以て御答禮遊ばされ具に御親閱を賜はる分列終りて奉唱隊御座下迄行進し軍樂隊の伴奏にて若き女性の聲も高らかに光輝と歡喜を謳ひ奉り奉唱歌終りて一同聖壽の萬歳を三唱し最敬禮の裡に還御あらせらる。陛下には連日極めて御多端なる大演習御統監及地方行幸等の御疲勞も御厭ひ遊ばされず我等青訓生の爲長くも終始一時間を不動の御姿勢にて御親閱を賜りました事は如何に陛下が青年訓練生に御期待遊ばされるか伺はれて誠に恐懼感激に堪へない次第でありますこの恩典畏き天顏を咫尺の間に拜し無上の光榮に浴しまして我等青訓生の責務は愈々重大なる事と痛切に感じました。

此後我等は益々訓練所に精勵し心身を鍛錬し忠君愛國の志を強固に思想正純にして質實剛健の氣風を養ひ智徳を鍊磨し内にありては家業に精勵し一旦緩急あれば義勇公に奉じ天壤無窮の皇運を扶翼し奉りて宏大無邊の皇恩の萬分の一に酬ひ奉ると共に此の光榮と幸福を語り傳へて永久に忘れてはならぬと深く決心致しました。終りに臨み天皇陛下の御聖徳を仰ぎ奉りて御玉休の益々御健かに涉らせられる様御祈り奉ります。

御親閱を拜受して

玉名郡府本青年訓練所 荒 木 賢

忠臣菊池武朝の奮戰場託摩ヶ原野營の一夜は明けて、旭光さんとして古戰場を照らす。お、今日こそ待ちに待ちし光榮

の日御親閱の日かと思へば血は湧き肉は躍る。野營地の清潔もいそぐと、午前八時御親閱場帶山練兵場へと向ふ。さしも廣き練兵場も刻々と集ふ光榮の人々によつて埋もれる。六萬六千の若人の顔は今日こそこの光榮に浴せんと喜びの色が溢れてゐる。午後一時天皇陛下臨御の報傳はるや今までの騒音は静まりて各部隊は緊張す。やがて御召自動車の爆音聞え、「君が代」の奏樂裡に御到着遊ばさる。あの自動車に陛下御坐しますかと思へば自然に頭は下る。やがて分列は開始された。眞剣な喜びの餘り忘れ様としてゐた服裝を整へる。「前へ進め」我が大隊は前進を始めた。「左に向きを變へ」で左に向をかへる。と遠く雪白の玉臺に立たせ給ふ陛下が拜せられる。お、なんと言ふ端然さよ、一刻も早く進みたい近づくに連れて喜びと緊張の度は増す。かつて味はつたことのない莊嚴な喜びが底からと湧いてくる。列は正しいか亂れてはゐないか、みだれた様を御覽になつたら陛下はどんなに御思ひ遊ばすだらうかと思へば、そればかり氣にかゝる。待ちに待ちし龍顏、今こそ拜せられるのか、「頭右」はまだか、愈々緊張した。「頭右」一齊に右に向けば清々しい玉臺に陛下は直立不動の姿勢を以て立たせられ、我が隊を見てゐられる。一生に一度は拜せんものと思ひし

陛下、九重の奥深くゐます陛下は今なんの隔りもなくすぐそこにゐます。はつきりと龍顏は拜せられる。そして陛下は我々を見てゐられる。我は迫り來る威嚴に打たれて身を忘れた。瞬間に合ふ眼と眼と心と心陛下は「君等よ頼む」と仰せられる様な氣がし自分は「きつと忠義を致します御安心下さい」と心の中で叫んだ。お、心と心は交ふ。と陛下の右手は鮮かに動いて恐れ多くも陛下には我々に舉手の禮を賜ふ。あゝ我等の光榮こゝに至るか。その時我はピンと靈感と言ふのかなんともいへない或る何にもかに打たれた。陛下は我々下賤の民草にまで本當に恐れ多くも舉手の禮を賜うたのだ。我々の光榮、歡喜、感激、あゝこゝに極まるか、これに如くものはない。感激のうちに自失のうちに涙にむせんで「きつと盡します」と心で答へつゝ御前を通りすぎた。ぐるりと廻つて元の場所近くに来て今きた玉座の方をふりむけば、未だに陛下には直立不動端然と立ち給ひて時々舉手の禮をなし給ふ御姿が遠く見える。その前を部隊はどんな行進して行く。次から次へと。なんと言ふ神々しさだ、莊嚴さだ。陛下には約一時間も寸分だに休まず貴き御身を

以てお立ち遊ばさる。御疲勞には渡らせないかそれさへ氣づかはれた。分列は終つた、奉唱も終つた、さうして 陛下にはお歸り遊ばさる。「捧げ銃」感激の涙にぬれた眼を以て 陛下を送る。「では御すこやかに」と心で祈つた。そして御親閱は終つた。各部隊は解散した。

かくして待ちに待ちし光榮の御親閱は終つた。野營地につきしも感激に上氣した顔色は皆の面にさめなかつた。幕舎撤去の傍ら靈感に打たれた事や「忠義しよう」どなと話し合ひながら作業を終へた。忠義しなくてはいけない、我忠心は頓にました。心も軽く歸途につく。

御親閱の光榮に浴して

玉名郡八幡青年訓練所第三年次 北野元一

昭和六年十一月十八日!!榮えある此の日だ!!

大阿蘇の彼方から朗かに明け放たれた。我等玉名郡の青訓生と九州關係各縣及び山口縣の中等學校の一萬三千は前夜公設グラウンド附近で晩秋の一夜を凌ぎ味爽蹴起それ〴〵武裝をととのへ帯山御親閱場へ一番槍とくり込む。間もなく彩色様々の旗印を朝風に翻し百足の如き行列人人!!まつたく人の波だやがて六百餘の郷軍男女青年團青訓生、男女中等學校高專校を網羅し西日本の精華を挙げた、御親閱の幕はやがて切つて落されるのだ。あゝ歴史的大繪卷の豪華版か?「氣を付け」のラツパ突如鳴りひびけば同時に各集團は各大隊長に大隊長の號令で氣をつけを行ふ數十萬坪の帯山原頭寂として聲なく、昨夜、夜營を共にした某村の某、夜營一夜中雀の早かわりかと思はれる程、饒舌を巧にし我等を寢につかせなかつた彼も、まつたくうつてかはり霹靂そのものだ。戸山學校軍樂隊のメロデーが靜かに流れて来る、やがて大隊長の落ちつきあるそして嚴かな「捧銃ツ」の號令!清淨雪の如き玉座に立御し給ふ 陛下、聖姿の神々しさ!我等はまつたく無想無念!感激!身に餘る光榮千載一遇と云ふ語がある、その通り!!自分は自分を守れ、いつの間にか涙!!一滴!!一滴!!いや

自分ばかりでない周囲の人々も、感極まつて、一滴!!二滴!!あゝこれぞこれ國民の 陛下を思ふ御國を思ふ、清き涙でこそあれ!無想無念とは書いた、!!感極まれるとは書いた!だが〴〵其の時の瞬間はそんな事より以上!まつたく我々は之を筆舌に表現し得べきものではないと信する、嗚呼!なんたる歴史的シーンではないか? 陛下には恐れ多くも我々に擧手の禮を賜ふ。直に「前へ」のラツパ一聲莊重輕快なマーチを吹奏されこゝに中學生を先頭に勇壯なる光榮極りなき一大分列式は開始された、各校旗、訓練郷軍旗、團旗、五彩の色どり又は瞭原の火の如く、將た又秋の千草の咲き亂れたる如く黒の小倉服、カーキ色の郷、調、團、服、歩武堂々數十大隊の大部隊が進む 天皇陛下には一々會釋を賜ふ。かくて分列式を終り九州各縣及び山口縣の代表女軍が御前に進み「あゝすめらみことの」と御親閱奉唱歌の奉唱である美麗なシーンを彩つて莊重な餘韻が全帯山に響きひし〴〵と胸にせまるものがある、之が終ると本縣本山知事の音頭で萬歳を三唱、その聲や、民草の眞心こめて、天地を歴し、遠く阿蘇の山々にもこだませよとばかり響く、かつて西日本の若人の精華歴史的繪卷は靜かに閉ぢた。又莊嚴な「君が代」裡に 陛下には還幸あらせられた。最後に自分は此の御親閱と我國現在の多事多難な秋にあたり之と關聯して考へるのも無駄ではなからうと信する。滿洲事變、國際聯盟、及び世界を對照しての注目的となつてゐる我が日本此の秋にあり西日本の若人を擧げた御親閱の姿は輝しくも、大日本の若きそして強き力を表現し、又青訓生や男女中等學校、男女青年團の御親閱及び分列式に參觀した外國の拜觀武官も「日本ならでは」の感を、さう深めさせ、彼等の心膽を寒からしめたであらう!と、一人微笑んだ!

御親閱を拜受して

玉名郡荒尾北女子青年團員 黒田須磨子

御親閱拜受の光榮を荷ふ幸多き日を指折り數へ曆を繕いて待ち奉つた。前日より營舎についたが此の大任を思ふとき不安と喜びに、安らかなる夢も結ばれなかつた。

十一月十八日、御親閲の當日はほがらかに明けはなれた。昨日來の雨も全く晴れて、清められた式場は一入すがくしく榮えある旭光にみたされた。數萬の團体は、一糸亂れず式場に集り今か今かと御臨幸を待ち奉る間、水を打つた様に靜肅である。正午十二時 殷々たる氣を付けの喇叭遠く長くさしもの廣場に響き渡れば、山なす若人は、さすがに鳴りをひそめ襟を正して玉座を正視する。神々しき現人神の麗はしき龍顏を玉座に拜したる瞬間、あまりの長さに自ら兩眼うるほひ自ら頭を垂る。長時間に亘る分列式に畏れ多くも一々擧手の御答禮を賜ふ。唯々繪巻物を拜するの感。

御前に佇立する意識すらなく、時々軍樂隊の強き奏樂に自己に復るを覺えた。やをら奉唱隊の前進に若人の波は、玉座に近く進み寄つた。咫尺の間に神々しき御姿を拜し、「君が代」の奉唱おのづと聲から細まり行くをどうするすべもなかつた奉唱歌は式場の各所より自然に湧く様に響いた。萬歳の叫びは連山にこだました。其の瞬間再び新しき感涙は頬に流れた御還幸の時最敬禮の間、只々聖壽の萬々歳のみを祈つた。

大任を果して歸る足も輕やかに。包みきれぬ感激の色は面に表はれてゐるが、數町の間は何等話も出なかつた。

御親閲を拜受して

玉名郡玉名村女子青年團 宮 川 て つ

一天萬冷錦繡の秋はたけて、碧空に輝く陽光はいやが上に照り輝くのでした。一天萬乗の 聖天子をお迎へ奉る肥後の山野は五彩の色どり鮮かに裝ひて、光輝ある御親閲の日を待望致してゐました。

露營合宿の夢は遂にさめて、一生一度の榮ある十八日は訪づれたのでございます。選ばれた九州各縣の青年團は整々堂々帯山の地に進みました。群れに群れ夥しき拜觀者は、既に帯山を十重二十重に取り圍んで、今日の盛觀を拜せんと早朝よりつめかけて、其の數十萬を下らず。其處此處に起る萬歳のどよめき、喜びの亂舞、全く黒山の垣が出來てしまひまし

た。瞬く間に秩序整然として、各團体は位置につきました。強き國民として選ばれた小さき私には、此の貴き榮譽をになふ嬉しさが心の底からこみあげて参りました。一分一秒と時の刻まれるにつれて、心臓の鼓動は高鳴り身も心も緊張な態度に引きこまれてしまひました。さうして私共七萬の若人達は寸刻の後に 聖上陛下の御親閲を仰ぎ奉るかと思へばあまりの恐れ多さに感激の涙さへ光るのでござりました。碧空に轟く一發の合圖に高鳴る胸を抑さへて靜かに、聖駕の御着を今か今かとお待ち申してゐました。菊の御紋章が旭光に輝いたかと思ふと、軍樂隊の奉ずる「君が代」の曲は、帯山の空に響き渡りました。嚴肅に莊重に。私達は全く身も心も一体となつて唯々頭が下るのみでございました。靜に頭を上げて眼前を仰げば、恐れ多くも 聖上陛下は、御座所に御起立あそばし、私共七萬の若人をみそなはせてゐられたのでございませぬか。嗚呼——かしこさに涙こぼるる——全く私共は感激の極に達してしまいました。奉唱歌天地もひびけと聲の限りに歌ひましたもの、唯ありがた涙に咽んで無我無中の境地でございました。此の光輝ある有意義な御親閲に浴しました榮譽を永久に記念致しますと共に、私共は再生の決心を致しました。

御親閲に参加して

玉名郡米富村女子青年團員 橘 木 子

まぼろしにうつゝに描いてゐた、畏き大君の御英姿を何時眞實に奉拜する事の出來得るであらうかいつも一本／＼と指數の減るのを見ると何に譬へ様のない嬉しさで一ぱいでした。そしてその當時の面影が眼前に髣髴するばかりでした。おゝ我等肥の國民の眞心から壽ぎ奉る光榮に輝く日唯々私共はかたじけなさに涙がにじむばかりで御座いました、あこがれにあこがれてゐた出熊の日同じ希望に輝いてゐる私等は一時も早く御英姿を奉拜したい心が一ぱいで汽車の歩みもまどろい様な感じが致しました。鶴首して待ちに待つた御親閲も好天氣に恵まれいやが上に私共の胸は高鳴るのでありました。

いよいよ今日こそ日頃の希望も達せられるであらうと思ふ時ほんたうに今日の光榮を感謝せずにはゐられませんでした。一時十分帯山御着の合圖に私共はハット袴を正しはるか向ふの玉座を一齊に注目致しました。はるか彼方から御英姿を拜み奉つた時こそあゝほんたうの陛下であらうか夢ではなからうかといくら思つても尊き御英姿に唯々私等は茫然としてなんとも現はしがたい氣持が一ぱいで思はずかたじけなさに涙がこぼれ實に筆舌の盡すところではありませんでした。一時も早く分列がすみ私等の番の來るのを胸おどらせ今か〜と待ちました。刻一刻と時は進みいよ〜奉唱休前に進めの號令に足は勇み御英姿の御前に進み出た時思はず知らず頭が下りました。いよ〜指揮者の合圖で「あゝこゝにすめらみことの」と奉唱する時こそ私の存在すら忘れ眞心からあらん限りの聲を出し現にすめらみことの御前で奉唱する私の幸福を感謝しいかなる幸かかしこさに思はず涙が頬を傳ひました。

千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで御榮へましますと祈りつゝ、天皇陛下萬歳を三唱致しました、お名残りは何時までもつきぬうちに早御親閱式も終了し御還幸あらせられる御姿を伏し拜み光榮に浴した今日のほまれを萬世に語りつぎつゝ壽ぎ奉らうと誓ひつゝ、歸途に着きました。

御親閱の感想

玉名郡平井村處女會 林 田 志 枝

あゝ昭和六年十一月十八日何と私達の胸にひびく感激の日だつたでせう。此日こそ私達にとつて感銘深き記念すべき一生のほまれの日なのです。日數數へて來らん光榮の日を待つた私達の氣持は筆舌に盡されぬ喜びで満たされて居りました。いよ〜時日はたつて熊本につき前夜はほがらかなおいのりをすまし、多くの友と枕を並べました時、陛下の極く近きおひざ元に休ませていただいたといた光榮に胸のおどるのを覺え目はさへて寝つかれずうつら〜とする中に夜は白々と明けそ

めしました。明るい氣持で心の浮きたつのおさへ式場へと進みました、待遠い〜幾時間かの陛下の出御を待ち時間になりました時は氣持もびんとしまつてきました。式は靜々と進みましてやうやく奉唱部の順になりました、今こそ私達の進み出る所となり一步一步前進致しました時の胸のときめき感激に只々ふるへるばかりでした。そして陛下の御姿を拜みました時は何と云つたら良いでせうか、云ひ知れぬ有難さに胸はせまり嬉し涙に幾千の乙女はまぶたをぬらしました、その奉唱歌はふるへてしまひました。あの尊い姿こそあがれに憧れた眞の御英姿ではありませんか。私達は只々「あゝ」と感激の聲を發するばかりでした、かうした。

かうした喜びの日を迎へました、私達は生ある中は勿論生終りし後も萬世の有難き幸を語り傳へませう獨り我身のほまれとして、なく家のほまれとして。

御親閱を拜受して

腹赤公民學校後期一年 池 本 カ ツ 子

昭和六年十一月十八日は私達に取つて記念すべき日でありました。はしたなき私は腹赤村の處女會員の一人として畏くも聖上陛下の御親閱を受けることの出來る光榮に恵まれたのであります。何と感謝したらいいでせう。あの廣い〜帯山練兵場に——然かも何十萬と言ふ拜觀者の十重二十重に取りかこんだ式場に立たせられた時、私の心はもう此の光榮に浴することの出來たうれしさで一杯でした。何だか夢のやうにさへ思はれて時間の立つのさへおぼえません。

やがて一發の煙火は森嚴なる式場の空氣を破つて響きわたりました。すわ陛下の御入御五萬に餘る學生青年處女は勿論拜觀者すべての者の眼はひとしく西北の一角にそゝがれました。咳一つ聞えませんが、式場は水をうつたやうな靜けさです。その中をお召自動車は靜々と進んでまゐりました。自動車がとまつて一丈餘りの御親閱臺の上に私達九千萬の尊い陛下の御姿を拜し得た時私の心は雷氣にでもうたしたれやうにびりつと引きしまつてしまいましたもう自分自身さへ分りま

せん。唯はるかに拜する。陛下の御姿に全身の注意をそゝいでゐるだけです。御親閲がはじまつて一隊づつ陛下の大前を通り行く、學生青年に對して陛下には恐れ多くも數時間直立不動の姿勢を以て一々御會釋あそばされるありがたいその御聖徳をはるかにふしおがんで、唯々大御心のありがたさに泣かされました。學生青年團の御親閲がすんでいよいよ私達の奉唱の番となりました。さく／＼と足音高く進んで行く時の心、何と言つたら言ひでせうか。一生一代の光榮ある此の大任を無事果したいと言ふ覺悟と限りなき御聖恩のふかさに對する感激より外に何者もありません。所定の位置について間違なく尊くもけだかいうるはしい御尊顔を拜し得た時私の心はどんなであつたでせうか？餘りの恐れ多さに餘りのありがたさに生きた心地も致しません。軍樂隊の樂の音がひびいて奉唱が始まりました。私は全身よりほとばしる赤誠をこめて一生けんめい歌ひました。然しながら御慈愛にみちあふれたうるはしい御姿を拜しては唯々もうありがたくておそれ多くてやゝもすると聲の小さくなつて行くのをどしても禁じ得ません。はては涙さへあふれ出てまいります。三番の「あゝ吾等生ける甲斐ありおほけなき今日のほまれを……」に到つてはどうしても涙で歌へません。全身の聲をしぼり出してやつと涙まじりに歌ひ終つた時初めて私は我にかえつたやうな氣が致しました。でも涙はなほほゝをつとつて流れてなりませんでした。

ほんとうに私達は此の世に生ける甲斐がありました。私は尊い記念すべき十一月十八日を一生胸にいだいて陛下の御聖恩にそひたてまつるやうつとめてゆきたいと思ひます。

御親閲の感想

鹿本郡米田村青年團 星 子 千 齡

榮ある十一月十八日は日頃期待せし御親閲拜受の日である。長くも陛下には御寸暇なきの節我等青年團の御親閲を仰ぎ奉るの有難さよ。此の光榮の御親閲を拜受するの我等永久の記念として深く御聖旨に報ひ奉るべきである。御親閲の日

帶山練兵場の莊重なる氣分こそ忘れ得ず、只畏さに心も身体も共に緊張し見事に引きよかしと祈るのみ。靜かなる中に整然として進む分列式の行進。臺上高く龍顔を拜し奉るの時、電光に打たれたるが如き感ありて極度の緊張と感激を覚え、御英姿の尊さに感泣するのみ。陛下かくも深く、我青年團の上に大御心をお注ぎ遊ばさる事の深きを思へば感泣の外なし。酬ひ奉るに青年の修養を益々はげみ青年團の發展に献身努力し以て御聖旨を安んじ奉らん事を期するのみ。御親閲の光榮を拜受し御英姿を拜し奉りし我等益々心身の修養に努め内外多端なる帝國青年としての責務を充分つくすべきを深くちかふのである。

御親閲の感想

鹿本郡三嶽青年訓練所 一 森 敏 行

一時に起きた。どんよりした空模様で晝まではどうかとあやぶまれた。しかし今日は一天萬乗の大君が吾等青年の意氣澁刺たるものを肥後の野において俯はせられる光榮の日である。雨がなんだ。光榮におどる感激を胸につむむ若人の身には寒さも雨も物の數ではない。

熊本驛についたのが午前六時榮光にかゞやく黎明の都は清々しい中にも、生氣がハチ切れさうだ。目を廻らせば純白で端正な大奉迎門が電燈の照明でツツキリと浮き出して見える。僕等は、中隊編制の爲、高工へ向つた。途中の町々は装ひなり、歡喜に満ち／＼して居る。花電車が通る、シルクハットの紳士が行く、僕はもう御親閲氣分に浸つてしまつた。

練兵場へ着いて見ると嚴肅な空氣が迫つて來て誰一人笑ひ話をする人も無い。懸念された、空も今は全く晴れ渡り秋陽うら／＼かに照り映へて、純白の玉座は銀色に輝いて居る。さしにも廣き練兵場も、民草の感激と熱とで一パイだ。御出の時刻が、刻々と近づくにつれて、吾等の感激も高潮して行く。午後一時十分、大國旗は揚げられ、玉座には長くも、御英姿を拜し奉り、人々の感激も絶頂に達した。一段低い所には、天皇旗が燦然と輝いて居るのも拜せられる。何と云ふ嚴肅

な大式場だ！人々は感激に酔つてしまつたかの様だ。お、軍樂隊の奏樂である、マーチが聞える。分列式が始まつたのだ。武装せる學生團は、校旗を先頭に、歩武堂々前進して行く、續いて、吾等青訓生の分列式である。奏樂につれて、前進！「頭右」の號令で龍顔を拜した。此の時、陛下は擧手の禮を賜はり、御會釋まで賜はつたやうに拜せられた。賤が身をもちながら龍顔に咫尺したる恐れ多きに、血は高鳴り、顔面はビリ／＼と痙攣して、瞳の潤ふのを何する事も出来なかつた。此の時は私に限らず總ての人々が、世に比なき大君の御爲なら、命は決して惜くはないと、思つたに違いない。私は如何なる大悪人でも、大君の御顔を拜したならば必ず祖國愛は焰の如く燃へ立つであらうと思ふ。分列式は嚴肅の裡に終つた。奉唱部隊がゆるやかな奏樂につれて靜かに進み、形を整へてピタリと止まつた。嘖嘖たるラツパの「君が代」はと言ふ、前奏にて男も女も皆一齊に奉唱したが、怒濤の如き聲は託麻原頭一帶に響き、消へて行つた。嵐の如き餘韻は遠く外輪山の彼方へ……華美にして、莊嚴な、奉迎歌の奉唱は、吾等を一層感ぜしめた。最後に、知事の音頭に和して、聖上陛下萬歳を三唱したが、此の萬歳の轟が阿蘇の山々に消へる頃、陛下は、御召自動車にて還幸遊ばされた。かくして、御親閲は終つた。

私は聖壽萬歳を四方の神々にお祈りして感激のまゝ歸途に着いた。

御親閲感想

鹿本郡稻田村青年團員 金 光 元 喜

我々の期待したる日は來た。忘れもしない昭和六年十一月十八日である。この日、日本晴の託麻原頭に光榮に輝く若人六萬六千餘に達し、前夜來野營又は舍營をなしてこの榮ある日待つた參加團員は早朝より續々と集合した。劍尖は陽光にかがやき掲ぐる校旗團旗訓練所旗分會旗はその數何千本とも知れぬ。旗は風に翻り集ふ陪觀者何萬人なるか覺えず。人

の波旗の波しかして肅然として聲なく、陛下の着御今や遅しと御待ち申す莊嚴さとへんにもなし。午後一時十六分嘖嘖として響き渡る軍樂隊の國歌奏樂裡に、天皇陛下は着御遊ばさる。直ちに最敬禮を受けさせらる。次で軍樂隊が奏する華かにも胸躍る行進曲につれ各専門學校生徒を先頭に、中等學校青年訓練所青年團在郷軍人と順次に分列式は舉行された。陛下にはその間長くも終始直立不動の御姿にて御親閲を賜はる。神々しさ筆舌のよく盡すところにあらず。唯々感激の涙にむせぶのみであつた。分列式終つて三班よりなる奉唱隊一萬五千餘は軍樂隊伴奏で、若き女性の聲高らかに光輝と歡喜を謳ふ奉迎歌を奉唱す。終つて本山本縣知事の發唱にて、天皇陛下萬歳を三唱す、その聲野を壓し天にとゞろき金峯山もゆるぐ程であつた。午後二時十六分、陛下には一同最敬禮裡に還御あらせられた。斯くして御親閲は終つた。その隊伍の堂々たる、輝きと歡びに躍る步調に日本青年の輝かしさと力強さを深く感じた。我々はこの千載一遇の榮ある御親閲を賜はりこよなき光榮に感激の情に満ち／＼てゐるのである。

顧みれば、陛下御駐紮中如何に御多忙にあらせられしかは、ただ／＼恐懼し奉るの外はない。三日間に亘りて大演習御統監あらせられし後大觀兵式を御舉行遊ばされ更に地方行政を仰せ出させ給ひ、教育に産業に地方行政に乃至は司法事務に其の他各般に亘りて大御心を注がせられたのである。その間消防組及び男女學生青年團在郷軍人團等を御親閲遊ばされ尙侍從御差遣遊ばして、民業を奨め教化を盛んにし風俗を振張し神を敬し祖を崇め老を慰むる等の御聖旨を垂れ給ひたることは是眞に申すも畏さの極みである。

また皇后陛下におかせられては零下三十度といはれる滿洲の野に支那軍と交戦中の我が將卒に對し澤山の眞錦を御下賜に相成り我々國民を子の如く御愛撫遊ばさるゝ、兩陛下の皇恩の鴻大なるに九千萬の民草は今更の如くに感泣するのである。我々は層一層奉公の至誠を捧げ奉り、業に勵み職に努め而して身をば憤み以て皇恩の深きに報ひ奉るべきを期せねばならぬ。

御親閲の感想

鹿本郡三玉青年訓練所

池田敏輝

昭和六年十一月十八日御親閲日噫々何たる光榮の日ぞ南國の民草九州健兒の魂は深き感激と無二の光榮にふるへ戦いた。我等は今日の佳き日を天に幸あれ地に恵あれと如何ばかり祈念し奉つたことか。

寢食共に忘れて待望した光榮の日は遂に到来した。晩秋の靈氣天高く澄み地に濃くみなぎり歡喜と光榮に輝く託摩原頭帶山練兵場に集ふ六萬五千の郷軍青年處女各團員林の如く立ちならぶ各團休旗に流石に廣大を誇る練兵場も立錐の餘地なく埋められた。壯觀は實に言語に絶するものがあつた。我等は胸うつ怒濤にも似た感激と歡喜を抑へて、陛下の御臨幸を待ち奉る。午後一時全員「君が代」の奉唱奉迎裡に、陛下には自動車兩簿を以て着御直ちに玉座に立たせ給うた。年に幾度か儀式の際學校に於て御尊影の尊さを仰いでゐた我等が今目前に、陛下の玉座を拜した瞬間我等七萬の全員は一種言ふべからざる嚴肅の氣にうたれ其の有難さ尊さに胸に溢るゝ感激の血潮は涙となつて落ちてきた。最敬禮の號令待つまでもなく我等の頭は一樣に下つた。靜かに頭を上げて玉座を拜すれば恐れ多くも、陛下には擧手の禮を賜うた。「何たる光榮ぞ」人ありて人なきが如き場内に初めて軍樂の音勇ましく分列行進は開始せられた。「頭右」の最敬禮に對して各團休毎に、陛下には一々擧手の禮を賜ふ。我等は今玉座を離ること僅かに數十米、間近く龍顏を拜し奉ることの光輝は魂の奥深く揺りうごかす感激に胸せまつてまるで夢の様であつた。終始約一時間、陛下には玉座に直立不動の御姿で御親閱遊ばされた。其の尊き御姿こそ眞に生ける神そのものゝ御姿であつた。全員異常の感激裡に、天皇陛下の萬歳を三唱する天をゆるがし地ふるはすその叫びは實に溢るゝ赤誠と感激そのものであつた。かくして御親閲を無事終らせ給うた陛下には全員「君が代」奉唱奉送裡に大本營に還幸あらせられた。折から「休め」の號令に始めて夢からさめて我が意識に歸つた様な氣がした。

陛下には海陸遠き九州の果までも尊き玉座を進めさせられ給ひ皇軍鼓舞と民草の上を思はせられる大御心の有難さ我等は今日の光榮と感激に唯如何にしても皇恩の萬分の一にも添ひ奉る様に御奉公由し上げねばならぬと深く深く感じた。十一月十八日その日こそ我等の永久に永久に忘れる事の出来ない否忘れぬ感激と光榮の日であつた。

御親閲拜受感想

鹿本郡大道村青年訓練所

緒方至誠

そも我れ如何なる佳日に生れ遭へりしぞ？泰平の御代此の西陲の地に聖駕を奉迎し剩へ名も無き一青年の身を以て親しく陛下に咫尺し奉るの光榮を擔ふ。時維昭和六年十一月十八日。晩秋の空に紺青に澄み山野は紅葉の錦にはえて閭巷の天地に菊の香滿つ。

此の日親しく九國の學生青訓處女在郷軍人七萬の狀をみそなはず。さしにも廣き城東山練兵場も全く人の群を以て埋めらる。定めの際に分秒の差異もなく啾唳たる軍樂隊の國歌吹奏裡に遙か場の西南に當る正門の彼方に、錦の御旗は見初めぬ。「氣を付け」の號令も今日は一身に泌みて嚴かに響き、拜受團隊は勿論埒外の群衆もひとしく襟を正し滿場寂として聲を吞む。鳳轡は次第に進み、やがて正面玉座に悠然として立たせ給ふ。陛下の御英姿。刹那「夢には非ざるか？」と我を疑ひしかと拜し得た瞬間思はず知らず溢れ出る涙を如何ともなし得ず。再び起る國歌吹奏に初めて知る「有難さ」の情感御親閲は開始せられぬ。幾萬の人の流れ、合間々々を彩る數百旒の校旗、青訓旗、郷軍旗。それ等の目に入るも東の間、愈々我等の大隊となる。人我の見堺もなく唯無我夢中。「頭右つ」大隊長の號令一下振り仰ぐ眼前。擧手の答禮を與へ給ふ神々しき御尊影！。「ハッ」と胸を衝く一種言ひ知れぬ感情。胸は高鳴り心は跳る。唯無意識に大地を強く踏みつゝ進む。奏唱隊の優雅なる奉唱もすみ、のども破れよと熱誠こめし。陛下の萬歳三唱、玉座に御姿は消え御車を奉送し

て後始めて我を呼び起し得ぬ。
あゝ恵まれし其日よ。幸多かりし其の時よ。

御親閲拜受感想

鹿本郡大道村青年 奥村 貞雄

希望と元氣に満ち／＼た若人が今日は異様に明るく、朝の挨拶も何となく威勢がよい。「シツカリヤルゾ」といふ氣分が自ら面上に溢れてゐる。廣大を誇る帶山練兵場も忽ち人の原と化した。七萬の若人等は胸を躍らせながら靜かに時の來るを待った。程もなく軍樂隊の奏する「君が代」の國歌は靜かに而も嚴かに人の原に響き渡つた。現人神に在ます

陛下の御姿は今正しく正面の玉座に立たせ給うたのである。夢か、非ず。現か。然り。人もなく音もなく唯恍惚としてしばしは感慨無量。數萬の群衆寂として聲なし。「ハッ」と我に返つた瞬間、始めて知る勇敢なる行進曲。御親閲は既に開始されてゐるのだ。一隊又一隊、唯一つの大なる機械運行之如く、靜肅に勇壯に。愈々我等の大隊となつた。「頭一右つ」號令一下、唯一人の如く一齊に。何といふ有難さだらう。陛下には正しく擧手の御答禮。拜し得た其の一刹那。恰も電氣に打たれた如く、一語言ひ知れぬ感に打たれたのである。双頬を傳ふ涙に氣付いたのは、それから數刻を過ぎて「天皇陛下萬歲」を三唱した後であつた。

歸來家人に此の光榮を談ずるに老母は兩眼に涙を浮べ早速「神棚」「佛壇」に御燈明を點じ暫し黙禱した。私も亦共に。

感想

鹿本郡千田村處女會 増田 ツミエ

輝ける皇國の平和に續く昭和の御代も早や六年秋も愈々更けて野も山も紅葉に染まる十一月、ほまれも高き吾が郷土を

中心に舉行せられし大演習にかしこくも大君の行幸を仰ぎ、玉歩を止めさせられし十日間 陛下には寸時の御暇も無くそこかしこ御巡幸遊ばされた。

十一月十八日、恐れ多くも陛下には帶山練兵場に於て、在郷軍人男女青年團並に、男女中等學生を御親閲あらせられかしこくもかしこき極みであつた。光榮に浴する御親閲拜受者七萬餘名の中にいやしき農村の私も參加の光榮に浴し、大日本帝國に生れし身の幸福を泌みじみと感じさせられた。四邊紅葉の錦におほはれ、空はさながら湖水の面の如く、一點の曇り無き日本晴れは、ほまれに輝く秋の一日を莊嚴なる氣に包んだ。午後二時頃御車の音も、おごそかに軍樂隊の奏する「君が代」と共に御車は場内に……玉座の上に立たせられし御英姿をはるかに拜した時かしこき胸はつまり涙さへ湧くのだつた。在郷軍人男子青年團中等學生の分列式は開始され 陛下には各隊毎に御答禮あそばされ、終れば愈私共の奉唱玉座の御前百米の所迄進み靜かに、そして心からなる奉唱歌を……歌の進むにつれて感激は高潮に達し双眼の涙は禁じがたく、唱ふ聲すら涙にかすれて小さく低くなるのだつた。莊嚴なる中に奉唱歌もすゝめば全員一同「君が代」奉唱續いて萬歳三唱、その數分間の緊張せる氣分と、かしこさは云ふに言葉を知らず、唯々感激の涙の他はなかつた。

御親閲も恙なく終へさせられし 陛下には玉座を下りさせられ軍樂隊の「君が代」奏樂の中を御召自動車にて大本營に向はせらる御車も、涙にておぼろに拜された。

あゝ身の幸、おゝこの涙七萬餘の人々の同じふする所であらう。

御姿をおろがみまつるおほけなき今日の譽は身に餘りけり。

帶山原頭の感激

鹿本郡米野岳村青年團員 朝倉 智

東の大阿蘇の連峯海かすみ今日の來るを靜かに待つてゐる。九州近縣男女中等學生、男女青年團、青年訓練生、高等專

門校生、在郷軍人會員六萬六千の若人が御親閲の光榮に浴すべき十八日は來た。吾々青年團員は中學濟々費に集合し帶山へと歩を進む。秋色に色彩られしすべての大自然もある限りの力をもつて今日の晴の日を祝してゐるかの様である。

各集團は聖上の着御を待ち奉る。着御の時刻迫れば、喇叭鳴り「氣を付け」この時戸山學校軍樂隊の「君が代」吹奏裡に風聲着御。秋陽麗かに若人の頬に照り映えて肅然たる氣みなぎり渡る時天皇陛下の御尊姿を高さ玉座の上に仰ぐ。喇叭一聲軍樂隊の行進曲に伴ひ玉座前端的學生部隊より行進始む。吾々青年團の分列大君の御前に威容を整へ「頭右」の敬禮拜する御英姿の神々しさ仰ぐ若人の眼には涙が……涙が宿されてゐた。やがて一萬五千の女子奉唱隊は左右前より軍樂隊の誘導にて隊形を整へ最敬禮の後「あゝこゝにすめらみことの」奉唱歌を奉唱す。若き女性の感激の聲は高潮に達し、聴く者をして襟を正さしめる。終るや全員「君が代」を奉唱し續いて本山縣知事の發聲に合せて天皇陛下萬歳を奉唱す。時に午後二時十二分。ついで陛下には奏樂裡に還御遊ばされた。御親閱場に於ける一時間陛下には玉座に直立せられしまま身動きだに遊ばされず參加部隊へ御眼を注がせられ給ひ大御心の深きに打たる。帶山原頭晴の行事も夕陽金峰の彼方に沈まんとする頃若人の感激新たなる時無事終了。

我々は道の國日本の人民たるの喜びを深く暗示させられ、輝く日本の行方を教へられた。何處迄も使命に生きて郷土を守り、若人特有の清新潑刺の意氣を以て祖國日本を眞に美はしき日本となす事に全力を盡さねばならぬ。若き血潮のみなざる純眞な誇りと歡ひとを以て、大御心にそひ奉る事が吾々若き者の使命であらう。

御親閱拜受感想

鹿本郡山鹿女子青年團

寒 香

縫

御親閱拜受の千載一遇の光榮に浴するを得た十一月十八日澄み渡つた秋晴れのこの日は至上の喜悅として私の腦裡にあまりにも、はつきりと、印象づけられて居ります。

二三日前まで降つてゐました雨もきれいに晴れて、親しく陛下の臨御を仰ぐ日の輝かしく喜びにみち／＼た、あの帶山練兵場純白の布もて蔽はれし高き玉座、やがて御風聲は靜かに着御あらせられました。そしてお若き陛下の尊き御英姿をはるかに玉座の上に拜しました時、思はず緊張しました。天皇旗の金色の御紋章が和やかな秋の陽光をうけてきらきらと輝いて居ります、戸山軍樂隊の奉する「君が代」のメロデーが廣い／＼練兵場内にいとも莊嚴にながれてまいりました。勇ましく凛々しかつたあの分列式、數しれず竝んだ團旗の美しさ捧つ／＼をして御前を通る毎に、擧手の御答禮を遊ばす陛下の白い手をはるかに拜されました、勿体なく感じました。長く／＼續いた分列式もすみ、いよいよ私達數萬の乙女の奉唱部隊の前進がはじめられました。これからいよ／＼陛下のみ前に出で奉唱申し上げるのかと思ひます時いひしれぬ喜びで胸が一ぱいになつてまいりました、眞黒の上衣に眞紅のズボン姿の軍樂隊が三方に分れて行進してくる、その凛々しかつた事は今尙はつきりと私の頭に殘されて居ります。陛下のお姿がだん／＼に間近に拜される様になつてくるにつけ、なんともいひしれぬ感にうたれて、ます／＼緊張を感じるのです、眞心こめて奉唱申し上げます私の目には、ついに感きはまつて涙がにじんで來ましておわりの方はどうしておうたひ申し上げたか自分でもわからなかつた位でした。思ひますればなんてまあ恵まれた私でございませうか。

あの神々しい御英姿を、あまりにも目近く拜することができたとは、かゝる尊い日本國に生を、うけ得た我身の幸福を心から喜ぶと共に陛下のよき赤子としてその廣大なる御恩の萬分の一でもおむくひしなければと強く／＼感じたことでもあります。

御親閱參加感想

鹿本郡來民女子青年

高 田 君 代

菊香る十一月十八日千載一遇の光榮の日は來た。我等若人六萬六千の待ちに待ち奉つた御親閲の御盛儀の日は遂に來た

のだ。

この日天空一碧一片の雲影さへ見えず、和氣麗かに帶山原頭を包む、靈峯阿蘇の連峯は燦たる秋陽の中に遠くその勇姿をみせ、やすらかな大自然は今榮光と歡喜とにみちてゐる。さしにも廣漠たる帶山の天地が人々、人の波だ。人の洪水である。御親閱の榮光を仰ぎ奉る七萬の若人と、陪觀者拜觀者の數萬の大衆が心は皆一途に、聖上の御着を待つ。息つまる様な嚴かな緊張の數分が過ぎる。午後一時十分。式場高く國旗は掲げられた。聖上御着のラツパが帶山の空氣をふるはす。「只今天皇陛下御着になりましす。ラヂオの聲が意義ある今日の御盛儀を放送する。お、遙か彼方に立たせ給うた姿こそ天が日本帝國をしろしめす一天萬乘の大君の御尊姿にてあらせられるのだ、畏さに有難さに何とも云へぬ感激で胸の中が熱くなる。ハラ／＼とせきくる涙!!涙瞬間みんなの心に同一の何物かのなみだぐましい感情が相通してその波動は大きく波紋をえがいて、天と地と人と、すべてをその歡喜の渦の中に融和してそこに美しい神靈の世界が出現してゐるかの様だ。風にへんぼんとする無數の國旗のきれいさ、足並の立派さ、戸山軍樂隊の勇ましい軍樂の音につれて分列式は進軍する幾萬の團体が長い／＼大行進をつゞける、恐れ多くも陛下には、いろ／＼お答へになつてゐる様だ團旗の御前を通過する度に右の御手をお動かしになるのがかすかに／＼拜察される。ついで愈々私達女子奉唱隊の番が來た。三方から玉座近く接近する間近に玉體を拜して、いよ／＼萬感胸にせまる。龍顏實に御麗はしく、不動の御姿勢にて始終御會釋を賜ふその御態度のもつたいなさ、身にあまる榮光に、みなひれ伏して感泣するのだつた。いまこゝに、すめらみことのみ姿をおろがみまつる。高らかに唱ふ奉唱歌は高い青い秋のみに空に、こだまして火の國乙女の様な赤誠を捧げ奉る、

天皇陛下萬歲私は力一杯叫んだ腹のどん底から 天皇陛下の御安泰皇室萬歲を叫んだ。

思へば一句にわたつての行幸その間大演習御統監に地方行幸に、いさ／＼か御疲勞の御様子も拜せられず實に澁刺たる御態度にてあまねきめぐみを垂れ給ひ學業に産業に延いては、私等青年にまで御親閱の榮光を賜ひ深淵にして濫き大御心に私は只々恐懼敬虔の念に身も心もとけいるばかりであつた。國家興隆の基は青年の修養に待つこと多し、攝政の御時の青

年に賜はりたる御勅語を力強く味はつた。日本は若い時は世界のしのためだ。今に輝く朝の太陽に向つてわれらの覺悟と決心とは強い。それが私達の使命であり、生き甲斐ある眞實の生活である。天皇陛下御退出の後しばしこの信念に頬は赤く眼に熱いものが流れた。

感想

鹿本郡稻田村處女會 本 田 文 子

朝まだき空には美しい星がまたたいてゐる。冷たい清澄な空氣はまだ夜明前の沈黙を續けて、道の電燈がにぶい光を地上に落してゐる。今日は！かしこくも 聖上陛下をおろがみまつる日だ。息づまるやうな、そして歡喜におどる胸!!思はず握りしめた兩のこぶし!!私はひたすらに英姿を拜する時を待つた。絶好の好晴に恵まれて集ひ寄つて來る幾百幾千の人々その顔の一つ一つが今日はまあなんと喜悅に満ち満ちてゐることだらう。これだ!!こゝだ!!すべての人のこの喜びの様子。富めるもの貧しきもなくとけあつたひとつ心。さうだ。私達民草のすべてが一樣にさ／＼げ奉る「ひとつ心を持つてゐるのだ。この「ひとつ心」に日本國民のみを持つ「ひとつ心」に一點でもにごりがあるだらうか。否否、あつてたまるものか。すべてがうれしさ有難さに燃えてゐる。私は生れてこれ程「有難い」と云ふことを痛感したことはかつてない。

陛下の御發聲を告げる十發の砲の合圖!私達はいよ／＼み姿を拜し奉るのだ。今すぐここで、おそれおほくも御座所を幾何もへだたない所で!野に生ひ立つた草の様に果てもなく立ち並んだ二十萬の赤子は、いまか／＼と陛下の御着を待つた。御着聲!赤色の地に黄金色の菊の御紋の天皇旗が御座所の右側にさ／＼げられた。低く更に低く頭を垂れた全身が感激にふるへて、はらはらと涙が頬をつたふ。最敬禮を終へて臍を玉座に點すればお、畏くも陛下には不動の御姿勢で御答禮をたまはり、玉顔には民を愛で慈しみ給ふ微笑すらたゞえられてゐる様に思はれた。おろがむと云ふ言葉がこ

の時程いたく身にしんだ時はない。おろがむ!!私達は心からおろがんだ。有難い!!有難い!!いつてこの時程ありがたい事があるだらうか。今自分は 天皇陛下の御前に立つてゐる。今までの苦痛も悲しみもその影をひそめて自分の心の中にあるものは、ただ 陛下のみ姿とたとへ様もない有難さとそれだけだ。陛下のみ姿を拜したその瞬間から心のごりは美しく浄化されて、あるものは有難さと感謝の心である。深い感激である。日本國民にのみ許された君に對し奉る情である。約一時間あまりの分列式がすんで私達は奉迎歌を奉誦し奉つた。一條に唯ひとすちに感激した數千の人々の聲がひびいた。靜かに玉座に立たせ給ふ 陛下。あゝ 天皇陛下。私は日本國民であることを深く深く感謝する。唯もう喜びで涙があふれた。萬歳!!萬歳!!萬歳!! やがて「君が代」奏樂裡に最敬禮を終へて再び顔を上げればもう拜することは出来ないと思つてゐた。陛下は名残惜しげな御様子でじつと見下してゐ給ふ。うれしい。うれしい。幾十萬の民草は喜びの絶頂に打ふるへた。いと靜かに玉座より下り給ふ 陛下を御見送りしつゝ喜びに涙があふれた。

この感激!この有難さ!この吾の身の幸!。私は民草として恥ぢない行をなさねばならない。世の中を歩む時事にふれ私の心にひそむこの感激が私をして立派にみちびいてくれると思ふ。忘れてならうか!この喜びを。此の感激を。

特別大演習御親閱拜受感想

鹿本郡山本村處女會員 三 城 都 賀 子

昭和六年十一月十八日!!おゝこの日こそ私に取つて永久に忘れる事の出来ない光榮に浴した記念すべき思出の日である。畏くも 天皇陛下には私達處女會及び男女學生青年團のために連日の御疲勞も御厭ひなく御親閱を賜はつた。何と云ふ有難い大御心でせう。あの帶山練兵場に於て煙の如き黄塵の中に立御遊ばされた御時おゝそれを拜した私達同胞は皆一様に

感激の涙に浸つた。私は此の時程深く強く日本帝國の國民であると云ふ喜びを感じた事は今迄に會て無かつた。感激し興奮し總べてを忘れ只あるものは悦びであり感謝であり涙であつた。此の御若き 聖天子を戴く私達日本國民は何と云ふ恵まれたる國民であらうか。又かゝる有難い聖代に生を享け不相應なる御親閱迄拜受した私達は何と云ふ幸運者でせうか。私達は其の時いつはらぬ真心からの感謝を以て低くく 陛下の御前に頭をたれた。そしていや榮え行く大御代の萬歳を心からさげばすには居られなかつた。

御親閱感想

鹿本郡吉松村女子青年團 轡 貫 くに 子

光榮の日十八日―遂に其の日は來た。七萬六千餘の若人が只管待ち奉つた。畏き御親閱の日だ。天も此の日を祝福するか千切れ雲一つ見えない日本晴である。午前六時に市立高女に集合した。私達は午前十時帶山練兵場に着いた。一望幾里總べて人の波である、十一時十二時、素晴らしい歡喜と感激と緊張の中に忙しく時は流れて行く、若き血潮は燃えて胸は高鳴る、託摩原の全野が輝きと喜びにあふれてゐる。

此の日集る若人は學校宿營をなして此の榮ある日を待つた參加團休で早朝から續々つめかけ午前十一時全く整列を終り六萬餘の赤子等が熱誠を捧げての奉迎裡に午後一時五十分咥々として響き互る軍樂隊の本歌奉樂と共に肅然たる清秋の託摩原野に着御あらせられた。直ちに眞白き布にて被はれた玉座に歩を運ばせられ全員の最敬禮に御會釋を賜はり軍樂隊の奏づる嚴かにも胸躍る行進曲につれて各學校生徒を先頭に榮えある校旗の下分列式は開始された。畏くもその間 陛下には始終直立不動の姿勢にて御親閱を給ひ分列終ると共に一萬五千餘の奉唱歌隊は玉座下まで前進して若き日本女性の聲高らかに感激と光榮を謳ふ奉迎歌を奉唱し終つて國歌奉唱、聖壽萬歳を三唱すればその聲は清らかな秋の空に和し野にひび

き午後二時十六分 陛下には全員最敬禮の裡に還御あらせられた。
かくて若人達の誇と喜びとに迎へられた御親閲は終つたがある秋晴れの託摩の原で幾萬の若人達の胸に湧き出たものは何か、玉座の跡に何を誓つたか。言ひ知れぬ感激と信念は、はりきれる様な緊張の中に歡喜に躍る歩調で歸途についた。

御親閲に参加して

女子青年 小田久代子

壯觀なる分列式も終へ此度こそ奉唱部隊の御親閲に臨む機と成り茲に愈々心身勇み立ち、一入緊張は加へられ、髪を櫛り襟を正し、畏れ多くも、間近の距離迄前進致しました歩調だに身のおのゝぎを感じつゝ御前に進み忝くも玉座に不動の御姿勢を以てお立ち遊ばす御英姿を、拜し奉りし時、感慨無量唯々莊嚴なる感に打たれ、頭は自ら下り、前後を忘れ唯茫然となりました。稍暫し経て、奉迎歌奉唱に向ひ、聲音高らかにと覺悟したが、不思議なる哉次第にからみ、不知不識の間に眼は曇つてしまひ、斯かる長時間注目致し、愈々神々しさ身に迫り、斯くも昭和の御代に生ひ立ち此上なき今日の譽に遭遇し得べきは、何たるゆかりぞや。平素不肖なる自己のあらゆる一切に比較し、おほけ無き幸福に感謝の念溢れ出でしみる御聖徳の程を仰ぎ奉りました。時は寸時をも待たず最後の「君が代」は終り漸く頭を起せば如何なるお恵みなるや。未だお下り遊ばされずして、御姿の残らせ給ふ當時嗚呼とばかり且つは驚き、且つは喜び、御慈愛は一入感激に満たされ、忝くも御答禮を賜はり、御姿の消えさせ給ふをいとも厭げなくお名残惜しく、目送致しました

御親閲拜受感想

鹿本郡 一本保美

昭和の聖代此處に六歳秋長けて肥筑の山野に紅葉映えて霜月半、縣下百三十萬の民に溢るゝばかりの感激と限りなき光

榮に浴して陸軍秋期特別大演習御統監の大元帥陛下を迎へ奉る。

十一日熊本に御着き遊ばされし 陛下には爾來大演習を御統監遊ばされ或は學校諸官衙に御巡幸遊ばされた。或は又神社御親拜阿蘇御登山等、實に御席の温まる暇もなき御身にまします中に、同月十八日我等青年訓練所及び青年團在郷軍人中等學校生徒女子青年團員に對して長くも御親閲を賜ふ、我等は此の光榮名譽に感激更に深く謹しみて御親閲を拜受せり
光榮に輝く此の日帶山練兵場に參集せる御親閲拜受者の數無慮七萬五千と算せられ一大偉觀を呈せり。揚げられし日章旗に翻然として風にひらめきやがて莊重なる「君が代」吹奏と共に 大元帥陛下は設けの玉座に御着き遊ばさる時に午後一時十分、莊重なる軍樂隊の奉樂の下に分列式を開始し約、一時間餘にして無事終了せり。其の間恐れ多くも 陛下には直立不動の御姿勢の儘各隊毎に御答禮遊ばされたり。我等は去る十二日大演習御統監の 陛下が御愛馬白雪に御乗り遊ばされ戦線御巡視の際宮原驛附近にて長くも御龍顏を拜し奉り今日又斯くして御親閲を拜受し重ねの光榮に唯々賤が身の幸を祝福するのみ。

御惠深き 陛下の英姿を目の邊りに拜しては誰が感泣せざる者が有らう而して皇恩の如何に深きかを痛切に感じ國家奉仕の信念をより強く想起せざるものあらんや。斯く若き天子を上へ戴きて安く生活し得る臣民の至幸至福何ぞ是に勝るものが有らん、我等は大日本帝國臣民の一人として克く教育勅語の御聖旨を遵奉し心身を鍛練し資質の向上を測り來る可き時代に於いては此の萬國無比、金匱無缺の帝國を擔つて立つ 陛下の御慮を安んじ奉らざる可らずこれこそ我等青年に與へられたる使命たらざる可らず。

感想

菊池郡隈府町青年團 田上敏男

昭和六年十一月十八日 何と云ふ光榮の日でありませう。忝くも、聖上陛下には、數日に亘り九州の精兵が最大の

努力を盡し、日頃鍛練したる腕を競ひつゝ、帝國の武威を發揚せし陸軍特別大演習を御統監遊ばされました御疲勞を、お休めになる御暇もなく、九州沖繩縣下の在郷軍人、學生、青年訓練所、男女青年團を熊本帶山練兵場にて、御親閱を賜はりました榮ある日であります。聖上陛下の御親閱を受くと、口にせしのみにも、誠に恐れ多い事であり、又夢の様にも思へるのであります。しかもそれが現實に行はれたのであります。その光榮。その感激。到底筆や言葉で云ひ盡せるものではありません。御親閱當日參加致しました無慮六萬七千の九州健兒が、等しく緊張し、默想して、陛下の威風あたりを拂ひ、畏くも長時間を終始玉座の上に立たせ給ひし、尊嚴の御英姿を仰ぎ拜しまして、誰一人として、感激に滿されずには居られませんでした。そして嚴かなる國歌「君が代」合唱の折は、感激のあまり涙が込み上げて、思ふ様に歌はれもせず又分列式の時隊伍堂々、陛下の御前は流石に全身の緊張を覺え感激の涙が湧いてくるのでした。あの莊嚴而も其の嚴肅さに浸された者の幸福は二度と得難いものでせう。

靜かに回顧してみまするに、先に、聖上陛下未だ東宮に在します頃、全國の青年に對して「國運進展の基礎は青年の修養に須つこと多し」といとも優渥なる御令旨を賜はつたのであります。又最近數年に亘りまして御親閱を賜はりました事五度、尙昨年御令旨奉戴拾週年に際しては、全國の優良青年を宮城前の廣場に御親閱を賜はり、尙同年拾壹月六日には大日本聯合青年團理事田澤義輔氏をお召になり「青年團に就て」のお話を聞召さるゝなど、青年を愛し給ひ青年に對して御軫念あらせらるゝ大御心を拜して誰が感泣しない者がありません。願ふに青年は國家の活動力の源泉にして、國民精神作興政治の公明、國防の充實、産業の發達其の他あらゆる國家的事業の進歩發展は、修養ある青年の努力に俟つ所實に大なりと思ひます。然も我國今や重大なる時局にあり、外には滿洲事變並に國際聯盟問題等があり、國內に於ても思想界經濟界の前途に樂觀を許さざるものがあります。この秋にあたり國民は彌が上にも緊張して益々その力を協せて、舉國一致この難局に處する底力ある覺悟と決心を固く把持せねばならないのであります。

時も時吾々青年の大集團はその整然たる秩序と堂々たる統制の下に、熱烈なる忠誠、潑刺たる意氣を大御前に展開して

御親閱を仰ぎ奉つたのであります。この心、この意氣、この姿こそ國家の柱石となり、國家を磐石の安きに置き、國運進展に向はしむるものであります。御親閱の光榮に浴したる私共青年は眞に言ひ知れぬ感激に心を躍らせたのであります。この永久の感激を以て、夙夜御令旨を服膺して反省自勵、愈々確固不拔の信念を涵養し、質實剛健の氣風を練磨して、自己の職務に精勵し、邦家の進運に貢獻するの覺悟をより一層堅くしなければならぬと思ひます。

御親閱を拜受して

菊池郡隈府町訓練所四年次 田 中 俊 明

おゝ昭和六年十一月十八日九州山口八縣の若人約七萬の精銳に畏くも、聖上陛下の御親閱を賜はつた佳日であつた。吾も此の少なき腕に榮ある訓練所旗を持ち、乏しい心に母校の信頼を負うて第六中隊に加はつた各所に喜々として語り合ふ若人達の其の聲其の顔には清い明るい氣高い輝きがあつた。

竿頭高く阿蘇下しの風に翻る日章旗を仰ぎてはこれこそ祖國の姿か、我が身の日本に生れし幸福としみじくと感ぜずにはゐられなかつた四方展望の美をめぐらし帶山原頭靜寂にして、空高く燃ゆるが如き錦の御旗の下に、天皇陛下には肅然と立たせ給ふた御英姿の神々しさ思はず襟をたゞし、頭は自づと下り感激の鼓動が高鳴り、新興日本の姿そのまゝにいと莊嚴に拜されたかくて歴史的大繪卷の大分列式は開始せられ、足實に高く軽く身又軽く進めば夢心地の如く大地に響いてツシン／＼と重く強い足音が腦裏に響いて來る玉座御前にて頭右して御注目申上ぐればあやに畏し、陛下には龍顏麗しく若人の魂の總べてをこめた、敬禮に御會釋を賜はつた其の瞬間身は天空に吸上られるが如く自ら氣陶酔し何とはなしに眼頭が熱くなり、胸が迫つて云ひ知れぬ靈感に打たれた。萬幾千の女子奉唱隊の誠心こめた奉迎歌は高鳴る感激と共に帶山原頭に流れて十有幾萬の人の心々にしみわたり秋空に餘韻して消えて行つた續いて起る「君が代」の奏樂熱烈もゆる

七萬の若人は之に和した莊嚴無比沈痛無限の感は自ら、肌を裂き生ぜしめた感激！感激感銘無量の極に達した時「天皇陛下萬歳」の三唱は天も動き地も揺ぐかと計り思れた。天皇陛下の還御あらせ給ふや、軍樂隊の奏する「君が代」の樂はさも御齒の御後を慕ひ奉るかの如く靜かに流れて、名残惜しい極であつた。

余はこの有がたき御親閲に加はり、目の邊り聖姿を拜み奉つて終始一貫只感激の二字に盡き、胸は高鳴り心は動き、一種の靈感に打たれ、數ならぬ身の身に餘る幸福をしみくゝと感激せずにはゐられなかつた隣國支那を見よ、四億の民草は年中安けき日を持たないではないか、又北方ロシアは誤れる共產の名の下に、數億の國民は其の自由迄も奪はれてはゐないか我が祖國には日章旗翻り一天萬乘の大君を戴き君民一家萬邦に比類なきこの國体が世界のいづこにあるか、又此の御親閲を拜受して具さに我がすぐれたる國体の意識を體驗した。何か知ら胸奥に燃上る血潮は、これこそ參加した七萬の若人の總べてが持つ祖國愛の焰であらうか、吾は此の尊い感激を深くくゝ魂にきざみ込み、若く勇ましきスタートを切らんと思ふ。今正に國難來の秋……いざ祖國の爲に……。

御親閲を拜受して

菊池郡大津青年訓練所 立山金平

十一月十八日。この日こそ我等の一生忘るることの出来ない光榮に輝く日、最も意義深い日であつた。噫。青年訓練所生徒一同に御親閲を賜はる。聞くだに全身があつくなるのを覚えるのであつた。これも昭和の御代に生を受けたものの有り難さと感激の涙の浮ぶのを禁ずることが出来なかつた。

正午すぎ各青年訓練所生徒、中等學校生徒男女青年團員等無慮六萬七千、御親閲場たる帶山練兵場に整列を終へ、聖上陛下の御着叢を今か今かと待ちに待つた。やがて御着叢の報が傳はると、萬場寂として聲なく、かくもこの世に莊

嚴なことがあるかと思はれた。閱兵、分列、奉迎歌奉唱等滞りなく終つた。この間約一時間。陛下には直立不動の御姿のまま御親閲を賜はつた。あの神々しい御姿を拜したとき、我等もそのづとからだ固くなつて、熱涙が浮ぶのであつた。此の君ありて此の國ありとはつきりと心に銘したのであつた。噫。尊き御姿、我等は今も猶眼底に彷彿する。君のため國のため層一層努めねばならぬ心持ちが湧然とわき流れる。日本國民の有り難さよ。

御親閲の光榮に浴して

菊池郡城北青年訓練所 松本初男

誠に千載一遇の御親閲、西國の一隅に生をうけた男子として、生前に二度と會へない貴い此の一日に巡りあひたる我等の幸福、眞に喜びに堪へない次第である。其の朝は午前一時より起床して此の良き日を迎へた。

總ての行事は兎も角、特に感じたのは、分列式の際玉座に注目して御英姿を拜した時、貴く有難く唯、言葉に言ひ盡されぬ一種無限の感慨で一杯であつた事だ。又「君が代」合唱の時の靜肅緊張、最後の地振ひ天に轟く萬歳の聲、之皆陛下を仰ぎ奉る誠心の表現に外ならぬ。陛下には一時間餘の長い時間に少しの御微動なく御直立遊ばされし神々しき御有様、我等は自ら襟を正さざるを得なかつた。かゝる緊張は又決心の動機であつた。

我等は菊池の青年だ、忠勇義烈の血を受けし男子だ、先づ第一に陛下の萬歳、皇室の繁榮を祈り、大日本帝國の益々隆盛ならん事を祈らねばならぬ。かく思ふ時第二の國家を背負つて立つべき我等青年の任務、重且、大なるを感ぜずには居られぬ。即ち大に自覺し奮闘して如何なる難局をも打破る事の出来る身體と精神とを作成せねばならぬ。今度御親閲の光榮に浴せられたを幸、益々忠君愛國の至情に磨きをかけて、大岩落ちても驚かず大山崩れても動かぬ、確固たる信念を以て自己の職業を忠實に勉勵し、郷土の發展に勉めて、引いては國家の隆盛を圖り、そして我等の爲に御注ぎ遊ばされる

大御心の一端にても御慰め申上げねばならぬと深く深く心に誓を立てたのである。いさゝか愚感を述べると共に最後乍ら今後、益々諸兄の御奮闘あらん事を祈る。

御親閲拜受感想

菊池郡加茂川村青年訓練所第三年次 森 山 國 夫

夢多き南國の野山も秋の色濃かに菊芳薫る肥筑の野に展開せられたる特別大演習を御純監の爲 大元師陛下には十一月八日東京御發轍遊ばされ熊本の地に鳳輦を迎へ奉つてから早くも八日間を過ぎ火の國の山河は日と共にこの光榮と歡喜に輝きまさり、この間 天皇陛下に於かせられては演習御統監より引續き八代水俣或は阿蘇路へと遠く龍駕を柱げさせられ長くも一日として御寧日なき御有様にて縣下教育産業其の他に就き親しく天覽遊ばされ御獎勵になる大御心に地方民草關係人一同恐懼感激措く能はず無上の光榮に輝き亘つた。そして愈々今十八日若き血潮は燃え胸は高鳴る今日!!なんと輝かしくも歡び溢るゝ日ではないか。 聖上陛下下の九州、山口、沖繩各縣男女學生、青年訓練所在郷軍人の御親閲は十八日午後一時帯山練兵場で舉行あらせられた。空は紺碧に晴れ澄み渡り千切れ雲さへ無く、東の方には靈峯阿蘇の連山浮彫の如く鮮かに西の方には雲煙の彼方に雲仙を望み日本晴の託麻原頭に錦旗はいとも鮮かに輝き吹き渡るそよ風にはためき總てが若人の輝かしさと歡びに慄へてゐるではないか。この日集る若人は實に山口より遠く沖繩に及ぶ地域に亘りて其の數實に六萬六千餘に達し、早朝より續々詰めかけ午前十一時には全く集合を終り、劍尖は陽光に煌き揚ぐる校旗團旗は微風に翻へり場をかこみ、その數三十萬と算せられ眼も綾に林立する間をやがて被る光榮を前に六萬六千の全部隊は肅として、陛下の臨御を待ち奉る裡に午後一時十六分嘯として響き渡る軍樂隊の國歌の奏樂と共に着御直ちに展望臺に玉歩を運ばせられ全員の最敬禮を受けさせられ軍樂隊が奏する華やかに胸躍る行進曲につれて各専門學校生徒を先頭に榮あ

る校旗を先導に分列を開始すれば 陛下には長くも終始直立不動の御姿にて各部隊毎に一々舉手を以て御答へ遊ばされ具さに御親閲あらせらる斯くして男子各部隊の分全く終りて所定の位置に復するや女學生女子青年團より組織せられし奉唱隊は三方より前進し軍樂隊の伴奏にて奉迎歌を奉唱し若き女性の感激に高潮せる聲は場に響き渡りて聞く者をして襟を正さしめ、覺えず涙を催さしめた。其れに續いて全員「君が代」を奉唱し、本山縣知事の發唱にて聖壽萬歳を三唱すれば其の聲は野を壓し天に沖し焂に昭和聖代歴史的御親閲は終つた。斯くて御親閲開始より終了に至るまで正に一時間その長き間 陛下には御親閲臺上に直立あらせられしまゝ身動きだに遊ばされず終始参加部隊に御自を注がせられ給ふ大御心拜察するだに畏き極である。全員は今までのあたり行幸を仰ぎ御英姿を拜して光榮と感激と矜持とに無限の思ひを抱き帯山原頭晴れの行幸は空前の盛觀を呈して終了した。惟ふに

陛下が一天萬乗の尊き御身にあらせられながら、斯くも國事に御勵精あらせられたるを目のあたりに拜し奉りたる民草は今更の如く大御心の有難さにに感泣したであらう。然らば即ち吾等日本國民たる者層一層業に勵み職に努め身を慎み以て奉公の至誠を捧げ奉り皇恩の深きに報ひ奉るべきである。

御親閲感想

菊池郡戸崎村戸崎青年訓練所第三年次 山下 亥 一郎

今日は私等に御親閲を賜はる晴れの日だ。幾何かの以前から私の頭に釘付けられて只管其の日を一日千秋の思ひで待ちに待つた、御親閲の日は來た。

今日十一月十八日……私にとつて一生忘れ得ぬ尊い榮譽の日だ。午前三時豫定の如く起床して、うすら寒い晩秋の清氣の中に榮譽ある今日の思が心に満ちて、知らず／＼身の緊張するを覺える。早速身を清めて神佛に禮拜し今日の御親閲に